

「新時代」を働き・生きる若者たち：高卒5年目の人生経路

バイオグラフィー

—「世界都市」東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅳ—

乾彰夫・児島功和・進藤正樹・中村（新井）清二・原未来・藤井吉祥
・船山万里子・三浦芳恵・宮島基

序章

藤井吉祥・児島功和・中村（新井）清二・
船山万里子・宮島基

1. 若者の〈学校から仕事へ〉の移行をめぐる状況

1990年代以降、〈学校から仕事へ〉の移行に変容が生じている。高度経済成長期以来、日本社会においてこれまで機能してきた「戦後型青年期」（乾）¹は、「学校経由の就職」（本田）²の機能不全を端緒として、大きく解体・再編されつつある。では、その変容の下に生じている実態とはいかなるものか。そんな問いを掲げて取り組まれているのが、本調査である。

この変容を端的に表しているのが、「フリーター」³と称される、非正規雇用で働く若者たちの急増である。フリーターという言葉は80年代半ばにアルバイト情報誌により生成された造語で、当初は会社のために長時間勤務もいとわず働く正社員の働き方を忌避する一部の若者たちに焦点を当てたものとして登場した。その影響もあってか、90年代半ば以降のフリーターの急増に対し、正規雇用を忌避する若者の意識の変容として捉える論調も散見されたが、その後調査・研究が進むにつれ、雇用形態の転換を機軸とした労働市場の変容にその要因があるということが共有されるようになった。またフリーターのみでなく、失業者をはじめなんらかの要因により働けない者たちの存在⁴や、劣悪な労働環境の下に働く正社員の存在⁵などについての実態把握も進められていった。そしてこれまでの標準的移行過程から漏れる存在が増すにつれ、社会保障の脆弱さや学校以外の若者支援機関の乏しさなどが露呈してきている。こうした労働市場の変容を象徴しているのが、労働力の階層化・流動化構想を打ち出した日本経営者団体連盟「新時代の『日本の経営』—挑戦すべき方向とその具体策」（1995年）

であった。この提案が出された当初、すでに新規高卒求人数はバブル期の半数以下に落ち込んでいたものの、いまだ雇用形態の転換が全面化している状況ではなかった。しかし90年代後半以降、各種規制緩和策などが進められ、労働力の階層化・流動化を端緒とした「新時代」が、名実ともに展開されている状況に至っている⁶。私たちの調査対象となっている若者たちは、まさにこの階層化と流動化の進行する「新時代」に〈学校から仕事へ〉の移行に乗り出している者たちであるといえよう。

以上のような動向は日本だけのものではなく、ヨーロッパでは10年ほど先駆けて進行していた。そこではまずは従来の景気変動の幅を量的にも期間的にも大きく越えた若者の大量失業が人びとの目を引いた。同時に、これまで人びとの生活と若者の仕事への移行を強く規定していた社会の階級的な構造の変容のなかで、従来の拘束からは自由な若者たちの選択の可能性の広がりに着目する議論も登場した⁷。だが90年代以降に蓄積された多くの調査結果などからは、従来型の移行ルートの解体・変容は、移行の「個人化」を推し進めているものの、その進行は一律ではなく、高学歴層などを中心にこれまで通り比較的スムーズな移行（標準的人生経路）を果たしている層が依然として一定割合存在すること、その一方で長期にわたってジグザグの移行ルートをたどる流動層の中には豊富な家族その他の経済・文化・社会関係資本等を基盤に起業などに向かう（選択的人生経路）ごく一部の層と、諸資本の基盤もないまま失業と低賃金で単なる一時雇用のもとに滞留する（危機的人生経路）多くの若者たちによって構成されていることなどが明らかにされてきた。そうしたなかで、階級的な規範の弱まりは、社会の階級・階層的な格差構造を解消するものではなく、現実に進行する「個人化」は構造を解消するというよりは「構造化された個人化（structured individualization）」（Roberts）⁸であり、あたかも若者たちのたどる経路が彼ら一人ひとりのまったく自由な選択の結果と理解することは「認識論的誤謬（epistemological fallacy）」

(Furlong)⁹であると多くの研究者たちは指摘している。

ヨーロッパにおける調査研究ほどの規模や蓄積をもつわけではないが、日本においても一定の調査研究がこの間進められてきた。これまでの動向としては、高卒進路の問題からフリーター層の実態、これまで歩んできた経緯など、ひとまずは一時的な量的調査による全体像の把握が主軸となっていた¹⁰。そこでは、フリーターの増加は若者に一様に見られる現象ではなく、学歴・偏差値・家庭階層が低い層、女性、都市部などに偏って生じていること、フリーターから正社員への移行は困難なものとなっていること、不安定層にはネットワーク資源に乏しい者が多いことなどが見出されている。一方で、質的調査による把握も徐々にではあるが進められ、フリーター層の主観的状況や、抱える困難の複合性、あるいは低階層において築かれている文化の存在などが指摘されている¹¹。

2. 本調査の概要と特徴

1) 調査概要

こうした状況の下、本調査は、流動化・不安定化する若者の移行の実態をインタビュー方式により経年的に追跡することで、そのプロセスを質的に明らかにすることを目的として、対象者が高校3年に在学する2002年秋より開始した。

まず事前調査として、各種統計調査を用いて比較分析することにより、東京における若年労働市場の変容の動向を明らかにするとともに、都内の全高校549校を対象として、進路動向に関するアンケート調査を実施し、進路における高校間格差の実態を把握した。

そして経年的インタビュー調査による実態把握として、入試偏差値で中程度の都立普通科A高校(多摩地区)1クラス39名と、偏差値で最底辺に位置する都立普通科B高校(下町)でインタビューに応じてくれた50名を対象に、それぞれの学校にて30分から1時間ほどインタビューを行なった(第1回調査:2002年度89名)。また対象者が高校を卒業して1年後の秋から春にかけて、インタビュー時に確認していた連絡先から個別に連絡を取り、自宅や職場近くの駅前の喫茶店などで、各自1時間から2時間ほどインタビューを行なった(第2回:2003年度53名)。同じ手順で高校卒業3年目(第3回:2005年度39名)、5年目(第4回:2007年度31名)にもインタビューを実施している。また4年目には、4年制大学進学者のみを対象とした就職活動についてのインタビューを実施した(2006年度8名)。

インタビューでは事前にメンバー間での議論を経て調

査項目を立て、それを土台としながらも、対象者との会話のやりとりを重視して聴き取りを行なうという「半構造化面接」の手法を用いている。そして本人の了承を得て音声を録音し、逐語記録を作成して一次データとし、分析に用いている。なお引用の際には、読みやすさの便宜のため、事実を損ねない程度に修正を施している場合もある。また、本論で用いている氏名など固有名詞はいずれも仮名である。

なお本調査グループでは、これまでの調査ごとに分析結果を報告書にまとめている(序章末尾参照)。前回までの分析で析出された知見を踏まえながら、今回の調査項目を立てるとともに、それ以降の分析の土台としている。その意味では、今回報告もまた、一連の調査における中間報告である。

2) 本調査の意義

この調査が先行調査に対してもつ意義は、質的調査・経年的調査・対象者の多様性の三点を併せ持つところにある。

第一に、本調査は基本的にすべて直接面接によるインタビューという方法をとっている。またその際の質問内容は、進路や仕事に限定することなく、大人への移行にかかわる諸課題について時間の許される限りにおいて幅広くとっている。そのことから当人の主観的把握を含め、かならずしも仕事に特化されない家族・友人・日常生活なども含めた包括的把握が可能となっている。ワルツァーらも指摘するように、移行過程が複雑化・個別化した今日の状況下では、たとえ職業的移行についてであっても、表層としての就労のみでは捉えきれない側面が多分に存在するのである¹²。またファーロンからも指摘しているように、今日の若者のおかれた状況を把握するためには、社会構造からなる規定をきちんと見据えるとともに、その規定の下で若者たちがいかにかその状況を受けとめ、ふるまっているかという側面を見ていくこともまた重要となってくる¹³。この後者についての厚みのある把握は、質的調査でなければ難しいものであるといえよう。

第二に、本調査は高卒後5年間に渡り、同じ対象者にインタビューを続けており、移行過程の複雑さ、その時々の主観的状況、および対象者の変容についても追うことが可能となっている。そもそも高卒後の数年間、20歳前後の年代は、環境・心境の変化も著しく、かつての状況を後の回想で追うには限界がある。加えて短期間での雇用を余儀なくされるフリーターの中には、職場を転々と渡ってきた者もいて、数年前のことははるか昔のこととなっている。また「成長」といった類の分析は、一時

点での調査では捉えきれないものであろう。

第三に、本調査はフリーターなど不安定層のみでなく、多様な進路・移行を経ている層を対象としている。高卒後一貫してフリーターを続けている層もいれば、大学院まで進学している層もいる。なかには起業し会社経営を担っている者までいる。後述するように、調査上の制約から対象者には偏りももちろん存在するが、多様な若者の移行のあり方を一定程度把握することが可能となっている。

3) 本調査の射程範囲

一方、当然のことながら、本調査が若者の全体像を描いているわけではない。本調査の射程範囲として主に示しておくべきは、対象者の限定、地理的制約、継続調査の補足率という三点である。

第一に、対象者が入試偏差値で中位および最底辺に位置する二つの都立普通科高校の卒業生に限られているという点である。仕事への移行において、最も不利な状況に置かれているのは中卒・中退者であるが、そういった層はカバーされていない。また国公立・難関私立大学に進学するような層もまた、対象とはなっていない。また、職業高校では学校に来る求人などの差異もあり、若干事情が異なるであろう。しかし本調査の対象者が通っていた中位以下の普通科高校は、近年の社会的構造変容のなかで最も卒業後進路が変動しており、今日の若者の移行過程の変化を捉えるうえで欠かせない対象であるといえる。

第二に、東京という地理的制約である。この間の社会構造の転換に伴い、地方における産業基盤・経済の衰退は著しく、若者に限らず困難な状況に直面しているのは地方都市・農村部であるといえよう。しかし本研究では、『「世界都市」東京』というタイトルに示されているように、あえてこの大都市東京を対象としている。その含意としては、いち早く資本のグローバル化が進められてきた地域であり、上層ホワイトカラー層と周辺の労働者層への二極化が著しく進行してきたという事情、そして各種教育機関や消費文化の集積地でもあり、移行の多様化を捉えるうえで適所であるということなどがある¹⁴。なお東京の中でも一定の地理的特徴を掴むために、かつて「郊外」として開発が進められた新興住宅街である多摩地区と、昔ながらの町工場なども存在する下町地区から一校ずつ選んでいる。

第三に、経年的調査ゆえの限界もある。調査開始当初は89名だった対象者であるが、5年目となる今回調査では、およそ三分の一強の31名（A高校出身者14名、B高校出身者17名）に減っている。仕事の多忙さ・休日の不安定さなどにより受けられないというケースもあ

り、また同級生でさえ連絡が取れなくなっているようなケースもあった。しかし属性に極端な偏りが出ているわけではないし、補足率そのものも、20歳前後という年齢層であることをふまれば、かなり高い方であると思われる。それは対象者自身の協力はもちろんのこと、対象者同士のネットワークや卒業後も関係を保っている高校教員による助力により可能となっている。

3. これまでの知見と本稿概要

今回で4回目の調査報告となる本稿であるが、これまでの報告における分析結果を簡単に振り返るとともに、本稿各章の位置づけと全体の方向性について示しておく。

1) これまでの報告書の概要

1回目の報告書は、前述の統計分析とアンケート分析とともに、A高校B高校それぞれの高校ごとに、2002年度3年生であった対象者へのインタビューを分析したものの合計4本の論文から構成されている。まず統計分析からは、90年代以降の労働市場の変容に伴い、高卒進路において「就職者」と「専門学校進学者」が減少し、その分「大学進学者」と「無業者」へと流れ込んでいること、「無業者」とされる者の多くは非正規雇用が主軸となる産業へと参入していること、東京で育った若者たちは、地元に残る傾向が強まっていることなどが確認された。そしてアンケート分析からは、偏差値中位校以下では、偏差値が下がるほどに進学でも正規雇用就職でもない「左記以外の者」の割合が増加すること、また「左記以外の者」には、本来「専修学校（一般）」に含まれるはずの浪人生が一定数含まれる可能性があることなどが確認された。そしてA高校の分析では、あいまいなままに大学進学を思い描く男子と、芸術系など「やりたいこと」を思い描く女子との間で進路イメージにおける差異が確認された。また、学年全体に対するアンケート結果も参照したB高校の分析では、家庭の経済的文化的資源に乏しい者が多く、その多寡および学力の高低、そしてジェンダーが、生徒らの進路に強く影響していることが浮かび上がった。

そして高卒後1年が経過した2003年度調査の分析にて析出されたのは、目の前の日々をなんとか「生きぬいている」彼女らの様子であった。対象者は皆それぞれの進路において、新しい環境に向き合っていたのであるが、全体を通して、家庭階層やジェンダーなど、社会構造的な制約が若者たちの移行を強く規定していることが確認された。とりわけ高卒後に正社員となったものの

離職に追い込まれた5名が直面した危機的状況からは、今日の若者たちの移行過程における困難な実態が浮かび上がった。いずれのケースにおいても、心身を傷つけるほどにまで耐え抜いた末の離職であり、離職後もそのダメージの回復にしばらくの時間を要するほどであった。その回復過程において重要な働きをしていたのが、B高校の女性たちが形成していたインフォーマル・ネットワークとしての「地元ネットワーク」であった。また、専門学校進学者が学校内で形成していた同級生同士のネットワークにも、さまざまな困難を乗り越える支えとしての同様の機能が見出された。

高卒後3年目となる2005年度調査では、「模索」がキーワードとなっていた。まさに「今」の状況をどう乗り切るかで精一杯であった1年目に比べ、3年目の時点では、それぞれの状況の下でなんとか試行錯誤や紆余曲折をくり返しながら毎日を生きている様子が捉えられた。しかし同時に、それら取り組みに見られる圧倒的な格差もまた著しかった。1年目はそれぞれに新しい状況と対峙していたこともあり、さほど表面化していなかった移行における格差・分岐が、より明瞭に浮かび上がってきていた。従来型の「標準」ルートのもとで、相対的にではあるが安定して働き続けられている層が見えてきた一方で、「標準」ルートから外され、頼れる資源もなく不安定な状況に個別に晒されている層も少なくなかった。あるいは逆に、活用可能な資源を拡大再生産しつつ、自ら「標準」を超えていこうとする者もいた。また前回着目されたネットワークについて、そこに社会関係資本という観点を差し挟むことにより、ネットワークが果たしている機能における質的差異が、分岐間の対比から導出された。

2) 本稿の構成と全体の方向性

高卒5年目となる今回の2007年度調査では、高卒進路の一翼を担っていた四年制大学進学者の多くもまた社会に出ていくようになるということで、ひとまず定期的な調査の一区切りにするという方針が採られていた。そしてこれまでの移行を振り返る意味も込め、対象者の形成してきたアイデンティティにも踏み込むような調査設計が生まれ、これまでの倍の時間となる2時間を基準としたインタビューが進められた(実際には、それ以上の時間をかけている場合が多くを占める)。なおインタビュー期間は、対象者が高校を卒業して4年半から5年ほど経過した2007年12月から2008年4月である。

本稿は基本的に上記のインタビュー記録に基づくものである。ただし必要に応じて過去のインタビュー記録も

参照している。今回の分析では、これまで同様、構造的規定の強さとその下での若者たちの生活形成の様子についておさえるとともに、自身が置かれた状況をいかに把握し意味づけているかという主観的側面にもできるだけ留意する。それはとりわけ、将来に対する見通しをはじめとした時間感覚などに表れてくるが、その差異は移行分岐の新たな指標ともなりうるものと考えられる。前回顕著に見出された移行における格差は、今回においても維持・拡張している状況にある。そんな分岐が今後において、格差を孕んだ現状のままに推移・拡張していくのか、それとも再び一つの「標準」へと収束していくのか、あるいは分岐ごとの「標準」を生み出していくことになるのか、その帰結はまだ未知数である。しかしひとまずのところ、本稿で展開される軸として据えられるのは、〈学校から仕事への移行〉の行く末としての、〈大人になる〉という課題へのそれぞれの向き合い方であるといえよう。それは、まさに今をどう「生きぬく」という切実な課題に直面していた高卒1年目、明日という未来に対して「模索」を繰り返していた高卒3年目に対し、やはり格差は著しいものの、それぞれの経験蓄積からなる時間感覚を獲得し、なんとか「働き・生きる」ことが可能となっているということを意味しているのである。

こうした基調を土台として、以下各章では、正社員、非正規雇用労働者、自営・自由業者、学生、主婦の順に分析を試みていく(対象者区分については、章末の一覧表参照)。まず冒頭の1章では、比較的従来型の移行を遂げている正社員の者たちを取り上げる。そこでは正社員の若者にとって生活の大部分を占めている労働に着目し、就職1年目の者と3年以上の者に分けて見ていくことにより、仕事の世界へ入っていくという課題遂行とその条件について論じる。そして2章では、従来型「標準」から外れ、不安定な移行を余儀なくされている非正規雇用労働者を取り上げる。そこでは多様化した非正規雇用労働をいくつかの指標に基づき整理するとともに、その腑分けとも一定連動した対象者の将来展望の差異とその要因について詳細に追っていく。続いて3章では、従来型「標準」には安住することなく、会社経営や芸術系の活動に重きを置いて日々を過ごしている若者二人について取り上げる。そこでは不安定な状態ながらも、生活のためのアルバイト就労も含め、複数の活動に精力的に取り組んでいる二人の様子を描くとともに、それを可能としている条件・環境について追っていく。次に4章では、四年制大学を卒業してなお、学生といういわば仕事への移行の手前の段階に留まる選択をした者たちについて取り上げる。けっして多くの者たちが歩むわけではない道を選んだ者たちだが、その選択の背景に

はいかなる事情があったのかについて、仕事との関連もふまえながら追っていく。5章では、結婚し家事・育児など家庭での仕事を主に担うようになった主婦について取り上げる。彼女らの仕事・生活を支えている周囲の状況について確認するとともに、彼女らが主婦として担っている主婦業の内実について、男性既婚者も交えながら掘り下げる。

以上のような各章での考察をふまえ、終章では全体を貫く論点について今一步考察を深めていく。まず対象者を覆う社会構造的規定について、家庭階層・学歴・ジェンダーという観点から浮かび上がらせる。そして階層やジェンダーとも深くかかわりながら、より複雑な問題を呈しつつ若者の移行に影響を及ぼしている家族について論じる。最後に、彼女らがその経験蓄積から獲得しているアイデンティティの様相について明らかにして、本稿の締めとした。

【これまでの中間報告および凡例】

〈報告書①〉

乾彰夫・上間陽子・木戸口正宏・椎林美樹・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・宮島基・芳澤拓也・渡辺大輔『「世界都市東京」における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究』東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第20号、2003年

〈報告書②〉

乾彰夫・新井清二・有川碧・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・藤井吉祥・宮島基・渡辺大輔「「高校卒業1年目」を生きぬく若者たち—『世界都市東京』における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅱ」東京都立大学人文学部『人文学報』第359号、2005年

〈『18歳』〉

乾彰夫編・東京都立大学「高卒者の進路動向に関する調査」グループ著『18歳の今を生きぬく』青木書店、2006年

〈報告書③〉

乾彰夫・安達暉・有川碧・遠藤康裕・大岸正樹・児島功和・杉田真衣・西村貴之・藤井吉祥・宮島基・渡辺大輔「明日を模索する若者たち：高卒3年目の分岐—『世界都市東京』における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅲ」首都大学東京都市教養学部人文・社会系／東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第22号、2007年

〈就職活動〉

児島功和・中村（新井）清二・乾彰夫「大学生の就職活動のインタビュー分析」首都大学東京都市教養学部人文・社会系／東京都立大学人文学部『人文学報』第396号、2008年

以下本論では、順に「報告書①」、「報告書②」、「18歳」、「報告書③」、「就職活動」と略記。

その他凡例として、以下。

[〜] はインタビュー発言、(〜) は引用者補足、「…」は沈黙を表す。抜書き部分は斜体で示してある。また、引用において注記のないものは、すべて2007年度調査からのものである。それ以外の年度の調査からの引用は、末尾に(〜)で調査年度を記しておく。

付記：本研究は東京都立大学大学院・首都大学東京大学の教育学研究室乾ゼミによる共同調査である。今回調査のインタビューには各論文の執筆者に加え、安達暉（首都大学東京大学院人文科学研究科博士前期課程）、有川碧（首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程）、上間陽子（琉球大学）、木戸口正宏（北海道教育大学）、杉田真衣（金沢大学）、竹石聖子（常葉学園短期大学）、西村貴之（首都大学東京）、芳澤拓也（沖縄県立芸術大学）、渡辺大輔（首都大学東京、都留文科大学非常勤講師）がかかわっている。

なお本稿は、平成19年度首都大学東京傾斜的研究費「『世界都市』東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究」による研究成果である。

註

1. 乾彰夫「『戦後日本型青年期』とその解体・再編—『学校から仕事へ』の移行過程の変容を中心に」（『ポリテイク』第3号、2002年1月）。
2. 本田由紀『若者と仕事—「学校経由の就職」を超えて』（東京大学出版会、2005年）。
3. その定義はさまざまあるが、さしあたり本調査における定義は厚生労働省の定義（年齢15～34歳層、非在学者に限定し、女性については未婚の者、さらに、現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」又は「パート」である雇用者で、現在無業の者については家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事我希望する者）に準じる。ただし、下川彩乃（第2章）については派

遣労働者ではあるが低賃金であり、専門的職務内容とはいえないことなど、第2章で扱う他の「フリーター」女性と同じような境遇にあるため「フリーター」として扱う。一時的に派遣労働者となっていた西澤菜穂子、浜野美帆についても同様に扱う。

4. 働く意欲の有無で分けた日本版「ニート」というカテゴリーも提出され、一時期話題を呼んだが、この間増加しているのは求職型（失業者）・希望型であり、非希望型は増加しているわけではない。「ニート」については玄田有史・曲沼美恵『ニートフリーターでもなく失業者でもなく』（幻冬社、2004年）、類型区分については青少年の就労に関する研究会「若年無業者に関する調査（中間報告）」（内閣府、2005年3月）参照。
5. たとえば小林美希『ルポ“正社員”の若者たち—就職氷河期世代を追う』（岩波書店、2008年）など参照。
6. ただし、階層的雇用形態についての日経連構想がそのままに実現しているわけではなく、現状では「雇用柔軟型」の急増・拡大のみが突出している状況にある。
7. du Bois-reymond, M. (1998) 'I Don't Want to Commit Myself Yet': Young People's Life Concepts, *Journal of Youth Studies*, Vol. 1, No.1.
8. Roberts, K. (1997) Structure and Agency: the New Youth Research Agenda, in Bynner, J., Chisholm, L. & Furlong, A., *Youth, Citizenship and Social Change in a European Context*, Ashgate: Aldershot.
9. Furlong, A. & Cartmel, F. (2007) *Young People and Social Change: Individualization and Risk in Late Modernity*, Second Edition, Open University Press: Maidenhead.
10. 独自調査による代表的なものとしては、荻谷剛彦・粒来香・長須正明・稲田雅也「進路未決定の構造—高卒進路未決定者の析出メカニズムに関する実証研究」（『東京大学大学院教育学研究科紀要』第37号、1997年）、耳塚寛明・小杉礼子・粒来香ほか「高卒無業者の教育社会学的研究」（お茶の水女子大学人間発達研究会『人間発達研究』第23号、2000年）、日本労働研究機構「進路決定をめぐる高校生の意識と行動—高卒「フリーター」増加の実態と背景」（調査研究報告書138号、2000年）、同「大都市の若者の就業行動と意識—広がるフリーター経験と共感」（調査研究報告書146号、2001年）、労働政策研究・研修機構「大都市の若者の就業行動と移行過程」（労働政策研究報告書72号、2006年）、太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』（世界思想社、2006年）など。また2007年度より始められた日本教育学会「若者の教育とキャリア形成に関する調査」（代表：乾）は、これまでその必要性は言われつつも試みられてこなかった、量的かつ経年的な調査となっている。
11. メゾレベルの一時点調査としては、日本労働研究機構「フリーターの意識と実態—97人へのヒアリング結果より」（調査研究報告書136号、2000年）、労働政策研究・研修機構「移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査（中間報告）」（労働政策研究報告書6号、2004年）、部落解放・人権研究所編『排除される若者たち—フリーターと不平等の再生産』（解放出版社、2005年）など。ミクロレベルでの追跡調査としては、新谷周平「ストリートダンスと地元つながり」（本田由紀編『若者の労働と生活世界』第6章、大月書店、2007年）、神野賢二「ノンエリート青年の『学校と仕事の間』のリアリティ」（『労働社会学研究』第7号、2006年）など。本稿同様、メゾレベルかつ経年的な調査の試みとして、古賀正義・直井多美子・吉田美穂・野田香代子・五味靖・竹内実雪・敦賀亮太・戸田真希子「高卒フリーターの産出過程に関するエスノグラフィー研究—進路多様校卒業生追跡調査の結果から」（中央大学教育学研究会『教育学論集』第50号、2008年3月）がある。
12. Walther, A., Stauber, B. & Pohl, A. (2005) Informal Networks in Youth Transitions in West Germany: Biographical Resource or Reproduction of Social Inequality?, *Journal of Youth Studies*, Vol. 8, No. 2. (平塚真樹抄訳「若者の移行期をめぐるインフォーマルなネットワーク—人生の経歴における資源か社会的不平等の再生産か?」『教育』2006年3月号)。ワルツァーらは、インフォーマル・ネットワークが若者の移行に与える影響について分析し、若者の移行支援には、職業世界のみでなく生活世界までも含めた「学習のネットワーク (network of learning)」形成が必要であると論じている。
13. Furlong, A. & Cartmel, F., op. cit.
14. ボールらの「世界都市」ロンドンでの調査に倣っている。Ball, S., Maguire, M. & Macrae, S. (2000), *Choice, Pathways and Transitions, Post-16: New Youth, New Economies in the Global City*, RoutledgeFalmer.

乾ら「新時代」を働き・生きる若者たち

名前(高校)	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	現状についての備考	離家・結婚	
正社員 ※在学中のアルバイトは省略								
手塚豊(B)	正社員:印刷所					自衛隊に挑戦		
内田玲奈(B)	正社員:総菜屋					会社吸収	一人暮らし準備	
小谷恭介(B)	正社員:配送		無職	正社員:板金工場		ボクシングプロ志望	彼女と同棲	
相良健(B)	正社員	フリーター	正社員:配管工				結婚(新居)	
小林俊介(B)	専門:自動車整備		正社員:車検会社			整備業から店長職に	結婚(親と同層)	
人見加奈(A)	専門:看護			正職員:看護師		消化器外科		
加藤久美子(A)	専門:看護			正職員:看護師		循環器科	一人暮らし同居	
原島智史(A)	4大:工学部			正社員:電気施工・管理		現場監督		
川本裕(B)	4大:社会福祉			正職員:社会福祉法人		障害者支援施設	一人暮らし(寮)	
山口星沙(A)	4大:体育			正社員:スポーツジム		区民センター(委託)		
木戸貴司(A)	浪人	専門:情報処理			正社員	無職	正社員	プログラマ・SE
丸山真(B)	短大:運輸			フリーター		正社員	家電量販店	
非正規雇用従事者 ※「フリーター」:失業期間、複数の職場の同時並行も含む ※在学中のアルバイトは省略								
君島朋子(A)	短大:文学		4大編入		契約社員:旅行会社	添乗員	一人暮らし	
窪田千秋(A)	4大:生物工学系			2年任期の契約職員		専門学校の実験助手		
坂本和孝(B)	専門:保育・福祉			契約職員:社会福祉法人		障害者支援施設	一人暮らし(寮)	
若林理恵(B)	短大:文学		フリーター			焼肉/焼き鳥/スナック	一人暮らし準備	
下川彩乃(B)	正社員	フリーター			メッキ工場(二重派遣)			
浜野美帆(B)	正社員	フリーター			チャットレディ			
吉川綾(B)	専門	フリーター			インターネットカフェ			
西澤菜穂子(B)	正社員	フリーター			出会い系サクラ			
竹内奈央(B)	フリーター			工場/キャバクラ			彼女と同棲	
庄山真紀(B)	フリーター			カラオケ/すし屋			一人暮らし	
自営・自由業者 ※重複部分は活動時間の順								
黒川武志(A)	正社員:車の塗装			アルバイト		居酒屋設立準備	事務所まで寝泊り	
	起業・経営							
	イベント企画		バンド活動	バンド活動×2				
岡本祥子(A)	専門:演劇		アルバイト			コンビニ・MC派遣		
	アルバイト		役者			フリーランスの役者		
学生 ※重複部分は活動時間の順								
桑田泰宏(A)	4大:中国語				フリーター	語学学校留学	大学院進学希望	留学中
	アルバイト		交換留学	アルバイト				
金山克也(A)	浪人		4大:総合系体育学			専門学校入学予定		
			アルバイト					
川辺聡子(A)	4大:動物系			同大大学院		TA(授業補助)		
下田洋平(A)	4大:経済			アルバイト		塾講師・水道検診		
	アルバイト			大学通信制課程		教員免許		
主婦 ※重複部分は活動時間の順								
岸田さやか(B)	フリーター			主婦		妊娠中	結婚(新居)	
神崎晶子(A)	保育園バイト		アルバイト		主婦		結婚(新居→同居)	
	専門(夜間):保育							
堀実香(A)	主婦					子どもは保育園に		
				パート		喫茶店ホール		

図1. 高卒後の移行経路

第1章 正規雇用就職の若者たち：仕事の世界と生活における成長

中村(新井)清二・船山万里子・三浦芳恵

1. はじめに

本章では、高校卒業後5年目の時点で正規雇用就職者として働く若者に着目する。

本章で取り上げる若者は、就労年数によって大きく2つのグループに分けることができる。一つは就職後1～2年目の若者たちであり、もう一つは就職後3年以上を経過した若者たちである。両者はまた学歴も異なっていて、前者が高等教育卒業生または三年制専門学校卒業生であるのに対し、後者は二年制専門学校卒業生1名を除いて全員高卒就職者である。前者に関しては、私たちがこれまで把握してきた就職1年目の若者たちの中でも相対的に高学歴であり、後に見るように従事する職種も専門職が多く、労働条件や職場環境も相対的に整えられている。一方後者は、正規雇用での在職期間が本調査対象者で最長となる5年に及ぶ若者を含んでいる。彼ら彼女らは前者の若者たちに比して相対的に低学歴であり、生産・労務職や販売職が多く、中には労働条件や職場環境が劣悪であるケースもあった。このように条件の異なる両者を同列に扱うことはできないと判断し、以下ではそれぞれに分けて検討を試みる。

本章の対象者たちの語りを見ていくと、両者は上述の異なりにとどまらず、労働や生活において質の異なる課題を抱えているように思われた。すなわち、前者は仕事の世界に入り馴染んでいくという課題に取り組んでいる

真つ最中であるのに対し、後者は仕事に馴染むという課題を終え、職場や、労働に限らない生活全般における視野が広がり、なかには人生の課題ともいべきものと格闘するケースもあった。このように労働・生活において質の異なる課題を抱えている点も、同列に扱えない要因である。

そこで以下では、学歴・労働条件の格差に加え、労働や生活面での課題の異なり、およびその両者のかかわりを意識しながら、2節で就職1～2年目の若者たちの就職1年目における経験を、3節では3年目以上の若者たちに見られる労働・生活面での変化を、それぞれ検討する。また4節では本章のまとめとして、2節および3節での知見をもとに、若者が安定的に働き続けられる職場環境の条件と、正規雇用で働き続けることが若者にどのような意義をもたらすのかをささやかながら指摘しておきたい。

2. 就職1年目の若者たち：「仕事の世界に入る」ための課題と乗り越え

本節では就職1～2年目の対象者の就職初年度の就労状況に焦点を当てる。具体的には、「仕事の世界に入る」という課題が、どのような労働条件や職場環境の下で、どのように経験されたかをていねいに扱う。またその際、対象者が相対的に高学歴であることに留意し、高卒就職1年目を扱った第2回調査での知見と比較しながら検討していきたい。

本節で扱う対象者の教育歴および労働条件は次の通りである。

本節の対象者は、男性5名、女性4名の計9名で、丸山を除く8名は新規学卒者である。彼ら彼女らの最終

表1-1. 就職1～2年目の対象者の教育歴および労働条件

対象者(仮名)	高校	最終学歴(学科)	職業	給与(手取り)	待遇に関する特記事項	労働時間に関する特記事項	従業員規模	職場の同僚	職場に関する特記事項
原島智史	A	大学(理工)	電気・施工管理	約24万	残業代は40時間までしかつかない	納期のため残業100時間・休日出勤を経験	約600名	社員3名程度 (+他の職人)	職場は建設現場
山口里沙	A	大学(体育)	スポーツインストラクター	18万	ボーナスなし		約800名 (アルバイト含)	約20名 (うち社員4名)	自治体より業務委託
丸山真	B	短大(運輸)	家電量販店・販売	20～25万		早朝勤務	約5000名	(不明)	
君島朋子	A	大学(経営)	添乗員	18万	契約社員・年俸制(約250万)	変則的	140名	なし	
木戸貴司	A	専門(情報処理・3年)	プログラマー→SE	22万(転職後20万)	残業代35時間を含む		40名 →340名	出向先では、なし～2名程度	
人見加奈*	A	専門(看護・3年)	看護師(消化器)	約23万		夜勤あり 2交替	500名弱	約30名 (+パート3名)	私立大病院 病棟は約50床
加藤久美子	A	専門(看護・3年)	看護師(循環器)	27～28万		夜勤あり 3交替	約600名	(不明)	全国にネットワークをもつ病院、病棟は約40床
坂本和孝*	B	専門(保育・3年)	生活支援員	17～18万	契約社員、日給制(8800円)	夜勤あり 4交替	約100名	約20名 (非正規雇用含)	社会福祉法人、利用者数20人弱(うち長期約15名)
川本裕	B	大学(福祉)	生活支援員	18～20万		夜勤あり、入職時は機能的な残業	30名 (パート含)	11名 (うちパート1名)	社会福祉法人、利用者数約25人(うち入居者20名弱)

学歴は、大卒4名、短大卒1名、専門学校（三年制）卒4名で、性別的な偏りはない。ただし出身高校別で見ると、B高校出身者の場合、新規学卒での就職先は専門職に偏っており、かつ女性はいない。

他方、職種別¹では、専門・技術職が7名で、高卒就職者の多くが販売職や生産・労務職に従事していた²のと対照的である。また月給20万円を超える者が5名おり、高卒就職1年目の若者の多くが月給15万円前後³だったのと大きな開きがある⁴。企業規模についても、第2回調査の高卒就職者に比べ相対的に大きい。また、第2回調査の高卒就職者が1年以内に約半数離職しているのに対し、今回調査において離職者は1名にとどまっている。

なお本節の対象者には、非正規雇用就職者である君島と坂本も含んでいる。その理由は、二人が有期契約ではあるが、資格等を伴う専門職の職種でありフルタイムで働いていること、契約更新が期待できることなど非正規の中では比較的正規雇用に近い条件である点である。

上述の特徴をもつ対象者はどのように就職1年目を過ごしたのだろうか。以下では、対象者が就職1年目どのような職場環境にあったかを具体的にみるために、新人研修の状況、携わった仕事の内容、上司・先輩とのかかわり、同期の有無、などを詳述する。また、そうした環境下で、対象者はどのような困難を抱え、どのように対処したか、そしてその職場で働き続けることをどのように展望するに至っているか、といった主観的側面もあわせて検討する。

以下の記述では、民間企業への就職者と、看護福祉専門職への就職者に分けて個々のケースを概観する。というのも、後者は職種の類似性、資格等を伴う専門性に加え、入職前に教育機関において長期にわたる実習を課せられているという特徴があるためである。実習を通してその職業の世界をあらかじめ知っていることによって、就職1年目の経験の質が異なってくるのである。

1) 事例1：民間企業への就職者

①建設現場での長時間労働をくぐり抜ける原島智史

指定校推薦で電気工学系大学に進学した原島智史は、電気施行管理を業務とする比較的大きな会社（D電気）に就職した。「大企業の下の方で」働くよりは、「支店長とかになれる」可能性を考慮して会社を決めた⁵。

新入社員研修は合宿形式で入社式の朝まで11日間、うち4日間が自衛隊で行なわれた。内容は実務的なものではなく「社会人として」という一般的なもので、入社

式翌日には「いきなり現場（に）放り込まれた」。当然、現場では何も分からず、作業員に何か聞かれても「分かんないです」と応え、先輩に振ったりして対応した。

最初の現場は多摩地域の新築マンションで、仕事は電気工事の監督だった。現場での実際の仕事は入社3年目の先輩が中心にこなしており、複数の現場を回る10年目の上司はたまに顔を出すくらいだった。3年目の先輩はたびたび遅刻し、8時からの朝礼に原島だけが参加することもあったものの、10年目の上司は「なんだあいつ来てないのか」というくらいで怒るような感じでもなかった。出勤報告など会社への連絡事項についても扱いは緩く、現場は概して「寛容」な雰囲気だった。

現場の進捗状況は遅れ気味で、5月くらいまでは18時頃には帰れたが、7月にはほぼ毎日終電で帰宅、残業時間は100時間を超えた。帰宅できないときは事務所の床で寝た。6・7月は日曜日も出勤だった。3年目の先輩は、事実上の現場責任者を「いきなりやらされちゃったんで、僕以上に現場泊まったりして、大変な感じ」だった。そして、一番大変だった7月初旬、先輩が一時的に失踪してしまう。

ふだん遅刻とかで昼過ぎとかに来るときは、ノートパソコンだけは現場に置きっぱなしで、「あー、今日来んの遅せーなー」みたいな感じだったんですけど、その失踪のときは、ノートパソコンがなくなってるんですよ、デスクの上から。だから「あれ？」とか思ったら、その日は来なくて。ビックリしました。僕はホントにもう、辞めちゃったと思って。

先輩は結局3日ほどして戻ってきたが、その間に指揮を執った10年目の上司が「あいつ、つらい思いしたから逃げ出したな」と話すのを聞いて、「これから先はその10年目の人と俺の二人でやるのかなと思った」という。

先輩の失踪という事件を経験したその現場は7月一杯で終わり、8月からは準ゼネコンから下請けした現場で働くことになった。新しい現場では労働環境が一転し、帰宅時間も早く、日祝日はきちんと休むことができた。現場には50歳代と40歳代の先輩社員が二人おり、図面作成を教えてもらいながら仕事をしている。また、発注者が独立行政法人で、民間の現場に比べると検査が多く、鉄筋一本の違いだけで騒ぎになるなど、「うるさくて遅くて」と彼は感じている。

将来展望について、グループ長や本社勤務員へ昇進して「行けるとこまでいけたらおもしろい」と語る。昇進時期のイメージは、通常、現場責任者になるのが4、5年目で、3年目だとすこし早く、またグループ長は10

年目だと早いほうだという。グループ長になるためには、現場責任者を法的に担うための一級電気工事施工技師の資格が必要で、3年間の実務を経て試験を受けられるという。ただし、「現場で働いてるとそんな勉強してる暇もない」ので、資格取得はかなり先になるという。こうした長時間労働の常態化に対して原島は疑問を感じ、「うちの会社のだめなところの一つ」は労働組合がないことで、「組合あったらいいなって、正直、思います」という。

結局、辞める人はそういう労働環境だから（辞めてしまう）。4、5年目で辞める人がすごい多くて。営業がやたらと仕事を取ってきて、現場に振るのはいいんですけど、現場でやる監督員の数足りてないから、それで仕事が大変になっちゃって、だから「辞めます」ってなっちゃって、ますます人が足らない、そんな悪循環になっちゃってるから。

また、現在の労働条件では残業代は40時間までしか支払われず、その点も「なんとかしようってのが必要だ」と思っている。

②「思いやりの無い」会社で職場の人間関係に支えられている山口里沙

高校の教師になることを目指していた体育大学出身の山口里沙は、主に都内で十数カ所の施設を営業している会員制スポーツクラブにインストラクターとして就職した⁶。研修は3月の終わり頃に3日ほど、書類関係を中心とする形式的な内容で行なわれたのみで、すぐに辞令を受けた。同社への就職に躊躇していた山口はこのとき「もう逃げられないな」と思ったという。同期入社は20人ほどだが、配属は「みんなばらばら」で、3日間の研修ではそんなに仲良くなれるわけでもなく「同期って感じはしない」。

山口が配属された職場は、自治体が出資する財団が管理運営する公共施設の一つで、山口のスポーツクラブが財団からの業務委託を受け運営している。1週間の勤務内容は、月曜と金曜が休みで、火曜はプールで水泳指導、水曜日と土曜日は年配者向けの健康診断があり、木曜は「幼児教室」で教え、日曜は「普通にインストラクター」という具合だ。

職場には、入社11年目の女性職員、10年目の男性職員、5歳ほど年上の「お姉さんみたいな感じ」の管理栄養士の資格を持つ職員と山口の計4名の正規職員と16名ほどのアルバイトスタッフがいる。アルバイトには勤務年数が長い人や年上も多く気苦労は絶えないが、業務は正規職員として「しっかりしなきゃならない」と、

責任感をもって仕事している。

上司や先輩からは新人への配慮のこもったサポートを受けており、職場の人間関係に不満はない様子だ。基本的には、何かあったら上司や先輩を呼び、後ろで見るようにと11年目の先輩に言われており、「困った時はあまり1人では動かない」という。

一方、施設の運営については、財団とのあいだに「いろいろあり」うまくいっていない。財団から委託された業務に追われ現時点ですら「やる仕事が多くて4人でまわすのが大変」なのに、さらに「新しい共催事業をやってほしい」と一方的に持ちかけられてしまった。財団側の責任者が1～2年毎に替わるので「コミュニケーションが取れない」ことに原因があるという。また備品購入や施設補修手続きの煩雑さにも苦勞させられている。彼女は、こうした状況でも人を増員しようとしめない会社に不満があるだけでなく、会社に対する上司の愚痴や同期入社の人一人が「1年目なのに教室を丸投げされ」て離職したことなどから、会社に「思いやりのない」と感じている。

その離職した同期は、新規事業を一人で任されてしまい、「教えてくれる人がいなくて自分でやらなきゃならない」ことになったという。「普通1年目、3年目まで下積みっていうはずなのに」、「ずっと下積みも嫌だけどいきなり（仕事丸投げされるの）も嫌だよなって（離職した人が）愚痴ってました」。その話を聞いた別の同期が「そろそろ私も辞めようかな」というのを聞き、山口は「ああーそんな会社なんだなって」と思ったという。

この会社で働き続けることについて、「もう（同期が）何人も辞めてますし、私も（中略）やるだけやってそれでもおもしろくなかったら辞めてもいいかなって思うし、インストラクターが心底好きなわけでもないし、上司になるのも嫌だし」と就労を継続する展望を持っていない。とはいえ、3年間は続けるつもりだという。高校の教師になることも含め、「3年後に自分がどう思っているかで変えようかなと思う」と語っている。

③非正規雇用のなかで添乗員として成長する君島朋子

高校時代から観光関係の仕事を目指していた君島朋子は、A高校から短大へ進学、そして四年制大学経営学科に編入後、希望通り添乗員の職に就いた⁷。勤務先は大手旅行会社の子会社。雇用形態は、派遣社員の多い同職種としてはめずらしく契約社員で、「お給料的にも全然いい」。実際、1ヶ月の平均添乗日数約18日に対し、給与は年俸制で、初年度はボーナス込みで約250万円、福利厚生完備、その他諸手当がある⁸。ただし、親会社から出向してくる正社員と違い、引越し代や入社前の健

康診断にかかる費用がすべて自己負担であった点には多少不満をもっていた。また、契約更新毎の昇給はなく、また、正社員登用という説明はあったが、実際には「それはないですね」と期待していない。

君島は、短大2年の冬にスクール（無認可校）で添乗員の資格（総合旅程管理主任者資格）を取得している。就職活動では添乗に限らないさまざまな職種に目を向けたものの、やはり添乗しか興味が持てず、「他の（業種）を受けてても、興味がなさ過ぎて、エントリーシートとかも何も書けな」かったという。目指してきた添乗職に就いた君島は、仕事を心から楽しんでいる様子だ。「毎日毎回おもしろいです。お客様が笑ってくれるだけでうれしいし、（中略）座席表を作ったりとか部屋割りしたりとか、業者さんに電話したりとか、そういうのも全部楽しい」。

研修は、マナー接遇などは充実していたようだが、基本的に他の人の仕事が見られないため、添乗にかかわる研修、とりわけOJTの機会を得ることが難しい。入社して2回の研修の後、4月下旬から現場に出たという。一回目は、先輩が添乗する日帰り旅行を新入社員がペアになって見学し、二回目に「自分たちがやってるのを先輩が見る機会があるだけで、すぐに一人で日帰り旅行に添乗した。さらに、日帰りに2、3回出ですぐ二泊三日の添乗に出されたという。

勤務のシフトは流動的で、どのツアーに行くかなどの具体的な勤務予定が分かるのは1週間前、時には3日先も分からないことがある。勤務時間は早朝や深夜にも及ぶ。それでも「朝早いのはつらいとは思いますが、でも全然、出しまえば」平気だという。仕事内容では、接しにくい「気難しい」客への対応に苦慮しているが、「全国もう全部行っちゃたわぐらいの」年配客への対応も、新人の君島には「知識が追いつかない」ため難しく、「ここのお土産はどこで買えるか」などの観光以外の細かな質問に適切に答えることも課題だと感じている。

君島は添乗員として成長することに意欲的だ。「今までだったら普通に何も考えずに5時半に終わるようにやってた準備を、手を抜かないでしっかりやって3時ぐらいに終わらせて、あとの残った2時間半は観光地の勉強しよう」など、時間のやりくりをしながら勉強時間を捻出している。

将来展望は、君島の「人生プラン」によれば、まず「自分が周りを冷静になっていろいろ把握できたりいろんな背景が見えるように」なる3年間は働き続けたいという。そして、25歳で結婚、26歳で家庭に入り、27歳で第1子、30歳で第2子を出産、2児が手を離れたら「派

遣でも何でも」添乗員に戻りたいという。「ずっと添乗員はやりたい」という彼女であるが、職場には出産後も就業継続している添乗員のモデルはない。実際、産休を取っている人は内勤で、添乗員は結婚すると辞めてしまうという。

君島は、今は不満が無いのでこのまま2、3年は続けたいが、今後は派遣社員に雇用形態を切り替えることも考えているという。なぜなら派遣社員であれば「勉強したいって思ったときに休みを取れば勉強ができる」と考えているためだ。添乗員としていち早く成長したい気持ちが強いがゆえに、君島は、勉強する時間を確保するために直接雇用から間接雇用へと労働条件を切り変える選択も視野に入れている。

④大型家電量販店で先輩に励まされながら仕事に慣れていく丸山真

丸山真は、今回調査でただ一人、非正規雇用から正規雇用への転換を果たしている。

「保育園るときから、もうめっちゃめっちゃ電車が好きだった」という丸山は、鉄道関係への就職を目指し短大の運輸系学科に入学した。しかし、色覚の異常から鉄道関係への就職を断念せざるをえなくなり、卒業後は、学生時代からしていた駅の通勤対策補助員としてのアルバイトを1年ほど続けた⁹。その後2007年2月頃にそのアルバイトを辞め、仕事を探しにハローワークに行くと、飯田橋の「東京しごとセンター」のほうが大きくて情報も多いと紹介された。以後週3、4回は飯田橋に通い探したという。そこで紹介された印刷会社でアルバイトとして働き始めたが、会社で「君はこの仕事に向かないんじゃないかって言われて」1週間ほどで辞めた。再度ハローワークに行き、鉄道会社の子会社で電車清掃のアルバイトを見つけ、そこで働くことになったが、「性格の悪い」年配女性従業員たちから「怒鳴られながらやって、嫌になって」しまい7月に辞めた。

再びハローワークに通い、今度は正規雇用に「こだわって」採用情報を求めた。まず中部地方の鉄道会社に応募し、面接まではこぎつけたがうまくいかなかった。その後、都内の大手家電量販店を紹介され、9月に面接し翌月からの採用が決まる。給料(手取り)は20万円前後で、うち家計には5万円ほど入れている。

入社して最初の1ヶ月は、「パートナー」と呼ばれる教育係の先輩社員と実地研修というかたちで仕事を覚えていった。仕事内容は、商品の荷揚げと検品作業と配送準備作業である。勤務はシフト制で、入社した当初は13時から21時までの遅番、現在は早番で、始発電車

で朝5時半に出社して15時まで。ただし残業はほぼ毎日1～2時間している。

1日の作業は、朝一番のトラックが到着し、荷揚げと検品作業を7時半までした後、8時まで休憩をとる。引き続き荷揚げと検品作業をし、同時に11時前の商品配送のトラックが出発するための準備作業もこなす。午前中のトラックが出た後、交代で昼食をとり、午後も同じように、検品と配送の業務が続く。この仕事の「一人前」のイメージは「特に無い」という。

1ヶ月の研修期間中、仕事を教えてくれたパートナーの先輩社員とは良好な関係をもてたが、部署の上司とはあまりうまくいってなかった。その上司は研修期間中でも「ちょっとミスただけですぐ怒鳴る」ような人で、入社して2、3週間くらい「めちゃくちゃ言われた」。上司に怒鳴られたとき、そのパートナーの社員は「俺は丸山くんのことを信用しているから」と仕事の終了時間に合わせてメールをくれた。怒鳴られて「辞めても嫌だし、励ましてくれる人がいて「ありがたかった」と感じている。

現在の仕事における見通しは、父親が70歳を超え、母親が60歳を超えて病気がちということもあり、「とりあえず今は、(この会社で)働いて、親を安心させて」と考えている。しかし幼い頃から抱いている鉄道関係への就職という夢は諦めていない。「まあ、いい鉄道会社があったら、給料安くても、そっち行くなあ」という思いも抱いているようだ。

⑤ IT系中小企業の労働実態に翻弄され早期離職を経験した木戸貴司

専門学校時代からSEになりたいと考えていた木戸は、調査・設計などソフトウェア開発工程の「階層の上のほう」に携わる会社を目指して就職活動をし、2社目にして内定を得た会社に就職した。従業員40人規模、職種はプログラマだったが、「少数精鋭」の会社という売り文句に魅力を感じた。というのも、自らのキャリアを、プログラマからスタートして、SEとなり、転職してるかもしれないが、「そのまま会社に残ってたなら、どんどん上のほうに抜け出して」「いずれは管理職」と思い描いていたからだ¹⁰⁾。

ところが「少数精鋭」と呼ぶには程遠い労働実態だった。驚いたのは「幹部と呼ばれてる人」が自分と同じ「低い階層」の仕事をしていたことだ。木戸は新人研修明けに大手企業に意向し、開発製品のテスト作業に従事したが、上司もまた木戸と同じ段階の仕事をしていた。これを知った木戸は、この会社で「自分が何十年働いてもた

ぶんこのポジションなんだって思って、『えー』って思っちゃって。だから、先が見えてる、もろに見えてるって感じで。努力するだけ無駄だ」と思い始めた。実際、離職者は「かなり多い」らしく、「問題のある会社なんだ」と察せられた。

他にも不満があった。基本給にあらかじめ30時間の残業代が含まれていて、さらに30時間を超えても支払われないという「トリック」があった。また、5月末までの新人研修期間では、「教育係的な人」はいたものの「片手間みたいな感じ」で十分な指導を受けられず、研修課題は「インターネット使って自分で調べて、四苦八苦」しながらろくろじてこなし。社員間のつながりも「薄い感じ」で、「アットホームです」という会社の喧伝には「どこがだよ」と思った。出向先では、会社の先輩らと「散り散り」になり、「週に1回会議室を借りて集合会議」を行なうほかは、基本的に1人または2～3人の作業だった。同期は彼の他に女性が一人のみで、話しづらく感じ「あんまコミュニケーションも取ってなかった」。

それでも木戸は、「やっぱ入ってすぐに辞めるっていうのもどうなのかな」とギリギリのところで踏みとどまっていた。「親に言っても絶対、『最初はみんなそうだ』って片付けられる」と思い、離職したい旨を親には話せなかった。また、専門学校時代の友人たちはずっと就労継続している人ばかりで、愚痴をこぼすことはできても、本当に辞めれば「もう辞めたの」「あいつ根性ねえ」などと言われると思っていた。入社前に思い描いていたキャリアパスは閉ざされ、この会社で働き続けたいとは思えないなかで、「本当に自分だけで」進退を考え続けた木戸は、次第に「自分を責め」るようになり、「うつみたいな症状」を呈し始めていた。

そんな折、入社以来一度もシステム開発にかかわったことのない木戸に、上司から開発をやってほしいと突然言われた。それは、出向先で、まったく知らないコンピュータ言語で、「3日間で作って、しかもどう作ったかっていうのをプレゼン」せよというものだった。しかし、渡された見本を頼りに土日を使って本で調べても、「全然本と違う」ため、「こんなのヤクザだよ」としか思えなかった。「もう無理だ」「できない」と窮した木戸は、「行けないに近」い状況で会社を「バックレ」た。入社から3ヶ月経った7月の初め、「失踪に近い」離職だった。

その後、木戸は1ヶ月以上にわたって「うつの影響」に悩まされた。「やっちゃったよ、俺。雇ってくれるとこあのかよ」と、「今度は将来のほうで(自分を)責めてるっていうのが8月いっぱいまで」続いた。なぜな

ら、3日間ではどうにもならない「まったく知らない言語」の知識が、もしかしたら「一般常識」なのではないかという疑念が消えなかったからだ。「もしかしたらできるかもしれないってのもあって、でもどうなんだろうって思って、それでもちっこい会社だったんで、これくらいできないと大きいところじゃ通じないんじゃないかってのもあって、スキルのどうなんだろう、可能なのかどうかっていうのも（分からなくて）」。

こうした状況からの回復のきっかけになったのは、他社で新人として働き始めた専門学校時代の友人たちだ。離職までの顛末を話すと、友人たちは「まったく知らない言語」による課題に対し、「えっ!」「ありえねえ」などと反応した。木戸はそれを聞いて、「前の会社はちょっと異常だったんだろうなっていうのが分かって、他の会社だったらもう少しはマシだろうって安心感みたいなのが得られた」という。そして「あんな会社のせいで人生狂わされてたまるか」と思い直し、9月になってやっと「第二の就活」のための行動を取れるようになった。

現在、木戸は、1社目の約10倍の従業員を抱える大企業にSEとして再就職を果たしている。同期入社が他に8人おり、資格取得だけを目的として用意された研修に同期全員で1ヶ月間泊り込みで参加したことで、相談しあえる仲間ができたようだ。その後、プロジェクトチームに加入し、先輩たちと4人でシステム開発に取り組んでいる。

⑥小括

以上、民間企業に就職した5名の若者たちを見てきた。まず、彼ら彼女らの労働の実態を見ると、それぞれ厳しい労働環境が語られていた。原島は長時間労働や休日出勤が常態化した現場で先輩社員の失踪を目の当たりにし、山口は会社の事業形態の複雑さに苦労していた。君島は非正規雇用が常態化する職種ゆえに自力で展望を切り開かねばならず、木戸は入職前の展望と現実の長時間単純労働という実態との落差に苦しみ、なんの研修や指導もなく初任者に仕事を丸投げするような扱いをされた。このように彼ら彼女らは、それぞれの職場で仕事に馴染んでいくのを妨げるようなさまざまな困難にぶつかっていた。

こうしたなかで、木戸はうつ状態で自分を責めながら離職に至ったが、その他4名は離職することなく就労継続中である。彼ら彼女らを支えたものは、上司や先輩からの適切な指導や援助、あるいは職場の同僚からの新人への配慮あるかかわりだった。この点は、仕事上の困難を抱えても職場に助けてくれる上司や先輩がいなかったケースがほとんどであった第2回調査での離職者と対照的である。

また、第2回調査における就職1年目の若者たちや、本稿における非正規雇用の若者たち(第2章)と異なって、将来展望は比較的明瞭に語られていた。原島は、3年後に一級電気工事施工技師の資格を取得し、10年後には本社勤務をイメージしていた。山口は少なくとも3年間は同じ職場で働き続ける意思を表わしていた。君島は途中結婚で離職するも、育児が一段落したところで再度添乗員職に就くことを希望していた。丸山は中途採用での就職だったため日も浅くまだ十分職場について把握していないように見受けられるが、鉄道会社への転職に期待をよせつつも、両親を安心させたいためにも現在の職場で働き続けるつもりである。木戸は一度離職したものの、同業者である専門学校時代の友人の励ましもあり、再就職し少しずつ修正を図りながら将来を見据えていた。

ただし、彼ら彼女らの語る将来展望は、次項で見る看護職に参入した対象者と比べると限定的であるようにみえる。また、民間企業への就職者たちの就職1年目が、就職後にOJTなどを通して職場に慣れ、仕事を覚える途上にあるのに対し、看護福祉系専門職への就職者たちは、長期の実習によって職業準備期間をすでに終えており、1年目から一人前として期待される。こうした違いが就職1年目を支えるシステムとどのように結びつき、またどのような経験の差として表出するのか。その点に留意しながら、次に看護福祉系専門職に就いた若者たちの1年目を見ていきたい。

2) 事例2：看護福祉系専門職就職者

①憧れの看護職に就き一人前へのステップを確実にのぼる人見加奈

2006年度に公立看護専門学校を卒業した人見加奈¹¹は、都内の大学病院に入職した。高校時代バスケット部に所属していたため、はじめは整形外科を希望していたが、身近にいる看護師の先輩や看護学校の同級生などから、「身体のいろんなことを学んだほうが、他の病院に行ってもやっていける」と助言されて消化器外科への配属を希望した。

手術を控えた入院患者が多い消化器外科病棟の同僚は30人以上いて、師長のほか、主任は二人とも30代、それ以外は皆20代と若い。1人辞めたが、同期は6人いる。勤務形態は2交代制。病床約50に対し、日勤は看護師が8～12人の他にヘルパーが3人いる。夜勤は4人体制なのできつい。申し送り、夕食の介助から始まって、消灯後は2時間毎の見回り、早朝の検温・血圧測定、

加えて深夜には点滴の薬剤の準備など細々とした作業もあり、仮眠は2時間程度しか取れない。年休の消化は職場が多忙で容易でないが、師長が配慮してなるべくまとめて休みを取らせてくれる。職場の人間関係も良好だ。

人見は看護師という「好きな仕事」に就くことができたことを幸福に感じている。高校3年次、彼女は高卒後の進路を「看護師！一本！」(2002)と明快に語っていたほど、看護師になりたいという意志が強かった。前回調査時も、看護学校2～3年次のつらい実習を母親と仲間の支えによって乗り越え、就職後もより高い技術・知識の習得を志向しており、看護職への思い入れは強い。

そんな人見でも、就職1年目には、看護師を辞めたいと思うほどつらい葛藤を経験した。

やっぱり自分と他の同期を比べちゃうとか、そういうのがすごいあって。「(先輩は)あの人には優しいのに、なんでうちにはこんな厳しいのかな」とか、そういうのですごい悩んだり。勉強にしても、人より何倍もしなきゃ覚えられないけど、みんなは1、2回やれば覚えちゃったりとか、そういう葛藤がいっぱいある¹²、それがつらかった。先輩にいじめられたりとかじゃなくて、ただその自分との葛藤、壁を破れない自分がすごいつらくて、ああ辞めたい、みたいな。でも、1個やって褒められたりすると、ほんのその一言で、またやる気になってる自分が1年目はすごくいた。

こうした状況乗り越えたきっかけのひとつに、入院患者との交流があった。1年目の冬のある夜勤の日、余命わずかな一人の患者が、「今日僕は最期な気がするんだ」と言って、彼女に「ありがとう」と告げた。当時葛藤に苦しんでいた彼女は、「こんな私でも必要としてくれてる人がいる」と感じたという。

また、家族や友人にも支えられた。看護学校でのつらい実習を支えた母親は、就職1年目の葛藤の時期にも、人見が漏らす弱音を「うんうんって聞いて」くれた。また彼女には、看護学校時代にストレス発散のため始めたサーフィンを一緒にする幼なじみや、最近趣味で始めた写真で一緒に展示会を開いた地元の先輩など、地元で精神的支えとなる友人がいる。

しかし、母親や地元の友人には具体的な仕事の話はほとんどしない。代わって、仕事に直接かかわる悩みやつらさを共有し支え合うのは、看護の仕事の世界を知る職場の同期・先輩や、看護学校時代の同級生だ。なぜなら、他の職業の人に話しても「あ、そんな仕事してるんだ」という反応で、職場の同期のほうが「すごい分かるし、分かってくれる」からだ。さらに「医者のお痴」は、

「職場の同期であってもどうつながってるか分からないから、女の世界だし、怖い」ので、違う職場で働く看護学校時代の友人に漏らす。このように人見は、職業の異同にかかわらない、また職場の内外に広がるネットワークを多層的に維持し、その時々適切な感情的支援を得ることで多面的に支えられている¹³。

人見は今回調査時には就職2年目になり、「病棟の流れも覚えてきた」という。先輩を見ていて、一人前の看護師になるには5年くらいだという。3年目にチームのリーダー業務をやって、4年目でその業務を習熟し、やっと5年目で全体が見える。また3、4年目には、4人1組で行なう看護研究がある。あるテーマのもとで研究し、勉強会を病棟の中で開いて同僚から意見を聞いたり、1年に1回ある発表会で論文発表をするという。このように、業務や看護研究などに取り組む先輩の姿を通して、職場での仕事の見通しや成長過程が具体的に捉えられている。消化器外科にはさしあたり5年は勤務する予定でいる。

人見は、第1回調査以来一貫して、国内で看護の技術をしっかり習得した後、海外の貧困地域で医療活動に従事したいという夢を語っている。今回調査では、20代のうちに行きたいと具体的な時期を語った。しかし、現在の職場には彼女の夢を支援する制度はなく、具体化の見通しは立っていない。

②休日も医療の勉強に費やす加藤久美子

同じく看護師になった加藤久美子¹⁴は、全国にネットワークをもつ都内の病院に就職し1年目を迎えていた。所属は循環器科だ。「そこができていれば基本的なことはできるだろうと判断して」「今の死亡率も心臓が高いですし」との理由で選んだ。

加藤は、看護学校時代に留年を経験し、看護師を諦めかけるなど、つらい経験乗り越えてきた。だが就職後もまた、「社会人として慣れななきゃいけない部分」と、看護師としての責任を果たすための両方の課題と向きあうため、6～8月ごろに大変な思いをしたという。たとえば、熱を出しても代わりがないので出勤しなければならぬこと、勤務時間はバラバラで生活リズムを合わせるが大変なこと、他職種の友人とも時間が合わなくなり会えなくなったこと、循環器病棟の新人が彼女一人だけで全員先輩なので人間関係に慣れるのも精一杯だったこと、看護師免許を持っているために責任もあり「裁判沙汰」になる場合もあること¹⁵、など。そして最もつらく、看護師を「辞めたい」とまで思ったのは、「就職しても勉強しなきゃいけないんだというのをあらためて

実感」したときだという。加藤は、休日さえ「勉強しているか、寝ているか」というほど勤務時間外にたくさん勉強しており、その量は「学生時代よりもしてる」という。自分が患者を「受け持ったときに（その患者の病気について）分からないと、何をしたいかとか、何を看たいのかとか分かんないです。やっぱりその時間帯は自分の責任になる」からだ。このように毎日「勉強勉強」の生活から加藤は「勉強が嫌になっちゃったりとかして、投げ出したい」と思ったという。しかし、4月とともに新人研修を受けた他の病棟で働く同期や、4年目の先輩である職場の教育係、看護学校時代の友人と食事に行ったり話したりすることで、なんとか支えられた。また、退院していった患者から、後日、廊下で会った時に声をかけられ、「覚えてくれてるんだ」と思ったときや、患者の病気や処置方法が分かるようになったときの嬉しさにも、日々支えられている。

将来展望について加藤は、「3年間は同じ場所で働かないと、学べるものも学べない」と考えている。また、第2回調査までは助産師志望を強く持っていたが、現在は訪問看護に関心を移し、卒業研究では、在宅看護を継続できている家族の特徴をテーマにしたほど、「家に帰っても入院を繰り返している人も多い」現状の改善に関心を持つようになった。この背景には同業者である母親がかかわっている。母親は数年前に訪問看護の認定看護師資格を取得し、今も現役で在宅看護の地域支援に携わっているという。そして自らも、いずれ認定看護師の資格を取得したいと考えている。

加藤は、自らの人生設計のモデルについても、「たぶん自分の母親」だという。「働いているのが当たり前」の母親を見て育ってきたため、自分も「専業主婦(になる)」というイメージがない」という彼女は、結婚・出産後も職場復帰を展望している。なお、加藤には他県に恋人がいて、就職して3年経っても交際していたら結婚しようと考えているが、それが実現した場合、自分が東京を離れることになるだろうという。看護師資格があるため自分の方が「就職先がいっぱいある」からだという。母親の働くフィールドである「地域」や「献血場」、「検診のところ」など、病棟以外にも看護師を必要としている場所がある点で、看護師は「やっぱりいい職業だなどと思わず」と誇らしげに語っている。

③正職員になることを躊躇する生活支援員の坂本和孝

坂本は専門学校卒業後、障害者支援施設で契約職員として勤務して2年目になる¹⁶。保育園への就職を希望していたが見つからず、障害者福祉の分野に視野を広げた

ところ、専門学校の教師から現在の職場を紹介された。

勤務開始の日に職員が集まり、施設の概要を説明された後、この日に配属も発表され、坂本は「生1（生活支援第一係）」に配属となった。「生1」の仕事は身体障害を含まない知的障害者の生活支援だ。具体的な仕事は、重度知的障害者の起床介助、食事の準備、軽作業の手伝い、入浴介助など日常生活の手伝いである。勤務体制は、早番3人、日勤1人、夜勤が2人、夜勤は月に4回ほど、残業は週に1、2回で4時間ほどだ。最初の約1ヶ月だけは、教育係の先輩が一人多く入り、新人に夜勤は課せられない。施設では、職員同士が業務について議論する会議が半年に1回行なわれており、風通しは悪くない。またそのための議題を準備するための集まりを業務後に個別にもつこともあり、その準備にも残業代が出ている。

坂本が就職した当時は「生1」に21人いた職員が、1年のうちに3人離職し、シフトを回すのが大変になっていた。坂本が入職した頃は「生1」の離職率が高いと言われていたが、それはきつい先輩が原因となっているようだ。坂本も「すごい責められて」「厳しい」と感じ、坂本の同期の一人も1年経たずして人間関係が問題で辞めてしまった。1年目の6月のあるとき、そのきつい先輩二人が坂本のことを「悪口みたいな感じで」喋っているのを聞いてしまい、その後も坂本は「変な雰囲気」を感じていたが、同じ職場の「いい先輩」が「よく飲みに誘ってくれた」ことで、辞めるまでには至らなかったという。その後、このきつい先輩のうち一人は2年目には異動になり、現在では職場の雰囲気が良くなったという。そして2年目には、坂本と同じ専門学校・学科出身で面識のある後輩たちが入職してきたが、彼らも同じ「生1」で働くこととなった。その背景には「1年目に辞めてほしくない」という施設責任者の配慮があったようだ。

人間関係に苦勞した1年目だったが、それでも坂本にとっては「利用者のほうが大変だった」という。たとえば、ある利用者に歯磨きを促したところ、拒否されたうえに「怒られたり、蹴られたり」「唾吐かれたり」されたのである。このとき、坂本は「めっちゃへこみました。キレる、怒るとかいうより、へこみましたね」と語る。しかし、過去にこの利用者を担当した先輩から、利用者の利用歴や「相性とかもある」という話を聞くことで、なんとか乗り越えた。

現在2年目を迎え、仕事にも慣れてきた坂本は、やったことのない仕事をしたり、支援のなかで細かなことに気づくようになり、工夫して改善するのが「すごくおもしろい」という。たとえば、衛生面を考えて歯磨きのコップを替える回数を増やしたり、昼食の準備を効率的に行

なって散歩の時間を増やすなど支援の改善をいくつか提案し実際に採用されている。彼のこうした実践は同僚からも認められ、最近では改善策の提案を頼まれるようにさえなったという。また、同じ「生1」で勤続10年目の先輩をモデルにして、自らに課題を設定しながら実践に取り組んでいる。

職場外の人間関係については、学生時代のつながりから継続している「ビーチバレーのサークル」や、通っていた専門学校がある高田馬場での「飲み会」に参加している。特に、「ビーチバレーのサークル」では、同じ専門学校の仲間と「オールしながら」仕事の話をするという。就職後1年目では「全然仕事の話しなかった」が、「2年目になってなぜか、すごい仕事の話するようになって」いるという。

坂本は現在契約職員として働いているが、2年目で正職員になるための試験が受けられる。現在の待遇は、手取りで18万、ボーナス5万、不定期だが週2日は休みがある。しかし、今年正職員になった先輩に話を聞くと、正職員になると会議が増え、休みは若干増えるが、給料が減るといふ。正職員になったからといって待遇が良くなるとは限らないうえに責任は重くなるのを見て、「(仕事は)一応ずっと続けようと思っすけど、(正職員になるのは)どうなんだろう」「このまま契約社員のほうが(いいかも)」と正職員への転換を躊躇している。

④先輩の支えによって働き続ける気持ちを固めた川本裕

大学で福祉系の学科に通っていた川本は、所属していたゼミの教員が理事長をしている地方都市の精神障害者施設に正規職員として就職した。

この教員は彼が最も影響を受けた人物であり、当初保育士を志望していた川本を福祉の方向に転換させるきっかけを作った。大学の1年次から川本はこの教員に誘われ、関連する学会に参加するなど積極的に学校生活を送っていた。そして、勉強を進めていくうちに福祉の仕事に就くことを考え始めた。4年次からの実習では、病院と精神科クリニックのデイケアに行き、現場で働く厳しさを知ることとなった。その後、川本は精神保健福祉士の資格を取り、現在の職場に就職した¹⁷⁾。

川本が勤めるのは、施設内にあるいくつかの機能別事業所の中でも生活支援をする事業所である。精神障害をもつ利用者の食事や服薬、入浴、洗濯、金銭面の管理など日常生活の介助をしながら、「プログラム」と呼ばれる多種多様なレクリエーション(季節の行事や誕生日会、「頭の体操」、畑仕事や書道など)の企画を考案・実施している。

川本は、利用者の話を聞くことを心がけるなど、利用者との日々のかかわりにも腐心している。しかし、1年目の夏には女性の利用者から付きまとわれ、一時は離職を考えたという。病状が悪化している利用者で、川本の顔をうかがって極端に接近してきたり、後ろから捕まえてくるなど「もう仕事になんない」ほどだった。夜勤の日は事務所に鍵をかけなければ仮眠が取れないときもあった。こうしたことから次第に周りの利用者にも影響が出始めると、川本は「僕が悪影響を及ぼす原因を作っているのかな」「僕がいることで周りの人が調子悪くなっちゃったらどうしよう」と、うまく対応できずにいる自分に苦しみ、「辞めたい、つらい」と思ったという。

このトラブルの際に、川本の一歩の相談相手となったのは、大学の先輩でもある30歳くらいの上司(A先輩)だった。A先輩は川本を飲み회에誘い出し、話を聞いてくれたり、アドバイスをくれたりしたという。

A先輩は職場のリーダーとしても川本に大きな影響を与えている。A先輩は働きやすい職場づくりを実践し、職場で常態化していた残業が彼の働きによって解消されつつある。年に10日の有給休暇はあるが使う人があまりいないこともあって、川本は使いにくいと感じていたが、先輩に「使いなさい」と後押しされ、旅行の計画を立てることもできた。また、責任者会議を開き、仕事のやり方について話し合う機会も作っている。これら取り組みの結果、職場内は「風通しが良く」、人間関係も改善されてきたという。さらに、川本が月に1回程度他施設(学生時代の実習先)で行なわれる勉強会に参加する日を研修日として出勤扱いにするなど、職員の成長を積極的に後押ししている。

A先輩は、川本に給与面での待遇改善についても語ることがある。現在の川本の基本給は16万だが、勤続10年近いA先輩も給料はさほど変わらないという。給与について川本は、「結婚するにしても、親と一緒に住むにしても、今のお給料ではちょっと厳しいと思うので、もっと稼げるようにならないと、後々大変なのかな」と不安を抱えているようだ。こうした現状に対し、A先輩は川本に、「手取りで自分の年の数だけ給料をもらいたい、(中略)それぐらいもらえるようにならないと、質のいい援助とか、そういったものができてこない」と語っている。

以上のように川本は、給与の低さや利用者とのトラブルに悩みながらも、A先輩をはじめとする職場の先輩を中心とした人間関係に支えられて働いている。しかし、現在の職場は今年いっぱいの勤務であり、来年は異動がある。もし利用者の就労移行を手伝う部署に行くことと

なれば、行政からの委託事業であるため定められたノルマがある。2年で4人を就職させるといふ、かなり厳しい条件である。それでも川本は、今後の展望について「こないだ上司と面接して来年どうするっていう話をして、働きます、ということでお答えしてきたところです」と働き続ける決意を明らかにしている。

⑤小括

以上、看護福祉系専門職に就職した4名の若者たちを見てきた。彼ら彼女らに共通する特徴としてまず指摘すべきは、4名のうち3名（人見・加藤・川本）が就職1年目に「辞めたい」と思い詰めた経験があったことである。看護福祉系専門職は、入職前に教育機関において長期の専門的な実習が課せられているため、民間企業を離職した木戸のように入職して初めてその職種の労働実態を知るといふ状況とは異なっていた。にもかかわらず、3名に離職の危機が訪れた点には、新人であっても利用者からはベテランと同じような技量が求められるという対人サービス専門職の特性がかかっていると考えられる。たとえば人見が辞めたいと思ったのは、先輩に認められないつらさや、うまく成長していけない焦りを感じたときであり、加藤の場合は、受け持ちの患者への責任を果たすために、学生時代以上に医療の勉強をしなければならない苦しさにも耐えかねたときであり、川本のケースでは、利用者からの付きまといにうまく対処できないと自分を責めたときだった。彼ら彼女らが「辞めたい」と思うきっかけとなった出来事は、いずれの場合も、入職間もない頃から一人前としての力量が求められる職種の性質ゆえに生じたものである。

それでも3人が辞めなかったのは、民間企業就職者に比べ、新人研修が整備されていたり、教育系の先輩がきちんと配置され、機能しているなど、新人への支援体制が整っていたためであろう。この点は、民間企業就職者の多くが新人研修が不十分なまま現場に出されたことと語っているのと対照的である。また、感情面で支えてくれる存在として、職場の先輩や同期とともに、学生時代の友人たちが重要な役割を果たしていることも特徴的である。人見、坂本、川本のケースに見られたように、学生時代の友人は職場外の同業者として、それぞれの職場での出来事や情報を交換しあい、互いに励ましあう重要な存在だった。このように、職場内外のネットワークによる支えもまた、彼ら彼女らの離職を食い止めていた。

他方、看護職と福祉職のあいだには少なくない隔たりも見られた。まず、看護職は福祉職より施設規模が大きいと、新人研修とともに学んだ同期が多く、配属

後にもつらさを共有し支えあうネットワークを形成していた。また、看護職が伝統のある職業であるため、新人への支援体制がより整えられているのみならず、在職年数に応じた役割が一定存在することによって、一人前になるまでの成長段階が制度的に明示されていた。人見が先輩の姿を見て、「5年くらい」で一人前になれると見通しているのは、その証左である。さらに、福祉職は看護職に比べ、低賃金・長時間労働、長期的には昇給が見込めないといった条件で働いている。この第三の点について、看護職からは聞かれなかった就職継続への不安が語られていた点は重要である。これは、長期勤続自体を展望できない給与体系という福祉職の業界自体の問題である。坂本は正職員になったら給与が低くなり、将来も昇給が望めないことから登用試験を受験することに躊躇し、川本も、30歳ほどの先輩が新任者の川本と同水準の給与であり、この水準では「後々大変」だと感じていた。とはいえ川本の職場には、「質のいい援助」のために現在の状況を問題化し「働きやすい職場」を作ろうと努めている先輩がいた。先輩の職場づくりは、取りづらいつつ雰囲気となっていた年休の消化を促すことや、「風通し」をよくするために責任者会議を開き、職員間の認識のギャップを埋めることなどを通して行なわれていた。また、他の施設での勉強会を研修として認め、川本が職場外のつながりを維持できるように取り計らわれてもいた。このような職場外のつながりは、各職場固有の問題を共有する場であるだけでなく、給与水準のように一つの職場にとどまらない問題を捉える機会でもあり、「働きやすい職場」をつくるために重要であろう。こうした支援は、給与体系などの問題を福祉労働者として把握する機会をもたらしており、職場内には職業人として育つ土壌が形成されつつあるといえる。

3) 考察

本節ではこれまで、就職1～2年目の正規雇用の若者たちを、職種別に二つのグループに分け、それぞれが新人として置かれていた労働条件・環境とともに、主観的側面（辞めたいと思ったことや、それへの対処など）にも着目して、個々の具体的な経験を詳述してきた。以下では、二つのグループをまたぐ論点に照準しつつ、今回の対象者が中等後教育卒業後に就職1年目を迎えた若者たちであることを考慮して、第2回調査で取り上げた高卒就職者の1年目の状況と照らし合わせながら考察を試みる。

① 就職1年目以内の離職に見られる強い自責感情

今回調査で唯一、就職1年以内の離職者だった木戸の

離職前後の状況に着目したい。木戸のケースに見られた離職に伴う自責感情は、初職段階での学歴、仕事内容の複雑さ、職業準備の水準などの点で格差があるにもかかわらず、高卒就職1年目離職者である高橋有香も抱えていたものであった¹⁸。二人は、離職せざるをえなかった理由を誰にも相談することができず個人で引き受けていた点において共通している。

高橋は高卒後、化粧品などの容器の加工・塗装工場に就職したが、就職1か月目頃から、勤続20年ほどのパートの年配女性からいじめを受けるようになった。その女性のいじめは、それによって過去に新入社員が8人も辞めたほど悪質なものであった。しかし周囲の人々は、いじめの現場に居合わせても、年配女性を注意したり、高橋をかばったりせず、後になって気にしないように、と言うきりだった。高橋は次第に孤独感を深めていき、ついには出社できなくなってしまう。「(朝、家は出るので)親は会社に行っていると思ってるんですね。だけど結局私は会社に行けないんですよ。電車に乗るんですけど、その駅で降りられないんですよ。あと、おなかが痛くなって」(2003)。このように高橋は、つらいと体調が本当に悪くなるのだと知り、「登校拒否児の気持ちがよく分かる」(2003)と語っていた。いじめに沈黙する職場で誰も信頼できず、また親にも相談できずに、彼女は離職に至った。

同じように、木戸は辞めたい思いを周囲の人間に打ち明けられなかった。親に言えば「最初はみんなそうだ」と言われるだろう、専門学校時代の友人には「あいつ根性ねえ」と思われるだろうと、自分に批判的な言葉ばかりが想像された。彼は次第にうつ状態に陥っていく。そして、会社に踏みとどまろうとするものの、行けなくなるというかたちで離職に至る。離職後は、さらに1ヶ月以上にわたって、こんな自分を雇う会社などないと、辞めてしまった自分を自分で責めてしまう状態が続いた。

木戸がこのような状態に追い込まれた直接の要因は仕事の丸投げだったが、今回調査における他のケースと比較すると、その他にも木戸が置かれていた状況自体、新入社員としてその職業や職場に馴染んでいくのを支える諸要素が欠如していたことも看過できない。たとえば研修について、民間就職の原島や山口とは対照的に、出向先ではOJTの機会がないばかりか一人での作業が多かった。「いきなり現場に放り込まれた」原島の場合でも、基本的に3年目の先輩が中心で、知らないことを「先輩に振ったり」できたのと比べると、木戸には頼れる先輩が周囲にはいなかった。また、彼にとって人見や加藤に見られるような愚痴を言いあえる同期はいないも同然

で、加えて山口や川本、坂本のように精神面での支えとなってくれる先輩もいなかった。それどころか、人見が職場の先輩から一人前への成長のイメージを見出していたのと正反対に、彼にとっての上司は入職前に描いていた理想のキャリアパスを打ち砕く労働実態を体現し、この会社で働き続けたいという意志をそぐ存在だった。このように木戸の離職の要因は、けっして彼の個人的資質に帰するものではないのである。

木戸や高橋のケースから浮かび上がるのは次のことだろう。すなわち、学卒後間もない若者は、たとえ自らの仕事に理不尽さや無意味さを感じるがあっても、「最初はみんなそうだ」と我慢して乗り越えなければ普通の社会人ではないという価値観を強く内面化しており、不本意な早期離職の前後には精神的な苦痛を伴ってしまう。また、心身が保たれないほど傷ついた挙句の離職であるがゆえに、自らの離職行動を正当化できるようになるまでに長い時間を必要とする。しかし、彼ら彼女らが離職に追い込まれた背景には、新入社員を支え育てる職場環境が未整備であるなど、外在的な諸要因が存在している可能性は否めない。二人の早期離職者のケースは、いわゆる「七五三現象」と揶揄されるようなたやすく離職する若者像とは異なる実像を私たちに与えている。

② 職場外の同業者が果たす機能

さきに民間企業就職者と看護福祉系専門職就職者との差異にふれた(2項⑤小括)が、両者に共通する点もある。その一つは、就職1年目を支えるものとして、職場外の同業者が重要な役割を果たしている点である。その多くは専門学校時代の友人であり、このことは今回の就職1年目の対象者が中等後教育への進学者であることと密接に関係している。

専門学校での仲間は、専門学校時代には学習場面での学びあいとともにハードな学校生活や実習を支えあう機能をも有していた¹⁹。そのような「専門学校固有の関係性」によってつながっている専門学校時代の仲間たちは、卒業後においても、就業継続に直接的に結びつく感情的支援を提供している。

たとえば人見の場合、地元の友人たちは主には趣味など仕事以外の楽しみを媒介につながる仲間として位置づけられていた。それとは対照的に看護学校時代の友人は、看護の仕事をよく知る仲間として仕事上の悩みを共有しあい、かつ「医者のお愚痴」など、職場の同期にすら話せないことまで話せる重要な存在となっていた。彼女が仕事上の問題を打ち明け解決を図ろうとする同業者のネットワークは、職業的な成長を支えることに大きく寄与し

ていた。

また木戸のケースにおいても、専門学校友人は、離職の引き金となった「知らない言語による3日間でのシステム開発・プレゼン」が、新人プログラマに可能な職務内容でないことを指摘し、木戸の自責感情を解きほぐす重要な役割を果たした。木戸にとって専門学校友人は、職場や労働状況を相対化してくれる存在だったと言い換えることもできる。再就職への道を早期に歩み出せた要因として木戸に見出せて高橋に見出せなかったものは、こうした同業者のネットワークであった。

③ 仕事の見通しをもてることの重要性

民間企業就職者と看護福祉系専門職就職者の共通項の二つ目として、就職1年目の乗り越えに職場の先輩や上司が深くかかわっている点が挙げられる。しかし、先輩が果たしている機能をつぶさに見ていくと、新任者の相談役・助言者としての役割以外にも、労働のモデルというもうひとつの重要な役割があることに気づく。

看護職の二人は、いずれも就職1年目に職場の先輩や同僚による支えを得ることができた。加えて、各々が看護師としてのこれからの歩みを具体的に捉えることができていた。人見は、病棟で共に働く先輩の姿から、3年目、4年目、5年目の具体的なイメージを捉えていたし、加藤は、同じ看護師である母親の姿から、病院の外で働く看護師のイメージや、出産後も働き続ける具体的なイメージを掴んでいた。人見にとっての先輩は、この職場で働いていると何年後にどのような仕事を任せられ、どのように一人前への階段を上っていくのかを示す存在だといえるし、加藤にとっての母親は、生涯にわたって働き成長しつづける看護師の姿を体現する存在である。このようにモデルを通して自らの将来を具体的に見通すことができるのは、看護職が専門職として一定の歴史をもち、年長者のモデルが身近に存在するためである。

人見・加藤と対照的なのが木戸のケースである。木戸は職場に支えとなる先輩・同僚を得ることができただけでなく、彼にとって先輩は、「努力するだけ無駄」だと思わせる存在だった。この背景には、中小ソフトウェア開発企業における長時間単純労働という労働実態がかかわっていた。木戸のケースは、就職1年目において、この職場で働いていれば成長できるという見通しを持てなかったことが、職場環境に馴染むことを妨げ、学卒間もない若者にとって立ち足はかかる壁となったことを示している。

人見・加藤と木戸のケースの差異が表すのは次の事実である。すなわち、先輩(=年長の同業者)による支え

とは、新任者が就職間もない時期に経験するつまづきを乗り越えるための支えであるだけでなく、この職場や職業での労働および一人前に至る成長過程を具体的に表現し、この職場で共に働き続けることが自分の成長につながっているという感覚を新任者にもたらしめているのである。ここで強調したいのは、先輩という存在が、昇給・昇格のコースを例示する存在であるというよりも、具体性を帯びた労働そのものを表しているということであり、新任者はそこに自らの将来の歩みを見出し、職業人として成長していけるかどうかの見通しも立てているという点である。

④ 見通しを持つことを規定する条件

ところで、先に論じた先輩の示す労働実態とは、まさにその業界における労働の特質をも表現していた。つまり、就職1年目の若者が仕事の世界に入り込み馴染んでいく過程には、個別具体的な職場環境や人間関係だけでなく、彼ら彼女らが参入した業界の抱える諸問題もが影響しているのである。

たとえば福祉職の二人は、将来的に昇給が見込めないことへの不安を口にしてはいたが、それは就職1年目の他の対象者には見られなかったことである。そして坂本は、給与の問題から正規職員への転換に躊躇していた。このことが端的に示すように、福祉業界の給与水準を含めた労働環境が抱える問題は、彼らの1年目にとっても小さくない。

したがって、川本のケースのように、問題の所在を把握し、具体的に改善を進めながら解決を目指す先輩の下で1年目を過ごすことの意義は大きいと考えられる。川本にとってA先輩は、離職の危機にまで追い詰められた利用者とのトラブルから彼を助けただけでなく、福祉業界特有の問題に取り組むことによって自ら就業継続の見通しを作り出していくという福祉労働の一つのモデルを川本に提示していた。福祉職は、女性の労働者を主軸として構成されているため、勤続10年以上でも大卒初任給と変わらないほど低賃金であり、特に「主たる家計支持者」となりやすい男性の場合、30歳代以上までの勤続は難しい²⁰。その結果、就労期間が短く流動性が高くなり、職業の専門性が確立しにくいという悪循環がある。そのため、A先輩の発言に見られるような、年齢給を保障することで「質のいい援助」を目指す方向性は、福祉労働を改善するための一つの有効な方法であり、かつ長期勤続を可能とするためには避けて通れない問題である。A先輩は、そうした働きやすい職場づくりを伴いながらの福祉労働のイメージを川本に示していた。

原島の場合でも、職場の人間関係は良好だったが、労働環境の問題に直面していた。入社4ヶ月目にして月100時間を超える残業を経験し、3年目の先輩が耐えかねて失踪するという事件まで目の当たりにした。出勤報告の「寛容」さなど社員間に長時間労働の過酷さを緩和させる慣行があることで、彼はなんとか乗り切ることができたといえるかもしれない。そして、労働組合があるといいと語っているように、長時間労働の緩和やサービス残業の改善を会社の喫緊の課題として捉えている点は重要だ。

しかし多くの場合就職1年目の段階では、二人のように改善策を展望できずにいる。山口は、職場の先輩に新人としての配慮がなされた支援を受けているが、今の職場で働き続ける見通しについては「とりえず3年」と限定的であり、かつこの会社で将来的に管理職に進むことを明確に拒絶していた。彼女の展望の背景には、指定管理者制度による財団とのトラブルや、職員の多くを非常勤女性労働に依存するインストラクター業界の問題²¹がある。そしてこれらの問題性は、職場の上司や先輩職員が財団や会社との対応に苦慮する姿を通して山口に感じ取られていた。

非正規雇用が一般化している業界で働く君島や坂本のケースを見ると、そのことがこの職場や職業で働き続ける見通しに影を落としていた。君島の場合、正規雇用への転換はモデルも存在せず想定外で、労働条件を確保するために契約社員で続けるか、勉強時間を確保するために派遣社員に切り替えるかで悩んでいた。彼女は専門性を高めるために労働条件を切り下げるという選択を示唆しているが、専門性の向上は企業にとっても利益となり、川本の学習会のように、働き続けながらoff-JTにより専門性を向上させる機会があってもよいはずである。また、研修機会のみでなく、労働条件の問題に関しても、添乗員は内勤作業や上司からの指示や助言を受けるとき以外、労働時間のほとんどは添乗であり、一人職場とな

る。それゆえ誰からも助言や支えや状況を相対化する視点を得られず労働環境が問題化される機会がほとんどなく、制約は大きいといえよう。坂本の場合も、働き続けたいという希望を持ちながらも、正規雇用への契約変更躊躇していた。先にも触れたように、職責と給与のアンバランスなどの福祉業界の問題が彼の見通しに大きく影響している。

このように、彼ら彼女らの仕事の見通しは、それぞれの産業が抱える構造的な問題と絡みあって成り立っていることが分かる。ここに、第2回調査で捉えた高卒就職者たちの半数が1年以内に離職し、職場に留まった者の中にさえ将来の展望を描けないままなんとか働き続けていた若者もいた²²ことを加味するならば、その問題の奥行きはさらに深く理解できるように思われる。

3. 就職3年目以上の若者たち：労働や生活における成長と視野の拡がり

本節では、就職3年目以上の若者5名について検討する。

本節で検討する5名は高卒就職者が中心で、男性4名・女性1名とジェンダー差が大きい²³。また、前節の対象者と比べ、生産・労務職が多く、給与水準は相対的に低い。手塚以外は昇給を経験している。対象者によっては長時間にわたる残業が常態化しており、小林や合併前の内田の勤務先ではサービス残業が横行している。他方、同棲や結婚・家族形成、離家など、〈子どもから大人への移行〉にかかわるイベントを経験している者が多い点も前節の対象者と異なっている。

以下ではそれぞれの若者が置かれてきた労働条件・環境を踏まえながら、この5年間で労働・生活面でどのような変化を経験し、現在どのような課題と向きあいつつあるのかを中心に検討したい。

表1-2. 就職3年目以上の対象者の教育歴および労働条件

対象者 (仮名)	最終学歴 (学科)	職業	勤続 年数	給与 (基本給)	待遇に関する特記事項	労働時間に関する特記事項	生活上の変化
手塚豊	高校	印刷工	5年	15万	5年間昇給なし		(08年3月離職→自衛隊入隊予定)
内田玲奈	高校	惣菜等調理販売	5年	13万→21万	会社合併により待遇改善	会社合併によりサービス残業改善	一人暮らし準備のためマンションを借りる
相良健	高校	配管工	4年	22万	日給8000円 →06年6月(結婚のため)1万円 →07年4月10500円		離家、06年4月入籍、妻は妊娠中
小林俊介	専門(自動車整備・2年制)	自動車整備士→店長	3年	18万→20万	店長手当1万円	サービス残業常態化、休日出勤もあり	06年9月末入籍、07年4月長男誕生、母親と同居
小谷恭介	高校	精密板金・板金工	4年	22万～40万弱	日給7700円→06年4月8000円→07年4月現在8800円、社保・年金なし	大量受注により月の残業100時間超も度々ある	恋人と同棲・離家、ボクシングでプロライセンス取得を目指す

1) 事例

①労働を通じた成長によって離職への自信を得た手塚

B高校を卒業し印刷工として就職した手塚は、入社から5年が経とうとしていた2008年2月、離職を決断し、憧れだった自衛隊入隊の意志を固めていた。

就職3年目の前回調査時、彼はすでに会社を「辞めたい」と語っていた。人間関係が一番の理由だが、会社自体離職者が多く、特に彼が入社以来所属する伝票・封筒印刷の部署は、半年に何回も送別会をするほど入れ替えが激しかった。原因は給料の低さだと彼は指摘していた。当時手塚の給料は入社時と同じ手取り15万円で、「家族がいたりなんなりする人は本当にこれじゃやっていけない」。昇給は「一生懸命がんばっても」上がらないので「半分諦めてます、期待してない」と語っていた。仕事もマンネリ化しており、「模型とかミリタリー好きなんで、そっち系の仕事ができればおもしろい」「(アルバイトでも)仕事が楽しければいい」とも考えた。とはいえ、当時は離職を思いとどまっていた。なぜなら、「最後の最後まで使えないまま終わっちゃったな」と言われるよりも、「あいつ最初はダメだったけど最後は仕事できるようになって辞めてった」と言われたと思うからだった。実際、当時の彼は、仕事の熟達度について、「流れはだいたい把握できた」し、印刷機のメンテナンスも「ある程度はもう自分でやる」が、「俺はまだ全然だめ(一人前ではない)です」(以上、2005)と評価していた。

そうした彼に、今回調査では大きな変化が起こっていた。2007年1月、手塚は、前任者がうんざりして辞めるほど操作の面倒な「いわくつき」の二色機の担当となった。彼はこの印刷機を引き受ける際、主任から「こいつだったら(任せられる)って気持ち」を感じ「頼られてるかな」と思ったという。そうした経験もあり、彼は今回調査で「封筒をやらせたら俺がピカイチなんじゃない？」との発言が見られるなど、技能への自信がうかがえた。しかし、この頃から確実に仕事量が増え、入社当時は多くなかった残業も慢性的に行なわれるようになった。「にもかかわらず給料は上がらない」ことに不満を抱いた手塚は、6月に一度、退職の意志を主任に伝えたが、他にやりたいこともなく辞めるのは「逃げてるだけだ」と止められたという。

その後、会社にとって重要だった大量受注があった。彼の部署では「これやったらすげー金になるぞ」「みんながんばろう」と毎日、朝から深夜1時2時くらいまで「ぶっ通し」で印刷機をまわして、「すごい重労働」を1、2ヶ月続けたという。しかし依然として薄給だった手塚

らを見かねた上司が、「社長と専務に」対して「給料上げてくださいよっていう一つの訴え」を起こした。しかし、昇給の約束を一旦は取り付けたものの、翌月になると会社側が「今月は待ってくれ」と伝えてきた。このとき、6月に手塚の離職を止めた主任は、「これで給料上がんなかったら、お前もう辞めた方がいいよ」と立場を翻したという。そして上司が待遇改善を求めて再度会社側と掛け合い、「ひとがんばり」したにもかかわらず、翌々月になっても手塚と同僚たちの昇給はなかった。

そして手塚は、ついに離職を決意した。2年前は思いとどまっていた離職を今回決断した理由について、彼は次のように言う。

ホントなら、辞めようと思えばもっと早く辞められたはずなんですよ。でも正直いって自分自身、辞めるって言う勇気がなかった。初めて入った会社で、初めて辞めるっていう勇気もあった(必要だった)し、自分自身の弱さでもあったかなって。ここで給料上がんなかったっていう結果が出たから、辞めやすくなった。

手塚は会社側への怒りも露にした。「僕たちの血と汗と涙がみんなトップに取られちゃって。(中略)いい車買って、無駄にお金使って、僕たちにはいつも通りの15万のお金しか支給しないで。確実に売り上げとかは上がってるんすよ、仕事量も増えてるし」。また、彼の部署は主任以外に役職がなく(ただし主任の給料も「残業しなければ20万いかない感じ」、機械を操作する人間がいるだけの小さな部署であるのに対し、チラシなど会社のメインとなる「もっとでかい四色機や二色機」のある部署は、仕事は大変だが、役職者が多くおり、給料もよいという。この差異について彼は、自分たちは「しょせん封筒だろうと(中略)軽視されてる」と感じ、どんなにがんばっても、経営者側は「お前らには、このくらい渡しておけばいいやみたい、そんな感じ」だという。

なお、前回調査では人間関係を辞めたい第一の原因として指摘していたが、人間関係は「正直言って5年いたので慣れてきた」という。他部署の人々とも交流を持つようになり、社内では顔が広いと自認していた。また、昇給がないと分かって以来、「もうどんなにがんばっても給料上がらないんだから早く帰ろうって流れを」自ら率先して作るようになったという。

自衛隊入隊後の手塚についてはまったく未知数ではあるが、「自分自身もちょっと自信は、いろんな面で出てきたかな」「これからいろいろな壁は出てくると思いますけど、乗り越えていきますよ」との意志を表明している。

②労働条件が改善され、職場の人間関係を築く役割を担いつつある内田玲奈

B高校卒業後、学校経由で惣菜等調理販売会社に就職した内田玲奈は、2007年秋、勤務先が親会社であるスーパーマーケットチェーンに吸収合併されたことで、大幅な待遇改善を経験した。

合併以前の前回調査では、ただでさえ立ち仕事であるのに加え、店のチーフから「残業するのが当たり前」(2005)と言われ、長時間労働が常態化していた。そのため、就職1年目には「最初の頃なんて全身筋肉痛。足なんて全然痛くて歩けなかった」(2003)、前回調査時には「寝たと思ったらすぐ朝になる」「むしろお店に泊まった方が楽」(2005)などと語っていた。そして、残業に対しては「時間調整手当」が月1万円支給されるのみで、労働基準監督署の指導も効果はなかった。しかし合併後の現在では、月給が手取りで約1.5倍、労働時間は1日1.5～2時間の短縮と大幅に改善された。内田は、「だいぶ早く帰れるようになって、帰りに(洋服などの)買い物ができるようになりました」「身体も楽になりました」と喜びを表している。

また、会社の合併と前後して、一人暮らしの準備のためマンションを借りはじめた。家賃は約7万円で、昇給なしには維持することができない額だ。引越し作業は業者を頼まず、合併後に取れるようになった有休を1週間取って、台車を使って「自力で」運んだという。

業務面でも合併後は楽になったという。現在は弁当の調理販売が中心で、食材は「セントラルキッチン」と呼ばれる場所から多くは切った状態で送られてくる。発注が間に合わなかった場合は、親会社であるスーパー内で食材を借りて補充することができるようになった。とはいえ、立ち仕事に変わりはなく、腰痛・肩こりが慢性化している。

一方、労働条件とは別に、職場の人間関係は内田にとって長らく仕事上の精神的苦痛となっていた。その要因は、かつて彼女の職場で働いた経験があり数年前に再び働き始めたという60歳近いベテランのパート(「ボス」)の存在だ。内田の職場は、チーフを含め全員20代の社員3人と、40～60代のパート6人がローテーションで働いている。このうち、合併後に着任した20代後半のチーフ以外のメンバーは合併前とほとんど替わらないという。こうしたなかで「ボス」は、他のパートに「何々しなさい」とか「これしてちょうだい」と指示したり、チーフを「若いから舐めきっちゃって、『私の言うことを聞いたら間違いないのよ』みたいな感じ」に振舞うという。その結果、社員とパートの「線」が曖昧になり、

内田はやりづらく感じていた。しかし次第に職場の人間関係は落ち着いてきたという。そこには、内田の働きが少なからず介在している。彼女は職場の最年少でありながら、チーフや他のパートと「ボス」が揉めたとき、間に入ってパートの話聞くなど、職場の人間関係を穏やかにする要の役割を担っており、以って彼女は自身を「中間管理職」と表現する。また、職場は「基本的には仲良く」「月イチじゃないですけど、みんなで飲みに行ったりする」という。

将来展望について、チーフなどへの昇格はしたくないと考えている点や、「仕事楽しいとか楽しくないとかいう前に、もうお金をもらえる過程と思って仕事して」いる点、5年後・10年後の自分が「全然見当つきません」と語る点は、就職1年目から変わらない。また、内田はアニメやゲームが趣味で、「(仕事の支えは)これですよ、もう、本当にこれです、イベントです、こっちがメインなので」「仕事がつらくなったら、『これ(イベント)が行けなくなるんだぞ』って思い出しながら、がんばって仕事をする」と語っているように、趣味を精神的な支えとして生活を組み立てている点も就業当初から変わらない。

しかし、就業継続の意識には若干の変化が見られた。前回調査では「違う仕事がやりたくなる瞬間がある」「このままでいいのか」(2005)と語る場面もあったが、今ではそう思わなくなったという。

けっこう友達も仕事を辞めて、新しい仕事に行くと、やっぱりそれなりに人間関係とか仕事面とか大変な面が(ある)って聞かされると、「あ、やっぱりあたしはこのままがいいんじゃないかな」って思っちゃう。…5年ぐらい働いているんですよ、(今の会社)で。仲間もけっこう気が知れてますから。慣れました。

また「中間管理職」の役回りについて、チーフに「もうちょっとこうしたらいいんじゃないの?」「もうちょっとしっかりしなよ」などと「文句言えたりとかするんで(中略)やっぱ中間っていい。大変ですけど、いいところがけっこうたくさんあります」と肯定的な表現を用いて語る点にも変化が表れている。

③水道設備会社で職人として着実に成長する相良健

相良健は水道設備会社で配管工として働いて4年目になる。昨年、高校時代からつきあっている岸田さやかと結婚式を挙げた。妻のさやかは現在妊娠5ヶ月を迎えている(第5章参照)。

日々の生活は、仕事がある日は、朝は6時に起床し、7時に出勤、会社でミーティングをした後、現場へ向かう。夕方5時まで仕事で、帰宅は6時過ぎになる。帰宅後は、テレビを観ながら座ったまま寝てしまうほど疲労困憊だという。休日は、ピッチャーとしてプレーする草野球チームの練習に行くなどして過ごしている。

会社では一番若い職人だ。仕事内容は、家の上下水道の整備や、家屋の水回り全般の補修、配管をしている。会社に入りたての頃まず覚えたのは、土中に埋められた配管を掘り出すことだった。それから、親方から教えてもらいながら、徐々に、水道管を家屋に引き込んだり、配水管を家屋から引き出したりする仕事を覚えていった。仕事を一通り覚えて「まあ、できたなあって」思えるのは、図面を見て、現場の全体を確認しつつ、自分で管の寸法を測り、切断し、配管をできるようになったときで、2年目くらいだった。「やっぱり親方が褒めてくれたときには、ああ、できるようになったんだな」と嬉しかったという。

現場では、「人見知りする」性格にもかかわらず、休憩時間に他社の職人に「コーヒーを買ってもらったりうちが今度買ってあげたり」する関係を築いており「そういう関係は大事にしたい」という。「あんまりそこがごちゃごちゃしちゃうと、こっちの仕事がなくなっちゃうんで、いい関係っていうのを作って付き合う」ようにしている。一方、仕事でつらいことは、工期が決まっているから、悪天候でも外で仕事をしなければならないことだ。特に冬場、冷え込む日や降雪日に外で穴掘りをするのは、「湿布とコルセットが欠かせない」ほど慢性的腰痛に悩まされる相良にとってはつらい。

給与は、2年前に日当8,000円ほどだったが、結婚を期に昇給し、現在は10,500円だ。月収としては、週6日、毎日出れば手取りで22万円ほど。とはいえ、ゴールデンウィークなど休日が多い月は「激減」し20万を下回る。妻のさやかは「やっぱり、月給じゃない分、つらいところがある。日給でいいっていうことはないな、やっぱり月給のほうがいい」と語っている。

現在の住まいは、会社の持ち物で、月5万円ほどで借りているが、子どもが生まれることを期に、引越しを考え、都営団地に申し込んでいる。妻のさやかも妊娠前はパートとして働いており、ふたりで家計を支えていたが、現在は相良の収入のみが頼りとなり、また妊娠して病院に通う頻度も多く、ふたりで貯めた貯金を切り崩しながら生活をしている。

5年後の展望は、「一人前になっていたいなって。教えてもらうんじゃないかって、逆に、後輩が入ってきたりし

たら、自分が教えてあげられるような感じになっていたらいいな」という。そして、一人前の職人として「ぜんぶ仕事を一人でできて、現場を自分が持てる」ようになりたいと語っている。

④父親と店長職の双方への移行の途上にある小林俊介

専門学校卒業後に自動車の車検整備を業務とする会社（K社）に整備士として就職した小林は、2006年9月、恋人の妊娠をきっかけに結婚を決意し、店長職へと仕事（職務）を替えた。

就職して1年が過ぎた2006年6月、小林は同期入社の子3人とフロント業務の研修を受けた。K社は、整備士でも代理店長の業務を担えるよう、入社2年目になると、車検の予約受付や見積もり算定、車検内容の説明など接客業務の研修を受けさせていた。同期の仲間と研修を受けた小林は、7月から週1回程度、整備士として勤める本店（工場完備の店舗）の工場とは別の受付専門の店舗に代理店長として赴くようになった。

8月に入り、恋人と共に病院に行き妊娠の診断を受けた。「結婚するんだったら早いほうがいい」と以前から思っていた小林は、そんなに時間はかからず結婚を決断したという。しかし、ふたりの間で収入が問題となった。整備士としての小林の月給は手取り18万円、ボーナスも夏冬合わせて2ヶ月分。妻は育児に専念するため、この額で3人の生活を支えられるか不安だった。

すると、この経緯に配慮した本店店長が小林に、フロント業務の覚えも早かったので「向いてるんじゃないの?」と、店長職への転換を提案した。本店店長の提案に、整備士が好きだった小林は「店長やって（仕事を）続けていけるのか」不安を覚えた。そこで、直属の上司である工場長や整備士の先輩、また歳が近くて子どもがいる同僚、他店店長など、立場の異なるいろいろな人に聞いて回った。そして、工場の先輩からは「作業者でやってたほうが楽しいんじゃない?」「フロントなんてつまんないよ」などの助言も受けたが、店長になれば手当を含め給料が上がることや、本店の店長へ早く出世することができることなど「成長の幅」が大きいことを知り、店長となる決断をした。

代理店長として受け持っていた受付店で9月から店長に就任すると、最初のうちは仕事が整備士の頃より早く終わる日が多く、重労働ではないなど、職種替えの「メリットが多く見えてた」という。しかし、次第に任せられる仕事が増えると、朝8時に入社して帰宅は深夜があたりまえとなり、休日も出勤するようになった。給料は手取り20万円となったが、残業代や休日出動手当は出な

いため、小林は「やってる仕事(量)と給料が合っていない」と感じるようになった。

多忙化の要因はいくつかあった。一つは、通常の接客やパートの教育に加え、店長として取り扱い台数を増やす努力をしなければならない点だ。そのためには、マネジメントの提案書作成や、商品の価格を提示するだけでなく文章にイラストをつけて展示するためのPOPなどもパソコンで作成しなければならない。しかし、「案を出したりとかっていうのが苦手」「パソコンとか得意じゃない」など、整備士とは求められるスキルが違うことに苦戦している。また、最近になってK社が指定工場から認証工場に格下げされた。車検にかかる日数が長くなり、流れが煩雑になるのみならず、常連客への説明に苦慮するなど、対応に追われている。こうした仕事上の難しさがあるとはいえ、本店の店長や研修のトレーナーなどに相談したり、逆に整備士経験の少ない他の店長の相談に乗ることによって、仕事上の信頼関係が生まれており、それが小林を職場につなぎとめている重要な支えとなっているようだ。

一方、挙式は2006年11月に行かない、第一子は予定より早く2007年4月に生まれた。出産当日は偶然にも小林の仕事が休みで立ち会うことができたが、分娩中に自分の友人を連れてきてしまうほど小林は舞い上がっていたという。

現在、小林の実家で妻子と実母と共に住んでいる。出産直後、母親と妻の関係がうまくいかない時期があり、「義理母にもいろいろ怒られて(中略)いちばんつらかった」と妻は言っている。現在は夫婦とも子育てに慣れ、休日に家族で妻の実家に遊びに行ったり、買い物に出かけたりしている。小林は子どもの成長を楽しみにしているものの、あまりの長時間労働による疲労で、帰宅後「面倒見るのが億劫だな」と思うときがあり、妻から最近家事をしてくれないと苦言を呈されてもいた。また、小林夫妻は離家を希望しているが、しばらくは大幅な昇給も見込めず現時点での離家は実現できないと感じており、「10年後には買って間もない家に住んでたいな」と希望を語るにとどまっている。

⑤板金工として着実に技術を身につけながらボクシングのプロライセンス取得を目指す小谷恭介

小谷恭介は、運送会社を離職後、精密板金工場に再就職して現在4年目になる。仕事にも慣れ、技能の向上・会社への貢献に伴い給与が上がったこともあり、恋人との同棲や、趣味で続けていたボクシングのプロライセンス取得に取り組んだり、仕事と生活の両面にわたり大

きく変化があった。

同棲は、2007年6月から、高校以来つきあっている恋人と始めた。気軽な気持ちで物件を見ていたとき、とても気に入った物件を見つけ、その春の昇給に背中を押されて、ふたりで決意した。生活費全般をふたりで折半して、家計をやりくりしている。

仕事の方は技術的な習熟もあり自信が感じられた。また、図面展開やレーザー加工、曲げ加工などの技能を「覚えればこの会社にもできる」と語り、精密板金工としての今後の成長をイメージできている。しかし、会社が厚生年金や健康保険に加入していない点には不満を強く感じていた。小谷が加入を直接訴えた際にも社長は「お前が入ったところでもらえねーからな」と言い放ち、加入を拒んだという。

仕事での一番の大きな変化は、入社当時から悩まされてきた二人の「嫌な先輩」たちが退社し、職場の人間関係が改善されて働きやすくなったことだ。その二人のうち「一番悪いやつ」(X)は、この会社が「(刑務所からの)出所明けの最初の会社」で、「ヤクザ絡みとか、ホントに裏の危ない絡みがあるから、みんな仕返ししたくてもちょっとできない感じ」だった。二人は、自分らは何もせず「まだ終わってねーのかよ、これ明日までだから何時までにやっつけよ」などと顎で使ったりするため、工場内で若い小谷と後輩が「一番嫌な思いをしていた」。また、Xらは常に残業をしていたが、残業といっても無駄話やメール、同僚の嫌がるふるまいなどで時間を稼いでいるにすぎなかった。さらに彼らによる被害は工具だけでなく「事務所のパートの人たち」にも広がっており、「そいつがいるから辞めたいってのがしょっちゅう」だった。

彼らが辞めるきっかけとなったのは、腕のいい年配工員がXが嫌で来なくなったことだった。理由を知った社長は「お前は迷惑をかけてばっかだから」と、2006年9月にXを「クビ」にした。そして2007年に入り、残っていたもう一人も、Xがいなくなったことで「みんな途端に冷たい態度」を彼に向けたため、工場に居づらくなって辞めた。

Xが突然辞める前、小谷は「二人が嫌だから」辞めると社長に伝えていたが、彼らが辞めたことでようやく仕事を続けられる気持ちになった。かつては、工場の殺伐とした雰囲気嫌だったことから「一人でいたい派」で、他の従業員との交流は少ない小谷だったが、職場の雰囲気が好転したことで、同僚たちと飲みに行ったり朝までカラオケに行ったりするようになった。土曜日に会社の飲み会があったら、確実に何人かは朝まで残って遊ぶほ

ど、みんな仲が良いという。

しかし、Xらが分担していた仕事量が実際に少なくともなかったために、彼らが辞めた後は工場で若い後輩と小谷に仕事分担のしわ寄せがいくことになった。さらに、2007年の正月に大量受注があり、2月は日曜日も一日も休めないほどの分量で、若手の二人は年配の工員の次に多く仕事をこなすようになっていた。このような状況から4月からの日当が1割ほど昇給しており、翌月の給与は「ぶったまげた」ほどの額だったという。

仕事での大きな変化と併せて、もう一つ大きな変化があった。ボクシングのプロライセンスの取得を決意したことだ。5年間練習生としてボクシングジムに所属しており、現在の職場に移ってからは仕事が忙しくなかなか継続して通えなかったが、仕事がすこし暇になったことや慣れてきたこともあり、2008年2月に再び通い始めた。そして、以前は怪我の後遺症を恐れ「テキトーに」遊び感覚で取り組んでいたが、「人生1回きりを考えたら、自分を厳しい場所において、どこまで自分ができるかってのをやってみよう」と思い始め、3月からプロ志望に切り替えた。

小学校の頃から世界チャンピオンに憧れ、「やっぱ強くなりたいたい」という思いもあってボクシングを続けてきた。その背景には、彼が生まれ育ち現在も住み続けている街の風景がある。「街で、襲われたりとか絡まれたりとか(中略)何があるか分かんないじゃないですか。何もしてなくてもなんかインネンつけられたりとか。そういうのを常に思っています」。また小谷は、あるボクシングの元世界チャンピオンがテレビ番組で「不良」を相手に言った、「お前ら、弱い世界じゃ強いだろうけど、強い世界じゃ弱いんだ」という言葉が「僕の中ですごい響く」という。小谷はプロボクシングの世界について、「自分を限界まで追い込んで」トレーニングを積んだ者たちが集う「強い世界」であり、「ホントに強いかどうか」が試される場だと考えている。「僕は劣等感のほうが多いなって自分のなかで思ってるんですよ」と語る彼にとって、プロを目指すことは「少しでも自分に自信をもてる部分を作りたい」という思いと重なっている。

こうした世界に挑む小谷の意志は固い。「朝弱いから朝走るの嫌」だった彼が、現在は8時の出社前に4～5kmのランニングをしている。また、選手育成コースに切り替えてから練習は週6日となり、「お金稼ぎのための残業しないで」18～19時頃には仕事を切り上げ、21時半まで毎日ジムに通う。技術のみならずスタミナをつけるための練習はきつく、毎回1kgは体重が落ちる。練習中もけっして強気ではばかりいられず、「泣きそ

うに」なることもしばしばだ。

バテてくると、打ち返して来ないサンドバッグでも、逃げたい逃げたい、やりたくない、って思っちゃいます。(中略)(でも)サンドバッグ相手に「逃げたい」ばかり考えてたら、(本番では)相手だって倒すつもりで来るわけだから、(中略)「これだけ練習したんだから自分は強いんだ」と思うくらい心を持ってないと勝てないですね。

同棲を始めた恋人からは、月の収入が一定程度を下回らないという条件を出されながらも、プロボクサーへの挑戦に応援を受けている。その収入のために工場で働きながら、とりあえず3年間プロライセンスでやってみようと考えており、結婚はその後にと考えている。というのも、結婚して子どもがいる状況でボクシングで怪我してしまったら申し訳ないし、結婚前の「若いうち」にやれることをやっておきたいという理由だという。

2) 考察

以上、就職3年目以上の若者たちが労働面・生活面などのような変化を経験し、現在どのような課題と向きあいつつあるのかを、個々のケースごとに見てきた。以下では、それぞれの軌跡に見られる共通点と差異を、〈学校から仕事へ〉の移行過程においてのみならず、〈子どもから大人へ〉の移行過程における重要なモメントとして位置づけて考察したい。

① 勤続を支える要素 — 成長・昇給・人間関係 —

まず、3年以上勤続している5名の対象者が何によって就労継続を支えられているのか、職場における経年的な変化を考慮しながら考察したい。

第一に挙げられるのは、技能の獲得や作業の熟達など、労働面で大きく成長していることだ。手塚は、前回調査ではまだ自分を一人前ではないと感じていたが、今回調査では封筒印刷の技術を社内で「ピカイチ」と自負するなど、技術的な向上が自信につながっている。内田は、若いチーフに助言ができるほど、職場での作業に精通している。小谷や相良は、着実に技術を向上させているのみならず、それぞれの持ち場で一人前とされる技能や、身につけていればどこでもやっつけられる技能をきちんと把握し、今後の成長の道筋も見えていた。また小林は、受付業務の研修での成績が認められ、同期に先駆けて店長職へと昇格した。

しかし、技能的な成長は、そのみで勤続を支えてい

るわけではない。第二の要素として、待遇改善、とりわけ技能の獲得や熟達と労働に見合った昇給が、彼女らを職場に留めていると考えられる。たとえば小谷は、「嫌な先輩」たちの離職に伴って空いた仕事の大きな穴を埋めるため、1ヶ月間無休で働いたことが認められ、大幅な昇給となった。内田は、会社の合併により、昇給だけでなくサービス残業も改善され、「身体も楽になりました」と喜びを表現していた。また小林や相良は、上司から結婚・出産に配慮した昇給を受けており、彼らの家族形成が会社ぐるみで支えられ、承認されていることが分かる。

この4名と対照的なのが手塚のケースである。手塚の離職を直接的に引き起こしたのは、昇給の訴えを認められなかったことだった。手塚のケースを他の4名と比較すると、昇給という要素が、それまでの労働や技能の熟達に報い、会社に緊ぎとめる重要な役割を果たしていることが分かる。

第三に、労働面での成長やそれに対する評価と併せて指摘しておきたいのが、人間関係が安定してきていることである。この点が重要となるのは、それが就労継続を支える要素となっているのみでなく、ややもすれば職場の崩壊につながる問題を孕んでいたためである。たとえば小谷のケースでは、暴力的な先輩に顎で使われ反抗もできずに、小谷を含め同僚たちの離職を誘発するなど、工場の雰囲気が悪くなっていた。そこには業務区分の不明瞭さなど、前節の対象者の勤務先に比して職場環境が整っていないという問題があるが、「嫌な先輩」たちが辞めた後は、一転して職場の人間関係が格段に良くなり、会社に残る気になれ、また終業後は若い同僚たちと飲みに行ったり朝までカラオケに行く良好な関係が作られていた。

前回調査まで辞めたい理由の第一に職場の人間関係を挙げていた手塚は、今回は「5年いたので（人間関係に）慣れてきた」と語っている。「（社内で）顔は広い」と自認するように、この5年間のなかで他部署を含め社内でのつながりを拡げており、それによって職場に支えとなる仲間を得ていた。内田のケースでも、長期にわたって共に仕事をすなわち、「仲間もけっこう気が知れますから」と語るまでに職場の人間関係が安定してきていた。注目したいのは、内田に、職場の人間関係を良好にするために自分から立ち回る様子が見られたことである。彼女は長年気を揉んでいたパートの「ボス」との関係に苦慮しながらも、逆に「ボス」とパートやチーフとの揉めごとを「中間管理職」として沈静化させる役回りを担っていた。また相良も現場で会う他の会社の職人と

も良好な関係を築く努力をしていた。前回調査で、彼は親方の計らいで人間関係による離職の危機を逃れることができた²⁴が、現在では彼自身が積極的に一緒に働く職人同士の関係にコミットしている様子が見えてくる。小林のケースにおいても、店長となった後にはメカニックの経験のない他店店長の相談に応じるなど、自分が助言する側に回る場面も出始めている。内田、相良、小林のケースでは、自らが職場の人間関係を築く役割を担うことで、自分も働きやすくなる好循環を生み出していた。

②待遇改善を要求できるまでの自信をもたらしした労働

ところで、上に見た勤続を支える諸要素のうち、良好な職場の人間関係と技能的な熟達は、手塚にとって他の対象者以上に大きな意味を持っていた。というのも、手塚の離職は、5年間の成長なくしては起こりえなかったと考えられるからだ。彼がいみじくも、2年前には離職する「勇気がなかった」と語るように、「辞めたい」と言い続けながら離職できなかった手塚は、ついに離職への「勇気」を獲得したのだと言えるだろう。

まず、部署の同僚たちによる昇給をめぐる集団的な要求の基盤に注目したい。手塚は、仕事の休憩時間以外には同僚たちとあまり交流を持たずにいたが、長期にわたって共同して仕事に取り組んできた。だからこそ、大量受注の折、「これやったらすげー金になるぞ」と互いに士気を高め合い、「みんながんばろう」と長時間の過密な労働を物ともせず乗り越えることができたのだろう。この過程を共有していることが、昇給という集団的な要求実現に向け「ひとがんばり」できた基盤となっている。

また、手塚は給料の低さについての語り口を変化させている。手塚は、前回調査では、給料の低さを「諦めます。期待してない」（2005）と言い、不満をもちながらも受け入れざるをえないという立場をとっていた。しかし、残業の増加や大量受注を経て会社に貢献したという自負を持ったにもかかわらず、会社はそれに見合った給与への要求に応えなかったという結末は、彼自身が会社から労働力を不当に搾取される当事者であるとの自覚を促したと考えられる。しかも、彼は5年の勤続を経て、自らが置かれた労働状況や職場環境への理解は確実に広がっていた。そうした自覚や理解から、手塚は自らを貶める元凶を会社の体質に求めることができた。だからこそ、2節で見た木戸や高橋のように原因を自分に帰することなく、自分を傷つけることなく、会社を批判して辞めることができたのである。

したがって手塚の離職に至る経緯は、会社に対する「異

議申し立て」と同様の性格をもつものと解釈することができる。私たちは前回調査において、フリーターの女性たちのなかに、日々の就労生活への不満を「異議申し立て」として職場に突き返そうとする姿を捉えた²⁵。これらのケースで重要だったのは、彼女たちが仕事や職場への不満を一人で引き受けるのではなく、不満を共有する職場の同僚である他のアルバイトやパート社員とともに行動を起こしたこと、さらには問題の元凶を会社に求め、憤りを向けることができたことにあった。これら諸点は、手塚のケースにも当てはまるといえる。

③若年男性における家族形成の課題と〈大人への移行〉

小林・相良・小谷は、高卒後、働き始めて数年が経ち、仕事にも慣れてきたところで、同棲や結婚や妻の出産など、パートナーと共に大きな転機を迎えた。ここで特に注目したいのは、小林と小谷に見られる差異と類似性である。

小林は、恋人の妊娠を知ったことから結婚を決意し、同時に、家族を支える収入を得るために、思い入れのある整備士から店長職への転換を選択した。彼の選択は、一家の稼ぎ手として不足のない役割を担う男性になることが〈大人への移行〉であるとされる近代的な性別役割分担モデルに合致するものであり、その過程では自分の「やりたいこと」（整備士）を諦めるという決意が含まれていた。またこの選択は、夫や父親になるという課題と店長職につく課題という、二つの両立の難しい課題を一度に引き受けることも意味している。現在のところ、妻から求められている夫や父親になるという課題は、あくまでも自動車工場での労働者としての課題に重ねあわされており、職場の課題に伝えることを通して、稼ぎ手としての父親の役割を果たそうとしている。しかし、職場の課題に伝えようと努力することは、長時間労働や休日出勤が要求されることになり、家庭および育児責任に伝えることはますます難しくなっている。

一方、小谷は同棲を始めたが、一念発起してボクシングのプロライセンス取得に挑戦しはじめた。その際小谷は、家族形成の課題を保留している。小谷のこれらの選択の背景には、結婚の前に「若いうちに」しかできない「やりたいこと」をやっておきたい、という意識がある。この点は、家族形成の課題遂行のために「やりたいこと」を断念した小林と大きく異なる。小谷がトレーニングに時間を割くために「お金稼ぎのため」の残業をやめた（＝収入面を切り下げた）点も、小林と対照的である。

しかし、彼らが家族形成をめぐる相反する選択をした半面で、男性としての家族形成の課題がどのようなも

のとして捉えられているかという点では類似している。小谷が家族形成の課題を保留しているのは、ボクシングの後遺症によって、家族を養う夫・父親役割を十全に遂行できない可能性があると考えているためだった。このことは裏を返せば、夫・父親役割が第一義的には家族の扶養を指しており、自分のやりたいことよりも稼ぎや安定した就労が優先されると捉えられているということだ。その意味では、小谷と小林が自らに夫・父親として課していることがらは共通している。そしてこの点は、主婦業へと移行した女性たち（第5章参照）が、自身の職業展望をひとまず断念しているのと対照をなしている。

また、小林と小谷は、異なるかたちではあれそれぞれに自立を目指しているとも言えるだろう。小林の場合、前述の通り伝統的な男性の移行モデルに沿うことで自立に向かおうとしている。対して小谷は、「泣きそうに」なるほどのつらいトレーニングを積み重ね乗り越えることによって、サンドバッグから逃げない自分、どんな苦境にも負けないと信じられる自分をつくるのが、彼にとっての自立のあり方として捉えられている。彼の自立へのプロジェクトにおいて、3年間のプロボクシングへの挑戦は通過儀礼として設定されていると考えられる。

このように小林と小谷は、家族形成や自立に対して一見対照的な行動をとっているが、とりわけ結婚に伴って生じる男性の役割には共通した認識が見られるといえる。

4. まとめ

本章では、高卒後5年目の時点で正規雇用として就職している若者を対象に、就職1～2年目の若者が1年目において仕事の世界に馴染んでいく過程を、ついで就職3年目以上の若者に見られた労働・生活・人生における課題への取り組みを、それぞれどのような環境の下でどのように経験していたか分析してきた。

就職1年目の若者にとって仕事に馴染んでいきやすい職場環境と、就職3年目以上の若者にとって安定した就労を支える職場環境とは、私たちが分析した限りではいくつかの共通点があった。それは、良好な人間関係が築かれていること、労働のモデルが存在すること、そしてそれらに支えられて仕事の見通しが持てること、である。私たちは双方の対象者を、正規雇用が付随する諸制度（研修や職場の上司・同僚の配置・構成、残業代等の諸手当など）が彼ら彼女らの職場にどのようなかたちで具現化され、どのように彼ら彼女らの就労生活とかかわっているかを考察してきたが、上記3点は賃金や労働時間など

の単純な制度とは位相を異にしている。最低限の労働条件が整えられているだけでなく、研修制度をはじめとして労働者を育てる環境が整えられていることが、ここで働き続けようと思える感覚をもつことを可能にするのではないだろうか。

一方、就職1年目の若者と就職3年目以上の若者との間には差異もあった。その一つは、離職した木戸と手塚のケースの対照性として示された離職時の主観的な状況の差異である。このことは、労働経験を重ねることによって、技術的な向上のみならず、自らの労働環境を俯瞰的に眺め、仕事上の問題の要因を個人的資質から切り離して捉えることができるようになることを示唆している。また、就職1年目の対象者の語りにはあまり見出せなかった給与をめぐる意識が、3年目以上の対象者には多く見出すことができた。この違いは、前者の初任給額が後者に比べ相対的に高いことが前提としてある。しかし給与への意識が生じるのはそれだけでなく、自らの技能の向上や会社への貢献が昇給というかたちで評価され、会社にとって必要な存在であることがそこに表現されていると受け取られるからだろう。小谷が先輩工員二人の離職で空いた穴を必死に埋めたときの昇給を喜びをもって語っていたこと、それとは対照的に、手塚が昇給の反故を理由に離職を決断した際、会社が自分を見下していると怒りを露にして語っていたことはその証左である。加えて離家に踏み出した内田や、結婚し家族形成に向かった小林・相良のように、自立に向けた各々の課題の取り組みと、経済的な負担の増加は密接に関係しており、そのことも昇給をめぐる意識と関連していると思われる。以上の点を換言すれば、勤続を重ねていくという経験によって、自らの労働環境を相対的に捉えることができるようになったり、生活面での課題に取り組むことができるようになったりと、労働・生活の両面において視野が広がっていく、と言えるだろう。

註

1. 日本標準職業分類大分類による。
2. 「報告書②」で取り上げた正規就職者8名のうち、この2つに分類できるケースは7名に上る。
3. 『18歳』67頁参照。
4. ただし、平成19年度の産業別・学歴別初任給額と比較した場合、大幅に差異のある者もおらず、それぞれの産業・学歴に一般的であるといえる。厚生労働省「平成19年度賃金構造基本統計調査結果(初任給)の概況」参照。なお看護師については、厚生労働省「平成18年度賃金構造基本統計調査結果」における「職

種・性・年齢階級、経験年数階級別所定内給与額及び年間賞与その他特別給与額」を参照した。

5. 就職活動に関しては「就職活動」43-44頁を参照。
6. 就職活動に関しては「就職活動」44-45頁を参照。
7. 短大での様子については「報告書③」74頁を参照。
8. 2005年度に社団法人日本添乗サービス協会がまとめた「派遣添乗員の労働実態と職業意識」によれば、2004年度における経験年数1年以上・年間添乗日数150日以上派遣添乗員全体の平均年収は約230万円、1年以上3年未満では150万円未満で40.7%、200万円未満で75.3%となっており、たしかに就職1年目での給与水準は契約社員である君島のほうが派遣社員より高い。
9. 短大での様子については「報告書③」72頁を参照。
10. 専門学校での様子については「報告書③」72-73頁を参照。
11. 看護学校での様子については「報告書③」69-70頁を参照。
12. 新人看護師の離職要因については看護研究の中でも多くの蓄積がある。たとえば西村智代・横山茂生「新人看護職者のメンタルヘルスに関する実態調査」(『川崎医療福祉学会誌』6(1)、1996年)では、新人看護師が仕事と自らの性格傾向において特に強く悩みを持っていること、とりわけ仕事において「うまくいかず落ち込むことがある」に「はい」と答えた割合が78.6%と最も高く、「自分は仕事の上で有能である」に「はい」と答えた者は0.0%と皆無であったことを明らかにしている。また山田美幸らは、新人看護師は就職後6ヶ月前後に担当する患者の数が増え、重症度も高くなるため、実践的な能力をますます求められる局面に立たされることを指摘している。山田美幸・前田ひとみ・申間秀子「新卒看護師の離職防止に向けた支援の検討」(『南九州看護研究誌』6(1)、2008年)。
13. 人見の家庭は自営業で、公立学校にしか通えないなど経済的には「常に火の車」であり、「みんな働いてきたお金を渡さなきゃいけない」という。そのため、1年目に辞めたいと思ったときも「自分が辞めたら、家計やばいだろうっていうのもあった」と語っている。
14. 看護学校1年目の様子については「報告書②」85-100頁参照。なお彼女は、第三回調査は受けていない。
15. 日本看護協会「新卒看護職員の早期離職等実態調査」(2004年)によれば、「医療事故を起こさないか不

安である」が新卒看護職員が仕事を続ける上で悩みとなったことの第2位(69.4%)、辞めたいと思った理由の第2位(18.1%)に、また「ヒヤリ・ハット(インシデント)レポートを書いた」が前者の第4位(58.8%)、後者の第3位(16.1%)にそれぞれ挙げられた。このことから、加藤に限らず多くの看護師が、医療事故への恐怖感と隣りあわせで一年目を送っていることが推測される。

16. 専門学校での様子については「報告書③」70頁参照。
17. 就職活動については「就職活動」51-53頁を参照。
18. 「報告書②」72-74頁参照。
19. 「報告書②」94-96、148-149頁、『18歳』221-223頁を参照。
20. 介護労働安定センター「平成16年度事業所における介護労働実態調査」によれば、介護職における男性労働者の割合は約15%で、うち20代が36.9%、30代が29.9%となっている。女性介護労働者における年齢別の比率は男性に比べて分散していることから、男性にとって福祉職が若いうちにしか働けない仕事になっていることが分かる。
21. 労働政策研究・研修機構のHP上に掲載されている「職業とキャリアに関する総合情報システム CAREERMATRIX」の「スポーツインストラクター」の項には次のように記されている。「スポーツインストラクターの男女比は、3:7程度と女性が過半数を占める。女性の場合、以前は結婚と同時に退社する人が多かったが、現在では、結婚後も勤務する人が増えている。また、結婚と同時に退職した人も、子育てが終わってから、非常勤または個人契約者として施設及び業界に復帰する場合もある。就業者は若年層が多く、雇用形態では、パート、アルバイト等に個人契約者を加えた非常勤従業員が全体の約8割を占めている」。http://cmx.vrsys.net/I/CCS_i_01.php?occcode=06307&sysmode=s&flags=000010&jump=T1& (2009年1月20日アクセス)
22. 第2回調査時に高卒就職者で就労継続していたケースの中でも、B高校出身の手塚豊と内田玲奈は、職場の人間関係や身体酷使の労働に苦しみ、職場での将来展望を持つことを拒絶するように毎日をやり過ごすことで、なんとか就労を続けていた。「報告書②」75-80頁を参照。
23. この背景には、高卒で就職した女性たちの多くが就職1年前後以内で離職し、以後フリーターとして滞留しているという状況がある。詳細は「報告書③」第1章(22-47頁)を参照。
24. 「報告書③」56頁を参照。
25. 「報告書③」111頁を参照。

第2章 非正規労働者の就労生活とその中で生きる若者たちの見通し

原未来・宮島基

1. はじめに

本章では、高校卒業後5年目の時点で非正規雇用労働者（以下、非正規労働者）として働いている若者たちに注目をする。一時的に正社員の経験がある者もいるが、現時点で正社員ではない彼ら彼女らの就労生活は、いわゆる新規学卒就職といった伝統的な移行コースと比較すれば、〈学校から雇用へ〉の移行を果たせていない姿にも見える。だが、非正規労働者が被雇用者の3分の1を占める現在¹、学卒後に非正規労働者として働き続ける彼ら彼女らの就労生活はもはや珍しくない生き方であることもまた事実である。

では、非正規労働者として働く彼ら彼女らの就労生活とはどのようなものなのだろうか。急速に増加している非正規労働者ではあるが、以下に見る対象者の様子からうかがわれる実態はとても一括りにできるものではない。たとえば非正規として働く経緯を見ても、高卒後5年間一貫して非正規労働者として働き続けているケースや、高卒後正社員となったものの何らかの理由で離職し非正規労働者に至ったケース、そして今回の調査では4年制大学や専門学校といった高等教育・中等後教育を卒業後に非正規労働者として働いているケースもあった。またその雇用形態に関しても、パート・アルバイトだけでなく派遣社員や契約社員といったさまざまな働き方が見られた。

対象となるのは君島朋子、窪田千秋、坂本和孝、下川彩乃、下田洋平、庄山真紀、竹内奈央、西澤菜穂子、浜野美帆、吉川綾、若林理恵の11名である。非正規労働者として働く彼ら彼女らの入職経緯についてまずはじめに指摘しておかなければならないのは、前回調査（2005年冬から2006年春）の時点でフリーターであった若者の多くが2年を経ても相変わらず非正規労働者として働いているという事実である。下川、庄山、竹内、西澤、浜野、吉川、若林の7名は、前回調査報告書で「フリーター」とカテゴライズされた若者たちであり²、その中でこの2年間で一度でも正社員を経験した者はいない。今回調査では、そこに2005年以降に専門学校・4年制大学を卒業し非正規労働者として働き始めた4名（君島、窪田、坂本、下田）が加わっている（11名のこの5年

間の経緯については次項一覧表を参照）。

彼ら彼女らの就労生活の実態を分析するにあたり、次節で非正規労働者11名全員の労働条件や働き方などを整理する。そして3節では、彼ら彼女らの将来展望に焦点化し、それぞれの若者が今の仕事にどのように向き合っているのかを見ていく。続く4節では、長期間非正規雇用で働き続ける若者たちが、就労生活のなかで身につけた生きぬき方に注目する。客観的側面だけでなく、本人たちの抱く主観的側面からも彼ら彼女らの就労生活の実態を捉えることで、非正規雇用で働く若者の移行の実情を浮かび上がらせることが本章の主題となる。

2. 非正規労働者の仕事の差異

本節では、前回調査から今回調査までに彼ら彼女らが経験してきた仕事の労働条件に注目し、多様なその仕事の差異を整理する。

比較の軸として取り上げるのは、まず給料や残業代など諸手当、福利厚生といった従業員の待遇に関するものである。一口に給料といっても仕事それぞれに金額が異なるのはもちろん、時給制や日給制、年俸制などさまざまあり、また残業代や交通費など各種手当などが出る職場と出ない職場、更に保険なども加入できる職場とそうでない職場がある。（A）

それに加え二つ目に、その仕事が正社員への登用ルートをもっているか、そこで働いていて正社員になれる可能性があるか否かに注目する。彼ら彼女らの雇用形態はアルバイトや派遣・契約社員など多岐にわたるが、今後仕事を続けられる見通し、直接的には正社員として雇用される見込みは、彼ら彼女らにとって収入を安定させる方法の一つとして大きな意味をもつものといえる。（B）

そして三つ目は、その仕事に就くために必要な資格についてである。言うまでもなく非正規雇用は雇用の流動化の典型であるが、そうした雇われ方にも資格を必要とするものや必ずしもそうでないものがある。（C）

これら三つの点から、多岐にわたる非正規労働者の就労環境と仕事の性格を腑分けしたい。

1) 生活支援員（契約職員・坂本）／添乗員（契約社員・君島）

坂本が働く知的障害者の福祉施設の生活支援員としての仕事は、現在は契約職員であるため時給制だが、月に手取りで17～18万円で、夏・冬にボーナス5万円が支給されている。さらに健康保険、夜勤手当、そして作業によっては残業手当もあり、週休2日で有給休暇も認

卒業	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
坂本和孝		専門学校	卒業	卒業	2006.4~更生施設	2007.4~旅行会社
君島朋子		短大	卒業	四年制大学 編入	卒業	2007.4~旅行会社
下田洋平		四年制大学	卒業	四年制大学	卒業	2007.4~大学通信制課程 編入 6月~水道メーター検針 3~11月 塾講師
窪田千秋		四年制大学	卒業	四年制大学	卒業	2007.4~専門学校実務助手
若林理恵		短大	卒業	4月~12月せんべい屋 9~10月事務	9~10月事務	7月~焼鳥屋 8月~焼肉屋 1月~スタック
吉川綾		専門学校 9月退学 9~11月花屋	3~6月父会社の事務	12~3月キャバクラ	2006.7~インターネットカフェ	
浜野美帆		正規就職 2005.6退職	倉庫* 派遣* カーオケ*	10~3月テレアポ 4~5月漫画喫茶 6~8月派遣喫茶 9~11月派遣喫茶	2006.5~2007.1漫画喫茶 12~5月居酒屋 2007.2~チャットレディ	
下川綾乃		正規就職 2004.2退職	自動車免許 派遣(袋詰め)	2004.10~2005.4声優養成所 転々と水商売	2006.5~二重派遣(金属加工工場)	
西澤菜穂子		正規就職 7月退職	5月パチンコ	9~9月キャバ 10~12月キャバ 1~3月水商売	2005.4~2006.5キャバクラ 2005.11~2006.5漫画喫茶	1~2月派遣(DM工場) 3~8月派遣(倉庫) 9~10月出会い系サイトのサクラ 11月~11月出会い系サイトのサクラ
庄山真紀		中華料理屋	3~5月キャバ	7~9月キャバ	4~7月麻雀屋 9~11月寿司屋	2007.3~寿司屋
竹内奈央		ホームセンター 6~11月ドラッグストア	6~8月井当屋	11~5月100円ショップ	11~2月テレクラのサクラ 4~10月キャバクラ	11月~キャバクラ 11月~ケーキ工場

図 2-1. 対象者 11 名の 5 年間 (グレー部分は失業・無業期間を示す)

められている。また月1万円の職員寮も完備されている。

正規職員への登用に関しては、数年前に契約職員から正規職員になる試験ができ、現在は2年間働くとその試験を受験することができる。1年に1回受験の機会があり、去年は6人受けて3人しか合格しなかったというが、何回でも受けることができるという。

また、今の仕事に就くには一定の資格が必要であった。彼は専門学校での保育福祉学科の教員からの打診を通じてこの仕事に就いており、その際に彼が持っていた保育士と社会福祉主事任用資格に関して「資格がないとダメって言われて、どっちかがあれば」と述べている。多くの福祉現場と同様、彼の仕事は資格がなければ働けない(業務独占資格)わけではないが、彼の持つ資格と同等の実質的に高い専門性が求められている。

坂本ほどではないが、君島の職場も比較的待遇は良いといえる。旅行会社の添乗員の契約社員として働く彼女の待遇は年俸制で、ボーナス込みで200数十万、月額に換算すれば手取りで約18万円という。旅行添乗という仕事の性格上、日をまたいだ勤務が多く、時期によっては月に2泊3日を6回、計18日間前後は添乗をしている。夕食代や深夜手当、出張手当などは支給される。ただ、同じ会社の正社員には引越し代などが支給されるが、契約社員である彼女にはない。

現在は1年ごとの契約で、5年経てば正社員にという説明が入社前にあったが、実際は「口だけって言ったら何ですけど、まあ呼び込みの一つで、「(契約社員から正社員になった人は)たぶんいるんだろうけど、たとえば係長とかそういう役職が付かないとないんじゃないかな」という。正社員登用ルートがないわけではないが、現実的には相当に厳しいようである。

また、添乗業務には旅程管理主任者資格という国家資格に準ずる資格が必要である。入社時点で持っていなくても会社がこの資格取得のために研修を用意していたが、彼女は大学在学中に通った「スクール(無認可校)」で取得していた。国内旅行の添乗を1年経験した後、2年目からは海外での添乗も行なうことになっているという。

以上、二つの仕事の性格をまとめれば、君島の職場の正社員ルートは不明確であるが、A(待遇)、B(正社員ルート)いずれも比較的条件的の良い職場であり、資格が求められる仕事であると整理することができる。また比較の項目に加えて、新人に対する研修制度があることも二人の職場の特徴である(二人の就労状況については第1章も参照)。

2) 水道メーター検針(アルバイト・下田) / フロア清掃(アルバイト・窪田)

一方で次の二つの仕事は、前項と比べると待遇と資格に関して大きく異なる仕事である。下田の仕事は指定された地域(3,000軒程度のブロック)の建物を回り、一軒ずつ家屋の水道メーターをチェックするものである。一日の目安は200~300戸ほどで、固定給4,000円に100件以上からは一戸当たり40円が加算され、一日7,000~8,000円、月に10万円前後になる。分担地域が決まっているため早い時間に仕事が終わることもあり、9時に出社して遅くても17時には終わる。自分の担当分が終われば月末も休みになり、実働15日程度である。パートタイムから正社員になるルートがあり、実際に正社員になっている人もいるという。仕事内容に特別な資格は求められていない。

これと似た状況にあるのが窪田の働く清掃作業の会社である。窪田は、私立専門学校の実験助手(準職員)を勤める一方で、休日などには高校時代から続いていた清掃のアルバイトにも不定期に携わっている。待遇は9時から17時の勤務で日給7,000円、夜間は約1万円になる。会社のフロアなどを掃除する作業であり、特に必要な資格はない。また長期間この仕事を継続している窪田は実際に社員として働いてほしいと言われており、正社員になるルートもあるといえる。

以上、この二人の仕事はA(待遇)は必ずしも良くなく、仕事に特別な資格が求められるわけでもない。しかし、B(正社員ルート)に関しては周囲に前例があったり実際に誘いを受けるなど、明確に正社員になるルートが見えている。

3) 私立専門学校の実験助手(準職員・窪田)

自身の卒業した大学と同系列の専門学校で実験助手として働く窪田の仕事は、準職員として1年ごとの契約更新制であり、基本的には2年、最長で3年までしか働くことができない。

ただその他の待遇は比較的良い。準職員としての給与は時給1,030円、週5日、9時から17時までの勤務。まれに実験が終わらないと18時、19時まで残業をすることもあるが残業手当が付く。職場までの交通費も支給され、厚生年金や雇用保険も整備されている。また、学校が休みとなる夏と冬には短期の夏期休暇と冬期休暇がある。この点に関しては、特に給与が時間給である非正規労働者にとって休みの増加は収入の減少を意味し必ずしも良い条件とは限らないが、全体的に福利厚生などが整った職場といえるだろう。

仕事内容は、自分が大学在学中に扱った実験の「準備したり、あとはまあ、実験、学生がやってるのを見ながら、ちょっと危ないことしたら注意したり」といったものである。彼女は大学の教員からの紹介でこの仕事に就いており、彼女の同僚も同系列学校の卒業生だという。ここでは就職の際、特定の資格は求められておらず、窪田自身も仕事に対して「ちょっとバイトっぽい」と感じている。しかし、たとえば公立高校などにいる実験助手は専任の専門職であり、彼女の仕事も実質的には理系学部を卒業し、実験助手として授業内容を理解するだけの専門的な知識を有していることが求められている。

4) 塾講師（アルバイト・下田）

同じく下田の学習塾講師の仕事は、特に資格を要する仕事ではないが、高卒では就けないことに表れているように高等教育進学時に必要とされる程度の学力を求められるものである。彼は小学生や中学生を相手に5科目すべてを教えていた。

一方で、窪田の実験助手の仕事と比べると待遇に関しては劣悪である。給料は授業1コマ90分1,500円から1,600円、時給で約1,000円である。「授業の準備が一番大変でした」、「一人に対して1時間くらい予習が必要でした」と述べており、実際の労働時間は「午後3時から、遅いときだと、夜の12時くらいまで。で、実際、手当付く時間が4時間とか」だという。授業時間以外の時給は付かない。また正社員へのルートもない。

5) 飲食店、倉庫・工場などのアルバイトや派遣（下川・庄山・竹内・西澤・浜野・吉川・若林）

下川・庄山・竹内・西澤・浜野・吉川・若林が経験してきた仕事の条件は似たところが多い。待遇に関していえば、大半の仕事の時給は800円から1,000円程度。社会保険に加入できなかったり、派遣の仕事の中には交通費さえ出ないところもある。正社員になるルートはなく、働く際に公的な資格を求められることもない。

たとえば、西澤はこの間に離転職を繰り返すなかで派遣の仕事をいくつか経験している。工場で保険のパンフレット作りや封入れを行なう仕事では、9時から17時まで働いて日給8,000円。ただ、職場まで往復1,000円近くかかるにもかかわらず交通費が出なかった。また、スーパーへの卸売り倉庫に派遣された際は、12時から23時頃まで働くこともあったが日給は7,000円程度であった。同じ派遣社員で長期間働いている外国人の上司から言葉も分からないままに指示されながら、清涼飲料のペットボトルの箱20個を台車に乗せて運んでいたという。

竹内は他の仕事と掛け持ちしながら、自宅近くのケーキの製造工場で働いている。時給850円で、9時から15時45分までミキサーやオープンなど大きな機械を使った作業を日ごとに割り振られる。「大量生産だから、量が多い。バターとか一個10キロ単位。そういうのを運んで出し入れするから、けっこう、腰とか痛めて辞めちゃっている人とかいて、これ以上仕事を続けていたら車椅子になっちゃうっていう人もいる」という肉体労働である。また、職場では工場の責任者の社員3人が50人あまりの女性パートを監督している。作業工程に問題が発生すると社員がミスをした従業員を責めるため、「まだ慣れてないうちからそんなことを言われたら、うるさくなって、みんな辞めちゃう」、それはまるでパート社員を「機械扱い」しているような様子だという。

また、庄山が働いていた寿司屋は時給1,250円、彼女は生活費のためにカラオケ屋とダブルワークをしていた。客の注文を取り料理を運ぶ仕事で、「新人だから仕事できないと思われるのがすごい嫌なんで、がんばってやって」いた。だが働き始めてみると仕事の手順などを教えてくれない職場で、仕事に慣れてからも挨拶すらしてくれなかった。他の従業員からの陰口もひどく、上司に相談したが「もうちょっとがんばってくれ」と言うばかりで何の対応もなかったため、2ヵ月で逃げるように離職した。

このように彼女たちが派遣やアルバイトとして働いている仕事は基本的に待遇が悪く正社員へのルートもない。また、ほとんどの仕事が研修もきちんと為されないまま任される単純労働であり、それぞれに身につけたものは他の仕事を得るために役立つわけでもない。

それに加え、こうした仕事の中には特殊なリスクを負う仕事もある。西澤が以前派遣されたテレフォンポインター（以下、テレアポ）の仕事は、個人宅に電話をかけて「金（きん）を売る」仕事で、「その金を日本円じゃなくてアメリカのドルで買って、その金がいつか売れるから、みたいな」というものであった。読み上げる文書を上司から手渡され、「とりあえずこの紙を見て、電話をかければいい」「君たちには言っても分からないから仕事内容は言わない」と言われたという。そのため彼女は仕事内容もよく分からないまま働いており、同僚の間では「仕組みとか分かってないのに売れないよね」と話していた。ここで彼女は週5日、9時から17時まで、時給1,000円だが交通費なしで働いていた。

こうした仕事の中にはいわゆる「利殖商法」と呼ばれる違法なものがある。彼女の会社が該当するとは断定できないが、職場では「怪しいところなんじゃないかって

噂も出て」いたといい、西澤自身もある種の違法性を感じていた。非正規労働者として働く者たちの中には待遇が悪く正社員ルートもないだけでなく、さらに毎日の就労そのものに不安を抱えざるをえないような仕事を経験している者もいるのである。

6) キャバクラなどの「風俗営業」等（竹内・西澤・浜野・若林）

前項のグループと似た面もあるが、時給に関して比較的好条件であるのが、キャバクラなどの「風俗営業」、そしてインターネットや電話を介して異性と会話をする「性風俗関連特殊営業」に属する仕事である³。

竹内が以前働いていたキャバクラは、最低時給が2,000円であった。「ポイント制」と言われる制度によって客からの指名は2ポイントなどと細かく決められており、週に獲得したポイントを合算しそのポイント数で時給が高くなっていく仕組みとなっていた。あるいは、週6日19時から深夜1時まで働いている今のキャバクラは歩合制となっており、2週間に一度、「指名バック」や「ドリンクバック」と呼ばれる手当を合算した給料が現金で手渡されるという。

キャバクラのように直接に接客するわけではないが、インターネットや電話回線を通して男性と会話をする出会い系サイトのサクラも比較的時給が高い。西澤が現在働いている職場では時給1,300円、交通費が500円まで支給されている。サイトを利用している男性とメールでやりとりをする仕事で、「たとえば人妻だったりOLだったりとか。自分でキャラクター作ってそれを売り込む」のだという。現在西澤は30人ほどの「キャラ」を演じながら、この仕事を続けている。

これらの仕事は前項で扱った多くのアルバイトに比べ、時給に関してのみ比較的条件の良い仕事となっているが、同時にリスクを伴う仕事でもある。時給1,200円のスナックで働く若林は「お客さんいらしてくれたから飲まなきゃいけない。飲んだらもう、その日ずっと吐きっぱなし」と語っていた。また前回調査でも、彼女た

ちがキャバクラで働くなかで客からの嫌がらせを受けたり、劣悪な職場環境のなかで身体的にも精神的にも健康を害し、給料を高額な医療費にまわさざるをえない様子が見られていた。このように、これらの仕事は高時給である一方で、リスクを負う仕事でもある。

7) 小括

以上見てきたように、一口に非正規労働といってもその性格には相当な差異がある。坂本や君島のように相対的に待遇がよく正社員へのルートも比較的可見な契約社員として働く仕事もあれば、5項で見たような待遇も悪く正社員へのルートもないようなアルバイトや派遣の仕事もある。比較してみると明らかなように、非正規雇用の仕事はその条件に関して比較的好待遇のものからそうでないものまで、階層化している。坂本や君島が比較的安定的に働くことができているのに対し、派遣やアルバイトの者たちがごく短期間で離職を繰り返している背景には、前者に比較的良好な条件がそろっているのに対し、後者にはそうした条件が欠けていることが指摘できる。

ただ、比較的安定的に働いているように見える君島の添乗員や坂本の福祉職の仕事も、実は雇用の流動化の渦中であって不安定な仕事であることには留意が必要である。たとえば君島の仕事は有期雇用であり、必ずしも安心して働ける労働条件を備えているわけではない。つまり非正規労働者は総じて不安定な労働条件のなかに置かれているのであり、その低いレベルにおいてかろうじて比較的安定的なものから不安定なものまで階層化しているということである。

3. 非正規労働者たちの就労生活と今後の見通し

では、彼ら彼女らは非正規労働者として働く自身の働き方をどのように考え、これからどのような就労生活を送ろうと考えているのだろうか。前節で見たように、非正規労働者の仕事はきわめて多岐にわたっているが、それは仕事への見通しについても同様である。非正規労働

表 2-1. 対象者の仕事比較

	雇用形態	A: 給与・手当等 の待遇	B: 正社員登用ルートの 有無	C: その仕事に就くために必要だった資格
1: 生活支援員・添乗員	契約社員	○	○～△	保育士（国家資格）、社会福祉士主任任用資格、 旅程管理主任者資格
2: 水道メーカー検針・清掃	アルバイト	×	○	なし
3: 私立専門学校実験助手	準職員	○～△	×	大学理学学部卒
4: 塾講師	アルバイト	×	×	四年制大学卒
5: 飲食店・倉庫・工場など	アルバイト・派遣	×	×	なし
6: 「風俗営業」など	アルバイト	◎～○	×	なし

者の移行の実情を見るにあたって、本節では彼ら彼女らが自分たちの就労生活をどのように捉え、今後どのように生活していこうとしているのか、彼ら彼女らが描いている将来展望に即して見ていくことにする。そこでは、将来展望の描き方にそれぞれ特徴的な傾向が見られる。

1) 現職を通じて将来展望を描いている者たち

知的障害者の福祉施設で働く坂本和孝と、旅行会社に就職し添乗員の仕事をする君島朋子は、ともに現在の仕事を今後も続けていく展望を抱いている。

高校生の頃から添乗員への夢を語っていた君島は、高校卒業後は親の希望もあり短大に進学した。そのかたわら自ら探した「スクール」に通い、総合旅程管理主任者資格を取得するなど添乗員の夢を追っていたが、あがり症であることや低賃金で経済的自立が困難なことから添乗員への不安も感じていた。そのため、添乗員以外の仕事に就く可能性も考慮し、「四大卒って肩書き」(2005)を得るため同系列の四年制大学へ編入し、多様な職種を視野に入れ就職活動をしていた。しかし、やはり添乗員しかないと考えたことから旅行会社に就職し、2007年4月から契約社員として働いている。君島は添乗員の仕事について次のように語っている。

お客様笑ってくれるだけで嬉しいし、もうこれっていいことではないんですけど、笑ってるの、楽しんでもらえれば嬉しいです。(中略) 本社でやるときは基本的に私準備とか好きなので、準備も楽しいですし、座席表を作ったり部屋割りしたり、業者さんに電話したり。そういうのも全部楽しいし。

自分の機転の利かせ方や接し方次第で「ずいぶんお客様の気持ちが変わるんで」と添乗員の仕事にやりがいを感じており、君島はこの仕事を通して添乗員として今後さらに成長していきたいと考えている。

やっぱり先輩見てて、仕事ができるって言われてる人と、別にそういう話を聞かない人がいて、もとの素質もあるんだろうけど、絶対多少の、努力とかもあるじゃないですか。だから(自分も)その2、3年後、こうなるにはやっぱり今からちょっとずつ変えていかないと。

「基本的にずっと添乗員はやりたい」と話す彼女は、添乗員として成長することを強く希望している。低賃金であるとはいえ、君島はすでに離家し添乗員の収入で生活をやりくりしており、「3年は仕事をしてたいです。別にやめる気もないんですけど、結婚したからって」と、

結婚や出産の年齢までを含めた「私の人生プラン」を、現在の添乗員の仕事を通じて描いているのである。

現在の仕事を中心に展望を描いているのは、専門学校の保育福祉学科を卒業して知的障がい者の福祉施設に就職した坂本も同様である。もともと保育士志望であった坂本は、就職が決まる直前の2005年冬のインタビューでは、福祉施設に就職してもいずれは保育士になりたいと話していた。しかし、今回は次のように語っている。

第一に、(今の職場を)たぶん辞めたくないですよ。あんま転々としたくないですよ、まず、自分では。あと、今年になってすごい仕事を覚えたりして、1年目よりは覚えるようになって、違う仕事をふられたりしてるのがすごいなんか、いろいろ変えていくのが面白いんですよ。いろんなのがけっこう変わって、今年になって。そういうのを頼まれてきてるんで、なんか、楽しさがある。

坂本は仕事を任せられ、職場の体制や手順を自分で変えていける楽しさや自身の成長を感じ始めている。生活支援員として働きながら専門学校時代から入っている地域のサークルに参加したり、あしなが育英会にかかわったりしている現在の生活が、10年後も「あんま変わらない」かたちで継続していけると展望している。

以上のように、君島や坂本は契約社員として働きながら、現在の仕事を通して将来の展望を描いているのである。

2) 現職とは異なった目標をもち、その途上にある者たち

現職とは異なる目標をもちながら将来を展望している者たちもいる。四年制大学卒業後、実家暮らしを続けながら専門学校で実験助手として働き、以前から続けていた清掃のアルバイトにも顔を出す窪田千秋と、母と二人で暮らし水道メーター検針のアルバイトをしながら、新たに通信制の大学に通う下田洋平である(下田の学生生活については、第4章参照)。

高校卒業後、窪田は四年制大学の生物工学系学部に進んだが、授業コンセプトが曖昧でモデルとなる先輩の少ない「新設学科」であったことから、早い段階から進路選択に困難を抱えていた(「報告書③」83-84頁)。多様な職種にわたって就職活動をするかたわら事務系の公務員試験も受けるなど「どっちも中途半端」な状態となり、最終的には「もう何をしたいか分かんなくて」(2006)途中で就職活動を終えることとなった。大学と同系列の専門学校で実験助手として働く口をゼミの教員に紹介してもらい、現在そこで働いている。1年ごとの更新制で最長3年までしか働くことのできない職場であるが、た

とえ正社員になるルートがあってもそこで継続して働く気はないという。

仕事内容は、全部、こう、ま、楽なんですけど。逆に楽すぎて、これで仕事といえるのかなっていう部分、あるんですよ。そういうのもちょっと、働く、就職とは違うかなっていう、感じがあります。

しかし、現在の仕事を「ちょっとバイトっぽい」と感じ「自分が成長しているとは思えない」職場で働く窪田が、よりよい環境で働ける職場を積極的に探しているかといえばそうでもない。「(就職活動を)しなきゃいけないっていうのは分かるんですけど」と消極的ですからある。

徹夜…会社にまっ1年目でも泊り込みで仕事やってるとか、って(民間企業に就職した大学時代の友達が)言うので。なんか、それが全部じゃないとは思いますが、私のなかでは、私の正社員イメージ。こういうのもありうる、っていう感じにもうなっちゃって。だから…あんまり正社員に魅力を感じない、っていうか…。まっイメージできない、んだと思います。

正社員への否定的なイメージや自身の就職活動経験から、窪田は正規雇用就職ではなく結婚への願望を強めている。

(結婚願望が強くなったのは)大学3年生、4年生くらいから、ですね。就職したくないっていうのがあったので。ふふ。(中略)結婚できたらまっ就職しなくても、いいかななんて甘いんですけど。

仕事…まっ、うまく決まって、さらに、4月から仕事に満足してれば、いつか(結婚すればいい)っていうのはあったとは思いますが。今みたいに、すぐに結婚したいとかはなかったと思いますね。

「もともと…早く結婚したいなっていうのは、あったんですよ」と話しているように、彼女は高校生の頃から結婚を意識した展望を語ってきた。結婚への漠然とした希望が、就職活動の時点で「もともと、就職っていう、意識が薄かった」という姿勢に反映され、就職活動をうまくこなすことができなかった。そうした就職活動経験や正社員に対するネガティブなイメージ、また現在の仕事の雇用期限がもたらす見通しの悪さや「働いてるって感じはない」という満足感のなさが、彼女にさらに結婚を中心とした将来展望を描くことを促している。

一方、以前から一貫して教員になりたいと語ってきた下田も窪田同様、現在の仕事とは異なるところに展望を描いている。下田は、大学4年次の教育実習申請の際、実習校を確保することができず教職免許を取得することができなかった。一時は教員への夢を諦め就職活動もしたが、「自分に嘘をついているっていうような感じ」(2006)があったため、経済的負担の軽い他大学の通信制へ編入しそこで免許を取得することで、教員志望を続けていこうとしていた⁴。現在、通信制の大学に通いながら水道メーター検針のアルバイトをして学費や生活費を捻出する生活を送っている。そのような自分を彼は学生とフリーターの「中間みたいな感じ」と述べており、「自分が不安定」であると感じている。

最終目標は学校の先生なんですけど、ちょっとその途中になにか回り道的な他の仕事の方がいいのかな、ってこの1年で(思うようになりました)。そうですね、なんか他の仕事もやってみたいかなと。

同じ水道メーター検針の職場で働く40代フリーターの人たちの「けっこうぎりぎりの生活をしている」様子を見るなかで、下田は「ずっとずるずるフリーターみたいなやっていたら、就職の機会もなくなっちゃうんじゃないかな」と現在の立場に焦りも感じていた。こうした立場上の不安が、教員採用試験への不安やアルバイト先で教員経験のある先輩に「先生大変だからもうちょっと社会勉強の方がいい」と言われたことなどと重なり合い、教員以外の仕事に就く可能性を考えさせ始めている。

以上見てきたように窪田・下田の両者は、大学卒業後に至った現在の状況とは別の進路へ進むことを希望している。下田にとって二つ目の大学に通いながら今の水道メーター検針のアルバイトをすることは、目指している教員(あるいは他の正規雇用就職)に向けての途中段階であり、窪田にとっても実験助手や清掃会社の仕事は結婚という目標への一時的な職である。そのため、検針の会社や清掃会社にそれぞれ正社員への登用機会があるにもかかわらず、それは進路先としてほとんど重視されていない。むしろ今とは違う目標を念頭に置きながら、それがいかに実現できるかを計り、またその困難さを前に迷っているのである。

3) 就労と生活の問題を背負いながら将来展望を描く者たち

次に、これからの展望をもってはいても、先を見通す

上でさまざまな問題を抱えている者たちを取り上げる。まず指摘しておきたいのは、これまで見てきた4人が高卒後大学や専門学校を卒業し、今回調査で初めて非正規労働者という身分となった者であるのに対し、ここで扱う下川彩乃・庄山真紀・竹内奈央・西澤菜穂子・浜野美帆・吉川綾・若林理恵の7名は、前回調査ですでに非正規労働者として働いていたという点である⁵。さらにこの7名は全員、B高校出身の女性でもある。その制約の要因や様子は各人それぞれの文脈で異なっているため、以下では彼女たちがどのような問題を抱え、またそれに制約されるなかでどのように展望を描いているのか個々のケースごとに考察する。

①ダブルワークで一人暮らしを続けながら、いずれ弟を引き取ろうと考えている竹内奈央

高卒後すぐにフリーターとなった竹内は、今回インタビュー時にはケーキ工場朝から夕方まで働き、それが終わると19時からキャバクラで働いていた。このような生活のなか彼女が描く展望の一つは、キャバクラの仕事が続けていくことである。

夜は一応明確な目標が今のところあって、やっぱりキャバクラは夜の仕事。ある程度若いときにしかできない。(中略)ナンバー取れたらいいなってそれくらい。(中略)たとえば、何月までに何位以内に入るとか。もしくは、何月の売り上げ金はどれくらいでしょうか。何月は何人呼ぼうとか。そういう目標は決めてやっていきたいな。

彼女は「自分自身が感じられる手応えっていうのを一つひとつ身につけられるのがいいな」とキャバクラの仕事にやりがいを感じており、「ちゃんとやりたいなと思ったときから、心理学の本を読み始めたりとか、キャバ嬢が書いた本とか読んで」勉強してきたという。

もともと竹内は、中学生の頃からの声優になるという夢を叶えるべく高校卒業後フリーターとして働き始め、声優養成所に通う資金を稼ぎながら自分で情報を集めてオーディションを受けるという生活を送っていた。そして2004年10月からは声優養成所に通い、声優だけでなく芝居にも関心が広がっていた。その後は舞台活動のために、「お金を貯めることに徹しよう」と100円ショップや学童保育などのアルバイトを掛け持ちして働き、2005年10月には以前から望んでいた一人暮らしも果たした。

だがその内実は、就労においては学童保育での子どもとの関係や保護者からのクレームなどストレスの多いも

のであり、また時給が安く(790円)学童のおやつや余り物で食費を浮かせるギリギリの生活だった。相当の負担を抱えながら2006年9月頃にはすべて退職するに至り、その後は在宅のテレクラのサクラを「ボチボチ」やりつつ貯金を切り崩す生活を半年ほど続け、キャバクラの世界に入っていった。この間、声優や芝居への夢も薄れていったという⁶。

キャバクラで結果を出すという目標をもつ竹内だが、その一方で正社員として働くことも希望している。それは現在の一人暮らしを成り立たせるためだけでなく、両親・家族との関係が大きく影響している。

現時点では昼間、ちゃんと就職して、というかたちでは働きたいですね。そのなかで、まあある程度お金を貯めて。夜(の仕事)もやっているからお金を貯めて。だから、4歳の弟がいる。私は、彼を引き取ろうかと思って。だから要するに彼(弟)と暮らしたい。それは彼が生まれたときにもう、私は決めたことで。

彼女には2003年末に19歳下の弟ができたが、その妊娠は父も知らない「予想外の出来事」(2005)であったという。昔から両親が不仲であること、また母が長くうつ状態にあり、ネット依存症、自傷行為を図るなど精神的に不安定であることから、彼女は「現状を見て、あの家で、あの子(弟)がまっとうに育つとは思えない」、「(自分なら)もっとちゃんとまっとうな人間に育てる自信はあるかな」と考えている。

彼女は小学生の頃にも母の浮気を知ってしまったことがあり、「(父と母)二人だけがやるのはかまわない」、「私はきょうだいだけで住みたいんです、将来」と既に両親を見限った部分がある。そのような親の様子が、彼女の「自分で解決できない問題はないって思ってます」(2003)といった、人に頼らず自身の力だけでなんとかするスタンスを形成してきたともいえる。彼女は現在、仕事を掛け持ちして一人暮らしの生活をまわしているが、今後さらに弟を引き取ろうとしているのであり、経済力を得るために昼間は就職をし、夜は自分の関心事であると同時にまとまった収入にもなるキャバクラの仕事を続けていこうと考えているのである。

ただし、そうした今後の就労生活を支える保証はなにもない。彼女は両親を含め周囲の大人からの援助を受けておらず、今の生活を支えるのはまさに自分だけである。テレクラであれば月100万円稼ぎたい、キャバクラに入ったらナンバーワンを取りたい、「ダラダラ続けても意味がない」と常に目標を設定しそれに邁進する

姿は、一見自分の生活を旺盛に切り開いているようにも見える。だが実際は、過酷なほどに切り詰めた生活を続けるなかで弟の養育問題を中心に家族（両親）の問題に縛られ、安定的に働ける見通しはそれほど明快ではないまま、モチベーションのみを支えに何とかこの先を見通そうとしているのである⁷。

②母親との葛藤を抱えながら、ようやく就労への見通しをもち始めた若林理恵

前回インタビューでは親との葛藤を抱え無業であった若林は、今回インタビュー時には一人暮らしをスタートさせようとしていた。

とりあえず仕事を、今月以内には探そうと思って。遅くとも来月末には絶対見つけられるようにしたいと思います。(中略)就職できちゃえば、最初はバイトっていうかたちで入れてもらって、その後もし続ける気があったらそのまま正社員になってもいいし、みたいな感じで、いろいろ探しているんですけど。今その住むところが賄えるぐらいの稼ぎができるようになりたいと思ってますね。

高卒後、将来は字幕の翻訳の仕事がやりたいと短大に進学した若林は、短大での授業が「速すぎて自分に追いつけないし、吸収したいけど自分の力じゃ吸収しきれないほどの量」(2003)であったことなどから英語への自信を少しずつなくし、同時に礼儀作法を重視する短大の規則に対し強い不信感を抱くようになっていった。また、病気がちな母の代わりに家事を任せられ、一人でいられる空間もなく、さらには服装や日常の予定・交友関係・行動範囲などを管理しようとする母親の態度に対して嫌悪を感じ始め、過干渉な母親に対する不満が多く語られるようになった。四年制大学への編入を希望していたが、「あの家にいて進学しても疲れるし、バイトしてとっとと貯めて、とっとと(家を出て)、バイトしながら就活したほうがいい、利口だと思った」(2005)と、短大卒業後アルバイト生活を始めている。

こうした母の過干渉について苛立ちを感じ、離家したいと強く望んでいた若林であるが、その一方で母のことを「要は子ども依存症」(2005)と言い、母親が実は自分に依存していることに気付いていた。そして、「親も私がどっかにいれば頼っちゃうだろうし。だから、そうしたらもう一切実家とは連絡取らない」、「親の手の届かないところに行っちゃいたいんですよ」と希望を語りつつも、「今の親の生活を壊すことになる」ため、離家に踏み切れずにいた。

それに加え短大卒業直前に、別に暮らす祖母の介護を親に頼まれたことによって一層離家が難しい状況へと陥っていった。また母親の束縛に耐えかねた若林の妹が家出したことをきっかけに、彼女は介護のために祖母の家に住みながら実家でも病弱な母親の世話と家事をしなければならなかった。短大卒業後1年ほどはせんべい屋やスナックで働いたが、体調不良を理由に離職した後は家事と介護に専念することになっていった。そうした生活は「当分私がどこにもいけないようにするため枷はめられたっていう感じ」(2005)であったという。

しかし介護のために実家を離れたことは、若林にとっての転換点ともなった。当初は母からの支配の一環であった祖母の家での介護生活が、実際には実家から半歩外に出て親と距離をとれる状況を生み出していた。とりわけ家出した妹が2006年夏に子どもを産んで帰ってきたことで、若林に集中していた母親の干渉が軽減したことがうかがえ、実家の家事から解放され祖母の家のことだけをすればよくなった。

その後、2007年の夏頃からは焼鳥屋や焼肉屋などで再びアルバイトを始めている。しかも今回インタビュー時には、一人暮らしの準備をしている段階であった。介護をしていた祖母が亡くなったことが彼女の一人暮らしを決定づけたのである⁸。

予定している一人暮らしは実家の近く、家賃の3分の1は両親が出し、そのため一室は両親の物置代わりになるという。「自分で一切合財払うから1Kに住みたいって言ってたんですけど、聞かなくて、親が」という様子からは、若林に対する親の干渉はいまだに続いていることがうかがえる。しかし、そうした母親の依存に対して「しょうがないですけどね」と言い、「一番うちの家族の中で弱いので、多分母親だと思ってるから。なんだかんだ言って嫌い、嫌いなんですけどね。心配なんですよ、母親が」と祖母を亡くしたことにショックを受ける母をいたわる若林の言葉には、嫌で離れたたいと思っているにもかかわらずその関係を失うことはできないような状況が依然として続いていることがうかがえる。とはいえ、母親の干渉に対する葛藤が全面に出ていたこれまでのインタビューの様子とは違い、今回インタビューでは以前のような大きな母娘葛藤は見られなくなっている。自分を束縛する母親の存在自体は変わらないが、介護のために実家を離れたこと、祖母が亡くなり一人暮らしをすること、それと同時に就労制限がなくなったこと、そういった変化のなかで、彼女はようやく就労生活のスタートラインに立ち今後の展望をもち始めているのである。

③家族を支えながら、フリーター生活を続けていこうと
している吉川綾

家族と暮らしながらフリーター生活を続けている吉川は、将来について次のように述べている。

私、社員にはなりたくないですね、バイトで、自由でいたい、休みたいときに休みたい。けっこう、自分のライフスタイルは決まっていますので、それは絶対に壊したくないですよ。

保育士になりたいと思っていた吉川は、保育士資格取得のために医療系の専門学校に進学した。しかし、保育の授業が全然なかったことなどから半年ほどで退学、「学校、なんか通うのがもうすごい大変だよ。頭悪いから全然勉強分かんないし。難しいですね」（2003）と保育士への夢を諦め、フリーターとなった。それ以後は、花屋や服屋、キャバクラなどで働いたが、店舗から工場への異動や上司との関係の悪化、客からの嫌がらせなどでそれぞれ離職。父親が経営する介護の有限会社でも事務員として働いていたが、「仕事面でも、人づきあいたいたからね」と他のアルバイトをするために一時期中断し、それを辞めると父の会社に戻るという働き方をしてきた。

現在は父親の会社で働きながら、インターネットカフェでも働いている。この職場は2006年7月から1年半ほど続けているが、「今のネットカフェは、続けていこうと思えば続けていけると思うんですけど、でも、飽きた」という。

魅力を感じない、毎日同じことの繰り返しで、毎日同じ時間に終わって、あ、今日も終わったって感じで、なんか新鮮味もなくなっちゃった。

彼女の仕事は詳細にマニュアル化された単純労働である。接客の言葉も決まっており、対応の台詞だけでなく説明の際の手つきなども指定されている。そのために彼女は今の仕事に張り合いを感じず、続けることはできるが、そろそろ違う新しい仕事をしたいと考えているのである。

また、「社員にはなりたくない」という吉川の先の言葉は、この職場での正社員の働き方に起因するものでもある。彼女の働くインターネットカフェはテナントビルの5階6階にまたがった店舗で、客席数は58。それを常時二人ずつ、総勢30人近いアルバイト店員でまわしている。だが店全体を管理する社員は一人しかいない。その社員の働き方は、「休みが本当になくて、たとえば

朝の6時から9時まで一人で入っていて、で一旦家に帰ってから14時から23時までとかで、また次の日も6時とかからで、いいようにこき使われているって感じ」であり、「東堂さん（社員）は年中無休ですよ、土日も関係なしに働いています。たまに、1ヶ月に一度定休の日があるかないか」だという。しかも他の飲食店も経営する経営者は店員の勤務状況をカメラで監視しており、「東堂さんも社長にずっと毎日怒られている」という。

吉川は今後、この職場で社員になりたいと思うかという質問に「なりたくないですよ、無理無理。社員になりたいと思う人はまずいないと思います、東堂さんを見ていて、大変そう」と答えている。今の職場でアルバイトから正社員になること自体が一般的ではないことに加えて、社員の働き方のひどさを知る彼女にとっては、現状の労働条件にとどまる方が明らかに合理的なのである。

また吉川は、「自分のライフスタイル」を守るためにも、今後もフリーターでいることを志望している。実は彼女は将来、一人で生活できない妹を介助しながら一緒に暮らしていくことを考えている。「（介助の必要な人がいる）家庭が大変なのは、自分しか分からないから、周りは絶対分からない」と言い、「プレッシャーは、常に、ありますね」と話している。

私も、妹のことを理解してくれる人じゃないと、やっぱり、結婚もしたくないから、彼氏よりも、やっぱり親、家族をとって、ずっと家族と暮らしたいですね。やっぱり、大きくなって、（妹を）施設とかに入れたくないから。

以上のように、吉川は正社員になることは望まずフリーター生活を続ける展望をもっている。それは端的には正社員の過重労働への忌避から生じたものではあるが、同時に妹との生活を視野に入れていくこと、その負担への覚悟を踏まえて描かれたものである。吉川の家は既に結婚し離家した姉も頻りに様子を見にくるなど家族全員が妹のことを気にかけ、また地域の人にも支えられて生活しているというが、介護を続けていく生活は「けっこう大変だって思う」ものとして、彼女が今後の生き方を考える上に覆いかぶさっており、ある種の負担になっていることは間違いない。だが、「将来的には、私が看るのかなというのがあるし、それでいいとも思うし」と、これからも妹を支えていく生活に吉川は向き合おうとしているのである。

④両親の不和の間で離家することができないまま、新たな夢を追う下川彩乃

下川は、現在派遣社員として金属加工の工場に働いている。派遣先から更に派遣される二重派遣だが、派遣先で直接雇用のパートとして働かないかと誘われてもいる。人間関係も「上々」の職場であるというが、今後の見通しについて次のように語っている。

〔今の仕事をしばらく続けていく感じ?〕最近辞めたいなって、もう1年半以上いるんで辞めたい。〔何で?〕だって、5月に入ったらもう2年すよ。〔辞めたい理由はそれだけ?〕それもあるし、やりたいこともあるんすよ。アロマセラピストになりたいんす。

アロマセラピストに関心をもったきっかけについて、下川は「一応、人を癒す力がある。たまたまです、たまたま。本屋さんで見て」と話しており、「たまたま見て、あーなんだろう。おもしろいなって思って、資料請求」という。資格を取るには「30万くらい」かかる。

下川はこれまで一貫してアニメ声優の仕事を目指してきた。高卒後に惣菜等の調理販売会社に正社員就職したのも、もともとは2、3年そこで働きお金を貯めて声優の養成所に通うためであった。しかし、就職した会社では、店舗の欠員を埋めるために繰り返し異動させられ、会社の経営の先行きが不安になったことや、超過勤務、人間関係のストレスなどから10ヶ月ほどで退職した。退職後、仕事も探し始めたが、受けたアルバイト面接すべてに落ちてしまい、やっとのことで就いた長期登録の派遣の仕事も2ヶ月ほどで「急に打ち切られて」(2005)、派遣の仕事も転々としていた。その後、再びアルバイトの面接に落ちてしまったことから自信をなくし、前回調査では無業状態であった。また、結婚を勧める親に反対されながら目指してきた声優の夢も、「ちゃんとした踏ん切り」(2005)をつけなければと語り、本当に声優になれるのかという不安を抱えながら、今後の見通しについて「あんまり重く考えたくない」(2005)と話していた。

今回のインタビューでは、声優の夢は「なくなっちゃったんですよ」と話している。学校へ行くには時間もお金も必要であり、一時期通っていた養成所も「授業料みたいなのが払えなくなっちゃったんですよ。で、派遣じゃ無理だ。でもパートでも、多めに見て(時給)900円以上みたいなの。だから、だんだんどうでもいいやって」なっていったという。このように展望が一貫しないことを、彼女は「計画性がない」と語っている。

こうした下川の展望は一見、実家暮らしであるため明

日の生活に困らない者だからこそもてるものだといえる。しかし、下川は単に実家の家計に甘えながらこうした展望をもっているわけではない。

お母さん、お父さんがなんか苦手っていうの。あまり好きじゃないらしいっす。(中略) やっぱ父もすごい気持ちに不安定な人だから、やっぱ手を上げちゃうんす、母に手を。それでやっぱり、母は嫌だって。

下川家には家族をあげて父の故郷に戻るという話があるが、それに際して親戚との遺産をめぐるトラブルから、父親が精神的に不安定になるというのである。また母親が酒を飲み過ぎてしまうこともあり、父と母は繰り返し揉め、父が母に暴力を振るい、「それを私が止めるんすよ、一生懸命」という。

(お父さんには)ちゃんと決めて話すように言って。お母さんに「あんまりトゲ刺すようなことを言ったらダメだよ」って。「大変なことになるんだよ、分かった?」って。「ちゃんと物事考えないで、感情論になったらダメだよ」って。

両親の関係を調整する役割を引き受けている下川は「そうしないと(父が)手をあげちゃうんで」と自身の役割を認識しながら、両親のトラブルから距離を取ることができていない、もしくは抜け出せずにいる。「結婚して子どもを産んでっていうのは嫌なんです」(2005)と専業主婦である母とは別の人生を求め、以前から一人暮らしをしたいと語っていたが、母は父と二人になりたいためもし彼女が一人暮らしをするのであれば父親と離れて付いてくると言っており、そのことも下川の離家を難しくさせている。離家に向けた具体的な準備はほとんどしておらず、その実現はむしろ実家での自身の役割を背負うなかで延期されているようにも見える⁹。

先述のような、彼女の今の金属加工工場に勤める生活からはやや唐突に見えるアロマセラピストになりたいという夢は、こうした背景の下で毎日のストレスを軽減させてくれる支えとなっているのである¹⁰。

⑤借金と不安定な就労に振り回されている西澤菜穂子

正社員退職後フリーターとして離転職を繰り返し、様々な仕事を経験してきた西澤は、自身の今後の見通しについて、母親と話した様子を次のように語っている。

私一日に一回は夢が変わるんで。昨日は私ダンサーになりたいって言ってたんですけど。ソムリエになりたいって親に言っ

たら、「鼻炎だから無理」って言われて。で昨日は EXILE (歌と踊りの J-POP ユニット) を見てたらダンサーになりたいなと思って、「ダンサーになろっかな」って言ったら、(母親が)「リズム感ないから無理」って言ったり。

こうした夢に対して彼女は、取り立てて具体的な行動をとっているわけではなく、それはほとんど一貫性のない曖昧なものであるようにも見える。だが、彼女がこのような夢を抱く背景には、いくつかの要因が重なり合っている。

その一つが、彼女が抱える大きな借金である。もともと彼女は高卒後に叔父の会社に事務職の名目で勤めたが、働き始めてみると実際は雑用を押しつけられ、また会社の経営不振の愚痴のはけ口にされ、ストレスから自傷行為や胃潰瘍にまで至り3ヶ月で退社。退職する直前から極度のうつ状態・人間恐怖症に陥り、退職後もしばらくは家にこもりきりだったという経験をもっている。趣味を通じた友人の支えで次第に回復し、その後はパチンコ店、キャバクラなど短期のアルバイトを少しずつ始めた。そして、キャバクラより収入の多い水商売の仕事に入ってしまったのである。店を転々としながら高額な給料を得るようになり、一時期はその仕事ばかりしていて金銭感覚がおかしくなっていたという。この時に数十万円の借金を負うとともに詐欺にも遭ってしまった。借金を返済するためにも水商売を続けていたが、「夜になると涙が出てきちゃうんですよ。悲しいとかじゃなくて。なにやっているんだろうって。親の顔とか浮かんできちゃったりして…」(2005)と苦しんでいた。状況を変えるために漫画喫茶のアルバイトを始め、その後は派遣の仕事も転々とし、工場での仕事や倉庫管理の肉体労働の仕事にも就いた。また、「利子分払ってるみたいな感じで、元金払えなく」なったことから、時給の良いテレポの仕事を探したが、見つかったのは電話で「いつか売れるから」と金(きん)を売る「怪しい」仕事であり、とても安心して働ける職場ではなかった。就いた仕事はみな働きづらいものであり、十分な収入は得られていない。現在は比較的時給のよい出会い系サイトのサクラのアルバイトをしながら、徐々に借金を返済している。

つまり、なんら具体的な行動に出ることなくダンサーやソムリエといった夢を描いている背景には、第一に、以前抱え込んだ借金と一向に安定しない就労生活がある。5年前の正社員離職時の経験に加え、それ以後、繰り返し短期の仕事も転々としながら、時にリスクの高い世界も経験してきた彼女にとって、ある安定した生き方や働き方を単純に展望すること自体が難しいのではない

だろうか。

彼女にとっては仕事を安定させ借金を完済することが急務の課題ではある。だが、そうした展望は家族との関係のなかでやや屈折したかたちで引き取られている。

とりあえず私自分の家が大好きで、自分の家族が。ホントあいう家庭を築きたいなと思って。(中略) すごい仲がいいし、ま、結婚したいとは思いつつも、すごい自分ちが好きだからまだ出たくもないなっていう、まだスネかじっていたなっていう部分もあるし。[お母さんはお手本みたいになってるの?] うーん、お手本。あたしあの人以上に、「この人スゲー」って思った人はいないな、と。

西澤は家族をとっても大切なものと考えており、特に母親は「すごい、尊敬してる」存在であるという。「自分はこう、生きる道じゃないけど、結婚しつつも自分は自分でみたいなの、そういうのが欲しいから。だから必死になって夢を探してるじゃないけど」という西澤にとって、そのモデルは結婚後も着付け教室などで活躍する母親である。そして、その理想像へ向かうものとして先述の夢は語られている。

家族が大好きで母親を尊敬しているという彼女は、そうだからこそ水商売の仕事をしていたことはもちろん、借金の話も親にはすることができていない。父親の会社で事務員として働いていた西澤の妹が、取引先の会社に就職することとなり、その穴埋めとして西澤は親から「うちの会社に入れ」と言われている。だが彼女は給料を管理され借金が親に知られてしまうことを心配して、父親の会社にすぐには勤めることはできないと考えている¹¹。

親の会社で働くことは、給料を握られてるようなもんじゃないですか、顔とかを。「ごんだけ金あったのにどこやっちゃったの?」みたいな。なっちゃうんじゃないかと。

父親の会社に入ることで安定的に収入を得て借金を完済するという方法は、借金をしていることが親に知られることを回避したい西澤にとって避けざるをえないものとなっているのである。このように、離職後5年間一貫して非正規労働者として働き続けてきた西澤の就労生活の様子から見えてくるのは、借金を返すことが先決でありながら仕事は安定せず、しかも家族との関係を壊したくない、そうした複雑な要因を抱えながら今の不安定な収入と仕事とでなんとか今をやり過ごすかのように生きている様子である¹²。そして、そうした生活の中でも、彼女は「自分は自分」らしくあるということを体現する

ような「やりたいこと」を求めながらダンサーなどの夢を語り、展望を描こうとしているのである。

⑥不安定な就労と家族間葛藤によって追い込まれている 浜野美帆

前回調査では様々な職を転々とし自身を「半分ニート」と語っていた浜野は、今回インタビュー時にはチャットレディの仕事をしており、将来展望を次のように語っていた。

今の職場は、ホントは事務仕事に就きたかったんですよ。もう年齢も年齢だから、そのまま社員になりたいくて、そしてら表計算ってあるじゃないですか。あれができないから、まあ(今の仕事に)入ったんですけど。ある程度パソコン慣れたら、普通の事務系の仕事に移ろうかなって考えてるんですけど。ちゃんとした保険とかもしっかりしてるし。手取りは少なくとも。

小料理屋は出したいって夢あるんですよ。んで、もともとメイク(の仕事)やりたいから、メイクはそのうち歳とっても、行けるので、そっち系に進みたいなと思ったり、夢ばっかですよね。現実にならない夢ばかりみたいな。

高卒時、家庭の経済的事情から合格していた美容系専門学校への入学を断念した彼女は、美容院で働きながら資格取得を目指して学ぶことにした。しかし、仕事による手荒れと先輩店員との人間関係悪化のために1年で離職。その後は倉庫作業、カラオケ店、テレアポなど短期の仕事と失業を繰り返しながら月に10万円以上を家に入れていた。だがその間も親からは仕事が続かないこと、給料が途切れることを繰り返し責められ、また彼女自身も「うち(私)がグウタラだから、ニートだから」(2005)と自分を責めるように語っていた。そのときには今後の見通しも「将来はいまにも考えてなくて、なにをやるかも。どうでもいいってわけじゃないんだけど、まあなにも考えていないです」(2005)と行き詰った様子であった。

今回のインタビューでは、その後も葬儀屋、漫画喫茶、居酒屋などで働いてきた様子が語られた。金融の会社で融資を勧めるテレアポの仕事をした際には、「とりあえず知識もなければ、なににもないのに普通に電話かけてしゃべって」と言われ、望んで借りるわけでもない相手に融資を勧めることや、仕事の流れがつかめないことが「苦痛で仕方なかった」と話している¹³。美容院の仕事を辞めて以降、非正規の仕事を転々としてきた彼女は安心して働き続けられる職場を見出すことができなかった。

たのである。

その一方で彼女は月に20万円を家に入れるよう、家族から課されていた。実際には到底そのノルマは達成できず、話し合いの末「とりあえず今住んでる家賃の半分と、光熱費と、まあ仕送り代5万として入れてる」という。

要は一人暮らししてるみたいなんで、実家ですけど。で大家が、親。だからその、普通に20万とか稼いでいても、一人暮らしと変わらないんで、お金が貯まんないんですよ。食費も自分で出してるわけだし。(中略) そんなんで(実家から)出ていけなくて、普通に、難民だな、と思って、漫画喫茶のネットカフェ難民っての、確定だなと思いつつ。

こうした自分の状況を、すでに離家している姉に訴えても、「とりあえず家のことをしろ」と言われるという。病気がちな母親が救急車で運ばれた際にも、「お前はいても役に立たねーな」と言われ、浜野は「やる気が失せる」と話している。

また、仕事が続かないことを母や姉からさんざん責められ、そのプレッシャーから彼女は精神的に追い込まれなかなか仕事にも集中できない。ストレスからじん麻疹を出すなど体調を崩し、仕事を続けることが困難になり、その中で「ノルマ」を達成できないことがさらに親や姉との関係を悪化させる。まさに悪循環にはまっているのである。携帯電話代などが払えないと、自身の稼いだ収入のほとんどを実家の家計にまわしているにもかかわらず、親に「借金」というかたちでお金を借りているという彼女は、離家もできず、家族との関係にストレスを抱えながら就労生活を送っているのである。そして、こうした閉塞した状況を打開してくれるのが、安定した身分と収入を得られる正社員の仕事であると彼女は認識している。だが希望しても思うように進展しない今の状況を、彼女は次のように述べている。

一番思うのは、先が見えない。(中略) 夢はあるけど実際現実にならないし、まだ踏み出しの一步も出てないから。先の見えないゴールにいつまで経ってもいて、なにかに追い込まれてるんですよ。いいのかな、って逆に、ホント疑問に思う。こんなんでもう、また誕生日を迎えて24になって、「いいのこんなの24で? いいのかな?」みたいな。今はすごい狭い空間のなかを一生懸命脱出しようと思ってる感じ。追い込まれて追い込まれてるような感じ…。まあ余裕がないってことですね、要は。

このように彼女は、現状を打開する具体的な解決策を

見い出せないまま「追い込まれている」感じを強くもっている。小料理屋やメイクの仕事への希望は、彼女にとってはもはや閉塞した現状をかるうじて支える夢になっているとさえいえるだろう。まさに就労状況と生活問題に翻弄され、今後の見通しをもてない状況に立たされているのである。

⑦将来展望を見失っている庄山真紀

調理師になりたいと考えていた庄山は専門学校への進学を予定していたが、金銭的な問題から進学を諦め、高卒後フリーターとして働き始めた。弁当屋で働くなかで「とりあえず私のしたいことはしてる。作れるっていう」(2003)と語りそこで長期間継続して働いていたが、人事異動で新しくきた上司との関係から体調を崩すまでに至り、離職。その後はアルバイトを掛け持ちしながら家計を支えていた。今回のインタビューで彼女は将来について次のように語っている。しかしそれは将来を見通せているものとはいいがたい。

1年後は変わってないと思う。変わってないか、ちょっと新しい仕事を始めてるか。10年後、10年後って33か。考えたくない。考えたくないけど、そのときに結婚してなかったら、しょうがないからお見合いをして、案をしたっていう。それか、35までには死にたいかな。あんまり長生きしたくない。未来が見えないっていうのもあるし、なんかあんまり昔から長生きしたくない。

彼女の見通しからうかがえるのは、将来に対してきわめて悲観的で、生きていく意欲さえもとうとしないかのような姿である。母一人娘一人の母子家庭で育った庄山は、今回のインタビューのちょうど1年前に母親と死別しており、そのことがこうした語りに関係しているともいえるだろう。それは次の言葉にも表われている。

長生きしてても、現実、なんかやっぱりお母さんが亡くなってから、昔から別にあっただけじゃないけど未来に期待をしてないっていうか、そんなにキラキラした未来を考えたことがなくて、やっぱりなんか現実的に考えて、冷めた考えになりましたね、昔より余計。

庄山の家庭は経済的に困難を抱えてきた。それまで暮らしてきた家は「ホントに笑っちゃうくらい。掃除もしてなかったし、ネズミの爪痕がひどくて、まずもう流し、最初に流しのパイプをかじられて、そこからちょっと水が垂れて、(中略)パイプの下が水出ちゃって、床みた

いのが腐ってきちゃって、水で。(中略)寝る寝室にしても、これぐらいの穴が、もう空いてて」といった状態であったという。また母親は以前、児童扶養手当を申請した際に受給できたはずの手当を受給できず、また3年ほど前に母親が交通事故に遭った際にも相談をできる人がおらず誰にも頼れなかった、と庄山は話している。彼女たち親子は貧困に陥り、そのなかで支え合ってきたのである。そして、彼女自身「2人とも依存し合っちゃってるっていうか、そんな感じ、だったから、たぶん私がいなくなっても同じだったと。(中略)片方ない感じがすよね、たぶん。そんなこと言ってもしょうがないのは分かるんですけど」と語っているように、母親と庄山はまさに母子で密着するよう暮らしてきたのである。

こうしたなか、庄山はまるで自分の存在自体を責めてしまうかのように語っている。

一番ネックなのは、19歳でね、あたしを身ごもらなければ絶対違う人生があったと思うんですよ。(中略)なんか、ホントになんかあたしのために生きてきてるんですよ。ブラジャーぼろぼろでも買わなかったり、とか。自分の好きなことをまったくくしないで。もう、かわいそうだなと。

(自分の)感情全部が逆に、許せなくなってきちゃって。お母さんはもう姿もないし、食べることも飲むこともできないし、自分の好きなこともすることができないわけじゃないですか。なのに自分だけ好きなことやって、まあまあ暮らしていけて、みんなに優しくしてもらって、うーん、っていうのが。自分が嫌になって。

これまで貧困に苦しんできたが故に母親と密着してきた庄山は、母親を支えられなかった自分を責めるかたちでその死を受け止めてしまっている。そして、互いに支え合ってきた「片方」を失ったからこそ、彼女は今後の展望をまったくもてないでいるのである。こうした庄山の状況は、母娘で支え合いながら生活せざるをえなかったその構造的な要因からもたらされているのではないだろうか。

ちょっともう、情緒不安定というか、精神的に病んできちゃって、ホントにその頃とかホントにぼーっとしてるっていうか、死ぬぐらいしか思えなくて、もうどうしようと思って。これからどうしていいかも分からないし。

その悲しみを、彼女は西澤と西澤の家族によって支えられることでなんとか受け止めている¹⁴。だが、実際に将来展望をもてずにいる彼女の様子からは、それが十分

に癒されているようには見えない。彼女は将来展望をもつことさえ奪われた状態にいたのである。

4) 将来展望についての小括

以上、本節では非正規雇用というかたちで働く彼女らが、それぞれ日々の生活をどのように捉え、また今後どのように就労生活を送っていかうとしているのか見てきた。

君島や坂本は、添乗員や生活支援員といった現在の仕事を今後も続けていくという、就労を中心とした将来を考えており、また窪田と下田は、迷いながらも現在とは異なる目標に向かっていかうとしていた。一方、B高校出身のフリーター女性たちに特徴的に見られたのは、将来展望を描く上で不安定な労働条件に直面するだけでなく、各人さまざまな生活問題を抱えている姿であった。同じ非正規労働者でありながら、彼女ら11名の展望の質はそれぞれまったく異なっている。

君島や坂本が現在の仕事を中心に今後の将来展望を描いている背景には、二人が一定期間雇用を保障された契約社員であること、正社員へのルートがあることなどが影響している。君島が働く添乗員業界は非正規雇用が常態化しているが、「今のとこクビになった人もいないですし、だから毎年更新みたいな」状況にあることから、二人の就いている仕事が非正規雇用とはいえ急に失業する可能性の低いものであることがうかがえる。また、一定働き続けられる仕事に就いた二人はともに離家し、自身の収入ですでに生活している¹⁵。二人が働く仕事は、自身が望んでいた、もしくは望んでいたものに近い仕事であると同時に、生活の糧ともなる仕事であり、やりがいと収入を同時に得られるなかで今後も継続して働いていく見通しをもちやすいものだといえるのである。こうした仕事に、二人は高卒後進学し資格を取得することによって就いている。

そうした君島や坂本と対照的であるのが、B高校出身のフリーター女性たちである。そのほとんどが高卒である彼女らは、君島や坂本のように資格を活かして一定期間働くことを見通せるような仕事に就けてはいない。単純労働や悪徳商法的一种であるかのような働きづらい職場で離転職を繰り返し、中には交通費も出ず実質時給600円という劣悪な仕事に就きながら、複数の仕事を掛け持ちすることでなんとか生計を立てている者もいる。彼女らは非正規雇用の中でも不安定な労働条件の下で働き、とても就労の見通しなどもつことができずにいるのである。それに加え、彼女たちは家庭や家族間の問題も抱えさせられている。たとえば、貧困のなかで親を

亡くし将来をまったく見通せない状況に立たされている庄山や、下川のように両親の不和に巻き込まれ離家したいという希望を叶えられないケース、若林や吉川のように家族のメンバーを自ら「ケアする人」になることで、実際に自身の将来展望を強く制約してしまっているケースもある。両親の夫婦問題や支配的な親との葛藤、家族メンバーの介護・介助など、多岐にわたる家族問題を背負う彼女たちは、そうした問題に翻弄されながら、またそれを受け入れながら、なんとか今後の見通しを描くかうとしているのである。不安定な就労と各自が抱える生活問題、その双方が彼女たちに覆いかぶさり、しかも浜野のケースが典型的であったようにそれらは密接に関連しながら彼女たちの展望を描きづらくさせている。

一方、四年制大学を卒業し非正規労働者となった窪田と下田は、迷いを抱えながら現状とは異なる目標をもつことで将来を展望している。二人は新規学卒就職という従来のルートに乗ることなく非正規雇用という現在の状況に至っており、特に下田は周囲の友人が正規就職しているなかで「自分だけこんな生活しているんだって感じなので」と、不安や焦りを抱えていた。先のフリーター女性の多くが家族の問題を背負いながら就労生活を継続しようとしていたのとは違い、窪田と下田は実家暮らしに支えられながら、結婚や正規就職したいという目標をもち、不安定な現状から抜け出る道を模索している。そして、今よりも精神的・経済的に安定できる状況を求める一方で、その実現の難しさに不安や戸惑いも感じているのである¹⁶。

4. 将来展望を描きづらいフリーター女性たちの生き生き方

前節では、非正規労働者として働く者たちの将来展望に注目し、彼女らがこれから先どのように生きていく見通しをもっているのかについて見てきた。そこでは、現職を通じた展望を描いている者がいる一方で、多くのフリーター女性が、労働市場でも底層に位置づく仕事で劣悪な労働条件に直面しながら離転職を繰り返し、しかもそれに加えて生活上の問題に制約を受けながら、かろうじて将来展望を描いている様子が見られた。

この展望を描きづらい女性たちはみな、前回調査時から一貫して非正規労働者として働いてきた者たちでもある。彼女たちは一つの職場で長期間働かず、しかも低劣な労働条件という制約によって翻弄され続けてきた。とはいえ、吉川が「自分が成長したなって思う」と語り、浜野も「進歩したなって思う」と話していることに表れ

ているように、非正規雇用で長期間働くなかで、彼女たちがある種の「成長」を実感できるような自身の生活のペースを築き上げてきていることもまた事実である。非正規雇用という就労環境に翻弄され続けてきた彼女らではあるが、けっして受動的な存在にとどまっているわけではない。そうした様子に焦点化し、本節では彼女たちが非正規労働者として働きながらどのように生きぬいてきたのか考察したい。

1) 就労における彼女たちの戦術

①仕事の選び方

前回と今回インタビューの間、多くの仕事を経験してきた浜野は、仕事を選ぶ際の一つの基準としてオープニングスタッフであることを挙げていた。

〔選んだ決め手は?〕なんか、オープニングスタッフだったんですよ。なんでもオープニングスタッフにしちゃう。後から入るより、オープニングスタッフの方がやりやすいなということに気がき。みんな分かんないのは一緒だし。

同じくオープニングスタッフとしてインターネットカフェで働き始めた吉川のアルバイト先は、オープニングスタッフには研修があったが、後から入ってくる人に対しては「一緒に入る人が、新人さんが今日いたら教えるみたいなかんじで、その人を教えるっていう人はいない」体制となっていた¹⁷。

また、吉川は自分が仕事を始めたときのことについて次のように話している。

なんか、最初仕事、全然覚えられなくて辞めたかったですよ。いつもなら、ばっくれて辞めちゃうんですよ。でも、みんなとアドレス交換をしちゃって、ばっくれるわけにはいかなかったんですよ。でも辞めるといいう電話もできないんですよ、私は。だから、ずるずるいったら、あっという間ってわけでもないんですが、仕事を覚えちゃって、で、なんか、ずるずるやってますね。

早期の離職を思いとどまった直接の理由は「研修日のお昼休み」に他の従業員たちとアドレスを交換していたことであったが、その研修はオープニングスタッフとして入ったからこそ受けることができたものでもあった。彼女たちにとってオープニングスタッフは、仕事について途中から入るよりいねいに教えてもらえるものであるとともに、他の人と同じところからスタートできる安心感をもてるものとして重視されている。このように、

短期間でさまざまな仕事・職場・同僚に直面し、まさに「使い捨てられる」ように働いてきた彼女たちフリーター女性にとって、オープニングスタッフで入ることは技術的な指導が手厚いだけでなく、同僚関係を形成するものとしても機能しており、その後の就労継続を支える基盤となっているのである¹⁸。

仕事の選び方に関しては、金銭面での選び方ももちろんある。多くの者たちは800～1,000円前後で働いているが、中には実質時給600円で働いていた浜野の派遣のようなケースもある。そのなかで、少しでも時給が高い仕事に就こうとしたとき、フリーター女性たちの一部が就いた仕事が「風俗営業」であった。前回調査では水商売など、高額な仕事に携わった者がいた。だが、「すごいつらかったんですけど、でもそれだけもらえたから」（2005）と庄山が話していたように、それは高額な給料と引き換えに高い危険性を伴うものでもあった（「報告書③」25頁参照）。

以前そうした水商売の仕事をしていた西澤は、その後テレアポなどに職を替え、今回調査では出会い系サイトのサクラの仕事をしていた。電話やインターネットを介したより危険性の低い仕事へと移ってきている様子からは、彼女たちが精神的にも身体的にも高いリスクを伴う仕事を避けるようになってきたことがうかがえる。時給の高さがある程度意識しつつも、過度の負荷を負わされるような仕事からは距離をおいてきていることも、彼女たちの仕事の選び方の一つとして指摘できるだろう¹⁹。

②就労生活の組み立て方

「使い捨てられる」非正規労働者は、就労を継続していくこと自体が難しい状況にある。しかし今回調査時において、対象者のうち無業の者は一人もいなかった。43頁の一覧表「対象者11名の5年間」からも分かるように、彼女たちの多くは一つの仕事を辞めてもまたすぐに次の仕事を始めるなど、常に仕事を絶やさないようにしていた。また、多くの者が複数の仕事を掛け持ちしており、中には、そのうちのどれかを辞めても他の仕事を継続しているため無業期間を免れている者もいた。彼女らが次第に一つの仕事を長期間継続していく傾向にあることも無業期間をなくしている背景にあるが、離職してもまた他の仕事を見つけて就職するなど、なんとか就労を継続させる術を彼女たちはこの間身につけてきたのではないだろうか。

その典型の一つとして、就労の組み立て方における工夫が見られた。彼女たちの多くは一時期に二つ、あるいは三つの仕事を掛け持ちして働いている。たとえば、庄山は深

夜の寿司屋のアルバイトと日中のカラオケ店でのアルバイトそれぞれのシフトを調整し、週に一日は休みの日をつくり、夜勤をしながらも睡眠時間をある程度確保できるかたちで一週間のスケジュールを組み立てていた。また、吉川も自身の「ライフスタイル」を維持するため、週に二日は休むというスケジュールを立てて、事務員とインターネットカフェのアルバイトを調整していた。

こうしたことから、不安定な就労形態の下にありながら、彼女らが自分たちの置かれた就労環境・生活環境に一方的に振り回されるのではなく、自分たちで生活を組み立てていく工夫をしながら日々を生きぬいてきている様子がうかがえるのである。

2) 同世代関係と、他の大人とのつながり

フリーター女性たちは日々の就労を乗り越えるため個人的にさまざまな工夫をしている一方で、友人・知人とのネットワークによって生活全般を支えられてもいる。これまで本調査が「地元ネットワーク」と呼び注目してきた彼女たちのつながりは、今回調査でも重要な役割を果たしていた²⁰。

たとえば下川は、工場の派遣社員として働きながら、友人の内田とともにゲームのイベントなどに参加している。これまでの調査で指摘してきたように、趣味を介して彼女たちが形成している「地元ネットワーク」は、日々の就労生活のなかで傷ついた自分を回復させる表出的機能をもっていた。3節で見たように両親との関係にストレスを感じている下川は、「唯一の楽しみがネオロマぐらいしかない」と内田のチケットまで予約しており、彼女にとってその表出的機能はやはり重要なものとなっている。

その一方で、今回調査で見えてきたのは彼女たちがつながっている異世代の人たちとの関係である。たとえば庄山は病気で母親を亡くしたが、その後母親が働いていた職場に客としてきていた「お寿司屋のおじさん」に支えられている。

お寿司屋さんのおじさんに、なんか（お母さんの）葬式やらないかみたいな感じで言われて、いや、こっちもお金もないし、そんなに大々的にやるつもりもないみたいな感じで言ったら、やろう、やろうよ的な。花とか、そういう（費用が）増える分に関しては僕たちが出すからとか言って。で、結局3人でしめやかにやるはずが、何人かな、けっこう来たんですよ。

その後も、庄山の家庭が抱えていた借金の返済のため

に弁護士を紹介してもらったり、住民税の納付延長を申請するために窓口まで同行してもらったり、あるいは寿司屋でアルバイトの仕事を得たりしている。寿司屋が深夜に閉店した後は、始発電車の時間まで店の片づけをしながらおじさんと話をしてもいるという。

また若林も、母親が通院の際に利用するタクシー運転手と知り合い、居酒屋店員や清掃会社事務などのアルバイトを数件紹介してもらっている。この「タクシーの運転手さん」は、その後もアルバイト先での様子を気にかけて、「『お前、俺の「顔」とか気にする（くらい）なら辞めていいぞ』ってやっぱり言ってくれるし」と懇意に相談に乗ってくれているという。

このように、彼女たちはこれまでも指摘してきた「地元ネットワーク」のような同世代間の友人関係によって互いに精神的安定を保っている一方で、親世代の大人ともつながっている。彼女たちはそうした異世代の大人たちから仕事先や生活をやりくりするための情報などを得ながら、日々を切り回しているのである。

3) 小括

以上にみたように、労働市場の中でも低層に位置づく仕事に従事する彼女らは、その働きづらい環境においてもそれぞれに自身の就労生活を送る上での工夫を重ねていた。オープニングスタッフの仕事を探すことで働きやすさを確保したり、よりリスクの少ない仕事に移るなど、比較的継続して働きやすい職場を求めてマイナーチェンジを図ってきているといえる。まさに彼女たちは、「使い捨てられる」非正規労働者でありながら、なんとか生きぬき生活していく戦術を磨き上げてきたのである。また、個々人が工夫を重ねてきたことに加え、彼女たちが築いている人とのつながりもまた重要な働きをしている。そこには同世代の友人関係である「地元ネットワーク」だけでなく、親世代の大人との関係も見られ、彼女たちは日々の生活を乗り切るための支えを得ていた。たとえば浜野は先に見たような劣悪な仕事を続けながらも、「ある程度は（仕事が）長持ちするようになったかな、って。もともと、環境が良ければ長持ちはするんですよ」とわずかな成長を感じている。そうした実感は、彼女たちの戦術や人とのつながりをいわば総動員しある程度長期間働けるようになったことによってかろうじて得られたものである。

その際二つの点に留意したい。一つはそうした成長が非正規労働の劣悪な就労環境のなかで感じられているという点である。繰り返し指摘してきたように、彼女たちの職場は非正規労働の中でもなお条件の悪いものである

場合が多い。仕事を続けられるようになったという彼女たちの実感は、望ましい条件によってもたらされたのではなく、劣悪な環境においてかろうじて得られているものなのである。

二つ目は、非正規雇用の彼女たちがこのような戦術を磨き上げることと、前回調査で指摘した「異議申し立て」との関係である。前回調査では、自分の置かれている状況や扱われ方の「不当さ」について上司に異を唱えた庄山や竹内のケースから、「異議申し立て」が彼女らの不満の訴えにとどまらない、構造的な個別化傾向への「抵抗」の萌芽でもあることを指摘した²¹。その「異議申し立て」には、働きづらい職場の現状を変革するという意味合いが含まれていた。しかし、今回調査で彼女たちに見られた戦術は、比較的働きやすい職場を求めて仕事を選びながらわたっていくこと、あるいは働きづらい今の就労のなかで自分のスケジュールを組み立てていくことであり、見方によっては悪条件の労働環境を受け入れそこで生活し続けるものでもあった。その意味で、彼女たちの戦術とは、直接的に就労環境へと働きかけるものではなく、場合によっては非正規労働者として不安定な生活に滞留する危険性を含んでもいる。だが、彼女たちがなんとか自らの生活をつくっていくとする営みのなかで、成長や自信を実感し始めていることはきわめて重要であろう。

5. まとめ

本章では、非正規労働者として働く者たちを取り上げ、彼ら彼女らがどのように今日の労働市場で働き、またその就労生活のなかでどのように今後の見通しをもっているのかについて考察してきた。

2節では非正規雇用として働く彼ら彼女らの仕事の差異について整理した。同じ非正規労働者ではあるものの、その労働条件は比較的待遇がよく正社員ルートが確保されているものから、劣悪な労働環境で正社員になる見込みもまったくないまま不安定な状況で働かされるものまで、きわめて多岐にわたっている様子が見られ、そしてそれが一種の階層性をもつことが明らかになった。

3節では、彼ら彼女らの将来展望に注目し、非正規労働者として働く彼ら彼女らが今後どういった見通しをもって生活していくとしているのかについて考察した。契約社員など比較的長期にわたって働くことのできる仕事に就いた君島・坂本は、それぞれ添乗員・生活支援員という現在の仕事を続けていく見通しを形成していた。また、四年制大学卒業後に非正規労働者となった下

田・窪田は、現在の不安定な就労・生活状況をよりよく変えていく方向として正規就職や結婚といった現職とは異なった目標を展望していた。特に下田に強く見られたのは、新規学卒就職という伝統的な移行ルートに乗れなかったことから経済的また精神的不安を抱え、自身の希望に向かって迷いながらも進んでいこうとする様子であった。一方フリーター女性たちは、条件の悪い就労環境によって将来が見通せないばかりでなく、家族や生活上の問題にも翻弄され、就労と家庭双方の問題に強い制約を受けながらなんとか展望を描こうとしていた。

以上のように、多岐にわたる非正規労働者たちの展望のもちようには、一定程度先を見通せる仕事に就いているかどうかをはじめとする、仕事の条件の差異が影響しているのである。君島や坂本が今後も現職を続けていくという具体的な見通しを形成できている背景には、二人の仕事が比較的安定的なものであること、またそれに付随する手応えを得られることなどが考えられる。逆に、非正規雇用の中でも低層に位置づくような不安定な仕事に従事している者たちは、将来展望を描きづらい状況に追いやられていた。すなわち、比較的恵まれていると述べた君島や坂本たち契約社員も実は不安定な非正規雇用であることにはあらためて留意が必要だが、2節で見た非正規雇用の仕事の階層性は、そのまま将来展望の見通しにも影響しているのである。

またそれに加え、劣悪な労働条件下で働く者たちの多くが生活問題をも抱えさせられている。そこには非正規就労で収入が安定しないことを親に責められ葛藤を生じさせているケースや、貧困のなかで支え合ってきた母を亡くし将来をまったく描けずにいるケース、あるいは家族の健康問題を抱えるなかで自ら「ケアする人」としての役割を引き受け、それが同時に今後の見通しを制約してしまっているケースも見られた。生活面での問題が不安定な就労と相互に影響し合いながら、彼女たちが先の見通しをもつことを困難にさせているのである。

だが、そうした展望を描きづらい彼女たちがその状況に一方的に翻弄されているのかといえば、けっしてそうではない。4節で見たように、困難な状況に立たされている彼女らは、就労生活を送る上での工夫を重ねながら、自分たちの生活をなんとか成り立たせていくための術を持ち始めてもいる。離転職を繰り返さざるをえないなかで、少しでも働きやすい職場を探したり、複数の仕事を組み合わせながらスケジュールを立て生計をやりくりするスキルなどを彼女たちは駆使している。それによって、彼女たちはなんとか生きぬいていくことができるという自信や成長の感覚を獲得しつつあるのである。

こうした自信や成長の感覚はどのようなものとして価値付けられるのだろうか。彼女たちの実感は現実の就労問題や生活問題を直接に組み替えるような構造的な視点を必ずしももっているわけではない。つまりこれを手放しに認めることは、結果的に彼女たちの置かれた状態を温存してしまう可能性もある。だが、ある種のライフコースを想定しうる働き方や生き方が大きく変化した今、不条理ともいえる労働条件・生活問題に直面しながらも彼女たちがかろうじて感じているこの成長という感覚は、見通しのもてない世界を生きる若者たちの移行にとっての、一つのメルクマールとなるのではないだろうか。

註

1. 総務省統計局「平成19年 就業構造基本調査」より。
2. 「報告書③」第1章参照。
3. 「風俗営業」および「性風俗関連特殊営業」とは、「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」第二条で定義された営業を指す。
4. 下田は大学時代、複数の奨学金を使って就学しており、また大学に留年するよりも経済的負担の少ない他大学の通信制に編入していることから、下田の家庭にさほど経済的余裕があるわけではない様子が見られる（数年前に父親を亡くしている）。
5. 若林は高卒後短大に進学しているが、前回調査時にはすでにフリーターとして働いていた。
6. 同じく非正規労働者のまま声優を目指していた下川も養成所を辞めており、非正規労働者として働き続ける若者が一つの目標をもち続けることの難しさがかうかがえる。
7. 現に竹内は、ダブルワークを重ねるなかで倒れてしまったという情報がインタビュー後に入っている。
8. 実家が生活保護を受給しており、若林が働けば生活保護受給額から働いた金額が差し引かれてしまうため、これまで彼女は母親に就労を制限されていた。そのことが若林のアルバイト探しを困難なものにしていたが、今回離家することによって家計分離され「大手で働いても大丈夫」となった。そこにはケースワーカー等の助言や介入の可能性が推測される。
9. 本インタビュー調査の直後、下川は50万円を払ってアロマセラピストの資格講座を申し込んだという。詳細は不明だが、実質的に離家が後回しにされたと考えてよいだろう。
10. 昔から好きだったイベントには高卒後5年経った現在でも高校の同級生（内田；第1章参照）と通っており、「唯一の楽しみがネオロマ（「ネオ・ロマンス系」恋愛ゲーム）ぐらいしかない、今」と話している。
11. 彼女が親の会社で働くことを躊躇するのは、借金問題の他に今の出会い系サイトのサクラの職場が「楽しい部分もある」と感じているためでもある。それは短期の仕事を経験してきた彼女にとって、仕事が続くようになったという自己評価を生み出している。
12. 将来展望の一つとして今回も結婚について語られている。ただ恋人がいても前回調査までは「まだ結婚は早い」と語っていた彼女が、今回恋人と別れていたにもかかわらず強く結婚を希望している様子からは、ある種の安定性を求めていることがうかがえる。
13. 彼女が苦痛を感じたこの仕事は、2節5項で指摘した違法性の高いものである可能性がある。
14. たとえば、西澤の父親の会社の社員旅行に連れていってもらったり、普段も西澤の家で過ごしたりしている。「でも西澤さんちにいる時はやっぱり、何も考えずに楽しいです。ホントに。それは昔もそうだったけど、今余計です」。
15. 仕事を掛け持ちしないと生計を立てられず、離家したくてもできないフリーター女性たちとは対照的に、君島の場合、「（正社員でなくても）別にそんなに不自由していない」と、現在の就労生活を続けていく自信にも似た見通しをもっている。そうした見通しのなかで、彼女は観光の知識や語学学習の時間確保のために休みが自由に取れる派遣社員に変わることも視野に入れている。
16. 窪田にとって結婚や専業主婦は安定的な状態として位置づけられているが、それは無条件に安定的なものとはいえない。詳しくは第5章参照。
17. 庄山は以前働いていた寿司屋でのアルバイトについて次のように語っている。「新人だから仕事ができないと思われるのがすごい嫌なんで、がんばってやって。（中略）みんなは教えてくれない、仕事の手順も教えてくれなければ、大雑把だし」。このように、自分を追い込まなくても済むようなオープニングスタッフが彼女たちに選ばれているとも考えられる。
18. 同じ非正規労働者であっても、君島や坂本には比較的新人への教育体制が整備されていた。なお、研修制度の機能に関しては『18歳』70-71頁、「報告書③」51頁、本稿第1章2節参照。
19. 仕事を選ぶとはいえ、それが性にかかわるものである限り、それに伴うリスクがなくなったわけではない。彼女たちは過度に干渉されないことなど、職場

でのある種の働きやすさを語っているが、一方でその仕事に対して後ろめたさを感じている。加えて、一日に30人も的人格を使い分けるなど、こうした仕事特有のストレスや危険性にも留意が必要であろう。

20. 「18歳」第10章、「報告書③」106-110頁参照。
21. 「報告書③」44-45頁、および110-111頁参照。

第3章 目標に向けて邁進する自営・自由業の者たち

児島功和・進藤正樹・藤井吉祥

1. はじめに

本章では、A高校出身の黒川武志と岡本祥子の二人を取り上げる。黒川は、ドラム奏者として二つのバンドを掛け持ちし音楽活動を行なっているほか、祖父の事業を引き継いで立ち上げた会社を経営しながら、かつアルバイトとしてホームページ・メンテナンスの仕事もしている。また数年後に同じ高校出身の仲間と居酒屋を開店する予定を立てており、現在はそのための準備もしている。岡本は、芸能系専門学校卒業後、フリーランスの舞台役者として活動する一方で、アルバイトを掛け持ちして日々の生活費に充てている。

私たちのこれまでの調査・分析では、学生を除いた「働いている」者たちを、雇用労働を軸にした上で〈正規雇用労働者／非正規雇用労働者〉に三分して捉えてきた。この枠組みに従えば、黒川も岡本も非正規雇用労働者ということになる。しかしながら、上記で示したような黒川と岡本の活動のあり方は、これまでの枠組みのなかで収めるには難しいところがある。まず黒川の会社経営という点、および居酒屋開業という点は、被雇用者でなく「自営業」と呼びうる¹。また黒川にとっての音楽活動や岡本にとっての演劇は、将来の見通しを含めた二人の生き方やアイデンティティにとって重要な位置を占めており、その意味では「自由業」と捉えうる²。以上のことから本章では、二人を「自営・自由業の者」として括ることとした。

以上のことを前提に本章では、不安定な軌道を辿る非正規雇用労働者でもある自営・自由業の二人が、これまでにどのような過程を経てその独自のキャリアを築いてきたのか、そして現在どのような生活を送っているのかを明らかにしたい。次節以下の構成は、次の通りである。まず2節では、音楽活動や会社経営で成功することを大きな目標とする黒川と、実力のある舞台役者になることを目標としている岡本のこれまでの歩みと活動の展開について概観する。3節では、二人にとっての目標・将来展望を軸としつつ、多忙な日々を構成している諸活動の連関、編成のされ方について明らかにする。そのうえで4節では、精力的に諸活動を行なっている二人を支えているもの、あるいは目標を達成するために参照され、用

いられている資源について示す。そして終節となる5節では、本章のそれまでの議論を整理し、同時に黒川と岡本のようなキャリア形成のあり方、生き方が示唆しているものについて触れておきたい。

2. 二人の活動の特徴

1) 黒川武志のケース³: 活動の多様性とその密度

黒川は現在、深夜のアルバイトをしながら音楽活動を続け、同時に会社経営や居酒屋設立に向けた準備を行なっているというように、その活動の多様性が際立っている。ここではそんな彼のこれまでの経緯について確認しておきたい。

彼は音楽好きな母親や兄の影響もあり、小学2年次にピアノ教室に通いはじめ、その後トランペットやチューバ、指揮者などもやっていた。いろいろと取り組んだ中でも、打楽器が一番おもしろいと感じていた。そして中学時代にドラムを始め、学校の音楽室で練習を積みながら技術を高めるとともに、ドラムを教えてくれる音楽教室を渡り歩いて実力を磨いていった。

そして高校在学時には、単発のスタジオドラマーの仕事もしており、知り合いから音楽プロダクションで契約ドラマーとして働かないかという誘いを受けたほどであった。しかし彼は、その知り合いが「ドラムのこと、そんな分かっている気がしない」ということ(2002)、コネではなくオーディションなどから実力で入りたいことを理由に、誘いを断っていた。

音楽プロダクションからの誘いを断りはしたが、彼はその後もドラマーとしての成功を目指して音楽活動を続けている。今回調査時にも、彼は二つのバンドを掛け持ちしており、総額で約200万円をかけてドラムを3台購入していたり、コンテストで準優勝しフランスツアーに赴いたりと精力的に活動をしている。

もっとも黒川は、ドラマーとしての自分の技術と、彼が率いるバンドの実力には自信を持っているものの、「売れる」ことの難しさも認識している。「要はいいバンドはいっぱいいると。コネも必要だし、相手の会社にもよるし。妙な世界なんですよ。音楽業界ってのは妙な世界ですごい分かりづらい構成になっているんです。アメリカと違って。なんで、そこがうまく当たらないと」(2005)。

そのため彼は、音楽を中心とした自身の活動を支えるための「保険」として、父親の知人が開業した自動車の板金塗装会社で在学時からアルバイトとして働きはじめ、卒業後に正社員となった。「保険」というのは、万が一「何も仕事がないっていう時に、車屋の技術があれ

ば(仕事に)すぐ入れる」という意味である。入社後彼は、仕事後に一人残って練習するなどして板金塗装の技術を身に付けていく。当初13万円だった給与も、技術や仕事量の上昇に合わせて社長と交渉して上げていき、3年目には月に30万円を稼いでいた。そして技術を十分に習得できた⁴ということで、約3年で会社を辞めた。その3年という期間は、「手に職付くのは普通は5年かかる」(2005)と言われたのを受けて、習得に要する期間を彼なりに設定し直したものであり、入社当初から計画していたことだった。

一方で黒川は、塗装会社在职時である卒業後1年目に、母方の祖父が個人で経営していたエンブレム製作事業を引き継ぎ有限会社化⁵、取引や営業などを行っていた。現在もブランド化を念頭に置きながら経営を続けており、会社の収益から自分の給料として毎月10万円、経営にかかわっている祖父には30万円ほど渡していた。

また塗装会社退社後、数ヶ月間は会社経営および会社の体制づくりに専念していたが、後述するように居酒屋設立のための貯金をする必要があること、そして会社経営にとってパソコンのスキルが必要であるとの判断から、夜間のアルバイトでホームページ・メンテナンスの仕事をしている。時給は最初1,500円と言われていたものの、実際に払われたのは1,000円で、それに憤慨した彼は「(仕事を)全部覚えて、3ヶ月くらいでその管理(者)になり、時給を1,350円プラス成果給に上げている。今回調査時では、週5日勤務で月に23万円ほどを稼いでいる。

こうした収入源の確保と並行して、黒川は高校時代の友人4人とともにクラブイベントを開催してもいた。深夜におよぶ板金塗装会社での勤務との両立のため、深夜3時過ぎの会議や営業回りなど、「寝る時間、ホント無かった」という日々であった。今回調査時にはイベント事業からは手を引いていたものの、彼はその友人らと「やりたいことやろう」(2005)ということで、地元で居酒屋を2010年までに開店するという目標を設定しており、担い手を探したり物件を見積もったりしながら、資金を貯めるために仲間と一緒に定期預金をしている。

以上で見てきたように、彼を特徴づけるのはその活動の多様性であるとともに、いずれの活動も高い密度でもって取り組まれている点である。最終的な目標は音楽活動での成功にあるが、居酒屋設立や経営する会社の成功もまた、彼にとっては重要な目標である。そして生活の糧を得るための労働も、稼げれば良いといったレベルを超えたかたちで取り組んでいる。それらの活動それぞれが、目標の実現に向けて、「自分で決めたことは絶対

やり通す」(2003)という強い信念を基に、精力的に行なわれているのである。

2) 岡本祥子のケース⁶: 舞台演劇を中心として

日々の活動や目標の多様さが際立つ黒川に対し、岡本の場合は「役者」という目標を軸とした一貫性がある特徴である。高校を卒業して芸能系専門学校の俳優学科に推薦で進学、専門学校卒業後はプロダクション所属を経てフリーランスの役者として活動しているというように、その軸を中心とした経緯をたどっている。しかし、その経緯はけっして平坦なものではなかった。以下、彼女のこれまでの変遷について見ていきたい。

彼女は、高校1年次に友人に誘われて演劇部に入学し、3年間在籍した。「目立つのが好きじゃない」ことを理由にスタッフ希望での入学であったが、舞台を見に行ったことをきっかけに、演じることに興味を抱くようになっていった。そして実際に声優の仕事をしている顧問の影響もあり、「声優か舞台役者」(2002)を目指して専門学校に進学した。ちなみに声優については、舞台役者が声優を兼ねていることを彼女は理由として挙げていた。

専門学校では俳優学科に所属し、「もうちょっと時間が欲しい」(2003)というほどに充実した学校生活を送っていた。授業内容は、ダンスや日本舞踊、発声などの実技がほとんどであり、学校からテレビのエキストラなどの仕事を紹介されることもあったという。卒業公演では担任の厳しい指導の下、共演のクラスメイトとの葛藤も含んだ密度の濃い舞台づくりを経験した。稽古では身体的・精神的に追い詰められ、失踪する者も出るほど厳しいものだったというが、彼女にとって当時の担任の姿勢は、「私のなかの基本的な考え方のベース」(2005)となっているという。

卒業後しばらくは在学時から通っていた養成所でレッスンを受けていたが、内容に物足りなさを感じるとともに、運営方針などに疑問を感じてもいた。そしてそこに講師として来ていた人物に「(この事務所はレッスン生を役者として)マネジメントする気はない」「うちの子として面倒見るから」(2005)と誘われ、彼が代表を務めるプロダクションに移籍した。

しかし、今回調査時に岡本はこのプロダクションを辞めていた。舞台公演を行なった際にかかった経費を代表が適切なかたちで処理せず、岡本自身が経費を立て替えるなど経済的に大きな負担を被ったこと、そうした経費処理についての代表の説明が不誠実なものであったことが理由として挙げられていた。代表は多額の借金を抱え、

「自分の生活もままならない状況らしい」とのことであるが、彼女以上に多額を負担している者もいた。そうした状況もあり、音信不通状態で去っていく同僚も出てくるなかで、彼女は代表に対しさまざまに詰め寄るもの、いまだに立て替えたお金は返ってきていない⁷。

こうしたことに加えて、彼女がプロダクションを辞める決定的な理由となったのは、代表や同僚たちの演劇に対する思い入れのなさであり、「ここじゃ勉強できない」と感じたことだった。同じプロダクションに属している同僚は、舞台というより映像系の仕事をやりたい人たちで、「華やかな世界だけを夢見ているタイプの子どもたち」だったという。さらに代表に対しても、「舞台に関して、モチベーションとしては絶対に私の方が高く、「(舞台に対して)私に口ごたえできるんだったら言ってみろ」というほどに憤りを感じていた。そして自分の方がよほど勉強しているという判断を下し、このプロダクションを去っている。

岡本自身、「あんまり思い出したくないんで」と語る以上のような経緯を経たのち、彼女はフリーランスとして企画公演やレッスンに取り組んでいる。プロダクションを辞める以前にも、高校演劇部の先輩から誘われて企画公演に参加したりもしていたのだが、彼女にとってフリーランスになるという選択をする上で大きかったのは、プロダクションを辞める直前に来た専門学校時代の講師からの出演依頼であった。そして5年目インタビュー時には、その公演を手がけていた演劇ユニット「プラス・カラーズ」を中心として活動し、「今、私のやりたかった芝居の勉強ができていたので、そういう意味では楽しいですね」と話している。

なお、レッスン料や出演に要するチケットノルマ、あるいは日々の生活や家計負担などの費用は、アルバイトでまかなわれている。彼女は実家近所のコンビニエンスストアでのアルバイトを高校2年次から約7年間続けており、舞台稽古やレッスンの都合に合わせてシフトを配慮してもらっている。そして先述の演劇ユニット主宰のツテで、別のプロダクションが運営している派遣会社に所属し、家電量販店などでの商品説明・紹介を行なう仕事もしている。こうした仕事をレッスンや稽古の合間に入れるなどして、彼女は休みのない生活を送っている。

以上のように岡本は、「役者になる」ということを確固たる土台としながら高卒後の移行を経ている。しかし「(事務所や養成所は)お金儲けのところがほとんどだから、何も知らないで入っていく私たちは、ある意味だまされやすい」(2005)と岡本自身自覚しているように、演劇の世界で渡っていくということは危うさと常に隣り

合わせである。事実、彼女が所属していたプロダクションは、舞台への思い入れはおろか経費処理すら滞っていたのだが、そのプロダクションの代表は、彼女が以前所属していた養成所の危うさを指摘してくれた人物であった。そういった業界事情もあるなかで、彼女は自身の思いを曲げることなく、日々演技の勉強に打ち込んでいる。

3) 小括

本節では、高校卒業から今回調査時までの黒川武志と岡本祥子の歩みを概観してきた。音楽活動や会社経営、舞台演劇など二人にとって重要な意味をもっている活動は、「標準」とされるような定型像があるわけでもなく、日々変動・模索の連続である。非正規雇用への従事、および変動的な生活スケジュールという意味では、第2章で取り上げているフリーター層と重なるのだが、黒川・岡本が異なっているのは、一定の覚悟を伴いながらその進路が積極的に選び取られているという点である。特に黒川にいたっては、正規雇用でそれなりの収入を得ていたにもかかわらず、目標達成を経たのちに「大丈夫でしょう、俺は別にフリーで働いても」(2005)と自ら辞職している。

ただ一方で、多様な活動それぞれを「全部同時進行で全部考えてる」(2005)と並行的に進めている黒川に対し、岡本は常に「役者」という軸を中心に据えながら渡っているというように、その移行過程だけで見ても、両者の違いは大きい。そこで次節では、これら差異の内実を追うために、将来展望・目標を軸とした諸活動の関係・編成のされ方について見ていきたい。

3. 将来展望と諸活動の編成

本節では、二人が描いている将来展望を示し、それと諸活動との関係、および活動の編成のされ方について明らかにしたい。

1) 終わりなき勉強と「ひとり立ち」

専門学校進学から卒業後の移行まで、一貫して演劇を中心とした生活を送っている岡本にとって、将来展望はもちろん役者である。しかし「役者になる」とはいても、そのみで生活していけるような職として確立しているわけではなく、多くの者が他の仕事と兼業しながら演劇活動を行なっている⁸。それゆえ「一人前」の境界もきわめてあまいかつ不安定なものとなっており、具体的な将来像は描きづらいのが、役者の世界での移行である。

そんな業界を渡っていく上で彼女が指針としている

のが、「ひとり立ち」という状態である。それは経済的基盤とは別個に立てられた指標で、「若さ」で押せる20代を超えて、30代40代になっても通用する力量を持った状態を指している。「部活動の延長みたいな」ノリでやっている劇団や、いつまでも同じキャパシティで同じ客相手にやっているような劇団で続けている人は、「(他に)出たときには通用しない」ため、ひとり立ちしていない状態だという。それに対し彼女の場合、「私はそこに留まる気はない」「上を目指したい」とのことで、「ハングリー精神」を保ちながら日々勉強している状態を楽しんでいる。さらに「深めると、どんどん深くなって、どんどん分かんなくなっていく」「追求するときがない」とのことで、勉強し続けていく過程において後付け的に備わってくるのが、「ひとり立ち」した状態なのだという。むしろ「歩みを止めてしまったら、そこで終わってしまう」ということから、「常に追いかけていたい」とまで思っている。

そんな彼女が現在課題として打ち込んでいるのが、「つながり」という演劇手法である。それは人と人のあいだに流れている「雰囲気とか、オーラみたいな」ものであり、たとえば長年付き添ってきた夫婦や家族の関係と、初対面の人同士の関係のあいだの差として感じ取られるものである。それを演技の場に置き換えてみるならば、会話の場面で本当に会話を交わしているように感じられる演技と、ただ台本に沿ってモノローグが応酬しているような演技とのあいだの差である。それは漫然と演技をしているだけでは駄目であり、「エネルギーを相手に向けて出」すことにより、はじめてつながった会話となるのだという。彼女によれば、そうしたつながりの獲得こそが実は「最低条件」であり、台詞や感情などの表現力は、その土台の上に乗せられていくものだという。

この演劇論は、かつての専門学校講師であり、現在はユニット公演やワークショップで岡本が師事しているプラス・カラーズ主宰により教えられたものである。その主宰は、ロンドンの人たちの演劇セミナーから学んだことを吸収し、ワークショップを通じて岡本らに教えている。こうした技術の一端はすでに1990年代初頭から日本に伝わってはいるものの、「未だにできていない団体とか役者が多い」とのことで、「今日本にそういうのがあまり浸透していない分、これからそういう人たちを増やしていきたい」というのが主宰の考えである。

こうした強い信念を抱いているからこそ、舞台に対する姿勢も自ずと厳しいものとなる。プラス・カラーズとしては、岡本が入る以前に一つ公演をやっているのだが、そのメンバーの舞台に対する姿勢があまりにもひど

かったということで、主宰は「芯のある人としか仕事はしない」という決意を抱き、岡本に声を掛けたのだという。誘われた当時岡本は、「つながり」についてはまったく知らなかったのだが、「私は真っ向勝負で舞台をやりたいという人間だった」という自己評価からも分かるように、ひたむきなまでの誠実さで演劇と向き合っていた⁹。そこに役者として追求していくべき指針が主宰から示されたことにより、かつてないほど充実した日々を送れるようになっていっているのである。そして同じくワークショップで学ぶ仲間からの刺激もあり、主宰の願いは「私たちの使命でもある」というほどに、その主宰をモデルとして師事している。

週二日のペースでやっているワークショップでは、上記「つながり」を身につけるためにさまざまな訓練が取り組まれているが、その研鑽は稽古の場にとどまらない。たとえばコンビニのアルバイトをしている最中にも、「エネルギーを出す位置を変える特訓ができたりする」し、「街を歩いているときも、『前の人とつながってみよう』とかいうこともできます」というように、仕事や日常までも訓練の場となっている。そして「日々生きてる居方(いかた)っていうのが、今までと違ってぜんぶ結び付けられる」というように、彼女にとって日常生活すべてが役者にとっての糧となっているのである。

また彼女は、以前から発声の仕方に課題を感じており、「つながり」獲得とともに発声法の矯正を目標の一つとしている。発声という課題に向けた取り組みとしてうってつけとなっているのが、電化製品の商品説明の仕事である。具体的には、商品についての研修を受けたのちに原稿を渡され、それを基に適宜アレンジしながらマイクで喋るという業務である。乾燥した店舗内で電化製品を扱うため水も飲めないなか、「延々と喋り続けて孤独な闘い」だというのが、彼女はこれを「一人舞台」と位置づけ練習の場としている。ワークショップや稽古で発見し学んできたことをこの仕事に持ち込み、広い店舗内で「あそこに届けるイメージで」などといったような、家ではできないような練習を積むことが可能となるのである。つまり彼女にとって派遣先となる職場は、生活費を稼ぐための場であるとともに、演技を磨くための稽古の場、活動の舞台の一つとして読み替えられているのである。

ちなみに彼女のスケジュールには、「休みの日」というものは存在しない。「基本的に何もしてない日ってないんです。(演劇の)ワークショップとか入ってなければ、だいたい仕事してる」というように、かなりの時間が就労に費やされている。彼女は高校生の頃からアルバイトをしているが、その背景には、彼女が高校1年の頃に父

親を事故で亡くし、主として母親のパート収入で家計をやりくりしているという事情がある。高校在学時から専門学校在学時にかけての収入は専門学校の学費工面に充て、卒業後は家に不定額を入れているという。そうした出費や諸経費をまかないながら、観劇やワークショップ代、次の公演のための貯金など、演劇にかかわるお金も捻出しているのである。さらに舞台稽古に入ると、1ヶ月のあいだ仕事を休むといったこともあり、それを見越した収入を確保しておかねばならない。そんな厳しい状況のなかで働いている彼女であるが、コンビニ・派遣ともに急な都合や長期休業への対応が可能であり、役者である彼女にとって融通の利く職場となっている。

以上のように、ワークショップや舞台稽古からアルバイトまで、休みなく活動を続ける彼女であるが、それらはいずれも「ひとり立ちした役者になる」といった最終目標に向けての道程となっている。そこでは生活の糧を得るための就労もまた、演技力向上のための訓練の場として読み替えられ、糧となっていく。こうしたあくなき向上心に駆り立てられた日々の活動に対する真摯な姿勢こそが、彼女にとって不安定かつ不明瞭な世界をなんとか渡っていくための原動力となっているのであり、「自営・自由業」としての姿の一端なのである。

2) 抽象的な展望と「自己マネジメント」

音楽活動、会社経営、イベント企画など、多彩な活動を繰り広げている黒川であるが、それは「すごい人になりたい」という思いに突き動かされてのものである。「最終的にはドラム」というように、音楽活動を最終的な目標に据えてはいるものの、「音楽で売れても居酒屋は続けます」など、一つの活動に特化しないかたちで将来を見据えている。

まず音楽活動についての展望を追えば、「ドラムで飯を食べたい」「バンドで売れたら最高」という一方で、「オレの音楽を聴いて、みんなぶっ壊れて楽しんでる」(2003)といった状態を最高の到達点としている。そしてそのためには、レコーディングなど音として聴かせる技術だけでなく、音の出し方から演奏する際の表情、パフォーマンスなどといった「見せ方」も欠かせない要素だとして、スティックの回し方などの演出技術を磨いている。また、彼にとって音楽活動とは、「俺は人生観をドラムで出したい」「いろんなことを音楽に結び付けて」(2003)と話しているように、自分自身の生き方と連動したものとなっている。つまり彼にとって、自身の生き方に磨きをかけること自体が、音楽活動における到達点へ近づくこととなっているのである。

そして音楽活動における成功を目指すかたわら、高校卒業以来一貫して抱いているのが「10年後に年商12億(円)」という目標である。12億という数字は、たまたまテレビで見た社長が年商12億円で、黒川の対抗心をくすぐったということだった。その社長は30代後半なのに対し、自分たちは20代のうちにそれを達成してやろう、ということを経営の最大の目標とし、エンブレム会社やイベント開催、居酒屋をその過程として位置づけている。

このように壮大な展望を抱いている彼であるが、ただ闇雲に語っているだけではない。「夢をずっと語っても、現実には動かないと夢が実現しない」(2003)ということで、活動を計画的に組み立て「絶対やり通す」(2005)という覚悟で実行している。それを端的に示しているのが、板金塗装会社での就労である。前節で紹介したように、彼にとってこの会社での就労は、収入源であるとともに音楽をやっていくための「保険」としての技術習得の場でもあった。そして「3年」という期限を自らに課し、その計画通りに技術を習得し退職している。また、仲間とともに取り組んだイベント開催も、まず最初に日時を決め、そこから逆算してやるべきことを組み立てていくといったかたちで動いていた。同じく居酒屋開業についても、2010年オープンという期日をまず定め、そのために定期預金を組んで設立資金を貯めるなどしている。そんな彼の計画性は、長期的展望を常に意識しながらも、短期的な目標設定を逐一掲げ、それをクリアしていくという姿勢となって表れている。

計画性とも関連するが、彼は日々の活動からいかに自分にとって意味のあることを効率的に得られるのかということを経営を常に考えている。板金塗装会社では、前述のように収入源と技術習得を同時に得ていたのだが、さらには社長の経営手法を間近に学び、その手際を吸収していた。そして退職後エンブレム関東の体制構築に専念していた時期には、当時保持していたお金をすべて母親に渡して「100円が惜しい生活」を経験することにより、金銭感覚の修正を行っていたし、その後のアルバイトでは、収入源確保とパソコン技術の習得を兼ねていた。こうした時間の使い方により、「フツーの人の24時間が48時間とかになってくる」(2007②)¹⁰とのことである。

さらに彼にとっては睡眠時間すら、活動の効率性と照らし合わせた計画性の下にある。「睡眠時間4時間(中略)取れば、だいたい仕事には集中できる」とのこと、それを活動の合間に挟み、スケジュールを立てている。「睡眠時間とかないねとかよく言われますけど、でも別

に好きなことやってるわけだし、実際に金につながっている部分もある」ということで、夢に向けてのプロセスとして、諸活動が組み立てられている。

彼の計画性に基づいた諸活動の編成、および目標設定とその達成は、たんに長期的展望へと直線的に近づいていくことを意味しているだけではない。たとえば居酒屋設立に向けての貯金についても、アルバイトの時間を増やしてまかなう一方で、「エンブレム関東の売り上げを上げて（中略）それで払わないと意味がない」といった思いを抱いてもいる。そこには、ただ貯金ができればいい、居酒屋開設ができればいいというだけでなく、「ここで成功すれば次も成功する」という、いわば「成功物語」の生成・循環のサイクルを作り出し維持していくことで、長期的展望に向けた自身のモチベーションを駆動させ続けていくといった意味合いが込められている。

また「成功」のみでなく、客観的には「失敗」と位置づけうる経験もまた、彼にとっては次への糧として機能している。たとえば結果的には赤字に終わったイベントも、その後のエンブレム関東での営業に活かしたりしている¹¹⁾。どんな経験であっても「どこかしらにいいところあるから」（2005）というように、そこを伸ばすことで次につなげていくという姿勢が保たれている。

以上のような黒川の展望・姿勢をまとめれば、それぞれの活動が他の活動における資源となり、総体として彼を「すごい人」という展望へと押し上げているといえよう。会社経営や音楽活動など、個別的な活動それぞれが自分自身の一定のマネジメントの下に展開される「自営・自由業」なのであるが、むしろ彼の場合には、それら諸活動の編成自体が一つの事業となり、「自己マネジメント」により展開されている。それが「すごい人」という、一つの属性に特化されえない抽象化された展望となって示されているのである。

3) 小括

本節では、黒川と岡本の将来展望を軸として編成されている多忙な生活の内実とその姿勢について見てきた。二人の活動内容はまったく異なったものであるが、休むことなく働き活動し、かつそれらを自身の目標と関連させて「糧」となるよう積極的に意味づけ編成しているという点で二人は共通している。こうした食欲ともいえる姿勢は、道の見えづらいなかでも進んでいくための駆動力として機能しているといえる。それは目標を達成するため行動の採算・意味を自分自身で計りつつ歩いていかざるをえないという自営・自由業において要請される特質なのではないだろうか。

ただ二人における活動の軸には、決定的な違いもある。岡本における軸は、目標としての「役者」一点であり、それに焦点化された諸活動となっている。しかし役者に向けての移行ルート（および到達点）の不明確さゆえ、どこに所属しどういった活動を行なっていくかという選択などは自分自身に委ねられているために、「終わりなき課題」を自身に課すことにより、それを指針としているのである。

それに対して黒川の場合、多様な活動それぞれにおける成功を目論んでもいて、明確な序列、優先順位などがあるわけではない。それぞれの活動は互いに入り組みながら影響を与え合い、一つの活動の成功が他の活動のための元手となって展開している。そんなサイクルの積み重ねによって到達するのが（彼の想定する）「すごい人」という自己像なのであり、またそうした自己像をたえず参照することによって、彼は多様な活動をまとめあげているのである。

4. 諸活動を可能にしている資源

前節では、目標へと向かい休みなき生活を送る二人の姿勢を確認したが、その周囲・背景へと目をやれば、その活動はさまざまな資源によって支えられてこそ可能となっていることが分かる。本節では、それぞれのケースから重要だと思われる箇所を取り上げ、こうした資源とその諸活動への影響に焦点をあてて論じていきたい。

1) 見通しや刺激を与えてくれる先達

資源としてまず指摘できるのが、同じ道を少し先に進んでいる先達からの影響である。標準化されているとはいえない移行ルートをたどっている二人にとって、見本となる人物と身近に接する機会は重要であり、その先の見通しを形成するうえで大きな意味を持っている。

役者を目指す岡本は、そういった影響を幾度も経験しながらの移行を経てきたケースである。そもそも役者をやりたいと思うようになった経緯には、声優の仕事もやっていた高校の演劇部顧問の影響があった。そして専門学校に進んだのちには、一時期映像系にも興味が広がっていたものの、やはり舞台役者としてやりたいと決意した背景として、指導の厳しさと有名だった2年次担任がいた。彼女自身、「あまりにも怖すぎ」るために卒業後は「あんまりかかわりたくない」というほどであったが、一方で「好き嫌いとかを通り越えたかんじ」で「私のなかの基本的な考え方のベースを作ってくれた」（2005）人であるという。具体的には、掃除や挨拶など

演技そのものではないが、「筋を通した方がいい」(2005)というように、舞台への向き合い方・姿勢についての土台形成となっていた。

そしてフリーランスとなった現在は、彼女が主にかかわっているユニット主宰の存在が大きいの。主宰は、他の社会でも通用するような「ちゃんとした人間性みたいなのを教えてくれる人」であるとともに、演技に関しても「(自分の状態を)ちゃんと見て分かってくれる人」であり、役者として自分を立てていくための重要な指導者となっている。さらに主宰は「先週私が教わってきたんだけど、ちょっとやってみようか」というように、岡本らに教えているワークショップ以外にも、自身が研修生として他のワークショップに参加しており、学び続ける姿勢そのものを示す「モデル」となっている。こうした指導者でありモデルでもある主宰と接するなかで、岡本は役者に向けた自分なりの指針を形成しつつある。

「教えてくれる人を、私はずっと探していた」という岡本とは違い、目標やモデルは「誰もいねー」(2007②)と語る黒川ではあるが、彼もまた先達から学んできたことは少なくない。その一番身近なケースが、彼が高校在学時からアルバイトで働き、高卒後に正社員となった自動車板金塗装会社社長である。「(会社は)最初は5人入って5人全員辞めたんですよ。(中略)社長についていけなかったんです」(2005)と話しているように、この社長は黒川を含む社員を非常に厳しい条件で働かせていたが、有限会社を立ちあげてわずか数年で約1億円を稼いだすなど、同じように有限会社を立ち上げ経営する彼のいい見本ともなっていた。その過程を間近で見てきた黒川は、ギリギリの線を見極めつつ「一発で決める」といった頭の回転のよさや交渉における強引さといった行動力から、「とにかく目標は必ず達成してる」(2005)というその姿勢までさまざまに学んでいて、「社長の影響、かなりでかいです」(2005)という¹²⁾。そして会社を辞めた後も、「もう親父みたいな感じ」といった関係で付き合いを続けている。

こういった人たちからいろいろと教えられ、刺激を受けていくなかで、二人は自身の移行を進めているのである。

2) 共に高めあい、支えあう仲間・同志

前項では、自身が向かおうとする道の一步先へと進んでいる者からの影響を見てきたが、同時に横のつながりとしての仲間の存在もまた、二人にとって大きな意味を持っている。

黒川は、バンド仲間やバイト仲間など、さまざまな関

係を築いているが、なかでもかつてイベントを立ち上げ、数年後に居酒屋を開店するという目標を立てている高校時代からの友人グループはその中軸となっている。メンバーは黒川、近所の幼なじみである大塚、高校時代の同級生である池田、一つ後輩になる矢野の4名。高卒後はそれぞれ別の道を歩んでいたものの、仕事や今後の展望などについて相談していたなかで、「5年後に店建てよう、俺とお前がやりたいことやろう」(2005)という話になり、その夢を共有するようになった仲間である。

黒川は「やり方はもう全部俺っすよ」(2005)「休みは俺にすべて合わせます」というように、この中のリーダー的存在¹³⁾である。しかしながら、彼らの関係は黒川が一方向的に指示をするような上下関係ではなく、「人の力を最大限にまで伸ばす」黒川(2005)、「臨機応変に動ける」大塚、「プレーキ役」の池田、「勉強家だし、信頼はある」(2007②)矢野、といったように、彼をリーダーとしつつも目標達成のために互いの能力をあてにし、信頼するといった性質のものである(「信頼は120%ある。俺の(金を)全額を渡してもぜんぜん不安はない」(2005))。また、居酒屋設立を思い至ったのは、黒川と池田の間で「(仕事後の深夜に)4時間くらいずっと励ましあって」(2003)いた際のことであったし、その後も黒川は、アルバイトの時間を削って時間を作り、大塚の相談に乗ったりもしているようで、情緒的な結びつきも強い。

「信頼する仲間がいるからこそ、やんなきゃいけない」(2005)という言葉に端的に表れているように、黒川の前へ前へと進んでいこうとする貪欲な姿勢は、こうした強固な結束を築いている仲間を支えられて成り立っているという側面があるのである。

また岡本の場合、こうした関係は共演者やワークショップのメンバーに相当する。舞台稽古においては、「ぜったい自分では見せたくないところとかを見せなきゃいけない」「恥をかいていく仕事場」(2005)とのことで、場面によっては互いにぶつかり合うほどに濃密な関係が要請されるという。そして年齢は離れているものの、「何でも本当に話せるし相談もできる」といった仲間を獲得している。またワークショップの仲間とは、稽古の最中や終わった後に、しばしばディスカッションとなることもあり、下手をすれば朝まで議論しているようなこともあるという。そういったなかで、「壮大な目標」を抱いているメンバーに感化されたり、あるいは身近な目標に据えてみたりなど、役者に向けて互いに高めあっている様子がうかがえる。

彼女にとって、「同じ目標を持ってる人は違う」との

ことで、役者仲間以外の友人との交流はごく限られているものの、こうした役者仲間との出会いを経るなかで、彼女は「出会いは本当に大切にしながらこれからも生きていこう」と思いながら役者生活を続けている。

3) 家族

前項までの資源とはやや異なる位置づけとなるが、家族もまた活動を行なううえで重要な資源提供元となっている。これまでの私たちの調査・分析でも何度も示されてきたように、黒川は豊富な経済資本・文化資本を持っている。両親が離婚したのは、家計の苦しさが生じるときもあったが、祖父からはエンブレム製作会社を引き継いでおり、「凄なお嬢様だった」母親からは小さい頃から多くのジャンルの音楽に触れる機会を与えられ、音楽的素養を高めていた。そして彼が多大な影響を受けた塗装会社社長は、父親が経営していた自動車販売会社の元社員であり、彼がそこに就職したのもそのツテがあったからである。現在両親は離婚し、彼も実家を離れているため、両親とはあまり会ってはいないものの、母親とは「昔っからいっぱいしゃべります」といった関係であり、父親は「ああいうふうにはなりたくない」という意味で反面教師として彼に影響を与えている(2005)。

他方、岡本は黒川のように、諸活動の元手となるような明確な経済資本・文化資本はないものの、「私の今の人生って、ほぼ芝居で、家族なんですよ」というように、家族の存在はきわめて大きなものとなっている。父親とは死別し、姉と弟は既に実家を出ているため、現在はパートで働く母親との二人暮らしであるが、「仕事とかも、そろそろうちに帰りたいって思ったりとかします」という思いを抱いているほどに、家での時間を大事にしている。そして家での時間の大部分が、家族との会話に費やされている。母親とは互いにその日にあった些細なことをさまざま話すそうで、帰りが遅くなった日でも「短い時間で濃密な会話をしないと(笑)」というほどである。また、一年のうちで唯一の「一日休み」の日であった彼女の誕生日には、母親とともに遊びに出かけている。彼女にとって家族とりわけ母親は、役者として生きていく決意をしている彼女のよき理解者であり、日々精力的な活動をしている彼女にとって大きな情緒的支えとなっているのである。

4) 小括

本節では、精力的に活動する黒川と岡本の諸活動をとりまく周囲の關係に焦点をあてて見てきた。今回事務所を辞めフリーランスとなっている岡本であるが、フリー

ランスになるということは舞台に定期的に出られる保障を失うことであり、その不安から事務所が信用できない状況であっても辞められないという人は少なくないそうである。しかし彼女の周囲には、見本を示し指針を与えてくれる指導者や目標を共有できる仲間がいて、かつ話をじっくり聞いてくれる家族もいる。あるいは時おり公演に誘ってくれるような、専門学校時代のつながりもある。そういった關係のなかからこそ、彼女は役者への道における障壁となりかねない元事務所を脱し、フリーランスへと踏み出す決断が可能となったのであり、役者に向けて邁進できているのである。

そして黒川も岡本同様、「どこ調べても載ってない」(2005) ような不明瞭なルートを歩んでいるわけで、社長をはじめクラブイベントやエンブレム会社の営業を通じて出会った多くの「成功者」から直接刺激を受けるなかで、「すごい人」に向けて諸活動を遂行していた。そして家庭の豊富な経済・文化資本を元手として、信頼できる仲間と目標への志を共有することにより、設定した目標の達成へと邁進できているのである。

二人はその積極的姿勢の強さから、ともすれば本人の意志・力量のみから日々の活動および移行を進めているかのように受け取られがちとなる。しかしながら本節で見たように、二人の移行は周囲の關係から得ている資源・影響力があつてこそ成り立っているのである。

5. まとめ

本章では、他の調査対象者には見られないような特異な経緯をたどっている黒川・岡本について見てきた。ただ「特異」とはいえ、かならずしも二人が例外というわけでもない。とりわけ岡本の役者、黒川のバンド活動などは、「フリーター」の一類型として括られる場合もあり、一定の層をなしているといえよう¹⁴。また黒川の起業・経営という側面は、数としてはより少数になるが、近年「アントレプレナーシップ(起業家精神)」という用語とともに脚光を浴びている働き方である¹⁵。

二人の活動を、いわゆる「やりたいこと」に向けた活動として見てみよう。2節で確認したように、二人は生活の糧を稼ぐための就労を営みつつ、さらに自分の「やりたいこと」に向けた活動を精力的にこなしているわけで、その生活はきわめて多忙・不規則なものとなっている。こうした側面については、かつて声優のオーディションを受けたり養成所に通ったりしていた竹内奈央や、インディーズバンドの衣装作成などを行ないつつライブハウスのスタッフになろうかと考えてもいた西澤菜穂子な

ど、フリーター層にも一定同じ傾向は見出せる（二人については第2章参照）。しかし彼女らの場合、家庭問題をはじめ過大な生活課題がのしかかるなど、「やりたいこと」へと向かい切ることのできない多くの事情が存在しており、岡本・黒川との差異は著しい。当然のことながら、「やりたいこと」に向けた二人の活動が今後どうなっていくのかについては、岡本・黒川にとってもいまだ見えているわけではない。しかし二人が終わりなき目標を掲げ、それに向けて邁進するという姿勢を維持しているのは、4節で確認したように、家族の資源や周囲の支えがあってこそ可能となっているのである。

そして黒川の会社起業・経営、および居酒屋設立にかんしては、「やりたいこと」であると同時に経済的な面での「成功」（「年商12億」）に向けた活動でもある。経済情勢の変動や雇用情勢の悪化に伴いながら、財界や政策においてさかんにベンチャー・起業の必要性・重要性が謳われているが、黒川のケースはその流れに見事に合致しているといえる。しかし本章で見えてきたように、彼の抱く展望は本人の意識のみで成り立っているわけではなく、土台としての諸資源や周囲の仲間とのあいだで形成・維持されてきたものであり、「アントレプレナーシップ」言説をその象徴とした個別の意識啓発として行なわれうるものではない。

いずれにせよ本章で見えてきた自営・自由業の若者は、80年代後半にリクルート社の調査を発端として喧伝された「フリーター／フリーアルバイト」の姿に近似している¹⁶。当時この言葉が指していたのは、「会社人間」となり働く状態を忌避し、積極的にアルバイト生活を続けていく若者の姿であった。同じような傾向はヨーロッパの若者研究でも指摘されているが、そこでの調査結果は本章で見えてきたケース同様に、活用可能で豊富な資源が周囲にあること、頼りにできる仲間がいるからこそ不安定な移行ルートを渡ることができていることを示している¹⁷。

このように、従来までの「標準」とは相容れないようなトラックをあえて歩もうとする二人であるが、今後においてどういった経路をたどっていくことになるかは未知数である。「やりたいこと」をめぐる諸資源や他者との関係の位置づけに注視しながら、二人の行く末を追っていきたい。

註

1. 厳密に言えば、黒川は有限会社の取締役であり、個人事業主としての「自営業」ではない。しかし一般的な呼称では法人格の有無はあまり重視されること
2. これまでのところ、生活をそれだけで支えられる十分な収入には結びついていないものの、そもそも芸能実演家としてそのみで生活している者はごく一握りであり、収入の多寡にかかわらず芸能実演家を一般に自由業と呼ぶこともある。なお芸能実演家の暮らしぶりについては、日本芸能実演家団体協議会編「芸能実演家の活動と生活実態 7 '05年版」(2005年3月)を参照。
3. 黒川の家族や持っているネットワークに関しては『18歳』111-115頁、「報告書③」108頁を参照。
4. 単に塗れるようになったというだけでなく、「俺の予想では、完璧な状態を1年間保たなければいけないというのがあった」(2005)ため、「猛ダッシュ」をかけ練習に励み、就職して1年後には塗りはじめていた。ちなみに彼によれば、通常だと塗り始めるまでに3年、きちんと習得するまでに5年かかるという。
5. 有限会社化した当時、彼は未成年であったため、登記上は兄が代表取締役で彼は取締役だが、兄が担っているのはホームページ作成のみであり、実質的な経営は彼が担っている。
6. 岡本の演劇への興味と家庭については「報告書①」68頁(女21)、専門学校時代の生活については「報告書②」96頁、専門学校の卒業後については「報告書③」29頁を参照。
7. 金銭トラブルや契約をめぐるトラブルは、演劇業界の構造的問題であると岡本自身考えている。([「この世界だとけっこうそういうこと(契約の曖昧さ)はあるの?」いや、(むしろ)ちゃんとしたところはないと思います])。現代演劇の調査研究を行なった佐藤郁哉によれば、こうした問題が起こるのは、日本における劇団がビジネスライクな契約によって結ばれる集団というよりも一種の擬似家族、あるいは共同出資によって支え合う生産者組合のような性格を帯びているからだとしている。この点は岡本のケースにも当てはまるだろう。佐藤郁哉『現代演劇のフィールドワーク—芸術生産の文化社会学』(東京大学出版会、1999年)参照。
8. 芸能実演家の収入や働き方の詳細については、先述の日本芸能実演家団体協議会編(2005年)の報告書を参照されたい。
9. 彼女の演劇にかける誠実さは、演技に対してのみでなく、ホールの片付けや事務所を辞める際の手続き的な側面など、全般的なものとなっている。

10. 今回は彼の高校時代の同級生で、高卒後1年目インタビューを受けていた大塚（4節参照）に対し、黒川とともにインタビューを行なった。これはその際の発言である。以下、その際の発言については(2007②)と表記する。
11. ちなみにこのイベントは、「もともと成功する気はなかった」とのことである。そこには、活動を共にする仲間の結束や力量形成、あるいは営業の過程で獲得した広範な人脈など、今後における投資としての意味合いが込められていたといえる。
12. しかし「(社長が)かわいそうなのが板金塗装と出会っちゃったこと」であり、業界の性質上「(売り上げ)一億が限界」だという。ゆえに黒川にとって、その社長は乗り越える対象ともなっている。
13. 彼はイベント企画で立ち回るなかで、仲間に食事代や飲み代をおごるなどして、戦略的にリーダーとしての地位を形成していったと話している。大塚は当初からそれを見抜いていたが、昔から親分肌な黒川の性格をふまえ、また「頭は一人じゃなきゃ組織はうまくいかない」(2007②)という考えから、彼をリーダーとして位置づけている。
14. 97人のフリーターへの聴き取り調査を行なった日本労働研究機構「フリーターの意識と実態」(調査研究報告書 No.136、2000年)では、音楽バンドや俳優関係を中心に、16名のケースが紹介されている。
15. 「キャリア教育」や言説レベルでの喧伝が著しいが、移行の実態把握という調査目的から描かれたものとしては、20代前半の起業家3名についての聴き取りを行なった前島賢士「ベンチャー企業をめざす若者たち」(矢島正見・耳塚寛明編『変わる若者と職業世界—トランジションの社会学』学文社、2001年)を参照。また、経済的成功を第一に据えたものとは距離を取り、これまでの働き方に対するオルタナティブの模索という動向もある。佐藤洋作・カンパネラ編集委員会編『もう一つの〈いろいろな〉働き方』(ふきのとう書房、2002年)を参照。
16. 一例ではあるが、芸術家志望のフリーター像としては、アルファトゥワン・リクルート編集部編『フリーター—有名人の無名時代アルバイト体験マル秘話集』(リクルートフロムエー、1987年)が挙げられる。
17. 社会的背景はもとより資源の質などで二人と完全に重なるわけではないが、従来型とは異なる移行ルートへの「文化的エリート」による姿勢を描写した

ものとしては、Du Bois-Reymond, M.(1998) 'I Dont Want to Commit Myself Yet': Young People's Life Concepts, *Journal of Youth Studies*, Vol.1, No.1、ここで参照した周囲の仲間関係についての重要性を指摘したものとして、Walther, A., Stauber, B. & Pohl, A.(2005) Informal Networks in Youth Transitions in West Germany: Biographical Resource or Reproduction of Social Inequality?, *Journal of Youth Studies*, Vol.8, No.2 (平塚真樹抄訳「若者の移行期をめぐるインフォーマルなネットワーク—人生の経歴における資源か社会的不平等の再生産か?」『教育』2006年3月号)、とりわけ227頁(原著)参照

第4章 学校に留まることを選んだ者たちの移行過程

児島功和・進藤正樹・藤井吉祥

1. はじめに

本章では、四年制大学（以下、大学）を卒業した後になお大学や専門学校などの学校に留まることを選んだ桑田泰宏・金山克也・川辺聡子・下田洋平の4人（全員A高校出身）を取りあげる。桑田は台湾の語学学校を経て、今回調査時には台湾の大学院への進学を希望していた¹。金山は専門学校に入学を予定しており、川辺は学部生時代在籍していた大学の大学院に内部進学、下田はそれまで在籍していた大学とは違う大学の通信制課程に学士入学となっている（表4-1）。

『平成20年度版学校基本調査速報』によれば、卒業者のうち「大学院等への進学者」「専門学校・海外の学校等入学者」の数は76,259人、全体の約14%となっている²。その中で最も大きな割合を占めているのが大学院進学者である。大学院重点化・拡充化という政策方針を背景に、大学院進学者は増加傾向にあるが³、それでも大学院に進学すること、あるいは専門学校などに入学することは、新規大卒者にとって一般的なトラックとはいえない。他方、入学難易度による違いはあるものの、近年は団塊世代の定年退職を背景として求人総数は増加しており、求人倍率も上昇傾向にあり、新規大卒者の約70%が就職しているという状況がある⁴。

以上のことから分かるように、大学卒業後になお大学や専門学校などの学校に留まるという選択は、新規大卒者の誰もが歩むような教育経歴やキャリア形成のあり方ではない。そんな状況のなか、本章では、4人がどのような軌道をたどって大学卒業後の進路先を学校とするに至ったのか、その歩みが具体的にいかなる条件においてなされたのかを描くとともに、特に〈学校から仕事へ〉の移行という観点から見たとき、4人にとって〈学校から学校へ〉の移行がどのような意味を持っていたのかを

明らかにしたい。

2. 大学卒業後の進路に至る経緯と現状

本節では、桑田〈大学⇒台湾の語学学校⇒台湾の大学院（希望）〉、金山〈大学⇒鍼灸専門学校（予定）〉、川辺〈大学⇒同大学院〉、下田〈大学⇒他大学に学士入学〉といったさまざまな進路先が、それぞれどのような経緯をたどって選択されたものなのかを、高校在学時からの展望を起点として見ていきたい。

1) 桑田泰宏のケース⁵

桑田は、高校を卒業して都内の私立大学外国語学部に進学し、在学中に台湾への留学を経験、卒業後も語学学校への再留学をしている。留学先で行なった今回調査時には、台湾にある大学院への進学を準備していた。

彼は高校3年のインタビュー時に、すでに中学時代から中国語やアジア諸国の文化に対する興味があったと話している。興味を持つきっかけとなったのは、中学生の頃に聴いた中国語の歌。それ以来、NHKの語学講座で中国語を独学で学び、高校3年次には簡単な自己紹介ができるほどになっていた。

そして外国語学部中国語学科に進学した桑田は、中国語の授業ではすべて「優」の成績を取り、学内の中国語スピーチコンテストでは準優勝するなど、優秀な成績を残している。大学1年次のインタビューでも、中国語学科という自分の好きな勉強に集中できる環境について次のように話している。「中国語が楽しくてしかたがないという、本当に進んでよかったなって」（2003）。学業以外の面では、部活やサークルには所属しなかったが、授業が一緒のクラスメイトや他学科の人とも交流するなど、広い交友関係を築いていた。また桑田は、飲食店のアルバイトで月に7～8万円ほど稼いでいたが、「フォローしあえる」という職場の雰囲気もあって、「（そのバイト先の）友達とは離れたくないです」（2003）と話すほどに、そこでの関係を大切なものと感じていた。

また、「中国語だけの生活に浸ってみたい」という理由で、3年生の秋からは大学の交換留学制度を利用

表4-1. 引き続き就学者の概要

	出身大学の学部・学科	出身学部・学科の選択理由	大学卒業後の進路
桑田泰宏	外国語学部中国語学科	中国語を学びたい	台湾の語学学校→台湾の大学院(希望)
金山克也	総合大学の体育学科	身体(野球に関連して)への興味	鍼灸専門学校(予定)
川辺聡子	動物関連学科	動物への興味	同大学院(内部進学)
下田洋平	経済学部	社会科教師志望	他大学の通信制に学士入学

して、1年間ほど台湾に語学留学をしている。台湾を選んだ理由は、大学で知り合った台湾人の印象の良さや留学先の大学が都市部にあること、そして「(自身のセクシュアリティと関連して)台湾はゲイに対してかなり寛容であることを知っていたから」(2005)と彼は答えている。留学先の台湾では、最初のうち自分がこれまで培ってきた語学力が通用しないことに戸惑いもあったが、友人ができたことや徐々に語学力がついてきたこともあり、少しずつそこでの生活に慣れていった。

留学費用については、双方の大学から給付制の奨学金を支給されていたが、それ以外にも実質的な費用は親が負担していたこともあり、「悠々自適な生活」を送っていたという。「本当に楽しかったですね。ほんとと最後の方は日本に帰りたくないと思っていて、もう、ずっと台湾にいたい!というのありましたね」(2006)という言葉からは、留学生生活を満喫していた様子がうかがえる。なお、余った奨学金は卒業後の留学資金に充てている。

交換留学から戻ってきたときすでに大学4年次も半ばを過ぎていたが、彼は民間企業などへの就職活動は一切行わず、卒業後にもう一度留学することを決めた。しかし、再留学はすでに交換留学時から考えていたことが次の言葉からも分かる。「中国語を究めたいという気持ちも強くなっているので、もし今年の夏帰国する時点で、自分の語学能力に納得がいけないようであれば、一度帰国して卒業後、再び台湾に戻って勉強したいと考えはじめた」(2005)。そして衣服や雑貨を販売する店でアルバイトとして週4日、1ヶ月に7~8万円稼ぐ生活を経て、大学を卒業して数ヶ月後には台湾の語学学校に私費で再留学を果たす。

台湾に戻ったとき、桑田は1ヶ月ほど日本人の友人の家に住んでいて、その間に台湾人の友人に頼んで住む部屋を探してもらっている(二人とも交換留学時にできた友人)。こうした幅広い交友関係の基盤もあって、彼はそれほど時間がかかることなく台湾での生活に再び馴染んでいった。また、戻ってしばらくは、それほど月日が経っていないにもかかわらず語学力が低下していたことにショックを受け、「泣きそう」だったというが、こうした不安も友人たちが愚痴を聞いてくれたこともあって、感じなくなっていった。

今回調査時に彼はまだ先述の語学学校に通っていたが、その後、台湾史を専攻として、台湾の大学院に進学するという希望を話してくれた。大きなきっかけとなったのは、元々は「飲み友達」だったという同じく日本から留学に来ていた台湾史研究をする大学院生のアドバイスだった。「そんなに台湾好きで1年後にまた帰って就

職するんだったら、大学院受けてみたらって言われて。(中略)あ、そういう道もあるのかと」。同時に桑田は、その「先輩」から月に3万円(彼の認識では20代後半の人の収入に相当)の給付制奨学金の存在を教えてもらったり、受験に向けて進学希望先の大学教員を紹介してもらい挨拶にも行っている。そして今回調査時に桑田は、「先輩」から教えてもらった専門書を読むなどして、進学への準備をしていた。

2) 金山克也のケース⁶

金山は、高校卒業後1年間の浪人生活を経て、私立総合大学の体育学科に入学した。今回調査時には大学4年生、卒業後には鍼灸の専門学校への入学が決まっていた。

高校時代、野球部に所属していた金山は、高い技術を持ったプレイヤーを目指して理論的な本を読み、それ以外にも有料の講習を受講するなどしていた。卒業後の進路についても、まず「野球やりたいって決めていた」ことがあり、プレーについて「いろいろ研究っていうか、したいな」(2002)という思いもあって、プレイヤーとして野球ができ、かつ理論的にも野球が学べる大学への進学を考えていた。そして彼は、「どうせやるんだったら、レベル高い方が」「ちゃんと学べる」(2002)ということを理由に、身体運動学などが学べる国立大学を志望する。体育大学という選択肢もありえたはずだが、高校の教員や体育大学に進んだ高校OBの経験談から、体育大学は部活動や実技に傾倒しすぎているイメージがあるとのことで、受験することはなかった。現役時には、第一志望の国立大学以外にも私立大学を3校受験、私立大学の教育学科には合格したが、彼は浪人することを決めた。しかし、1年間の浪人生活を経たものの、現役時同様に志望していた国立大学には合格できず、金山は私立大学の体育学科へと進むことになった。

第一志望の大学ではなかったものの、彼の野球への情熱は変わらず、野球部に入るためにわざわざ自宅からも在籍学部キャンパスからも離れた練習グラウンドの近くに下宿をかまえるほどであった。しかし、それほど気持ちを持って入った野球部での生活は、入学からわずか半年で終わってしまう。体力がついていかないことが基本的な理由と話してくれたが、バットで体を叩かれるといった部内での「しごき」に耐えかねてという事情もあった。そうした「しごき」が理不尽であると認識していたものの、相手が同じ学校の人間であること、「そういうことっていうのは、(中略)当たり前っていうかやむをえない」(2005)という部内の暗黙のルールを感じたこともあって、責任者である監督にもそのことを話さない

まま、彼は部活を辞めていた。

その後なんとか授業には出席できていたものの、部活動を辞めた直後の2ヶ月間は「悶々というか、やる気が出ないっていうか、完全に家に閉じこもって」(2005)しまうほどであった。大学入学時よりも、生活や将来展望、そして自身のアイデンティティを野球中心に築いてきたこともあり、金山にとって野球部退部は、自分の存在意義を否定されるに等しいものであった。卒業間近の今回インタビューでも、大学4年間で一番大変だったこととして部活動での経験を挙げていることから、その痛手の大きさが分かる。

野球部退部を余儀なくされ、それまでの生き方を否定された金山は、「何もやることない」(2005)状態に陥ってしまったが、成人式で会った友人から野球サークルへの参加を持ちかけられる。最初は迷っていたが友人に押し切られるようなところもあって、結局かわりをもつようになる。その後は違う野球サークルにも参加し、同じ大学の女子軟式野球チームのコーチを頼まれ、それを引き受けている。更に一つ目のサークルにかかわりだすのと同時期に「やることないし、稼いでみようかな」という理由から、飲食店でのアルバイトも始めている。前回調査時に彼はそれまでの大学生活を振り返って、自分は「何事もきっちりしないと気がすまないタイプ」だったが、サークルやアルバイトの仲間との交流を通じて徐々に変わってきたという。そういった変容も含め、退部後の積極的な活動は、金山なりにそれまでの自分とは違う自分を築くためになされたことだったといえるだろう。

その後、3年次後半から始めた就職活動では、大企業を中心に20社ほど受けるも、どの会社からも内定を得ることはできなかった。そして彼はそれ以上就職活動を続けることなく、鍼灸の専門学校へと進路変更し、推薦入試を受けて合格、次年度からの入学を予定している。専門学校に入学し、卒業した後は、鍼灸師となりいずれは開業することを金山は将来展望として描いている。

3) 川辺聡子のケース⁷

川辺は、関東にある私立大学の動物関連学科に進学した。彼女は大学在学時に民間企業への就職活動を行なったものの内定を得ることができず、大学院進学へと進路を変更した。今回調査時に彼女は、同大学大学院の修士課程1年生になっていた。

大学院では週のうち3日、行動生理学や動物保全学といった授業があり、また研究テーマを決めるために大学以外の施設での調査も行なっている。プレゼンテーショ

ンソフトを用いた発表も学部生時代より増え、授業の無い日にはそのための準備もしているという。授業以外では、ティーチング・アシスタントとして、野鳥観察を行なう学部生の授業に帯同するといった仕事もしている。

川辺は幼い頃から動物好きであったが、高校時代にそれまで飼っていた犬を獣医に診てもらった経験や犬が死んでしまったときに自分に治すことができるという思いから、獣医への憧れを持つようになり、獣医学部もしくは畜産学部への進学を希望していた。しかし、希望していた学部のある大学には合格することができず、一般入試で私立大学の動物関連学科に進学した。

獣医になることは断念したものの、彼女はその後も動物とかかわる仕事に就きたいという希望を持っており、入学後は動物に関連する資格の取得にも励んでいた。ただ彼女が在籍していた学科は、創設2年目で就職活動の指針となる学科自体の就職情報が不足していたことや、そもそも動物にかかわる企業や職種が少ないこともあって、彼女は就職活動への不安を口にしていた⁸。また川辺は、自宅と大学の距離が遠かったこともあって、部活やサークルに所属していなかったため、先述した情報不足を補うこともできなかった⁹。

そして3年次後半の就職活動の時期になり、彼女がエントリーシートを提出したのは、動物とは関連のない事務系の仕事であった。川辺は業種を問わず6社にエントリーしたが、結局内定を得ることはできなかった。その後も大学が主催する就職ガイダンスには参加するものの、もう一度企業にエントリーすることはなく、彼女はそのまま就職活動から降りることになる。

その後、大学院進学へと進路を変更することになるが、進学という選択肢が具体的に視野に入ってきたのは、卒業研究がおもしろくなってきたとき、学内に掲示されていた大学院募集のポスターを目にしたからだと彼女は話してくれた。すなわち民間企業への就職活動で内定を得られず悩んでいたこと、卒業研究がおもしろいと感じることが重なり、そして動物関連の仕事に就きたいというこだわりが、進学という選択肢に結びついたのである。もっとも4節で詳細に述べるように、高額の学費を捻出できる親の存在、家族に大学院出身者がいることも、この選択に大きな影響を与えていると思われる。

大学院に内部進学した彼女は、卒業後に正社員・正職員として動物関連の仕事に就くことを強く望んでいる。そして川辺は、担当教員が紹介してくれることもあるという動物園職員などへの就職も視野に入れながら、「面接とかも緊張しちゃってあんまりできなかったことがないんで」「あんまり(就職)活動も好きじゃなかった」と学部生時代には感じ

ていた就職活動に再び向かおうとしている。

4) 下田洋平のケース¹⁰

下田は、高校卒業後に指定校推薦で都内の私立大学へと入学し、その大学卒業後には別の私立大学の通信制課程に編入した。

下田は高校時代から社会科教員を志望していた。きっかけは中学・高校時代の教員たちとの出会いだった。社会科の中でも特に経済に興味があったこともあって、大学の学部は経済学部に進学している。入学後は教員を目指して教職関係の授業やゼミを履修し、授業以外にも社会哲学サークルに所属するなど、勉学中心の学校生活を送った。

ゼミでは出身校の教員にインタビューするといった活動も行なわれており、こうした経験が彼の教員像をより現実的なものにしたと同時に、社会科の教員になることの難しさを実感させることにもつながったという。また、「教職の糧になるかな」という考えから、学内で開講されたファイナンシャルプランナー資格取得のための講座にも出席していた。

このように大学入学後は教員免許取得に励んでいた下田であったが、免許取得のため必修になっている教育実習を受けられないというアクシデントに見舞われてしまう。彼は中学校での実習を希望し、実習希望先の教育委員会に3年次7月、12月と申請したが、二回とも受け入れてもらえなかった。定員オーバーというのがその理由である。その後、私立の学校やツテのないところにもあたってみたが、どの学校にも受け入れてもらえなかった。

結局他に実習校を見つけることができず、実習は断念せざるをえなかった。それらのことがはっきりしたのが4年次の4月だったため、下田は「留年して教育実習をする」か「就職する」かの二者択一を迫られることになった。家計的に留年をする余裕がないこともあって、彼は教職をあきらめることを決意し、民間企業への就職活動を行なうことになる。しかし、想定外の出来事だったこともあって、実際に動きはじめたのは5月の連休明けとなり、活動開始時期としてはかなり遅くなった¹¹。業種は絞らず、とにかくまず20社ほどエントリーし、4社の説明会に行ったうち2社は面接まで進んだが、内定を得ることはできなかった。今回調査時に当時のことを振り返って彼は、「大変だなあと、けっこう求人はいっぱいあったんですけど、なかなか取ってくれないみたいな。面接とかそういう、厳しいというか」(2006)と話していた。

そして準備が充分でなかったことも関係していると

思われるが、「あなたは何をやりたいのですか」という面接官の質問につまずいてしまい、「やっぱりじっくりこないとか、自分に嘘をついているような感じ」(2006)を持った下田は、再び教員への道に挑戦することを決め、学費を考慮した結果、大学を卒業した後に別の私立大学の通信制に学士編入することにした。

今回調査時に下田は、単位取得のための勉強をしながら、アルバイトで週5日、公共料金のメーター検針の仕事を行っていた。現在はメーター検針の仕事だけだが、前の大学を卒業してからしばらくは塾講師のアルバイトも掛け持ちしており、きわめて多忙な日々を送っていた。教員免許取得のため勉学に励む一方で、ほぼフルタイムで働いている自分について彼は次のように話している。「微妙な感じですね。フリーターのでもあるし、いちおう学生でもあるし。いちおう学生とは言っているんですけど。でも、フリーターみたいな学生という感じも。中間みたいな感じが(する)。

この仕事で出会った人たちから下田は、いろいろと大きな影響を受けている。アルバイトとして働く40歳近くの男性から話を聞くと、「なんかずるずるフリーターみたいなやっていたら就職の機会もなくなっちゃうんじゃないかな」と自分の将来について不安が強まることもあった。他方、芸術家になることを目指してフリーターをやっている人たちを見て、就職に「漠然と焦っていた」状態から、「いろんな働き方があるんだな」「最低限(暮らしていくことが出来るレベルが)分かった」と話しているように、働くことのイメージが具体的に多様なものにもなっている。

それ以外にも職場には小学校教員をしていた男性がおり、「先生大変だからもうちょっと社会勉強したほうが(いい)って、(中略)教育は大変だからもうちょっと精神力つけてからって。で、いろんな仕事体験した方がいいよ」というアドバイスを受けている。それを聞いて下田は、「ちょっとなんかリアルに大変なんだなって。で、これはもうちょっと修行を積むとか、やってからじゃないと厳しいのかな」と思い、あくまで大きな目標としての教員は変わらないものの、一度は民間企業に就職して経験を積んでいこうと考えるようになり、今回調査時の後に就職活動する気持ちがあると話してくれた。

5) 小括

以上、本節では、在籍していた大学・学部・学科だけでなく、進路先となる学校もまったく違う4人がどのような経緯をたどって大学卒業後の進路(決定)へと至ったのかを概観してきた。

まず見えてきたのは、就職活動に多くの者が動きはじめる3年次後半から4年次前半にかけて、4人とも明確には学校に留まるという選択を意識していなかったということである。桑田は交換留学の際に、再留学を示唆してはいたものの、まだ迷っている状態であったし、金山・川辺は就職活動を行っていた。下田は教職希望でずっと来ていたのちに、アクシデントにより就職活動に向かっていた。すなわち学校に留まるという選択は、紆余曲折を経た結果として選ばれているのである。

次に見えてきたのは、個人差は小さいものではないが、4人の進路選択がそれぞれを取り巻いている資源の影響を受けるなかでなされているということである。本節で述べたものに限定しても、桑田の院進学には日本人留学生の「先輩」の影響が大きく、下田の選択には家計の状況が強かかっていた。

ここで指摘した一点目については3節で、二点目については4節でより詳細に議論を展開したい。

3. 学校に留まる理由とその意味：仕事との関係を中心に

4人が大学卒業後になお学校に留まるに至った経緯は一樣ではない。だが、共通しているのは、大学卒業後に学校に留まる選択を早い時点から決めていたわけではなかったということである。本節では、結果として学校に留まるという選択をすること、〈学校から学校へ〉の移行が4人にとってどのような意味を持っているのかを、特に仕事との関連から見ていきたい。

1) 努力を無駄にしたくない：桑田泰宏のケース

桑田は、高校在学時から一貫して中国語が使える仕事に就くことを希望している。彼は高校3年次に行なわれたインタビューで、仕事に関する将来展望として「スケジュール(旅客機の男性客室乗務員)」を挙げていた。だが、それにも「中国語を学べたあかつきには」(2002)という留保がついており、大学1年次には「まず中国語を活かせること、それをやりたいです」(2003)と話している。交換留学に行ってから、こうした気持ちに加えて、それまで中国語に費やしてきた努力を無駄にしたくないという気持ちが強くなったようである。

大学を卒業し、私費留学に行く前のインタビューでは「意地」という言葉を使って、次のように話している。「本当に中国語と関係のない企業に就職しちゃったら、そこそ中国語を学ぶ時間がなくなるのと、あと、せっかく一年留学したのにすぐ忘れちゃうんじゃないかなってのがすごいあって、やっぱりこの時間無駄にしたくな

いから卒業したら早めに(台湾に)戻って、まだ中国語忘れる前にまた上に重ねることができればみたいなことを思っていて。(中略)もうほんとと意地ですよ」(2006)。

今回調査時に桑田は、将来展望に関して、アルバイト経験があるという理由からサービス業と接客業、大学での副専攻と関係していることから旅行にかかわる業種への就職を考慮に入れていると話している。だが、それはあくまで大学院への進学が適わなかった場合だと考えていた。もっとも大学院進学も台湾史研究者を目指してのものではない。

彼にとって進学するということは、中国語習得に費やしてきた努力を無駄にしないということ、そして将来的には中国語が使えるような「好きな仕事したい」ということを意味しており、それは次に引用するように就職していった大学の同級生の生き方に対する違和感にもつながっている。「中国語学科卒業にもかかわらず、まったく中国語と違う就職先に就職しているという、この4年間無駄に生きてきたらうって思ってしまうような人たちがいて、それに俺もなっちゃうのが嫌だなんていうのがありますよね」。

だが、「正直ほんとに見通してないんですよ」とも話しているように、台湾の大学院で台湾史を勉強することが具体的にどの仕事へとつながっていくのか、中国語で勉強することをどのような仕事につなげていきたいのか、桑田のなかでもはっきりしているわけではない。また、台湾で多くの仲間と「自由度の多い」と彼が表現する学生生活をもっと楽しみたいという気持ちもある。しかしながら、彼にとって一貫しているのは、「中国語が使える仕事をもしできるならしたい」ということへのこだわり、そしてこれまでの努力を無駄にはしたくないという強い気持ちである。

たしかに桑田は、以前から持っていた興味・関心を追求するという点では、他のケースと比べて一貫した姿勢をもって歩んできたように思われる。しかし、大学卒業後の私費留学については交換留学を終え帰国後に、大学院進学に関しては私費留学時になって明確になったものである。それは、何よりも日本にいて同級生と同じように就職することが、それまで必死に学んできたことがすべて無駄になってしまうという気持ち、中国語にかかわる「好きな仕事したい」という気持ちを背景にもっていたのである。

2) 就職活動経験を経たのちに：金山克也と川辺聡子のケース

金山の進学先は、業務独占の国家資格である鍼灸師の

資格取得を目指す専門学校であり、仕事との結びつきが強い¹²。その点で入学理由は明快だといえるが、彼がその進路を決めるにいたった経緯は決して単純なものではない。

高校在学時から浪人時代にかけては、身体に関する高度な知識を必要とする野球の指導者が候補として挙げられていたが、それは野球プレイヤーとしての自分自身をあくまで前提、中心とした職業像だった。しかしながら、そうした将来展望は、体力がついていかないことと部内での「しごき」によって退部を余儀なくされることで途絶えてしまう。これをきっかけとして彼は自分の生き方を最初から考え直せざるをえなくなる。野球部退部について話してくれたのと同じ大学2年次インタビューでの、「好きな仕事できたらいいなって思うんですけどね。好きな仕事、体を動かすことに関連する仕事…ですね」(2005)という(沈黙を含んだ)語りにも象徴的に表れているように、金山はかつてのように具体的な職業ではなく「好きな仕事」という曖昧なかたちでしか将来展望を話せなくなってしまった。

その後、曖昧になってしまった将来展望を抱えたまま金山は大学3年次となり、大手電気メーカーやレコード会社など大企業ばかりを20社ほど受けたものの、1社からも内定を得ることができないという経験をする。そして彼は就職活動をやめ、鍼灸の専門学校入学へと進路を変更するのである。

高校在学時から野球部退部まで持ち続けてきた野球の指導員という職業展望、そして卒業後に入学する鍼灸の専門学校という二点だけを取り上げ、身体への興味・関心の追求という点から見れば、彼の歩みは一貫している。鍼灸への興味・関心を大学1年次から持っていたという彼の話もその裏づけとなるだろう。しかしながら、その間には、野球部退部という人生の一大転機といえる出来事があった。それによって明快だった将来展望も曖昧なものとなり、そのまま就職活動に向かったものの内定を得られず、それならばということで持ち出されたのが、鍼灸への関心だったといえるであろう。

川辺も就職活動において内定を得ることができないという経験をしている。動物関連の業種や動物に直接かかわることのできる職種が限定されていることを背景に、彼女にとって就職活動は就職のしがたさとして経験され、大学院進学へと進路変更を促すものとなった。川辺もまた金山と同様に、高校在学時から今回調査時までの興味・関心だけを見ると、真っ直ぐに興味・関心のまま進んできたように見える。しかし彼女の場合も、就職活動をしていた時期には、動物への興味・関心はいったん

脇へと置かれていたのである。そして進学へとつながる動物への興味・関心は、就職活動が順調には進まなかったことを經由して、その時期進めていた卒業研究の影響を受けたかたちで呼び出されているのである。

3) アクシデントと就職活動を経て：下田洋平のケース

下田の他大学への学士入学という進路は、教育実習を受けることができなかったというアクシデントを最大の要因とするものである。それに加えて、アクシデントによって仕方なく始めた就職活動中に、あらためて意識させられた自分の「やりたいこと」を大切にしたいという気持ち、そして家庭の経済状況への配慮などが重なりあって、彼を教員免許取得のための他大学学士入学(通信制)という進路へと導いたといえる。

よく知られているように、大学生の就職活動ではエントリーシートから面接にいたるまで、自分が何者であるのか、自分の「やりたいこと」とは何かを意識させられる機会が多く、こうした経験を積んだことが金山と川辺、そして二人以上に下田の進路変更を後押ししたと思われるのである。

ちなみに下田の場合、家庭の経済状況や通信制課程を受講していることもあって、免許取得のみに専念しているわけではなく、塾講師や水道メーター検針といったアルバイト就労にも多くの時間を費やしている。そこで一緒に働く同僚たちと接していくなかで、多様な働き方があることを実感したり、正規雇用で働くことの意味をあらためて思い返したりするなど、働くことについてのイメージや知識を豊かにし、学ぶといった作業を行なっている。彼の大学卒業後の生活においては、通信課程での影響以上にそこでの経験から受ける影響の方が、より大きなものとなっているといえるだろう。

4) 小括

仮に4人に「大学を卒業してまでなぜ学校に留まるのか?」と尋ねたならば、台湾の大学院で中国語を学ぶため(桑田)、鍼灸のおもしろさを感じたことから鍼灸師になるため(金山)、卒業研究が楽しくなり動物についての学びを深めたいため(川辺)、教員免許を取るために(下田)と答えるであろう。しかしながらこれまでの経緯を追っていくなかで見えてきたのは、4人がそれぞれの理由から〈学校から仕事へ〉の移行を大学卒業時点で果たすことができず、その時点で自身にとってよい選択肢を考慮した結果、学校に留まることを選んだということである。

桑田にとっては交換留学から帰国し、同級生と同じよ

うに就職活動を行なって就職することは、中学校の時に中国語の歌を聴いて興味・関心を持ったのをきっかけとし、これまで勉強を続けてきた中国語への努力を無駄にすることだと感じたこと、そしてそのまま卒業しても中国語を使う仕事には絶対に就くことができないという確信をもったからこそ、彼は学校に留まることを選んだのである。金山と川辺の場合は、まず就職活動が思うようには進まなかったことが要因としてあり、〈学校から仕事へ〉の移行の仕切り直し先として専門学校入学、大学院進学が選ばれたといえる。だが、なぜ鍼灸で、なぜ動物関連の大学院かという、それは金山によっては身体への、川辺にとっては動物への興味・関心ゆえにといえるだろう。下田にとって他大学への学士入学は、教育実習が受けられないというアクシデントと就職活動中に自らの「やりたいこと」をあらためて強く意識させられたということが大きい。

まとめると、4人にとって大学卒業後になお学校に留まるということは、〈学校から仕事へ〉の移行の仕切り直しとして結果的に選択されたのであり、それはそれまで自分が打ちこんできたことを無駄にたくないという気持ち、そして自分が築き上げてきたアイデンティティと深くかかわる「やりたいこと」に携われる仕事に就くという可能性を失わないためにとられた選択だといえるであろう。

4. 進路選択・学校生活における資源の影響

前節では、大学卒業後になお学校に留まる理由とその意味を、仕事との関連から見てきた。明らかになったのは、それぞれの進路選択への経緯と理由はさまざまであるものの、いずれの進路選択も〈学校から仕事へ〉の移行の仕切り直し、アイデンティティと深くかかわっている「やりたいこと」に近づく可能性を保持するという意味を帯びていたことである。しかしながら、そうした選択もある特定の状況のなかで形成されたものである。本節では、4人を学校に留まるという進路へと動機づけ、実際にそれを可能にした資源、そしてより広範に学校生活を送る上で支えとなっていた資源について明らかにしたい。

1) 家庭の資源と文化

前提として押さえておく必要があるのは、4人が大学進学者であり、最低でも4年間の学費を含む諸費用を用立てることができたという点である。これまでの調査・報告でも指摘してきたように、高校卒業段階での進路選択には家庭の経済的基盤の有無、とりわけ家庭が進学費用を用

立てできるかどうかで大きな分岐が生じていた¹³。調査対象者の中には進学への意思があり、すでに試験にも合格していたものの、学費の工面ができないために進学を断念せざるをえなかったケースもあったが、本章で扱っている4人はそういった困難には晒されていない。桑田、金山、川辺の3人は大学学費を親が負担しており、下田は奨学金を二つ取得することでまかなっていた。

そのうえで、大学卒業後の進路選択について見てみると、4人の中でも違いが見られる。金山と川辺については、卒業後の専門学校入学や院進学に要する費用もすべて親が負担している（金山は入学前ではあるが、親が負担することになっていると話してくれた）。とりわけ金山の場合、全体として学費の高い鍼灸専門学校の中でもとりわけ費用がかかる専門学校（三年制）を選んでいるが、それは雰囲気・内容を優先しての選択であった。桑田の語学学校への再留学費用は、帰国時に精力的に行っていたアルバイト代を使ったものでもあるが、交換留学時の奨学金の多額の余りから捻出してもいる。それが可能になったのは、彼の親が交換留学時の実質的な生活費を送付していたためである。

一方で、3人の対極に置かれているのが、大学在学中に父親を亡くした下田である。学費は奨学金を併用することでまかなっていたものの、教育実習に行けないというアクシデントに際して、免許取得のためだけに留年するという選択が可能な状況ではなかった。そして、より学費の安い他大学の通信制課程への編入を決めている。また現在学費はアルバイト代でまかなっているが、同時にアルバイトで稼いだ中から3万円を家計にまわし、1万円弱を奨学金の返済に充てており、生活において「仕事が主になりつつある」と感じているほどにもなっている。

次に、それぞれの家庭の家族学歴や文化的背景に注目してみたい。表4-2は、家族の職と学歴を一覧にしたものである。

家族学歴の高さという点で突出しているのが、金山と川辺である。金山は父親・母親が大卒で妹も大学在学中であり、川辺の場合は父親・母親が大卒、姉は大学院進学者である。桑田は父親・母親ともに高卒ではあるが、姉が大学院を卒業している。川辺と桑田のように大学院進学者が身近にいるということは、家族の認識も含め、本人の進路選択においても大きな支えとなっていると考えられる。下田は父親が大学教育経験者ではあるが、母親学歴は不明、二人の姉も専門学校卒であり、経済的な面だけでなく家族学歴という点でも他の3人とはややその背景を異にしている。もっとも4人が調査対象者全体

表 4-2. 引き続き就学者の家族背景

	父職／学歴	母職／学歴	きょうだい職／学歴	学費負担者
桑田	中小企業社長 ／高卒	小売店パート ／高卒	姉・研究所職員 ／大学院卒	大学⇒親、語学学校⇒貯金 大学院⇒奨学金(予定)
金山	大手商社 ／大卒	NPO主催 ／大卒	妹・学生 ／大学在学中	大学⇒親 専門学校⇒親
川辺	通信機器会社 ／大卒	職業訓練校講師 ／大卒	姉・公務員(内定) ／大学院在学中	大学⇒親 大学院⇒親
下田	タクシー運転手 ／大学中退(故)	弁当屋パート ／不明	姉×2 ／専門学校卒	大学⇒奨学金 通信制⇒アルバイト代

の中では相対的に家族学歴が高いことは、これまでの調査・報告でも指摘してきた。

他方、家庭の文化的背景という点から見て突出しているのが、金山である。彼の父親は海外勤務も多く、それもあって家族で海外旅行に行くことも度々あったという。父親は休日には英会話やスポーツジムに通い、母親はNPOを主宰する傍ら登山や語学の勉強をしており、金山も母親が関係者だという子どもの文化活動を支援する団体にかかわるなど、経済的な面だけでなく文化的にも恵まれた状況にあったことがうかがえる。また文化的背景ではないが、4人に共通しているものとして、進学や入学に際して家族が情緒的な支援をしているということがあった。情緒的な支援とは、たとえば次の下田と母親のやりとりで見られるものである。「[お母さんは何て言うてるの?] 好きにすればって(笑)。[就職活動の話も?] そうですね、自分の人生だから。(中略)最終的には自分が選ぶんだってということで、どちらでもどうぞみたいなの」。

以上のような家庭の資源や文化を背景として、大学卒業後の進路としてなお学校に留まるという選択が支えられ、促されているのである。

2) 資源としてのネットワーク

まず、金山のケースを見てみたい。繰り返し述べてきたように、野球部の退部という出来事は彼に大きなショックを与えただけでなく、将来展望まで見据えそれまで築いてきた生き方やアイデンティティを否定し、断絶させるものであり、しばらくの間は家に閉じこもってしまうほどであった。そうした状態から抜け出し、飲食店でのアルバイト、野球サークル二つ、女子軟式野球チームのコーチなど多岐に渡って活動し、多忙な生活を送ることができるようになったのは、アルバイト先の仲間をはじめとした周囲の友人による支えが大きい。彼は2年次のインタビューで「入学当初と比べて、だいぶ変わっ

たと思います。前よりもゆるくなった」(2005)と話しているが、それはアルバイトや大学の友人との交流のなかで徐々に変化していった結果だとしている。また今回調査時にも大学生生活を振り返り、安心する関係としてクラスの友人たちを挙げ、その理由を「聞いてくれるし、話してくれるし、いい悪いっていうのを比較的、今では一番言ってくれるから」と答えている。リハビリ的機能を果たしているともいえるこうした友人関係があったからこそ、大学進学との目的と同義であった野球部の活動を続けられなくなった後でも、彼は学校生活を送ることができたといえるだろう。

また金山は20社あまりの企業への就職活動を行なっているが、彼がそれだけ受け続けることができたのは、アルバイト先の同学年の仲間と「励まし合ったり、書類どうだとか言って、自己アピールの文章の話したり」と、一緒に取り組んでいた点が挙げられる。個々での取り組みが強いられがちな就職活動にとって、仲間の存在は彼にとって心強いものだったようだ。

こうした情緒的な支えとなっているネットワークの存在は、桑田のケースにも見いだせる。特に卒業後の私費留学時に語学力の問題などから落ち込み、「泣きそう」だった彼は、交換留学時にできた友人が愚痴を聞いてくれることで気持ちが落ち着いていったと話している。また桑田は、インターネット上で形成したネットワーク含めて多くの関係を持っているが、進路選択との関連では彼が「先輩」と呼ぶ日本人留学生から給付制奨学金の情報とともに進学を勧められたことが重要な契機となったほか、「先輩」からは受験に向けて進学先の教員を紹介してもらい、挨拶に行くといった行動もしている。中国語の習熟という意味では、高校在学時から先輩のツテで中国での在任経験のある人と話をしたり、大学では日本に來ている留学生と話をすることで、その語学力を上げていった。

大学卒業後、下田もまた将来展望に関して周囲の影響

を強く受けている。最も大きい影響を与えられたのが、公共料金のメーター検針のアルバイト先で会った元教師だった先輩である。彼はその先輩から、教師の仕事の厳しさをいろいろと聞かされるとともに、「先生は大変だからもうちょっと社会勉強したほうが(いい)」といったアドバイスを受けたこともあって、免許取得後すぐに採用試験を受ける予定を変更し、ひとまず民間企業で働くことを考えはじめている。

ネットワーク資源が比較的乏しい状況に置かれていたのが、川辺のケースである。彼女は学業以外では、部活やサークルには参加することなく、アルバイトも短期のものを一時期やっていただけである。そして就職活動では、エントリーシートの自己PR記入に際し、「書いてみて、これでいいのかなとか(思っちゃって)」(2006)と悩んでしまい、6社にエントリーしただけでそれ以上活動が続けることはなかった。同様に就職活動を止めたものの対照的なのが金山で、「(就職活動には)思い入れがなかった」と言いながらも、20社ほどの試験を受けている。彼が就職活動するうえで支えとなっていたのは、アルバイト仲間が同じように就職活動をしていて、互いに励ましあっていたということがあった。前節で述べたような要因以外にも、こうしたネットワークが比較的乏しいことが、川辺の就職活動に影響を与えていたのではないかと考えられる。

3) 小括

本節では、4人を大学卒業後になお学校に留まるという進路へと動機づけ、実際にそれを可能にした資源、そして進路選択の前提となる学校生活を送る上で支えとなっていた資源について明らかにしてきた。

家族の経済力や家族学歴、文化的背景といった家庭の資源は、それぞれの進路選択に大きな影響を与えていた。情緒的な支援はあるものの下田のように相対的に資源の乏しい者もいるが、金山と川辺は調査対象者の中でも際立って家庭の経済力があり、家族学歴が高い。また金山が入学予定の学校、川辺の進学している学校の学費はいずれも高額であるが、二人とも親が学費を捻出(金山は「予定」)している。桑田の両親はともに高卒であるが、姉は大学院卒であり、父親が会社社長ということもあり、家計自体には余裕がある。交換留学時の学費含む生活費は実質的に親が負担していた。

資源としてのネットワークという点では、傷ついたとき情緒的な面で支えてくれる友人の意義が、金山のケースに象徴的なかたちで見られた。金山はアルバイト先の仲間や大学の友人に支えられることで、傷ついた自己を

修復し、学生生活を再スタートさせていたのである。そしてネットワークは情緒面だけでなく、桑田のケースに見られるように、進学に際しての情報など具体的な支援を担っていった。さらに学校に留まるという選択のみでなく、職業的移行も含めた広い意味での進路選択への影響もまた指摘された。それは前節で示したような興味・関心と「やりたいこと」の維持にかかわり、下田のように今後における自身の進路選択を左右してもいた。

5. まとめ

本章では、四年制大学を卒業した後になお大学や専門学校といった学校に留まる者たちの移行過程を取り上げてきた。以下では、これまでの分析を通して明らかになったことをまとめておきたい。

4人は学生生活から就職活動までそれぞれ自分が歩もうとしてきた進路において何かしらの問題にぶつかることになった。それに際して、4人は志望変更も含めた問題への対処における「模索」を行ない、そのなかで〈学校から仕事へ〉の渡りにおける「仕切り直し」として、「やりたいこと」と結びついた〈学校から学校へ〉の移行を選択していたのである。このような「模索」を経た上での移行の「仕切り直し」は、自分が積み重ねてきた「やりたいこと」への努力や労力を無駄にたくないということ、そして就きたいと考えている仕事に就くための可能性を保持・拡張するという意味合いがあったのである。

なお、その際に考慮されるべきは、高度経済成長期以降の日本社会では、新規学卒一括採用という雇用慣行のもとで、学校から雇用への間断なき移行が標準化されてきたという点である。その強固さにより、学校にも職場にも所属していないことが、社会的に容認されがたいという事情が生じてもいた。このことは〈学校から仕事へ〉の移行に何らかのかたちでつまづくことが、その後の人生における大きな障壁となりうることを意味している¹⁴。本章で取り上げてきた者たち、なかでも就職活動を行なったものの内定獲得には至らなかった金山・川辺・下田にとって、学校に留まるという進路が浮かびあがるのは、そうした文脈でもごく自然な流れであるといえる。

その上で指摘しておきたいのは、「やりたいこと」の追求であれ仕事への移行の仕切り直しであれ、いずれにせよそれを学校に属して行なうという道を選ぶためには、在学のための経済的基盤の確保が必要になるということである。金山・川辺・桑田は、調査対象者の中でも経済的に恵まれた家庭に育っているが、それぞれ進学が可能となったのは、家庭の経済的援助があったこそだっ

た。一方、下田の家庭は経済的にけっして恵まれていたとはいえず、彼は経済的制約から免許取得に向けて困難な道を選ばざるをえなかったのである。なお、大学進学に際して下田が活用していた奨学金や、桑田が大学の交換留学制度により得ていた給付金などは、若者がそのキャリア形成を家庭の経済力ゆえに断念しないような公的支援体制という点で重要であると思われる¹⁵。また経済的・文化的資源という点だけでなく、情緒的な面で支えてくれる家族や、アドバイスをくれる先輩、相談できる友人など、さまざまな人たちに支えられるかたちで「学校に留まる」という選択を行っていたという点も重要であろう。

大学を卒業してもなお学校に留まるという選択は、1節でも述べたように、多くの者がたどるトラックではない。しかしながら90年代後半以降、〈学校から仕事へ〉の移行が不安定化し、また大きく変容した状況において、本章で取り上げた4人のように大学卒業後に〈学校から学校へ〉と移行することは、ただ闇雲に「やりたいこと」を追いかけたいといった気持ちゆえになされたこと、あるいはそれとも関係して仕事に就くことを忌避するといった個人々の志向だけの問題として考えることはできない。

今後の課題となるのは、こうした状況のなか、4人が希望どおりの進路を〈学校から学校へ〉を経由することで歩むことができるのか、あるいはそうではないのかを諸資源の影響を測りながら検証することである。

註

1. 今回インタビューの後、桑田に連絡を取ったところ、希望通りに大学院進学が決定していた。だが、調査時点では「希望」だったため、本章ではそのように扱う。
2. 「大学院等への進学者」とは、大学院研究科、大学学部、短期大学本科、大学・短期大学の専攻科、別科へ入学した者、また進学しかつ就職した者とされている。
3. 水月昭道『高学歴ワーキングプアー「フリーター生産工場」としての大学院』（光文社、2007年）は、こうした傾向が大学院進学者の職業的移行に与えた影響について批判的に論じており、重要である。
4. 先述の学校基本調査、リクルートワークス研究所「第24回ワークス大卒求人倍率調査」（2007年）を参照。就職活動における入学難易度による差については、小杉礼子編『大学生の就職とキャリアー「普通」の就活・個別の支援』（勁草書房、2007年）を参照

5. 桑田の大学生生活については「報告書②」105頁を参照。
6. 金山の家族背景については「報告書①」65頁、浪人時代については「報告書②」118-134頁、『18歳』138-141頁を参照。
7. 川辺の大学生生活については「報告書②」106-107頁、「報告書③」83-84頁、就職活動については「就職活動」47-48ページ参照。
8. この点については、「報告書③」第4章、「就職活動」を参照されたい。
9. 私たちの調べによれば、学内には動物園での実習やボランティアを紹介するサークルもあり、それらは動物関連の仕事に就くための情報源という意味でもツテという意味でも重要な資源となっているのではないかと考えられる。
10. 下田の大学生生活については「報告集③」79-80頁を参照、就職活動については「就職活動」56-58頁を参照。また今回調査時におけるアルバイト生活については、第2章参照。
11. 就職活動時期の傾向については、先述した小杉（2007）、特に第一章での分析を参照されたい。
12. 鍼灸医療にかかわる組織が設立した団体「鍼灸医療推進研究会」（<http://www.harikyu.or.jp>）によれば、「はり師・きゅう師国家試験」の受験者・合格者ともに近年は増加傾向にあるという。しかしながら、あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師免許取得者を対象とした量的調査（社団法人 東洋療法学校協会 <http://www.toyoryoho.or.jp/>）によれば、「はり師・きゅう師」課程卒業者の平均月収は約20万となっており、以上のことから鍼灸師資格取得に要する費用・期間に比してその見返りは乏しい現状が見えてくる。（それぞれの団体 URL には2008/12/07アクセス）
13. ここでは「報告書③」の終章3節1項「社会階層」を挙げておく。また高学費の問題については、田中昌人『日本の高学費をどうするか』（新日本出版社、2005年）が詳しい。
14. ここには、学校および職場の機能の包括性という特殊日本的事情が関与しているのであるが、それをプリンソンは〈場〉という概念により説明し、今日における若者の移行の問題について論じている（メアリー・C・プリンソン『失われた場を探して—ロスジェネレーションの社会学』池村千秋訳、NTT出版、2008年）。
15. ただし、下田が借りた奨学金は貸与制であり、その

返済が大学卒業後の彼の就労・学生生活にとって小さくない負担となっている点には留意が必要である。

第5章 「主婦業」への移行と内実

児島功和・進藤正樹・藤井吉祥

1. はじめに

本章では、女性既婚者であり、生活のなかで主に従事している活動が家庭内での家事や育児である岸田さやか・神崎晶子・堀実香の3名を「主婦」として、その移行の内実を見ていきたい。また活動のみでなく、彼女らの自己規定が「主婦」に置かれているという点も、ここで彼女らを主婦として扱う重要な理由となっている。なお「主婦業」とは、主婦として担っている家事・育児などアンペイド・ワークをはじめ、家計補助的な就労をも含みこんだ諸活動の総体を指している¹。

前回調査の報告²では、主婦にとって重要な契機である「結婚」について分析したが、今回はそこで扱っていた対象者のうち、実際に結婚し主婦としての生活を送っている女性たちについて取り上げる。前回調査報告で明らかになったのは、結婚という自分たちの新たな家族形成は、経済的条件により大きく左右されるということであり、互いの関係を支える周囲の人びとの存在もまた大きな意味をもっていたということである。それらの知見をふまえつつ本章では、結婚し主婦となった女性たちが置かれている状況に焦点を当て、その移行プロセスと実態について考察していく。

岸田・神崎・堀の3名の結婚や出産といった大きなイベントの時期はまちまちであり、同じ「主婦」とはいえ、その現状には隔りがある(表5-1参照)。5年目調査時で見れば、第一子を妊娠中である岸田、子育てに専念している神崎、すでに子どもが保育園に通い、働き始めている堀といった具合である。ゆえに本章では、今回調査時に焦点化するのではなく、過去の状況も対象に据えつつ、トータルに対象を捉えていく。

以下では、まず事例に沿いつつそれぞれの移行プロセスを丁寧に追っていくことにより、移行先としての主婦

業の実態について明らかにする(2節)。そのうえで、彼女らの主婦業がどういった基盤の上に成り立っているのかについて、経済面・ネットワーク面から分析する(3節)。そして職業的キャリアや家事・育児の内実など、仕事という側面から主婦業を切り取り男性既婚者(婚約者)と対比することにより、社会における主婦業の位置づけを明らかにする(4節)。最後に本章での検討をまとめ、そこから浮かび上がる論点について提示したい(5節)。

2. それぞれの移行プロセスと現状

1) 岸田さやかのケース³: 主婦という展望への一貫性と周囲に見守られたなかでの結婚

まず、高校3年の初回インタビューから一貫して主婦になりたいと語っており、卒業後4年目で高校在学時より付き合っていたパートナーとの結婚に至った岸田のケースを見てみよう。

B高校出身の彼女は高2の頃、友人の協力もあって相良健(第1章3節参照)と交際を始めており、初回のインタビューでは将来の進路についての質問に対し、「彼氏さんが就職安定してから」(2002)という留保をつけつつも、「高校卒業したら、花嫁さんになりたい」(2002)と明快に答えていた。しかし卒業後1年目のインタビュー時相良は無職となっており、実現のめどは立っていなかった。その後配管工の仕事に就いた相良は、就職して一年ほど経った時期に離職の危機を迎えるものの、結婚を望む彼女の後押しもあり、辞めずに続けることとなった。そしてその決意を契機として、「じゃあさっそく結婚式場探しに行こう」(2005)と結婚に向けての準備が進められ、2006年4月に入籍した。

パートナーの就業継続を直接の契機として現実化した結婚であるが、それは長年の準備期間を経てなされたものでもある。高校時代からふたりは互いの家を行き来し、両方の家に泊まるという「プチ同棲」生活を続けていた。そして双方の親から生活面の援助を受けるとともに、ふたりは収入の一部を両家の家計に回すなど、新たな家族

表5-1.

	出会い	入籍	挙式・披露宴	妊娠発覚—出産	ふたり暮らし
岸田さやか	2001年	2006年4月	2006年4月	2007年11月—	2007年1月～
神崎晶子	2005年	2006年4月	2006年5月	2006年2月—10月	2006年4月～ (後に親と同居)
堀実香	2001年	2003年4月	2003年4月	2003年1月—9月	2006年5月～

のメンバーとしての関係を徐々に築き上げてきた。また、ふたりは高校時代から結婚資金を少しずつ貯めており、そこから披露宴の費用（自治体の補助が受けられる式場）を全額まかなったという。そして結婚してしばらくのあいだは親元で生活しながら資金を貯め、およそ9ヵ月後に相良の職場の社長から家賃を半額にもらったアパートを紹介され、ふたり暮らしをスタートさせている。

結婚に向けて着実に歩みを進めてきた岸田であるが、実は「花嫁さん」のみを将来展望としていたわけではなく、その一方で保育士への希望も抱いていた。しかし家計の厳しさから、彼女は高校在学中からアルバイト代の一部を家計に回しており、親からは「専門（学校）とかは諦めろ」「お金ないから就職しろ」（2002）とも言われており、保育士に向けての進学を卒業後の進路として考えられる状況にはなかった。ただ保育士については、「自分の子どもができればやらない」（2002）とも話しており、子どもが好きだという思いの延長上に据えられた夢だったといえる。

なお就労については、高校在学時の終わりごろ友人に誘われて勤めはじめたスーパーで、卒業後も働いていた。しかし1年あまり経った頃に友人が辞め、仕事のミスや対人関係などの相談ができる人もいなくなり、彼女自身も離職している。そしてその後はホームセンターでのアルバイトを始め、結婚後も働き続けていたが、最初に妊娠した際に流産してしまったこともあり、再び妊娠した際には安静状態確保のために離職し、現在は体調管理と家事に専念している。

ホームセンターでのアルバイト就労は、抜けた人の穴埋めなどもあり、時間の定まらない生活であった。日によっては帰りが20時過ぎになることもあり、「ご飯も作ってあげられない」という思いに悩んでいたという。しかし結婚してから約半年後、彼女はパート扱いとなり、残業しても18時、休日などの裁量も利くようになった。アルバイトに比べれば、パートは発注や入荷などの業務を担うなど責任が重くなったが、「売り場を作るのがすごく楽しかった」と仕事へのやりがいを感じていた。基本は正社員とのペアで、怒られることもあったが「（失敗とか）ぜんぜん気にしないでいいよ」と声を掛けてくれるなど、彼女にとって働きやすい職場だった。また、アルバイト・パートに対しても、きちんと有給休暇の取得が促されているようで、妊娠した際も「もう休みたいだけ休んでいいよ」と言われていたそうである。そこに職場の人間関係の良さも加わり、2度目の妊娠とともに離職したものの、「（いずれ）ホームセンターに戻るかも」

という気持ちを抱いている。

現時点での将来展望については、まず「3人は最低でも」というように、出産・育児が念頭に置かれているが、一方で「早く仕事復帰したい」という思いも抱いており、家事・育児の合間の内職業か、前職への復帰を考えている。また、結婚直前の第3回調査では「前は生きてればいいなって思ってたけど、今は夫婦円満ならいいなって」（2005）と語っていたが、今回もまた「仲の良さはぜったい今と変えたくない」と、ふたりの関係を基本に将来を描いている。

2) 神崎晶子のケース⁴: 就職・留学と迷うなかで、 妊娠を経て結婚・主婦へ

次に、調査時で1歳半の子どもを抱え、子育てに専念している神崎のケースを見ていきたい。

A高校出身の神崎は、小さい頃から保育士になりたいと思っており、高2の時点で学校選びやピアノの練習を始めたりもしていた。そして高校卒業後、昼間は近所の保育園でアルバイトとして働きながら、夜間の短大に通うという生活を送っていた。アルバイト先で保育の難しさを感じながら、それを大学の友人と共有したり相談したりなどして、保育士についての学びを深めていた。

保育士に向かって邁進していた神崎だが、短大3年次のインタビューでは、「外国行くか、就職するか、結婚するか」（2005）というかたちで迷いを見せていた。迷いながらも「学校みんなの周りの流れるに」（2005）就職活動をし、早期に保育園への内定を得ていた。また結婚にかかわって、当時から付き合っていたパートナーと卒業後は同棲する予定であった。「一緒に暮らすなら結婚しちゃいなさい」（2005）という親の意向もあったが、「まだ別に仕事とかもしたいし」という彼女の思いや、「ちゃんと一年でも社会人として働いて欲しい」（2005）というパートナーの思いなどもあり、結婚に向けての貯金を積むということで結婚は待ってもらっていた。

そして短大卒業間際の2月、職場の近くへ引越す手はずも整え、すでに職場の研修にも2回ほど行っていたのだが、引越しの直前に妊娠していることが分かり、「就職しても（すぐに産休で）迷惑を掛けるから」と、就職を辞退することとなった。予定外の妊娠であったものの、「産むって頭しかなかったし、おろすことは考えてなかった」という。そして職場近くへの引越しもキャンセルし、パートナーの通勤時間や「やっぱり親元が自分的には安心だし」という彼女の意向などから、彼女の実家のマンションの上の階に新居を構え、結婚生活を始め

ることとなった。

家では、検診に通いながら昼間は両親宅でゆっくり過ごし、夫の休日には郊外にある夫の実家に顔を出す日々を過ごしていた。夫の実家に行くということについて彼女は、「嫁に行った身なだけで、(自分は)親元にいるから」と、相手方の家族への気遣いを語っている。その後引っ越しを経て、現在は彼女の両親と完全に同居することとなり、生活費として10万円を家に入れている。

出産に際しては、母親が仕事も休みにして付き添ってくれたうえ、自身の経験もふまえて世話をしてくれていた。夫もまた、「何していいかわからない」といった様子ながら付き添っていて、出産にも立ち会った。そんな夫に対し彼女は、「その時はすごい邪魔で」と感じつつも、「後々思ってみれば、居てくれてよかったと思う」と当時を振り返っている。そして出産後は、神崎の実家で夫とともに過ごし、母親の協力を得ながら子どもの面倒を見ていた。2、3時間ごとに繰り返される夜泣きに対処したり、乳児湿疹が出てきて病院通いを続けるなど、子育ての奮闘を続けていた。

なお、夫は彼女が短大3年のときに勤めていたアルバイト先で高卒正社員として働いており、朝早くから夜遅くまでの長時間勤務である。そのため、なかなか子どもが起きている時間に帰って来られず、一緒に遊ぶことも難しいため、子どもから人見知りされるようになってしまった。また夫は、金銭面や生活面でのルーズさもあり、神崎から「不安なことはだんなの成長」「子どもの面倒は見ないし、自分のことでいっぱい」と叱咤されている。しかし仕事の愚痴をこぼすこともなく、休日には自ら買い物に行って料理を作ってくれるなどしている。

そんな夫の状況から、子育てはほとんど彼女が一手に引き受けており、ストレス要因ともなっているのが、育児の大変さ以上に、子どもが成長していくことの喜びを感じながら、育児に専念している日々である。また、地元の友人が休みのときには家に来てくれて、子どもと一緒に遊んでくれており、夫よりなついているほどだという。

そして就労に関しては、「今はいっぱいいっぱい」「自分の子と他の子は違うな、という部分があった」とのことで、保育士からはしばらく離れようと思っている。一方で「仕事しているときはストレス発散になる」という理由から、子どもが幼稚園に入った際にはパートで働こうという思いも抱いている。

3) 堀実香のケース⁵: 思わぬ妊娠により、急遽結婚・出産、その後就労へ

A 高校出身の堀は、高校3年次の最初のインタビューで、介護福祉士の資格取得を目指して専門学校への進学を予定していた。進学先は、勉強は厳しいが就職先が多いという姉が通っている学校に決めた。姉からは学校での様子などいろいろと聞いており、「大変だよ、覚悟しときな」という激励を受けていた(2002)。

しかし卒業間際の1月に、妊娠していることが分かる。最初はその事実をなかなか受け入れられず、どうしてよいか分からない状態であったが、付き合っていた当時大学4年生のパートナーと相談し、「じゃあ産もうか」となった。専門学校は途中まででもよいので進学したかったというが、「(身体が)危険ですよ」と学校側に言われ、進学を辞退することとなった(2005)。

そして4月になり、入籍し身内だけで式を挙げた。5月にはアパートを借り、自分たちだけの生活を始めた。夫は大学卒業後、ふたりの生活費をまかなうために量販店の販売員としてアルバイトを始め、ほぼフルタイムで働いていたが、1年後に転職し、堀の言葉を借りれば「ホントに自分に合ってる」というアミューズメント系の会社で契約社員として働いている。勤務時間は不定期ながら、遅くても夜9時には帰ってくるという。社会保険などはきちんとしておりボーナスも出ている、正社員登用の制度もあるようで、比較的安定した条件で働いている。

一方堀は、徐々におなかが大きくなり、体を自由に動かすことができず、眠かったり遊べなかったりとしんどかったものの、病院に行く以外には家で家事をして日々を過ごしていた。そして出産前後の1ヵ月ほどのあいだは、実家に戻り面倒を見てもらっていたが、手のかからない子どもで夜泣きも病気もしなかったそうである。その後、子どもが立ち歩きできるようになってからは、周りをうろついたり物を荒らしたりして目が離せず、大変であった。また新聞の折り込みチラシで自治体が開催する幼児教室を知り、毎回場所も変わるため不定期参加であったが、何度か通うようになる。自分より年齢がかなり上の親が多かったものの、話しかけてきてくれる人と仲良くなり、一緒に遊んだりもしていた。

その後子どもが2歳になるころには、図書館や自治体の文化センターのキッズルームに貼ってあったチラシを見て、近所に住む2歳児限定の子育てサークルに加入し、毎週1回のペースで1年間通う。そこは文化センターが出資し、母親たち自身が企画・運営を担うという形態で、絵本を読んだり外で遊んだり、運動会やクリスマス会なども行っていた。そこでは子どもの友だちが増えると

同時に、堀自身も友人が一気に増えたという。年齢差もあり、気を遣ってしまうなど、もともと友だちを作るといふことにそれほど積極的ではなかったという彼女であるが、子ども同士で仲良くなり、それがきっかけで親同士も仲良くなるなどして、「関係も変わった」という。

そして子どもが3歳になる年度初めからの保育所入所に向けて、11月ごろからアルバイトを始めることとなる。保育所入所について、当初はほとんど知識もなく、サークルの人や同時期に出産した高校の同級生から情報を入手し、諸手続きを進めていく。ひとまず職場近くの無認可保育所に子どもを預け、保育料をまかないながら配偶者控除内ぎりぎりまで働こうと週3~4日働いていた。そして無事、自宅からすぐ近くの保育所に入れることとなり、その送り迎えの合間に働くという生活を続けている。

アルバイト先はかねてより友人から「一緒に働かない？」と誘われていた喫茶店で、人間関係としても仕事内容としても問題なく、安心して働ける環境にある。さらに給料も上がりボーナスも出て、「けっこうやりがいになっちゃう」とのことである。ただ通勤に30分以上かかるため、子どもの送り迎えや買い物などを考えて、近所の職場を探そうか検討中である。

また、出産のため一時は断念した介護の仕事に就くという展望について、子どもが保育所に通い始めてゆとりができたこともあり、あらためて考え始めている。高卒後の進学予定先であった専門学校については、内容が充実しているという魅力を感じつつも金銭的な負担から躊躇している。そして職業訓練校や通信教育で資格取得を考えるも、時間や費用の都合から、無資格のままとりあえず働いてみることにして、介護の派遣会社に登録している。まだ研修段階で、実際の現場には行っていないものの、時給の低さや勤務時間の少なさもあり、主たる収入源としてではなく「介護系の時間」として、週1日のみ働く予定である。

4) 小括

以上、3名のこれまでの経緯をやや詳細に追ってきたが、ここではそのプロセスをまとめ、主婦業への移行がもつ意味について触れながら、次節以降の考察につなげたい。

まず結婚という側面から3名を見れば、いずれも出産と深く結びついていることが分かる。神崎・堀はともに妊娠発覚に伴う結婚であり、出産と結婚はセットになっているのだが、岸田においても「結婚式終わったあたりから、子作りに励めれば(笑)」(2005)といったように、

結婚を機としての出産を考えていた。もちろん、結婚と出産はかならずしもセットになるわけではないのだが、ここでの3名にとって、主婦への移行と親への移行が一定の連動性をもっており、主婦業のなかでも育児が重要な側面として位置づいていることが分かる。

そして彼女らの移行プロセスを追った場合に重要だと思われるのが、展望の変遷についてである。神崎・堀は次の進路に渡る直前での妊娠・結婚であり、それまでの展望を断念するという結果となっている。堀の場合にはふたたび当時の展望に向かい始めているが、家族のことも考えて、そのルートを変容させている。岸田は比較的一貫して主婦への展望を抱き、それに向かって着実に歩みを進めてきたという側面が強いが、それでも「やっぱりやりがいがあった」と感じていたパート就労を中断することとなっている。また3名とも、なんらかのかたちで仕事に就いていたいと思っており、専業主婦であり続けることを望んでいるわけではない。こうした意味において、主婦にとっての展望とそのプロセスを捉える際には、就労との関係で見ていく必要がある。

このような彼女らの主婦業、とりわけ育児をとりまく状況について、また彼女らにとっての展望の変遷、なかでも就労との関連について、次節以降詳細に追っていくこととしたい。

3. 主婦業を支えているもの

ここでは彼女らの主婦業がどういった基盤・支えの上に成り立っているのかについて見ていく。まず家計となる経済的基盤がどのように形成されているのかについて確認し、経済面にとどまらない支えとして家族のサポート、および友人・仲間との交流について分析する。

1) 経済的基盤

家庭内で家事や育児を行なっている彼女らであるが、その仕事に主に従事するためにはさまざまな基盤を確保することが必要となる。その中心となるのは、経済的基盤の確保による家計の維持である。

たとえば岸田は、付き合っていた相良の就労継続という収入源の安定化が結婚を決定づけたといえる。岸田は「夢はハタチ結婚」と語っていたものの、実際に結婚したのは22歳になってからである。この2年間の開きは、ふたりの生活の経済的基盤としてのパートナーの就労が安定するまでに要した期間であるとともに、結婚資金を積み立てていくための期間であった。神崎に関してパートナーが正規雇用であったことは、結婚・出産へ

と決意を固めることになった要因として大きいだろう。堀の場合、彼女が妊娠したときはふたりとも学生であり、どちらかが安定的な収入源を持っているわけではなかった。だがその後、彼女のパートナーは家計を支えるため収入を重視した仕事に就き、今回調査時には比較的安定した稼ぎを得ていた。また彼女も節約をこころがけ生活費を抑え、アルバイトをして家計を支えている。結婚の前であれ後であれ、新たな家族生活を成り立たせていく上で、収入源の確保はきわめて重要な課題となっているのである⁶。

もっとも、収入のみが経済的基盤を成り立たせているわけではない。限られた収入からいかに生活費を効率的に運用するかといった家計のやりくりもまた、生活を大きく左右するものとなる。その役割を担っているのが、主婦となった彼女らである。贅沢ができるほどのゆとりがあるわけではない収入のなかで、堀は余分な出費を控えながら安いものを探してまとめ買いをし、子どもの服は貰い物で済ませるなど、「普通の主婦の知恵」を駆使して生活を営んでいる(2005)。また神崎の場合、給与は彼女が管理し夫にお小遣いを渡すというかたちをとっており、電気代や水道代を抑えるために「決まりを作って、できたらお小遣い500円アップ」といった措置をとるなど工夫をして、住居費・生活費や引っ越しのための貯金を毎月捻出している。

そうした夫婦双方の営みのなかで、経済的基盤が作られているのであるが、それはけっして磐石な基盤というわけではない。堀の夫は非正規雇用である契約社員として働いており、岸田の夫は日給月給のため月により収入の変動が大きいなど、ともに不安定な要素をはらんでいる。神崎の場合には、夫の収入こそ比較的安定しているといえるが、その夫の金銭管理の面で苦労することがあるなど、苦労を抱えている。しかし、そうした不安定な要素や苦労を抱えながらも、彼女らの語りがさほど困難を感じさせないものとなっているのは、家族や友人など周囲の人たちがいろいろな側面から生活を支えているためである。つまり生活(およびその仕事)を支える資源は、経済的なものばかりとは限らないのである。

2) 家族の支え

そんな周囲の人たちからの支えとして、ここでは家族に着目してみたい。まず夫について見てみると、岸田の夫の場合、残業がほとんどなく仕事帰りに買い物をしてから帰宅するなど、日常的に家事参加を行なっている。だが一方で、神崎の夫の場合、朝の出勤は6時と早いにもかかわらず帰宅は終電になるという長時間の勤務状況

があり、家事や育児への参加は少ないようである。それゆえ、自分の子どもから人見知りされてしまっている。また堀の夫は、仕事の時間が不規則であることもあって、帰宅時間が遅くなることも少なくないという。しかし、神崎・堀の夫にしてみても、休日には買い物や料理、子どもの送り迎えなどを担っており、家事分担を忌避しているわけではない。男性の家事・育児への参加をめぐるさまざまな議論が行なわれているが、上記で見てきたような夫の家事・育児への参加の仕方の違いは、単にその当人の家事・育児に対する意識の低さの問題というよりは、男性の働かせられ方の差によって生じているものだといえよう。

次に、夫以外の家族について見ていこう。彼女らにとって特に自身の母親は、家事・育児を行なううえで、夫の家事・育児への参加だけでは足りない部分を補う重要な役割を担っていた。岸田・神崎は親と同居していた時期もあり、それによって家事負担を軽減させているし、神崎・堀は出産の前には実家に戻っており、母親の支援を受けている。そして堀は、ときおり子どもを実家の両親に預けることによって、休日を夫とともにゆっくり過ごす時間を確保している。

また、家族の支えにかかわって、結婚に伴う親子関係の変容も指摘できる。堀の場合、自ら家事・育児を担うようになったことにより、それまでそれらを一手に引き受けていた親のありがたみを再認識し、強い感謝の念を抱くようになっていく。岸田の場合、以前は父親とはほとんど話さないという状況だったものの、結婚後は「父親との関係が良くなった」という。その変容には結婚自体が契機として機能しているとともに、相良が間に入るにより、徐々に話す機会が増え、両者の関係がほぐれていったという側面も含まれている⁷。彼女らにとって結婚とは、ふたりの関係を軸とした新たな家族形成であるとともに、それぞれの家族関係の再編ともなっているのである。

3) 友人・仲間

今度は友人・仲間関係に注目してみよう。友人・仲間は、結婚生活や育児におけるストレスを緩和してくれたり、ふたりのパートナーシップを承認してくれたりする存在として重要である。

まず岸田においては、以前から岸田と相良のふたりの関係を知っている共通の友人がいることで、その関係が安定的に維持されているという側面がある。ふたりが付き合い始めたのも、学校での周囲の友人の協力があってのものであった。その後の結婚生活のなかでも、彼女が

妊娠中には病院に付き添ってくれる友人がいるなど、多くの人たちに支えられるかたちでの結婚生活を送っている。

次に育児のサポートとしての友人ということで、堀と神崎の二人を見ていきたい。神崎は子どもが小さいこともあり、なかなか外に出ることができない時期に、昔からの友人が家に来てくれていた。そして子どもとも遊んでくれているようで、「楽させてもらう」という表現にもあるように、友人との交流が育児ストレスを軽減させてくれている。彼女の場合、これまで培ってきた地元・高校時代の友人などとのつながりを資源としながら育児を行なっているという点で、岸田のネットワーク資源との類似性が見られる。

一方で堀は、同じく母親となった同級生と情報交換をするなどして支えあう傍ら、図書館など公的機関を利用したり、地域の子育てサークルに所属したりと社会的子育て支援をうまく活用している。彼女はそこへの参加を通して、子どもの活動の場を獲得するだけでなく、多くの「母親」仲間と知り合い関係を築き、育児などについての相談や情報収集などを行なっている。この公的資源が介在した新たな友人・仲間ネットワークの形成は、とりわけ彼女らのような若い母親にとって大きな意味を持っている。若年出産者は若年者であるがゆえの経済的基盤の乏しさがあるなかで、同じ境遇の同世代仲間も少なく、ともすれば孤立しがちである。そのため、ここで築かれる仲間関係は、保育園の入園の仕方や育児で起こった問題への対処法などを知る情報源として機能しているのと同時に、母親という同じ立場にいる友人を得る機会となっているのである。

社会的子育て支援を利用して母親仲間を増やしている堀と親族関係およびこれまでの地域ネットワークの中で育児を行なう神崎という異なる二人の姿が見えてくるが、両者に共通しているのは、岸田のパートナーとの関係でも見られたことであるが、育児という、ともすれば家庭内だけに閉じたものだと考えられがちな営みもまた、友人・仲間という多くの「家庭の外の人」の参入によって営まれているということである。

4) 小括

本節では、主婦業に専念する彼女らの生活を支えているものについて見てきた。当然のことながら、結婚と出産、そして主婦業は同義でなく、結婚後も就労を主とした生活を続ける女性もおり、「シングルマザー」として生計を立てていく者もある。しかし本章で取り上げている3名にとって、結婚することは主婦業を担うことを意味し、出産・育児に取り組むことと連動していた⁹。そ

して彼女らが主婦業に専念することを可能としていたのは、経済的基盤の確保と周囲からのさまざまな支えであった。経済的基盤に関しては、けっして磐石なものとはいえないながらも、日々の生活に苦しむというほどではない。そして彼女らは、家族によるさまざまな支援を受け、また友人や母親仲間などの交流を行なうなかで育児を行ない、生活をまわしていた。ふたりの関係の承認ということから具体的なサポートまで、ふたりの関係だけに閉じることのない開かれた関係が彼女らの生活を比較的安定したものにしているといえるのではないだろうか。

4. 主婦にとっての仕事とその意味

本節では、仕事という観点から、彼女らのこれまでの移行の様子・現状について明らかにしたい。彼女らの移行の様子については、2節で詳細に追ってきたが、それを男性既婚者(婚約者)である相良健・小林俊介・小谷恭介(第1章3節参照)と比較することで、主婦という進路の特徴を示したい。そのうえで、主婦となった彼女らが担っている主婦業の内実について、詳細を追っていく。

1) 職業的キャリアからの離脱と再就労

彼女らの進路を追った際、第一に指摘できるのは、出産を境とした職業的キャリアからの離脱である。そしてその選択は、少なからず職業的キャリアへの思いを絶つてのものでもあった。

まず堀の場合、妊娠に際しての戸惑いは大きく、いろいろと迷った末の出産決意であった。出産を決意したのにも、彼女は途中までもよいので学びたいと考えていたが、身体を配慮した専門学校からの促しもあり、進学を断念した。神崎の場合、妊娠発覚に際しては迷うことなく決断がされているのであるが、その前段階である短大3年次には、「園長がすごいいい先生」で、「子どもがすごいのびのびしてる」という職場の雰囲気にも満足もいて、卒業後に控えた保育士としての仕事を「5年後は続けていきたい」といった展望を語っていた(2005)。しかし妊娠の発覚に伴い、つわりや産休などで職場に迷惑をかけてしまうということで、就職を辞退している。そして岸田の場合、「アルバイト」から一定の責任と勤務裁量が付与された「パート」へ昇格し、待遇の良さやいろいろとフォローしてくれる同僚の存在もあり、やりがいを感じながら働いていた。最初に妊娠した際にはそのまま働き続けていたのだが、「仕事とかあって病院に行けなくて」、結局流産をしてしまう。このこともあって彼女は次に妊娠した際には離職し、家事に

専念している。

妊娠・出産に伴い、ひとまず職業的キャリアから離れている彼女らであるが、「無業」のままではと考えているわけではない。堀は子どもの保育園入所に伴い喫茶店のアルバイトを始めているし、神崎も子どもが幼稚園に通うようになった際には、父の店を手伝うか、パートで働こうと思っている。岸田の場合、しばらくは出産・子育てに専念することになるであろうが、それでも「早く仕事復帰したい」と思っており、内職もしくは以前働いていたホームセンターでのパート勤務を展望している。

しかし、彼女らにとっての再就労は、家事・育児に支障をきたさない範囲でのものであり、あくまで家計補助としての位置づけに抑えられている。10～16時で週3～4日喫茶店でアルバイトをしている堀は、同僚との関係の良さやボーナス支給、昇給などもあり、やりがいを感じつつ精力的に働いていたのだが、年間収入が103万円（扶養控除限度額）を超えそうなペースとなっていることが分ると、それを103万円以内に抑えるようシフト調整をし、就労を控えている¹⁰。また、子どもが小学校に上がった際には、学童保育の要件が厳しいため、子どもの帰宅時間に合わせて仕事を終わらせるようにする必要が出てきそうだと予想している。

以上のように、彼女らにとっての再就労は、あくまで主婦業の中心的業務となる家事・育児に支障をきたさない範囲で、かつ制度的にも制約されたなかで営まれていることが分かる。

2) 「主婦業」の内実

結婚・出産を経て主婦となった彼女らであるが、ここでは彼女らが主婦として日々営んでいる仕事について見ていきたい。

まず家事については、さほど詳細に語られているわけではない。しかし日用品の買い物や食事の支度、掃除・洗濯など、いくつもの作業を日々こなしている家事労働は、けっして容易ではない。それまであまり家事などはしておらず、急ぎょ家事を担うこととなった堀は、「家に帰るとご飯があるのは素晴らしい」ということをあらためて実感し、「今は自分で作らないと食べられない」と家事の大変さを語っている（2005）。さらに出産を前にした時期には、つわりや身体のだるさ、眠気などに耐えながらの作業である。岸田は「一回もどきないと、もう立ってられない」ほどに厳しいつわりの症状のなか、朝早い夫の出勤に間に合わせるよう弁当を作っている。神崎の場合、家事は実家の両親の協力を得ながら行なえているのであるが、夫の勤務時間が長いと、結婚披露

宴の準備などは彼女が一手に引き受けてもいた。

こうした日常のなかに埋め込まれている家事に対し、彼女らにとってより大きな意味をもってくるのが育児である。まずおむつや服の用立てから食事の用意、子どもの学資保険の捻出まで、ふたりでの生活にはなかったさまざまなことを考えねばならなくなる。それらに加え、子育て特有の大変さもある。堀の場合には、わりと手のかからない子育てであったようだが、歩き出すようになってからは、物を荒らしたり事故に遭わないよう「目が離せない」（2005）状態となっていたという。また、子どもを図書館に連れていき絵本を見せたり、幼児教室に通わせたりして遊ばせてもいる。その後保育園へ行くようになってからは、朝夕の送り迎えや急な発熱への対応などが必要となり、緊張感が絶えない日々だという。神崎の場合は、2、3時間おきに繰り返される夜泣きへの対処に苦心していたと同時に、子どもの肌が弱いために病院通いを続ける日々であった。そして夫は帰宅も遅いため、子育ては彼女が一手に引き受けている。そうしたなかで、「今はいっぱいいっぱい」になりながらも、「なんか、慣れちゃった」と育児にいそしんでいる。

以上のような家事・育児における一つひとつの作業は、日常のなかに埋め込まれた些事であるかもしれない。しかし、家庭での日常生活のなかにはこうした仕事が無数に存在しており、それらを臨機応変に編成しながら営んでいるのが主婦業といえるだろう。さらに出産後の再就労まで含めれば、彼女らの生活はきわめて多忙かつ複合的なものとなるのである。

3) 男性既婚者（婚約者）との対比

次に、男性既婚者（婚約者）の職業的キャリアの変遷について確認し、それとの対比のなかで主婦である彼女らの現状について見ていきたい。

まず彼らの移行から指摘できるのは、彼らにとって結婚することは、何よりも自分の収入によって妻や子どもの生活を経済的な面でしっかりと支えられるようになること、すなわち経済面において職業に強く結び付けられるようになるということである。

相良と岸田が結婚に踏み出す契機となったのは、相良が離職の危機に迫られた状況を乗り越えられたためであった。そして彼は結婚したことにより、「前よりは仕事しなくちゃいけない」という意志を抱くようになっていく。小林は、高校在学時から整備の仕事に就くことを考えており、専門学校卒業後は望み通りの仕事に就き、その延長上に将来展望を抱いていた。しかし恋人の妊娠をきっかけに結婚を決意し、収入を増やすために整備士

としてのキャリアをひとまず中断し、店長職へと職種を替えている。そして整備士として働いていた時期からすでに長時間労働だったものの、店長となった現在は「どんどんどんどん忙しくなる」とのことである。板金工場で働いている小谷は、結婚を予定しているパートナーと一緒に住んでいるが、それは仕事量の増加に伴う昇給をきっかけとしていた。現在はプロを目指してボクシングに打ち込んでいるため、結婚は待ってもらっているものの、生活費を収入に応じて折半するなど生活基盤はふたりで支えるものとなっている。それゆえボクシングを本格的に始めることについて、パートナーからは「やってもいいけど仕事は普通に、今まで通りくらいの収入は(確保してほしい)」と言われている。

以上のような、収入源確保と連動した結婚と職業との結びつきは、主婦となった女性たちとは対照的である。結婚を前後して、職業的キャリアを中断し家事・育児への従事へと至っている主婦に対し、男性既婚者の場合には収入源確保を第一とするような変容が生じ、結果として職業へのコミットメントをより強めていた。そこには、より多くの稼ぎを得られる職が男性に偏っているという労働市場におけるジェンダーバイアスや、出産に伴う就労の一時的中断が不利益とならないようサポートする体制が実質面において整っていないこと¹¹などの影響が強く働いているといえよう。

そういった現状とも密接にかかわって、ジェンダー規範による性別役割分業もまた確認できる。相良は次のように話している。「[結婚して意識は変わった?]自分が働かないとあれなのかな、自分が働いて生活していかないといけないというのがあるんで、一家の大黒柱みたいな」。もっとも彼の場合、現実問題として現在は出産準備に専念している岸田を経済面で支えていくという課題があるために、生活費を稼ぐという役割を負っているのであるが、「大黒柱」という言葉には性別役割をめぐる規範も込められているといえよう。そして「一家の大黒柱」として男性が働くことは、他方で家事や育児といった仕事を妻が主に担うことにもつながっている。それを端的に示しているのが、「花嫁さんになりたい」(2002)という岸田の展望であろう。その具体的な現われとして結婚後には、岸田は相良より帰宅時間が遅くなってしまっていた時期に、自分が夫のための食事を用意できないことを嘆いていた。そこには食事作りを自己の役割として積極的に位置づけている様子がうかがえるだろう。また神崎の場合、就職と同棲は両立させようとしていたものの、結婚との両立は「二つ新しいこと(は)できない」(2005)と留保をつけていた。この同棲と結婚との違いからは、彼女にとって結婚するということが、主

に家事・育児を担う主婦となるということの意味していたと捉えうるであろう。

4) 小括

本節では、仕事という観点から、彼女らのこれまでの移行の様子・現状について明らかにしてきた。

まず職業的キャリアとのかかわりでいえば、結婚・出産に際し収入源の確保という面で職業への強化が見られる男性とは対照的に、主婦となった彼女らに共通しているのは、自身の職業展望をひとまず断念しているということであった。このことは、夫婦間において経済的基盤の不均衡が生じていることを意味している。彼女らにとってこの不均衡は、夫婦間での役割分業がそれなりに機能している現状であれば、問題として顕在化しにくいものであろう。しかし、なんらかのアクシデントが生じ、夫の収入や周囲の支えが得られない状況となってしまった際には、さしあたり彼女ら自身の収入が頼りとなる。そうしたときに、中断された職業的キャリアの重みが出てくる可能性が皆無とはいえない。本調査では今年度の結果も含め、フリーターから正規雇用への移行は、とりわけ女性にとって厳しい状況にあるということが確認されている。そして一般に主婦とカテゴライズされる彼女らもまた、出産に際して無業の状態にあるわけで、そこから安定収入を得られるような正規雇用への就職は難しいことが予想される。

そして、結婚・出産に伴い生じてくる家事・育児という仕事について見てみると、夫のかかわりは小さいものであった。女性男性ともに家族のためを思い、日々働いているという点では同じであるが、役割の担い方において決定的に異なっている。相良たち男性に求められていたのは、家族の生活を成り立たせていくための収入源を確保するということであり、職場での自身の奮闘が金銭を介して家族にもたらされるという順序となる。一方で堀たち主婦の場合、主に担っているのは「家庭内」の仕事である家事・育児であり、それは夫が「家庭外」で働いて収入を得ることができるとの前提をつくること、そして子どもや夫の成長や健康に配慮し、自身を含めた家庭の生活をまわすという営為である。この営みは、彼女らの奮闘によるものであると同時に、受け手となる家族との直接的かつ応答的な関係のなかで展開されるものである。こうした特性をもつ家事・育児が、労働市場のジェンダーバイアスや性別役割分業規範などを介することにより成り立っているのが、「主婦業」なのである。

5. まとめ

本章では、岸田・神崎・堀の主婦業への移行とその内実を見てきた。本節では、これまでの分析を通して明らかになったことを整理したい。

まず2節で見てきたのは、各自のこれまでの移行のプロセスと現状である。そこでは彼女らにとって、結婚と出産とが分かちがたく結びついていることが確認できた。またその結びつきともかかわって、彼女らにとって結婚・出産は、職業的キャリアからの離脱と主婦業への移行を意味していた。それぞれが経てきた経緯はさまざまながら、析出された出産・就労という論点は、女性にとっての移行を考えていく上で重要な一側面であるといえるであろう。

そして主婦となった彼女らが、どのような基盤の上に現在の生活を営んでいるのかを見たのが3節である。そこでは収入源を確保する夫とそれを基にやりくりする彼女ら主婦という役割分業により、結婚生活を成り立たせていく上で求められる経済的基盤が確保されていることを確認するとともに、彼女らの主に担っている家事や育児が、多くの支えのなかで営まれていることを確認した。ただ、彼女らを支えている周囲の人びとは、堀の子育てサークル以外は私的なつながりがその中心となっており、そういったサポートを得られるのは周囲との良好な関係を維持できてきた者に限られてしまうという問題もある。それゆえ、家事・育児に対する公的支援の整備・活用などを通して、事例から確認されたような「開かれた結婚生活・育児」がどの家庭においても可能となるような環境を社会的に整える必要があると考えられる。

さらに、主婦業への移行を男性との対比で見たのが4節である。彼女らの移行はまず職業的キャリアからの離脱としてあり、家庭内での家事・育児を担う存在として自らを位置づけるというものであった。一方、男性既婚者の場合には収入源の確保という意味での就労への強化が見られ、主婦との対照性が際立っていた。この性別役割分業に基づき営まれている家事・育児（および補助的就労）こそが、主婦業という仕事なのである。

この主婦業は、職業的キャリアから隔たっているという意味で経済的側面を中心に社会的制約が少ないが、一方で主婦業の内実を追ってみれば、経済的側面とは違った評価もまた浮かび上がってくる。それは彼女らの行なう家事や育児が、家族に対する直接性と応答性に富んだケアの営為であるという点である。

そのことは、堀と神崎の育児についての語り象徴されている。堀は自分の子どもがしゃべり始めたり、自分が教

えたことをそのままやってくれたりすることに達成感を感じており、神崎もまた「楽しいことは、やっぱり子のこの成長を見たときかな」（2007）というように、子どもがだんだんと育っていくことを大きな喜びとして感じている。

もちろん、育児により生じるストレスも少なくないが、二人はそれ以上に子どもの成長を眼の前で実感できることの喜びを感じているのである。それは育児という営為に対する報酬が、直接的な応答性に沿って返されることを意味しており、金銭という媒介を挟んで得られる報酬とは対照的なものである。もちろん同じ報酬であるからといって、どちらか一方のみで代替されるわけでもないし、男女における不均等が生じている現状は解決されるべき課題であるといえる。さらに、性別にかかわらず私たちが就労し、生活し、成長していくうえでこのケア的営為が担っている役割は大きい。これまでその重要性を私事に押し込められてきたケアの営為の公的・社会的意義について、あらためて見つめなおしていく必要があるのではないか。

このケア的営為にかかわって指摘できるのが、家族と一体となった主婦の将来展望である。たとえば堀は、介護職に就くという展望をふたたび抱くようになっているが、専門学校に通い直すことは考えておらず、「それだったら子どもの学費に回した方がいい」（2007）と話しているように、自身のキャリア形成を子どもに託している。また岸田の場合、夫の相良が仕事で一人前になることを将来像の筆頭に挙げていたのに対し、子どもを産んでいることや夫と一緒に過ごせていることを第一に挙げている。彼女らは自身の今後において、夫や子どもの存在を常に意識したかたちで語っているのであるが、こうした家族との一体性が、彼女らにおける「アイデンティティとしての主婦」の源泉となっているのである。もとより「家族とともに生きていく」という意味では、家族のことを思い職種を替えた小林のように男性も同じであるが、その意味合いは若干異なっている。男性の場合には、就労という家族の外の世界に眼を向けながらの一体化であり、いわば「家族を背負う」というかたちとなるのに対し、主婦の場合には家族に目を向けながらの一体化であり、「家族を抱える」というかたちとなる。

今後の課題としては、こうしたジェンダー化された両面性が、今後解きほぐされていくのか、あるいは逆に強化されていくことになってしまうのか、彼女らの軌跡を今後とも追っていくことにより、より長い時間軸の下で検証していきたい。

註

1. 「主婦」の定義については、無業者に限定するものから既婚女性全体にさえ拡張可能なものまでさまざまであるが、ここでは「主に家庭内の活動を行なう女性既婚者」とすることにより、一定の限定化をかけた。「主婦」定義については、国広陽子『主婦とジェンダー—現代的主婦像の解明と展望』（尚学社、2001年）など参照。
2. 「報告書③」第5章、『18歳』第7章参照。
3. 結婚に至るまでの過程については、『18歳』第7章、「報告書③」89-90頁に詳しい。またフリーター生活については、「報告書③」29頁など参照。
4. 短大での様子については「報告書②」107-108頁および「報告書③」70-71頁、結婚については「報告書③」91頁参照。
5. 彼女のこれまでについては、「報告書③」89頁参照。彼女は第2回調査は出産直後ということもあり、受けていない。また第3回調査では、子どもが小さいこともあり、電話でのインタビューとなった。
6. なお内閣府「平成17年度版 国民生活白書 子育て世代の意識と生活」では、結婚・出産を望む者の割合が減っているわけではないものの、経済面での負担がそれらを抑制させているという傾向が指摘されている。
7. 一方、相手方の家族に新たな参入者として加わるといふことに伴う齟齬が生じることもある。たとえば神崎は、夫の家族・親族とのやりとりにおいて、助けられている面もありつつ、同時に気を遣ってしまうなどストレスを抱えてもいる。
8. 厚生労働省「平成19年 人口動態統計」によれば、全体（とりわけ20代）の合計特殊出生率がこの10年（1995-2007年）で低下しているなかで、10代の合計特殊出生率は上昇している。しかし出生の全体数からすれば、10代の出産者はごくわずか（1.5%ほど）にとどまる。また、東京都社会福祉協議会が若年出産者に特化して実施した調査である「10代で出産した母親の子育てと子育て支援に関する調査報告書」（2003年）によれば、10代出産者における同世代ネットワークの形成困難が指摘されている。
9. 堀と神崎はいわゆる「できちゃった婚」（嫡出第一子の妊娠期間よりも結婚期間が短いケース）という結婚形態となるが、内閣府「平成17年度版 国民生活白書」によれば、「できちゃった婚」の割合はこの20年間で倍増し、現在では夫婦の4組に1組

は「できちゃった婚」となっている。特に、15～19歳では嫡出第一子のうちの8割以上、20～24歳では約6割が「できちゃった婚」により生まれている。ここには、経済的負担などを背景として、漠然とした不安から結婚へと踏み切れずにいる状態に対する「きっかけ」となっているという側面があるとともに、「子どもができれば結婚した方が良い」という意識、そしてひとり親で生活を立てていくことの難しさなどが強く影響していることがうかがえる。

10. 所得税における配偶者控除や会社からの扶養手当などの限度額（通称「103万円のカベ」）を指す。他に社会保険料の被扶養者の限度額（「130万円のカベ」）など、もともと家計負担の軽減として位置づけられている優遇措置であるが、限度額を多少超える程度の収入である場合においては、差し引きの手取りの逆転現象が起きてしまう。それが逆転現象を避けようというインセンティブを生み出し、夫婦の一方の収入をその限度額以下に抑えるよう努力することとなる。ゆえに収入的に低額となる場合が多い女性パート労働は、たとえ当人が仕事にやる気を出していたとしても、家計補助としての位置づけに抑えられてしまうのである。
11. たとえば神崎は、産前産後休暇という制度の存在は知っていたものの、「迷惑がかかる」という理由で活用していない。こうした制度とその活用面でのズレは、諸制度全般にかかわる問題だといえよう。

終章

乾彰夫・児島功和・中村（新井）清二・藤井吉祥・
船山万里子・宮島基

以上本稿では、高卒後5年を経た彼ら彼女らの様子について、属性ごとにカテゴリー化して論じてきた。以下本章では、本論での知見をまとめるとともに、各章では論じ切れなかった点について分析し、若干の考察を試みる。

まず1節では、本論を振り返りながら知見を整理し、2節以降の考察の導入とする。そして2節では、彼ら彼女らの移行および生活を根本において規定している社会構造について、家庭階層・学歴・ジェンダーという角度から明らかにする。それら構造要因は、時には重なり合いつつ時には相反しながら、彼ら彼女らの移行および生活に影響を与えている。次に3節では、とりわけフリーター女性にとって、若者の移行を強く制約している家族について論じる。それは家庭階層・ジェンダーといった構造問題を背景にもちつつも、ある種のねじれ状況を経て彼女らの生活をとりまいている。最後に4節では、彼ら彼女らがこれまで経てきた経験や現状についての把握・意味づけについて、抱かれている時間感覚の違いに着目して分析する。こうしたアイデンティティ形成の課題は、各自が置かれた状況による違いが色濃く反映されながらも、彼ら彼女らにとって「大人になること」という課題へと接合しているといえるだろう。

1. 本論のまとめ

まず本節では、本論でカテゴリーごとに述べてきた緒論について、大まかに振り返っておく。

第1章では、正社員およびそれに準じる形態で働く者たちについて見てきた。そこでは、今回新たに正社員として加わった専門学校卒・大学卒の者たちの就職1年目の様子と、前回同様正社員として勤務している就職3年目以上の者たちの様子に大別し分析を進めた。

前者に関しては、「仕事の世界に入る」ということの内実およびその条件について明らかにすることを課題とした。その問いは、「仕事の世界に入る」どころか、心身ともに傷つきながら離職していった者も少なくなかった高卒就職1年目の状況との対比が土台となっているが、今回も離職に追い込まれた1名の様子からは、会社の働かせ方の問題が露呈していたと同時に、自責感情に

苛まれ、自身を傷つけてしまう困難が生じていた。また就労継続者もそれぞれ厳しい状況に直面し、「辞めたい」と思うようなこともあった。しかし職種・業界による差異は大きいものの、少なからず仕事に対する見通しを築きながら、働き続けていた。それを可能としていたのは、職場内外での研修の機会や、モデルとなる先輩の様子、専門学校その他で築かれた職場外での同業者ネットワークなどであった。

一方で就職3年目以上の者たちの場合、相対的に労働条件などが未整備ではあるものの、仕事に対する自信なども見られ、「仕事の世界に入る」という課題がそれなりにひと段落している様子がうかがえた。そして自らの働きに即した昇給などが見込めない会社の状況に対する憤りとともに辞めていく者や、家族形成など生活面での新たな課題に取り組む者など、労働面・生活面ともに拮かりを見せていることが明らかになった。

職種の違いや会社規模、あるいは参入時点での振り分けとなる学歴差などにより、生じてくる課題や仕事の見通しなどの差異・格差も少なくない。しかし正規雇用就職を果たし、従来型の「標準的」移行に即した過程を経つつある彼ら彼女らは、相対的にはあるが、着実に〈大人への移行〉を歩んでいるといえるだろう。

次に第2章では、さまざまな経緯により非正規雇用労働に従事している者たちを見てきた。ひと括りに非正規雇用とはいっても、契約社員・派遣社員・アルバイトなど、雇用形態からしてさまざまであるが、ここでは「待遇」「正社員登用ルート」「必要な資格」という軸を用いて「仕事の差異」を分析した。その結果、非正規雇用の仕事のなかにも階層性が存在することが浮かび上がり、それが学歴や資格などと連動していることが明らかになった。

そういった仕事の違いをふまえながら、非正規雇用に従事する彼ら彼女らが、現在の仕事および将来の見通しに対してどのような意味づけを与えているのか、将来展望を機軸としながら分析した。そこでは、1章で見た正社員ほどに安定した基盤を持つわけではないものの、現在の仕事上にそれなりの見通しを持ちつつ展望を抱けている者および現職とは別種の展望を抱く者と、当面の課題に迫られるなかで、長期的展望は抱けないうまに在る者との対照性が際立っていた。それは上記「仕事の差異」区分とも連動しており、前者が専門卒・大卒などに偏っているのに対し、後者は高卒がほとんどで、3年以上の長期にわたって主に数々のアルバイト・派遣労働などを続けている。とりわけ後者に関しては、先の見通しを描きづらい仕事の性格もさることながら、家族関係における問題も大きく関与していた。それは家族独自の問題に

とどまらず、就労生活にも影響を及ぼしており、その相互作用からなる困難のねじれも生じていた。そうした不安定な状態に置かれた者たちにおける困難の複合性は、就労の問題を就労のみで捉えることの限界を示しているといえよう。

職業的移行にさまざまな困難を抱える長期フリーター層であるが、しかし諸課題に振り回されているばかりではない。全体的な傾向としても、短期間での渡り歩きを強いられていたかつてに比して、比較的長期間同じ職場で働き続けられるようになってきている。そこには、さまざまな職を経験してきたなかで、徐々に自分にとって働きやすい職場の条件を見定め探り当てられるような戦術を体得してきたという側面があった。困難な状況ながらも、それとの格闘においてそれぞれが奮闘しているのである。

第3章では、2章同様非正規雇用に従事しつつも、「主たる活動」を「自営・自由業」に置いている者たち二人を見てきた。正規雇用からの離職も含め、自らの主体的選択の下に不安定な経路をたどっている者たちである。二人は日々の生活費を稼ぐかたわら、バンド活動や演劇など、現状ではさほど稼ぎには結びつかない活動に邁進しており、日々の活動までも資源に読み替え精神的に毎日を過ごしていた。多元的な展望を抱く黒川と、「役者」という核を常に見据えて過ごしている岡本との差異も大きい。両者ともに終わらなき目標を掲げ、それを自らの駆動力としていた。しかしこうした二人の活動は、本人の意志・力量のみで可能となっていたわけではない。それは先の見えない道ながらも、部分的にであれモデル・指針として参照可能な先達、また同じ夢を掲げながら、ともに模索する仲間たち、そして物理的・精神的な資源提供を与えてくれる家族といった、二人をとりまく周囲の人びとに支えられ成り立っているのであった。「標準」とは隔たった経路において「やりたいこと」の追求にいそむ二人であるが、それは諸資源の活用があってこそ可能となっている道なのである。

1章から3章までは、すでに学校を卒業している者たちを対象としてきたが、まだ学校に在籍している者たちもいる。第4章では、四年制大学卒業後もなお学校に留まるという選択をした者たちについて見てきた。大学院・語学学校(留学)・大学通信制課程・専門学校と学校種別はさまざまながら、四年制大学卒業後に学校に留まるということは、それほど多くの若者がたどるルートとはいえない。彼ら彼女らがそういった進路へと至った経緯とその意味について明らかにすることが、4章で据えられた課題である。まず大学卒業後の〈学校から学校へ〉

の移行という進路は、早い時期から抱かれていたものというよりは、希望していた就職先への就きがたさ、学生生活や資格取得におけるつまづき、就職活動の断念など、さまざまな経緯を経たうえでの選択であった。また同時に、それまで自分が打ちこんできた「やりたいこと」への可能性を失わないため、あるいはその再燃として選ばれた道でもあった。そういった意味では、大学卒業後になお学校に留まるという選択は、〈学校から仕事へ〉の移行の仕切り直しとしての側面を含んでいるといえる。しかし学校に留まるという選択には、それを可能とする資源の存在も欠かせない。本章対象者には、経済的にも文化的にも高い家庭に育った者が多く、調査対象者全体の中では際立っているが、家庭の有する資源のみならず、大学その他で出会う友人関係からも多くの刺激を受け、自らの進路の支えとしていた。

最後に第5章では、結婚して家事・育児など、主に家庭内での仕事に従事している主婦を見た。〈学校から仕事へ〉の移行という視座において、主婦という立場は傍流もしくは対象外とされがちであるが、女性にとっての移行問題を考えるうえでは無視できない経路である。主婦となった彼女らの経緯から見えてきたのは、まず主婦への移行において、出産・子育てが重要な位置を占めていたという点である。妊娠発覚に伴う結婚であった二人をはじめ、結婚後しばらくしてからの妊娠であったケースにおいても、出産を強く意識した結婚となっていた。そして彼女ら主婦を支えているものとして、家計を支える経済的基盤、家事や育児を支える親や家族・友人の存在が大きいことが確認された。それらは主婦にとって、安定的に主婦業を営んでいくうえでは欠かせないものだった。また彼女ら主婦は、職業的に見れば無業あるいはパート就労など補助的就労への従事者であり、主婦への移行は職業的キャリアからの離脱を意味していた。そんな主婦とは対照的に、男性既婚者の場合は収入源確保のために、それまで以上に就業へのコミットメントが求められていた。ここに見られるような、家庭内の仕事に従事する女性と職場での仕事に従事する男性という性別役割分業によって生じているのが、主に家庭での仕事に従事する存在としての「主婦」なのである。一方で彼女らの営む主婦業は、直接性・応答性をベースとしたケア的営為が中心となっており、そこから派生した家族との一体性は、彼女らの主婦アイデンティティを安定的なものとする重要な基盤となっていた。

以上のようなまとめを下敷きとして、以下では残された論点について展開し、全体の総括としたい。

2. 社会構造による規定

本節では、家庭階層、学歴、ジェンダーの3点から、調査対象者の移行過程に影響を及ぼしている社会構造の規定的性格について確認したい。

1) 家庭階層

これまでの調査でも、階層的な要因が若者の移行過程に与える影響について明らかにしてきた。まず、家庭の経済的条件と文化的条件の格差は、家族形態や若者自身の家計負担などに見受けられ、同時に進路選択における偏り（たとえば高卒後の進学／未進学など）として表れていた。

高校卒業前の時点では、A高校においては四大・短大への進学希望者が最も多く、専門学校も含めるとほとんどの者が進学希望であった一方、B高校においてはフリーターを含む進路未定者が最も多く、進学は少なかった。実際の進路でも、四大進学者とフリーターを比べるとその違いは明瞭であり、卒後3年目の時点の出身高校構成をみれば、四大進学者10名のうち9名がA高校出身者で、フリーター11名のうち9名がB高校出身者であった。

こうしたことは、高校入学時の「学力」の差のみでなく、「学力」に反映する両校生徒の家庭の間に生じている階層的格差に由来していた。フリーター層には、高卒時では家計の苦しさが進学を困難にしたケースが多くみられ、経済的条件が進路選択の制約となっていた。卒後3年目の時点でも、フリーターの約半数の家庭が母子家庭であり、その中には生活保護を受給していた世帯も含まれ、経済的条件が移行における制約となっていた。一方、進学者の家庭は、学費捻出の見通しが立つという点で、経済的条件が相対的に安定していた。すなわち、高校卒業後の進路にはそうした経済資本の差が「むきだし」のまま作用していたのである。また、四大進学者の家族に高学歴者が多かったのに対して、フリーターの場合は確認できているだけで、大卒の母親を持つ者は一人のみ、両親もしくはどちらかが中卒というケースもあった。家族学歴は経済資本と併せて進路選択に影響を及ぼしていたといえるだろう。

これらの階層的要因は「やりたいこと」にも影響を及ぼしていた。高い経済・文化資本を受け継いだ黒川においては、それらはよく活用されていた。さらに彼は豊かな社会関係資本ももっており、こうしたいくつもの資本の豊かさが活動を支えていた。一方で、夢である声優になるために俳優・声優養成所に通っていたが、学費の捻出と生活費

を得るために複数のアルバイトを掛け持ちし、思うように活動に集中できなかった者もいた。同じように「やりたいこと」を明確にもち、活動していたものの、資本の多寡がそれぞれの活動に影響を与えていたのである。

今回調査時にも、階層的要因は依然として強く機能していた。今回新たに学校を卒業した者たちとの就労状況における対比は学歴要因として次項で詳述するが、今回調査では特に将来に対する見通しにおいて、家庭階層が強く影響している様子が見られた。

まず非正規雇用者について見てみよう。前回調査時より非正規雇用に滞留しつづけていた7名は、労働条件の厳しさやアルバイト先の正社員の過酷な働き方を見たことも関係し、そもそも安定して働ける見通しを得てはなかった。しかし彼女らの見通しを制約していたのは、こうした就労にまつわる問題のみでなく、家族内の問題でもあった。若林は生活保護を受けながら「難病」を抱える母親や祖母を介護しなければならず、浜野は家計負担をめぐって家族内関係にしんどさを感じ、竹内は両親の不仲から周囲の援助もなく一人暮らしを始め、年の離れた弟を引き取り育てたいと考えていた。非正規雇用で働くB高校出身の彼女たちは、家族からの感情的支援がないばかりか、家族の問題をも抱え、そうした問題を有効に解決できるネットワークも脆弱で、安心して働ける就労生活そのものが見えづらい状態にあった。とくに家族の問題から見えることは、階層が低いということが進学費用の捻出・感情的支援など直接的な資源に乏しいだけでなく、経済的要因やその原因となった諸困難を背景に家族内関係など家庭内にもさまざまな問題を生じさせていること、そしてそれが若者たちの移行・将来の見通しに強い影響を与えていたことである。

上記のような、先の見えづらい生活を送っていた者たちとは対照的に、「やりたいこと」の延長上に将来の見通しを描いている者たちもいた。前回調査以来、会社経営・バンド活動など多彩な活動を展開している黒川は、豊富な経済資本・文化資本・社会関係資本を駆使することにより、自身の設定した目標に向かって邁進していた。また、引き続き学校に留まる選択をしていた者たちも同様に、これまで努力や労力を重ねてきた「やりたいこと」の延長上に自らの立場を置いていた。その選択の背景として指摘できるのは、家族による感情的支援の重要性、大卒者だけでなく大学院卒者がいるなど家族学歴が高いこと、そして下田のように家計状況がけっして楽ではない者もいるが、総じて本調査対象者の中では恵まれた経済的基盤を有していることである。

以上のように、仕事を安定的に続けられる将来展望を

抱くことすら難しい者たちがいる一方で、学校に留まる者や「やりたいこと」実現に向けて邁進することができる者たちがおり、その分岐にはこれまでも指摘してきたように、家庭の経済的条件や文化的条件が強く影響しているのである。そして家庭階層の問題が家族間葛藤として表れていたフリーターのケースに見られるように、階層の問題はより複雑なかたちで若者に陰を落としていた。

2) 学歴と働き方

今回調査では、四年制大学卒業者が労働市場に新たに参入していることから、相対的に高い階層の者たちと低い階層の者たちについて考察することができる。ここでは中等後教育を経て新たに労働市場に参入した者たちと、それ以前から参入していた者たちとの働き方における対比を見ることで、家庭階層の一つの帰結でもある学歴が生み出すさらなる規定性を確認したい。

今回調査時点での正規雇用就職者は12名いたが、うち7名が今回調査時点で新たに正規雇用就職者カテゴリーに加わった者たちであり、残りの5名は3年以上就労継続している者たちである。出身高校で見ると、前者のうち5名(加藤、木戸、原島、人見、山口)がA高校で2名(川本、丸山)がB高校、後者は全員B高校である。また前者学歴をみると、大卒が3名(川本、原島、山口)、短大が1名(丸山)、専門学校卒が3名(加藤、木戸、人見)である。職種別では、専門・技術職が6名で、労務が1名で、給与水準をみると、月給20万円を超える者が5名いた。

第一に指摘しておくべきことは、新規参入層は、職種も専門職が目立ち、労働条件や職場環境が相対的に整っていたことである。3年以上就労している者たちの職種は、生産・労務職や販売職が多く、中には労働条件や職場環境が劣悪であるケースもあった。給与水準は、就職5年目の手塚は入社時と変わらず残業代がなければ15万円ほど、相良は20万円を下回ることも少なくなかった。小谷のケースでは厚生年金と健康保険が整備されていなかった。このように、正規雇用就職者のなかでも、中等後教育を経て新規参入層と3年以上働いている層とでは、給料をはじめとする労働条件において格差は明らかであった。

また新規参入層の就職1年目の働き方の特徴は、職場で成長していく見通しが得やすい環境にあることだ(就労継続を支える重要な要素)。たとえば、看護職では研修制度や技能を高める機会が制度として整えられており、一定の従業員規模であることから各世代の先輩がおり、また同期も多いことから、互いに支えあい、相談で

きるネットワークが形成されていた。たとえここまで充実してはなくても、1年目の新人として扱われ、なんらかの支援や研修が用意されていたことは珍しくはなかった。このような職場環境は、高卒1年目の第2回調査における高卒就職者たちの職場環境と比べると、就職1年目の労働者が働き続ける見通しを得やすいものになっていたことは明らかであろう。

一方、このような労働条件や職場環境の格差は非正規雇用で働く者たちの中にも現れていた。前回調査時点でフリーターであった者の多くが2年を経ても非正規雇用で働いていたが、そこに新たに中等後教育を修了し非正規雇用で働き始めた4名が加わっている。フリーターを継続している7名は労働条件の水準が低い環境でなんとか生活をつないでいたのと比べて、第2章で述べられていたように、新規参入層の4名は、仕事のやりがいを感じていたり正規登用への道がひらけていたり、また家庭の問題が妨げとなることもなく、相対的にはあるが、安定した働き方をしていた。たとえば添乗員として働く君島は、B高校の者たちよりは安定している労働条件のもとで、資格を活かしつつ仕事にやりがいを感じながら就労生活を送っていた。またB高校から専門学校へ進み資格を取得し生活支援員として働く坂本も、正社員登用には迷いを見せながらも、仕事にやりがいを感じ就労継続の見通しをもっていた。

以上のように、正規雇用労働者を見ても、中等後教育を経て新規参入層は、3年以上働いている者たちよりも、相対的によい労働条件や職場環境のもとで仕事をしており、また非正規雇用労働者でも同様に、新規参入層は「滞留」している者たちよりも相対的に悪くない労働条件のもとで働いていた。総じて、学歴の違いとして現象している出身家庭の社会階層の格差は、進路における分岐のみならず、正規雇用・非正規雇用の両者において、それぞれの労働条件や職場環境の格差となって彼ら彼女らの働き方に影響を与えていた。その他、中等後教育を経ることで表れた特徴としては、専門学校や大学で築かれた新たなネットワークが、彼ら彼女らの就労生活における重要な支えとなっていたという点が挙げられる。これまで高校時代のネットワークによる支えを確認してきたが、専門学校などで築かれたネットワークには、同じような職種で働く仲間という側面が加わっていたのである。

3) ジェンダー

これまで指摘してきたように、社会構造的な要因はらむジェンダーも、若者たちの移行のなかで大きな影響を及ぼしていた。

まず、非正規雇用における女性比率の高さが挙げられる。非正規雇用11名のうち9名が女性であった。なかでも、前回から引き続き非正規雇用に滞留していた7名はみな女性たちであった。一方、3年以上正規雇用で働いている者たちのほとんどは男性であり、これまで非正規雇用から正規雇用へと移行した者は男性2名のみで、職種も荷揚げ荷下ろしの作業員や水道配管工などの男性労働者向けの労務作業だった。非正規雇用に女性が多く、正規雇用に男性が多く偏在していた。

また、正規／非正規の区分のみでなく、職種におけるジェンダーも確認できる。保育士など福祉職は、女性が多く働く職種の典型であるが、就職にためらいを見せていた神崎のケースでも見たように、保育士の待遇はその専門性に比して、きわめて低く設定されている。また、介助労働に就いた二人はともに男性であったが、二人は低賃金であること、長期的な昇給が望めないことに直面していた。これら福祉職は、女性に強く依存した職種であり、結婚・出産に伴う離職などを見越して、長期勤続を前提にした職場環境が整備されていない状況がある。そこには、伝統的なジェンダー規範が根強く機能しているのである。それら福祉職に比して、女性に開かれた専門職種としては歴史のある看護職は、伝統的な男性中心の専門職ほどではないにせよ相対的に条件が整っていた。この職種には仕事の内容面でのやりがいに加え、女性が働きやすい職場として整備されてきた歴史があり、結婚・出産によって一旦は離職しても再就職しやすい環境が整えられている。パートナーとの結婚を視野に入れている加藤の場合、看護師が再就職しやすいことを念頭に置いて、相手に併せて転職を考えていた。しかし、再就職しやすい労働環境がここでは、会社に縛られた働き方を余儀なくされるパートナーに合わせた転職として結びついており、それが女性に偏り開かれていることに留意したい。

このように労働条件を通した男女の働き方が確認できたが、さらに結婚を境とした男女の働き方の差も確認することができる。小林は恋人の妊娠を機に結婚を決意し、夫と父親に同時になる課題と向き合うことになった。収入面での不安から、整備士から店長職へと職換えをしたが、仕事面での新たな課題を抱えるとともに、小林の実家でおくる新婚生活で妻に負担を負わせることにもなっていた。一方女性の側においても、職業的移行を断念した堀や神崎、扶養控除範囲内に労働時間を限定していた堀のケースなどに確認できるように、彼女らの主要な役割が家庭内での仕事に移っているのである。

一方、女性にはキャバクラなどの女性特有の職種が

開かれており、この仕事を経験したことがある者が非正規雇用で働く女性の半数にみられた。この仕事は、他の非正規雇用で働くよりも時間給換算でより高収入であるが、業務特有のストレスや健康被害などもあり、決して働きやすい環境ではない。この業界での働き方は、容易に高額な現金を手にするが、服飾費や交友費、医療費など出費もそれなりの額となり、逆に借金を抱えてしまうようなケースもあった。そういった意味で、かえって不安定状況から脱しづらくなってしまいう要因ともなるのである。しかし正規雇用が男性に偏っている労働市場の構造下では、仕事で活かせる技能などを持っていないノンエリート女性にとって、生活費を工面するためには「有力な」選択肢ともなっているのである。

以上のような労働市場におけるジェンダー差は、生活上の現実的課題や当事者の意向、あるいは規範までも含め、深く構造化されているのである。こうした諸点により、大人への移行過程そのものが、男女において異なった様相を呈していた。この違いは、女性が自立して社会で生きていくという点において、女性に不利な状況が広がっていることだと考えられよう。

3. 家族問題

本調査でもくり返し指摘してきたように、今日の若者にとって家族の問題は、職業的移行や日々の生活などに対し非常に大きな影響力を持っている。とりわけ前節でも確認したように、家族の影響は移行における資源提供の可否として強く表れているが、対象者のうちには資源の有無にはとどまらない困難・負担を抱えているケースもあった。そして対象者のうち、こうした事情を抱えるケースはすべてフリーター女性となっており、職業的移行の困難との重複が見出された¹⁾。しかも単に重なっているというのみならず、双方が要因となり結果となるように影響を与え合い、彼女らの移行を制約している状況となっていた。以下では、若者の移行における家族をめぐる諸相について、背景と現象の両側面から考察したい。

1) 親子間葛藤を抱える者たち

かつて本調査では、短大進学者の多くが親との関係において抱えていたこじれを「親子間葛藤」と捉え、子どもの「自立」に対する双方の認識の不一致（関係や行動範囲が広がり「自立した」という認識を強める子どもと、まだ学生であるという点から子どもを自身の保護下にいる存在として見なす親）として解釈した²⁾。その後、進学者においてはそういった葛藤は見られなくなっていっ

たものの、一方で職業的移行に困難を抱えているフリーター層において、より複雑なこじれが生じていることが浮かび上がってきた³。

たとえば母子家庭で生活保護受給世帯である若林の場合、短大生活やその後フリーター生活を通じて親の強い干渉下に置かれている。短大在学時より、母親から服装や趣味、交友関係などに対する強い干渉を受けていたとともに、病弱の母親に要請され家事も彼女がほとんど一手に引き受けていた。そして短大を卒業したのちには、実家の家事のみでなく、近くに住む祖母の介護および家事もまた担わされるようになり、就労時間の確保もままならず、実家と祖母宅の往復という日々となっていた。そういった状況を強いる母親に対し、彼女は憤りを募らせ「(親元から) トンズラしたい」(2005)という思いを抱き続けているが、同時に母親に対する「かわいそうな人」(2007)という評価も交わるなかで、その干渉下から抜け出せずにいる。最近では生活保護ケースワーカーの関与もあってか一人暮らしを始める準備をしており、親の干渉から抜け出すきっかけを掴みつつあるが、まだまだ親との葛藤を解くほどには至っていない。

また母子家庭の浜野の場合、高卒後美容院で正社員として働いていた時期には問題化していなかった親(および姉)との関係が、美容院を離職したのちのフリーター生活においてこじれてしまっている。美容院離職後のフリーター生活では、労働環境の厳しさなどから断続的な就労生活となっているが、そのことを母親と姉から「こらえ性がない」(2005)と非難されている。そして彼女はプレッシャーから、無理をしてがんばり過ぎてしまい、かえってスムーズな転職を妨げてしまう。それがいっそう家族の苛立ちを増幅させるとともに、仕事に対する自信も喪失し、「うち(私)がぐうたらだから」(2005)と自分自身をも責める側に回して苦悩を募らせている。

職業的移行の手前の状態にとどめられている若林と、職業的移行の困難と家族関係における困難が相乗的に生活を追い詰めている浜野といったように、両者が直面している困難の位置づけの違いもあるが、いずれにせよ家族間の問題が大きく前面化しているという点で共通している。さらに彼女らにとって、こうした親子間葛藤がより複雑なねじれとなっているのは、かつて高校在学時には母親との関係にさほど困難を感じていたわけではなく、むしろ感謝・尊敬の念も抱いていたという点である。浜野は困難な状況のなか、子ども3人を抱えながら女手ひとつでそれを切り抜けてきた母親に対し、「やっぱり尊敬してる」(2002)という思いを抱いていたし、メイクの仕事で賞を取ってもいた母親に「憧れを抱いて」

(2002)もいた。若林の場合、勉強へのプレッシャーや趣味についての干渉など不和もあったが、進路について相談する一番の相手は親であったし、進学資金の確保に際し尽力してくれた母親に感謝の念を抱いてもいた(2002)。そして当初抱いていた翻訳という仕事は、親とともに映画をよく見ていたことに由来している。その後両者ともに、かつて抱いていた将来像は頓挫しているのであるが、その後の不安定な状況と重なるようにして、親子間葛藤が表面化するようになっているのである。

かつての短大進学者の親子間葛藤が、どちらかという親とのあいだの感情的な対立が主であったのに対し、ここで見たような親子間葛藤は、日々の生活および将来展望に対する端的な制約として機能しているのである。この傾向は、さまざまな形態をとりながら、フリーター女性において広く見られる問題となっている。

2) 葛藤の背景にある貧困

以上のような親子間葛藤には、複合的な要因が重なっているが、なかでも大きな課題として挙げられるのが、貧困家庭の抱える困難である。

前述の二人はいずれも母子家庭で、母親は病気を抱え働けない状態にあり、生活保護受給世帯である(浜野家は弟の就職に伴い、現在は受給していない)。それが若林の場合には家事・介護の担い手として、浜野の場合には稼ぎ手の一人として、彼女らが位置づけられていることの大きな要因となっている。浜野に対する母親の叱咤も、「収入が途切れると困る」(2005)という家庭の切実な課題から生じたものであり、個人的な対立だけが問題となっているわけではないのである。また収入の工面のみでなく、生活をまわしていくためには家庭内での仕事も欠かせないのだが、若林の場合には親が病弱であるために、彼女がその担い手となっているのである。

なお、貧困という問題が最も深刻に表れているのが、浜野ら同様母子家庭で厳しい家計状況におかれていた庄山のケースである。若林や浜野の場合には、生活保護によりひとまずの最低生活費は確保されていたが、庄山の家庭は生活保護を受けておらず、自前での格闘を余儀なくされていたのである。彼女の場合、経済的困窮を端緒としつつ、健康問題から社会関係上の困難まで、貧困状態が多層的に展開されている。

まず貧困と健康問題の関連について⁴、そもそも貧困は、身体の不調により働けなくなり、経済的にも困窮するというケースが少なくないが、それと同時に貧困状態に陥っている場合には、目の前の生活費を工面するという課題に迫られることとなり、治療費やその時間の捻出

は後回しになりがちとなる。庄山の母親は、庄山の高卒後4年目で亡くなっているが、死因は慢性的な疾患であった。彼女の家庭は生活保護こそ受けていなかったが、母親は生活費を工面するため身体を酷使して働き続けており、異常が見つかったときにはすでに手遅れとなっていた。そして病状が悪化しても入院することもなく、ぎりぎりまで働くとともに庄山が看護を続けていたが、異常が見つかったから程なくして母親は息を引き取っている。

また貧困には、往々にして社会的孤立という側面も付随してくる。庄山の母親は、仕事上の付き合い以外にはあまり知人もおらず、庄山と目の不自由な母親（庄山の祖母）以外の家族との関係も実質切れている状態にある。そういったなかで庄山は、母親の唯一の理解者であり、両者は「ふたりとも依存し合っちゃってる」というような関係となっていた。それゆえ母親がいなくなった庄山は、「(自分の)片方ない感じ」となり、展望を描けないままにいる。

以上のように、直接的には経済的困難を指す貧困であるが、それは経済面のみでなく、さまざまな回路を通じて日々の生活を圧迫しているのである。さらにその圧迫は、家庭の困難として現れるため、親だけでなく子どもの生活も圧迫し、職業的移行をはじめとした子どもの社会的自立を阻んでいる。家庭内での困難の背景には、こうした「貧困の世代的再生産」(青木)⁵と呼べるような状況が進展しているケースも少なくないのである。

3) ケア役割とジェンダー

一方、家族をめぐる問題には、時には貧困とも重なりつつ、それとは別種の問題も存在している。それはとりわけ女性において顕著に見られる、家庭内での家事・育児・介護などケア労働への従事である。

先ほど、家事・介護に従事しているがゆえに就労もままならずにいる若林のケースについて言及したが、そこには親の健康問題にとどまらない要因も絡んでいる。彼女には妹と弟がいるが、家事を負わされていたのは彼女と妹のみであり、弟は一切を免除されている。その前提には、前節でも指摘したように労働市場におけるジェンダーバイアスが背景として存在しているといえるが、若林のケースではそれ以上に、母親の抱くジェンダー規範が強く影響しているといえる。また生活保護世帯であるにもかかわらず、彼女が卒業後も本格的に就労せず祖母の看護・介護に当たる状況が「許され」ていたのは、彼女が女性であるということと関係していたと思われる。

それが若林にとっては、就労への制約として機能し葛藤の元となっていたのであるが、一方でこうした家事・

介護など家庭内での仕事は、就労の制約も含め主体的に選り取られる場合もあるため、単に制約としてのみ片付けられない側面もある⁶。職業的展望が描きづらいフリーター生活を続けるなかでも、こうした主体的選択に類する様相を見せていたのが、吉川である。彼女はこれまで、生活の支えを必要としている妹がいるということに言及してこなかったのであるが、今回調査時にはその妹を生涯面倒見ていくという覚悟を表明している。この覚悟には、妹の介助に要する時間を確保できるような勤務形態でなければ働けないということ、妹も含めて一緒になってくれる男性としか結婚できないということ、などといった妹の介助に付随してくる諸制約をも引き受けるという決意が込められているのである。家族の介助や看護の役割が女性に偏りがちであること⁷は、伝統的な性的役割分業が大きな背景にあるとともに、そのもとで形成されてきたジェンダー化された道徳意識⁸が、一面ではそうした役割を彼女たちがある意味自ら進んで引き受けてしまうこととも結びついているといえるかもしれない。

4) 困難脱出の岐路

以上のように、貧困やジェンダーを背景とした家族関係における困難が、さまざまな側面から彼女らの移行を制約しているのであるが、今回調査時にはそれらを脱していく契機を掴みかけているケースも散見された。

まず親子間葛藤にかかわって重要となってくるのが、就労生活の安定である。まず前回報告書でも指摘したように、高校在学時より親との不和を口にしてきた下川であるが、正社員として働いていた高卒1年目の段階では、対立こそなくなっているわけではないものの、葛藤の様子は控えめなものとなっていた。そこには、日々の就労により生じる親との時間的・空間的距離や、「正社員」としての社会的地位獲得による影響が確認された⁹。こうした傾向は、今回調査での君島の様子にも表れていた。君島は進路選択や職業選択に際し、これまでたびたび親と衝突してきた。だが、大学4年次に家を飛び出すように離家し、恋人と実家の近くで同棲した後、現在まで一人暮らしを続けている。そして親と一定距離をとって暮らすことで、「かえって(中略)親と仲良くなった」と話している。それが可能となったのは、契約社員として安定的な収入を確保できるようになったことが決定的だといえよう。

また貧困の問題にかかわって、生活保護世帯である若林の場合、今回調査時には世帯分離を行ない、一人暮らしを始めている(他にも、生活保護世帯で正社員として働いている内田のケースでも、同様の措置が取られてい

る)。それにより、自分の部屋もなく親の干渉下に置かれていた以前に対し、親との間に一定の距離を保つための基盤が確保されるとともに、親からの制限を気にすることなく就労することが可能となった。いまだ親からの干渉は強く、彼女自身の姿勢も含めなかなか離れられない状況ではあるものの、若林は今後について、独立生活に向けた意欲を語っている。

そしてこれまででもくり返し指摘してきたことであるが、家族が安らげる場となりえていない彼女らにとって、情緒的安定を支えるうえで重要な機能を果たしていたのが、同じ地元に住んでいる同年代の友人たち（「地元ネットワーク」）であった¹⁰。貧困に苛まれた生活のなかで母親を失い、将来像も抱けず情緒不安定な状態に陥っていた庄山であるが、高校以来さまざまな局面で互いに支え合ってきた西澤に支えられることで、かろうじて日々の生活を過ごせるようになっていく。

若者の移行は周囲の状況による影響を強く受けて進められるのであるが、本節で見てきたように、その最たるものの一つとして出身家族の問題がある。就労のみがクローズアップされ、職業的移行に特化しがちな移行支援であるが、生活の土台となっている家族問題の側面への注目もまた重要かつ不可欠であろう。それぞれが抱える困難の状況によって、それを脱していく方途はさまざまであり、上記所作が一律に効果的であるとは限らないし、そのみで解決されるような問題でもないだろう。しかしいずれにせよ、家族関係がこじれる要因の一つに、家族関係が内閉化し、外部との接続が狭められている状況が指摘できる。その背景となっている構造要因に対する社会保障の整備・拡充はもちろんのこと、就労であれ住居分離であれ、相互の関係の間に一定の外部が差し挟まれ社会化されていくことが、家族に対する支援策として重要な側面となるのではないだろうか。

4. 個別化・不安定化する移行過程のなかで「大人になること」

私たちは今回の調査結果を分析するにあたり、高校卒業から5年という歳月が経ち、対象となった若者たちが自身のアイデンティティをどのように形成・発見しているのかということに着目してきた。それは学校から社会への移行というこの期間のなかで彼ら彼女らがどのような人間的な成長、あるいは発達をとげてきたのかを確認するためである。

エリクソンによれば、アイデンティティとは以下のように定義される。「人格的な同一性 (sameness) と連続

性についての客観的であるとともに主観的な質であり、一定の他者と共有する世界の同一性や連続性についての確信と対をなしているものである。自覚されない日常生活レベルにおける質としては、自分の加わるべきコミュニティ (communality) とともに自分自身を発見した際の若者のなかに、すばらしく明瞭にそれを認めることができる。その若者のなかに我々は、すでに変更不能なものとして与えられているもの一体型や気質、才能や弱点、幼児期のモデルや獲得された理想など一と、とりうることのできる役割、職業的な可能性、提供された価値観、友人関係の形成、最初の性的出会いなど、選択肢として開かれているものとの間の、独特な統一物が出現することを認めることができる。」¹¹

すなわちそれは、自己の過去から現在に至る同一性・一貫性についての主観的な感覚であるとともに、客観的にはその若者が加わるコミュニティ (コミュニティ) の中で他者によっても共有されるものである。したがってアイデンティティの形成は、自分がコミットしていくコミュニティの発見と対をなしている。そしてそのアイデンティティは、若者がそれを通して社会にコミットするという点において将来への展望と一体のものであり、いわばその個人のなかで過去・現在・未来という時間の流れを結びつけるものである。

エリクソンのアイデンティティ理論は、その問題が広く社会的問題として問われる歴史的時代において理論的課題となったと彼自身が述べるように、資本主義と産業化の成熟した1960年代のアメリカ合州国を背景としていた。そして後期近代 (late modern) における「個人化」の進行はアイデンティティ問題をあらためて課題として登場させている。「個人化」は、それまで階級・階層やエスニシティ・宗教などによって分化したコミュニティの中に埋め込まれていた個人々のライフコースをコミュニティから引き剥がす。その結果諸個人は、生まれながらのコミュニティの拘束から自由になる一方で、人生経路 (biography) を自らの手で紡いでいかなければならなくなる¹²。すなわち諸個人は、自らの手でその経路を操り (navigate)、アイデンティティを形成・維持し続けなければならない¹³。

ギデンズは『モダニティと自己アイデンティティ』¹⁴で、後期近代において個人が直面する自己アイデンティティの維持にかかわる問題を次のように述べている。すなわちモダニティは、それまで空間 (コミュニティ) の中に埋め込まれていた時間の流れを空間から分離する (時間と空間の分離)。そしてそれまでローカルな状況のもとに埋め込まれていた社会的関係あるいは人びとの

相互行為をそこから切り離し標準的な価値を持った交換メディアや専門家集団などの抽象的システムのもとにおく(脱埋め込みメカニズム)。そして社会生活の組織は新たな情報や知識に照らして常に修正を受ける再帰的(reflexive)なものとなる(制度的再帰性)。こうしたもとの「変容する自己は個人的変化と社会的変化とを結びつける再帰的過程の一部として模索され構築される」(36頁)再帰的プロジェクトになる。つまり、自己アイデンティティとは「一人の人間の行為システムが継続している結果として与えられるものではなく、むしろ、人間の再帰的な活動のなかで常に作られ、維持されなくてはならないもの」(57頁)、「生活史という観点から自分自身によって再帰的に理解された自己」(同)であり、それは「行為主体によって再帰的に解釈される(時間的空間的)継続性」(同；括弧内は引用者)だとギデンズはいう。そしてさらに、こうした「自己の再帰的プロジェクトは、自己の活性化と統制のためのプログラムをもたらす」(10頁)ことで個人の生に有意義感を与えることとも結びついているという。

以上のエリクソン、ギデンズの議論を踏まえれば、アイデンティティとは、コミットしようとしている社会への自己のスタンス(方向性)ということにおいて、自己の過去・現在・未来の時間的な流れを結びつけていくもので、それは単に個人の行為が客観的に積み重ねられているということではなく、それらを主体の側が意味づけながら一つの物語として自己を紡ぎ出していくことにある。すなわちアイデンティティを獲得するということが、個人のなかでひとつの時間の流れを創りだすといえる。

逆にいえば、アイデンティティの喪失は時間の流れを断絶させてしまう。例えば私たちのケースでは、就職1年目に困難にぶつかり強烈な自責感情を抱えたまま身体そのものが職場へと向かえなくなって辞めていった西澤・高橋(高卒就職)や木戸(専門卒就職)、あるいは大学で野球を続けられなくなった金山らの場合、その時点で一旦、彼女ら彼らのなかの時間の流れは断絶し、止まってしまっている。

ただしエリクソンとギデンズの議論のなかにひとつ重要な違いもある。それはエリクソンが若者のなかでのアイデンティティ生成を、その若者のコミットするコミュニティ(コミュニティ)の発見と一体のものとしていたのに対し、ギデンズにおいては「個人化」の進行する後期近代では、コミュニティ(ローカルな状況)から切り離された「自己」の再帰的プロジェクトとしてそれが行われるとしていることである¹⁵。たしかに自己の過去を振り返りつつ過去の自己と現在の自己とを結びあわせ

ながら未来へとそれを投影させていくことは、その個人自身の「特定の物語を進行させる能力」¹⁶によるところが大きい。しかしそうした個人の能力は、はたしてその個人がコミットするコミュニティとは無関係なものなのだろうか。私たちのケースを見るなかで、そのことについても併せて検討をしたい。

以下この節では、こうしたアイデンティティをめぐる課題、とりわけ一人ひとりのなかでの時間展望の連続性に着目しながら、いくつかのケースを検討したい。

1) 連続的な時間の流れを生きている者たち

これまでの自分の積み重ねてきた学習や仕事、生活の経験の先に一定の時間展望をもって自分の将来を描けている幾人かのケースをまず見てみたい。

相良は、水道設備会社に配管工として働くようになって4年目になる。会社に入りたての頃は土中に埋められた配管を掘り出すことから始め、その後は親方に教えてもらいながら、より高度な仕事を学んでいった。2年目頃には管の寸法を測って切断し、配管をできるようになり、技能の向上が彼の自信へとつながっていた。5年後の展望として相良は、「一人前になりたいなって。教えてもらうんじゃなくて、逆に後輩が入ってきたりしたら、自分が教えてあげられるような感じになっていたらいいな」と話している。大学病院に入職して2年目の人見は、かつて抱いていた看護師になるという希望を現在叶えている。1年目には離職を考えるほど思い悩むこともあったが、職場の同期や先輩、看護専門学校時代の同期などの励ましもあり、今回調査時には「モデル」となる先輩の姿を見てさしあたり5年は勤務し、その後は海外の貧困地域での医療活動というかねてからの希望を話している。同じく看護師として入職1年目を迎えている加藤は、「勉強勉強」の毎日に疲れることもあるというが、新人研修と一緒に受けた同期、4年目の先輩、看護学校時代の友人に支えられるなどして、安定した就労生活を送っている。

3人のケースから見えてくるのは、就労生活において同じ世界の一步先を歩んでいる「モデル」となり、愚痴含めて話を聞いてくれる人がいることや、技能を教育・訓練してくれる場や機会が与えられているということである。言い換えるならば、安定的な職場の先輩・同期関係もしくは労働条件があり、そのなかで技能を向上させることができ、就労生活を送ることができていることである。そして、それらのことがそれほど先のことではないにせよ、5年程度先の自分の成長した姿を現在の延長上に描くことを可能にしていたのだ。

だがそうした将来展望は、ただ単に目の前にモデルがあるから、それに何も考えずに乗っていけばいいということではない。例えば人見の場合、看護師という仕事はたしかに中学時代からの夢であったが、それが現在に平坦につながっているわけではない。難しい壁にぶつかって「辞めたい」と深刻に思ったことだけでも、過去に少なくとも2回あった。はじめは看護学校3年の病院実習のつらさのなかでもう実習に行けないと思ったとき¹⁷、もう一度は今の職場に入って1年目、同期の同僚がこなしている課題を自分だけこなせずに一人悩んだときだ。しかし実習の時には母親に「あんたが行かないと患者さん一人になっちゃうよ」(2005)と励まされ、今の職場では末期の患者さんからの「ありがとう」という言葉に励まされて、そうした危機を乗り越えてきた。彼女は、乗り越えたい壁に突き当たって時間の流れが途絶えかけたなかでそれぞれ、いまの仕事にコミットし続けることを促す精神的な支えを得ながら、それまでの自分の思いと積み重ねてきた努力とを再び自分の中で紡ぎ直しつつ、そのアイデンティティを維持・再生・強化してきたといえる。

しかしアイデンティティの維持・再生にかかわる再帰的な物語構成は、過去と現在という時間の連続性から未来の方向が見えるというだけではない。むしろ一方では未来の方向性・展望が見えることがそこへ向けて自分の過去と現在を紡ぐという側面もある。人見の場合、職場の中にいる少し前をいく先輩看護師というモデルや職場の中にある制度化された養成・研修の制度は、これから先、ここにコミットし続けることで自分がどのように成長していけるかを見通させることで、彼女の過去・現在を未来の時間の流れへとつないでいくことを比較的容易にさせているといえる。

仕事を通してのアイデンティティの形成・維持ということとともに、もう一つ比較的安定した時間展望をもっている見えるのは、家族形成ということにコミットしはじめている若者たちのケースである。第5章で主婦として扱った女性たちについては、家族との一体性のなかで彼女らの「主婦としてのアイデンティティ」があることをすでに本論でも指摘した。そこでは出産や家族の成長ということが、彼女らの時間展望の軸となっている。その際、とくに意図せざる妊娠の発覚から結婚へと進んだ堀や神崎の場合、職業準備を中心に流れていたそれまでの彼女らのなかの時間は一旦途切れることとなり、自己物語の紡ぎ直しが必要とされた。しかし結婚・出産・子育てという家族形成へのコミットは、当面は子どもの成長を軸に見通される時間的展望へとその時間の流れを

結び直すことで、その連続性を再生させているように見える。もちろん家族との一体性のもとにある彼女らのアイデンティティは、もう一度彼女らが仕事へと向かうことがあったり、あるいは思わぬ家族の危機などに直面したときに、再び大きくその安定性が脅かされる潜在的可能性を秘めていないわけではない。

「結婚」という契機がアイデンティティの再構成に結びつくのは女性の場合だけではない。高校時代からバイクが好きで、自動車整備の専門学校から整備士の仕事に進んだ小林は、つきあっていた恋人の妊娠をきっかけに結婚に踏み切るとともに、整備士から営業管理業務へとそのキャリアートを切り替えた。専門学校時代から今の会社に入ってこの直前までの小林は、整備士として「(技能的に)上を目指す」ことを目標にそのアイデンティティを紡いできていた。入社1年目にはあまりのサービス残業の多さに一度は「こんなやってらんない」「もう辞めてやる」(2005)というところまで行きかけたものの、職場の先輩らに励まされたり上司から受けた高い業績評価のおかげで、サービス残業をいとわず「自分のスキルアップ」(2005)を目指そうと、そのアイデンティティをさらに維持・強化させていた。しかし今回、結婚と子どもの出産ということを契機に展望とアイデンティティの修正をはかっている。だがそれは彼のなかでは、けっしてこれまで流れてきた時間の断絶ではない。むしろ営業管理職研修を含めたこれまでの仕事のなかでの経験を、「一家の大黒柱」として妻や子どもを養う父親としての新たな役割に結びつけて、その物語を描き直すというかたちで彼のなかではその再生と維持が進行している。そのなかでは例えば整備士としてのこれまでの経験は、他の店長らとの関係を築くうえで、彼の重要な資源となっている。小林の場合もまた、「家族を養う」という重大な役割を引き受けることで、子どもの成長をひとつの軸としてその時間的展望が描かれているように見える。

2) 停滞した時間のなかで奮闘している者たち

一方で、将来への時間的展望を描きづらい状況に絡め取られながら、毎日をなんとか生きていく若者たちもいる。その中心は、前回調査から今回調査までフリーターとして離転職をくり返している女性たちのケースである。

庄山は、今回調査時までに弁当屋、キャバクラ、カラオケ屋、水商売、寿司屋など多くのアルバイトを転々とし、母親と二人暮らしであったが、母親とも死別し、「あんまり長生きしたくない。未来が見えないっていうのもあるし」と話している状況にある。また、家計状況が苦しく進学を断念、就職した美容院を辞めてからは様々なアルバイトをおこなっていた浜野は、次のように話して

いる。「一番思うのは、先が見えない。(中略) 夢はあるけど実際現実にならないし、まだ踏み出しの一步も出てないから。(中略) 今はすごい狭い空間の中を一生懸命に脱出しようと思ってる感じです。追い込まれて追い込まれてるような感じ…。二人の話から見えてくるのは、「先が見えない」生活に耐え、それでも必死に努力を続けてきたがゆえに感じている、深く重い疲労感である。

庄山の場合、若くして彼女を生み、貧しいなかで彼女を育てながら一所懸命働いてきた母親との一体となった生活時間の流れが、母親の突然の死で途絶えてしまったあと、その先の展望へとつなげることのできるような自己物語を未だに紡げないように見える。一方、浜野は、そうした状況下でも、「進歩したなって思う」とも話している。それは彼女のみならず、フリーター女性全般において、これまでの調査時と比べ、同じ職場で長期間働き続けられていることからくる彼女らのなかに生まれてきたひとつの感覚であるようだ。そこには、不安定な労働市場のなかを渡ってこざるをえなかったがゆえに身につけてきた経験と力が影響している。浜野の場合、過干渉な同僚に悩まされた美容院の仕事、仕事内容が不透明なテレアポの仕事、広い倉庫内でひとり作業を進める葬儀屋の仕事などを経験していくなかで、同僚とも気軽に話せるけれども近すぎるわけでもないという現在の職場に居心地のよさを感じはじめている。また、入職時にはオープニングスタッフを狙うなど、少しでもよい状況で働くための「戦術」を僅かではあるが見出している。

浜野に代表されるようなこうした感覚は、これまでの自分の様々な経験を紡ぎ合わせながら、この程度であれば何とかやっていると見えるだろうという当面の見通しを支えるものとなっている。そしてそれらはまた、“地元ネットワーク”などを通じて彼女らのなかにそれとなく共有されている「戦術」であり感覚であるように見える。だがそれは、前項で触れた者たちと比べたときに、いまだに現在から未来へと流れる時間的展望となっているわけではない。「小料理屋・美容の仕事」(浜野)、「ソムリエ・ダンサー」(西澤)などの彼女らの夢は、過去から現在までを結ぶ彼女らのなかの時間の流れからは切れた、文字どおりの「夢」として語られているだけである。彼女らの当面の見通しは、いわば“明日もまた今日と同じ程度にはやっていると見えるだろう”というきわめて限られた時間展望、“現在”が明日も繰り返されるだろうという見通しにすぎない。しかしそれでも彼女らが「成長した」という実感がもてるのは、正規・非正規の仕事を次々と辞めざるをえず、辞めるたびに「だめな自分」を賣めていた、“明日”につなげる時間展望すら描けないでいた状

態を脱することで、暫定的ではあれ何とか今の「仮のアイデンティティ」を保てるようになったということであろう。

3) 小括

以上、過去・現在・未来という時間の連続的な流れが感じられ一定の相対的に安定したアイデンティティが形成・維持できている者たちと、未来につながる時間の流れをいまだに感じる事ができず、“現在”に留まり続ける時間の流れの停滞のなかに絡みとられたままにいる者たちについて見てきた。私たちの調査対象者が高校偏差値ランクで中位以下の若者たちのみであるとはいえ、彼ら彼女らの間には経済資本や文化資本などをめぐる大きな差異がある。だがこの節で主に取り上げた者たちは、私たちの対象者全体の中でも、両親がともに中等後教育学歴で経済的にも一定の水準にあると考えられる看護師の加藤を除けば、どちらかといえば経済資本・文化資本ともに豊かではない者たちである。すると上述の両者の違いはどこにあるのだろうか。それは例えばギデンズがいうような、主体の側の「物語を進行させる能力」の違いなのだろうか。

再帰的に過去の自分の経験を振り返りながら今の自分を描くことは、時間の流れを感じられている者たちばかりに見られることではない。すでに指摘したように、明日も今日と同じ程度にはやっていると見えるだろうという彼女らの感覚は、むしろこれまでの自分たちの経験を総括するなかから生まれているものである。

むしろ両者の間の大きな違いは、コミットするコミュニティそのものの中に未来への成長を見通せるような“プログラム”があるかどうかであろう。例えば人見や加藤が働く大病院の場合、1年目・3年目・5年目といった新任看護師への養成・研修のプログラムが制度化されている。そして同じ職場には、それぞれのステージの課題を乗り越えようとしている先輩看護師たちがいる。そうしたコミュニティそのものの中に存在する“プログラム”は、彼女たちに「3年後・5年後の自分」についての具体的なイメージを描きつつ、それに照らして過去から現在までの自分の物語を整理し未来へとつなげていくことを容易にしている。

但しそうした“プログラム”は“前近代(pre-modern)”のコミュニティのように、個人々に即した個別具体的な“プログラム”として選択の余地なくそのコミュニティに埋め込まれているものではない。例えば小林の場合、整備士を続けるか営業管理職ルートに乗るかはまさに彼自身の選択の問題であった。その際彼は、先輩整備士に話を聞きに行くなどするなかで、それぞれのルートをた

どったときの未来イメージを想定しつつ、これから自分が責任を持つ家族の未来を重ねながら、物語の再構成をはかっていた。

このように見たときに、時間の連続した流れを保持できるようなアイデンティティを紡ぐことができるかどうかは、けっしてその個人の「物語を進行させる能力」にもっぱらよるものではなく、やはり、エリクソンのようなコミュニティ（コミュナリティ）の発見と対になるのが必要だといえることではないだろうか。すなわち、自己の過去・現在・未来の連続性と同一性を担保するアイデンティティの形成は、ギデンズのいうようにその個人が過去から現在までの自己を再帰的に捉え直し、それを未来へと投影させる再帰的な作業を不可欠にしているとはいえ、この再帰的な作業はコミュニティがもっている制度的非制度的な“プログラム”を手がかりにすることなしには、有効に機能しないということである。

自己物語を紡ぐという点では、私たちのケースでは、このほかにも「自営」グループに分類した黒川・岡本の例がある。とくに黒川は、インタビューのたびに、雄弁な自己物語を披露してくれるという点でもきわめて印象的であった。別途十分な検討が必要とされている。但し、いくつかの点だけは簡単に指摘しておきたい。第一に、二人はそれぞれ、明確な“プログラム”のない世界を自力でわたろうとしているとはいえ、けっしてコミュニティのまったくないなかを孤独に歩んでいるわけではない。岡本の場合は、大きくは演劇界というひとつの大コミュニティを自分の生きる場として設定しているだけでなく、そこで演技者としての自分の成長イメージの探求と重なりあう指導者や劇団・集団をいろいろと試している。そういう意味では、彼女は演技者としての具体的なアイデンティティとそれを可能にするコミュニティとをまさに探求している最中といえるだろう。黒川の場合、岡本以上にその世界が茫漠としているとの印象も受ける。しかし彼は高校時代の友人4人の仲間との間で当面の大目標を共有することで、彼がコミットするコミュニティを自ら形成していると見える。

第二に、黒川のようなアントレプレナーシップは、近年、新しい移行形態として内外で注目されているとはいえ、若者たち全体の中ではけっして多数派ではないし、今後多少の増加はあっても、当面大きな割合を占めるようになるとは考えられない。そういう点では、多くの若者たちが直面することになるのは、先に取り上げたような二つの状況のいずれかであろう。

しかし1990年代以降の今日、“プログラム”をもつコミュニティと“プログラム”のないコミュニティとの

格差は、むしろ大きく広がっている。医療・教育などの専門職や公務労働、民間大企業などの中では基幹的な部分への中長期的な人材育成プログラムは近年、一層精緻化している。しかしその一方で、アルバイト・派遣労働など、仕事そのものが単純で発展性がないばかりでなく、持続的な職場コミュニティさえ作れない世界が飛躍的に拡大した。たとえ仕事は単純であっても、職場に持続的なコミュニティが存在すれば、そこに職場文化が生まれ、その職場で成熟していくことをめぐる非公式の“プログラム”が発生する余地はある。しかし持続的なコミュニティの存在しないところではそのような非公式の“プログラム”さえ難しい。昨年は、長期間にわたり派遣労働などの不安定な職場を渡り歩かざるをえなかった若者の起こした突発的な犯罪が目立った。それらの一連の事件の背景にも、未来につながる連続した時間の流れを紡ぎ出すことができず、自分の仕事や生に有意味感を感じることでできないままに孤立した若者たちの問題が存在するのではなからうか。

註

1. 職業的移行における困難と家庭における困難の併発状況について、宮本みち子「家庭環境から見る」（小杉礼子編『フリーターとニート』第3章、勁草書房、2005年）参照。
2. 『18歳』第6章参照。
3. 本稿第2章3節3項、および「報告書③」第1章4節参照。
4. 貧困と健康問題の関係は広く指摘されるところであるが、たとえば女性の就労という観点から生活保護世帯への調査をした朝比奈は、貧困家庭に置かれた女性の就労を妨げている要因として、本人および家族の健康問題や、家族の育児・介護・看護などを挙げている。朝比奈朋子「生活保護世帯における女性就労の特徴について」（『川村学園女子大学研究紀要』第18巻第2号、2007年）参照。
5. 青木紀『現代日本の「見えない」貧困—生活保護受給母子世帯の現実』（明石書店、2003年）。
6. こうした主体的引き受けについては、ケア役割のみでなく、男性既婚者に見られるように、収入の確保など経済面での役割を主体的に引き受けるという側面も同時に指摘できる（第5章4節参照）。しかし経済的役割の場合、その引き受けが可能となっている状況下においては、職場など外部との関係が開かれていることを意味し、家族関係上の葛藤には至り

- にくい。
7. 障害や病気の家族の介護が、既婚・未婚を問わず女性に偏りがちである状況は、たとえば日本労働研究機構が以前に行なったフリーターからの聴き取り調査でも、家族の介護・看護などが進学や正規雇用就業への障害となっていたケースはすべて女性だった(同「フリーターの意識と実態—97人へのヒアリング結果より」調査研究報告書 No.136、2000年)。
 8. Gilligan,C.(1982)*In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press, 岩男寿美子監訳『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』(川島書店、1986年)参照。
 9. 「報告書③」62-63頁、および本調査のデータの再分析となる藤井吉祥「親子関係における若者の『自立』—質的調査による考察」(首都大学東京都市教養学部人文・社会系/東京都立大学人文学部教育学研究室『教育科学研究』第23号、2008年)参照。
 10. とりわけ家族における困難とのかかわりでは、「報告書③」42、106、109頁など参照。なお庄山のみならず、浜野にとっても西澤および西澤家は、「第二の家」(浜野2005)といった機能を果たしていた。
 11. Erikson, E.H.(1975)“Identity Crisis” in *Autobiographic Perspective*, in *Life History and the Historical Moment*, Norton(pp.18-19); New York.
 12. Beck, U.&Beck-Gernsheim,E.(2002) *Individualization: Institutionalized Individualism and its Social and Political Consequences*, Sage:London.
 13. Cote, J.E.&Levine,C.G. (2002) *Identity Formation, Agency, and Culture*, Lawrence Erlbaum Associates; Mahwah, New Jersey.
 14. Giddens, A. (1991) *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press; Cambridge, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』(ハーベスト社、2005年)。
 15. ギデنزにおいても自己アイデンティティの形成・維持において他者の関与が一切否定されているわけではない。しかしギデنزの場合、後期近代において「存在論的安心」の危機にさらされるところでの自己アイデンティティの維持・再生に関与する役割を持つ他者は主に、他の社会関係からは切り離された「純粋な関係性」としてのパートナー関係および個人のアイデンティティの修復・再生をもっぱら司る専門家としてのセラピストに限定されている。
- Giddens, A.(1993) *The Transformation of Intimacy*, Polity Press; Cambridge, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』(而立書房、1995年)参照。
16. 『モダニティと自己アイデンティティ』59頁。
 17. 「報告書③」69-70頁参照。